

岩手県文化財調査報告書第48集

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

—IV—

(宮地遺跡)

昭和55年3月

岩手県教育委員会
日本国有鉄道盛岡工事局

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

— IV —

序

東北新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、宮城県境より盛岡市に至る 101kmの間に所在する48遺跡について日本国有鉄道盛岡工事局からの委託事業として岩手県教育委員会が調査主体となり、昭和47年10月から昭和52年12月までの5年3ヶ月にわたり発掘調査を実施してまいりました。

昭和53年度においては、40遺跡について3分冊にまとめ報告書を刊行したところですが、本年度は残る8遺跡について報告書を刊行することによりこの委託事業のすべてが終了することになりました。

本報告書は東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書IVとして昭和50年、51年度の2ヶ月にわたり調査した江刺市宮地遺跡についてのまとめであります。この遺跡は平安時代初頭を中心として北上川東流域に営まれた集落跡であり、調査によって竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、方形溝跡等の遺構や、土器、土製品、石製品、鉄製品、金銅製品、動植物遺体等多くの貴重な資料を得ることができました。

言うまでもなく、北上川は本県の文化史にとって象徴的存在であり、その流域は長い間、文化の中心でもありました。宮地遺跡の調査結果は、そのことを裏付けると共に、当時の生活実態を示すものといえましょう。

本報告書が学術関係者だけでなく、社会教育や学校教育分野でも広く活用されれば幸いです。最後に、これまでの調査について長期間にわたり御援助、御協力をいただいた地元教育委員会をはじめ関係各位に対し心から感謝を申し上げます。

昭和55年3月

岩手県教育委員会

教育長 新里 益

例　　言

1. 本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書7分冊の中の第4分冊として、昭和50年度と昭和51年度の2ヶ年に亘って発掘調査を実施した江刺市に所在する宮地遺跡について作成したものである。

2. 本遺跡の発掘調査、および調査資料において次の方々からご指導、ご助言を賜わった。

(敬称略)

- ・岩手大学名誉教授　　板橋　源
- ・岩手大学教授　　草間俊一
- ・北海道大学助教授　　林　謙作
- ・岩手県文化財審議会委員　司東真雄
- ・江刺市文化財調査委員　佐鳴与四右エ門

3. 本書における資料の鑑定、分析などについては、次の方々と機関からご教示、ご協力を賜わった。(敬称略)

・獣骨鑑定

　岩手大学農学部教授　　兼松重任

・石材鑑定

　岩手県立杜陵高等学校教諭　佐藤二郎

・種子鑑定

　農林水産省林業試験場東北支場村井三郎

・花粉分析(井戸堆積層)

　パリノ・サーヴェイ株式会社

・鉄津の組成分析およびX線回折

　岩手県工業試験場

4. 本書に掲載した地形図、空中写真は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図、20万分の1地勢図、および2万分の1空中写真を使用したものである。

5. グリッド配置図は、日本国有鉄道作成による500分の1地形図を使用した。

6. 土質柱状図は、日本国有鉄道所有のボーリング資料を参考にした。

7. 遺跡における層相と遺物の色調観察は、小山、竹原編著『新版、標準土色帖』日本色研事業㈱を使用した。

8. 本遺跡の基準線方向角は、N-37°00'00"-Wである。

方向は新平面直角座標第X系(東北)による座標北を示す。

原点 (経度 140°50'00"000)
緯度 40°00'00"000

9. 遺物、写真、実測図等の資料は、岩手県教育委員会文化課において保管している。

10. 調査主体者

岩手県教育委員会、日本国有鉄道盛岡工事局

11. 調査担当者

岩手県教育委員会事務局文化課

12. 本書の執筆は次のものがあつた。

・序文

調査に至る経過……………鳴 千秋

調査の方法、整理の方法等……………朴沢正耕

・本文……………佐々木 勝

なお、遺物、図面の整理、および写真的撮影などは、熊谷由美子、平野邦子がこれを補助した。

日 次

序 文

1. 調査の経過	1
2. 調査の方法	4
3. 整理の方法	5
4. 遺物保有処理の方法	6
5. 広報活動の実施	6

本 文

I. 遺跡の立地と環境	11
1. 地形と地質	11
2. 周辺の遺跡	17
II. 調査の概要	23
1. 調査の方法	23
2. 調査の経過	27
3. 調査の結果	27
III. 報告に際して	28
IV. 発見された遺構と遺物	30
1. 積穴住居跡とその出土遺物	30
第1号(B J 09)住居跡	30
第2号(C A 53)住居跡	39
第3号(C B 06)住居跡	44
第4号(C C 56)住居跡	48
第5号(C D 03)住居跡	55
第6号(C E 50)住居跡	61
第7号(C F 56)住居跡	67
第8号(C G 06)住居跡	73
第9号(C H 56)住居跡	78
第10号(C J 03)住居跡	85
第11号(D B 53)住居跡	92
第12号(D J 50)住居跡	102
第13号(E B 06)住居跡	110
第14号(E H 03)住居跡	123
第15号(E H 09)住居跡	128
第16号(E I 50)住居跡	135
第17号(E J 09)住居跡	140
第18号(E J 50)住居跡	144
第19号(F B 50)住居跡	155
第20号(F D 09)住居跡	159
第21号(F D 50)住居跡	166
第22号(F I 50)住居跡	170
第23号(G F 50)住居跡	178
2. 井戸跡とその出土遺物	185
第1号井戸跡	185
第2号井戸跡	211

3. 溝	225
第1号溝	225
第2号溝	226
第3号溝	226
第4号溝	227
第5号溝	227
第6号溝	228
第7号溝	229
第8号溝	229
第9号溝	230
第10号溝	237
第11号溝	240
4. 方形溝状遺構	240
第1号方形溝状遺構	240
第2号方形溝状遺構	243
5. ピット類	244
No.1 ピット	244
No.2 ピット	244
No.3 ピット	245
No.4 ピット	248
No.5 ピット	248
No.6 ピット	248
No.7 ピット	249
No.8 ピット	249
焼土遺構	251
6. 遺構に伴わない出土遺物	251
V. 遺構と遺物に関する予察と問題点	299
〔1〕検出遺構	299
1. 壁穴住居跡	299
2. 井戸跡	308
3. 溝跡	310
4. 方形溝状遺構	311
〔2〕出土土器の分類	312
〔3〕住居跡における土器のあり方	325
〔4〕出土土器に関する問題点	330
〔5〕遺跡の構造	334
〔6〕遺跡の年代	337
分析鑑定結果報告	341
1. 花粉分析	342
2. 鉄滓の組成分析およびX線回析	345
3. 植物遺体	346
4. 骨骨	346
写真図版	347~391
発掘担当者および協力機関	392
発掘調査地元作業員名簿	392
整理作業員名簿	392
岩手県教育委員会事務局職員一覧	394

図版目次

第1図 東北新幹線関係遺跡位置図	9	第60図 第16号住居跡出土遺物	139
第2図 地形分類図	13	第61図 第17号住居跡	141
第3図 地質概念図	15	第62図 第17号住居跡出土遺物	143
第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡	16	第63図 第18号住居跡	145
第5図 グリッド配図	19	第64図 第18号住居跡出土遺物(1)	149
第6図 遺構配置図	24	第65図 第18号住居跡出土遺物(2)	150
第7図 第1号住居跡	25	第66図 第18号住居跡出土遺物(3)	151
第8図 第1号住居跡出土遺物(1)	31	第67図 第18号住居跡出土遺物(4)	153
第9図 第1号住居跡出土遺物(2)	34	第68図 第18号住居跡出土遺物(5)	154
第10図 第1号住居跡出土遺物(3)	35	第69図 第19号住居跡	157
第11図 第1号住居跡出土遺物(4)	36	第70図 第19号住居跡出土遺物	158
第12図 第2号住居跡	37	第71図 第20号住居跡	161
第13図 第2号住居跡出土遺物	41	第72図 第20号住居跡出土遺物(1)	163
第14図 第3号住居跡	43	第73図 第20号住居跡出土遺物(2)	164
第15図 第3号住居跡出土遺物	45	第74図 第21号住居跡	167
第16図 第4号住居跡	46	第75図 第21号住居跡出土遺物	170
第17図 第4号住居跡出土遺物(1)	49	第76図 第22号住居跡	171
第18図 第4号住居跡出土遺物(2)	53	第77図 第22号住居跡出土遺物(1)	175
第19図 第5号住居跡	54	第78図 第22号住居跡出土遺物(2)	176
第20図 第5号住居跡出土遺物(1)	57	第79図 第22号住居跡出土遺物(3)	177
第21図 第5号住居跡出土遺物(2)	59	第80図 第23号住居跡	179
第22図 第6号住居跡	60	第81図 第23号住居跡出土遺物(1)	182
第23図 第6号住居跡出土遺物	63	第82図 第23号住居跡出土遺物(2)	183
第24図 第7号住居跡	66	第83図 第1号井戸跡(1)	187
第25図 第7号住居跡出土遺物(1)	69	第84図 第1号井戸跡(2)	189
第26図 第7号住居跡出土遺物(2)	71	第85図 井戸枠実測図(1)	191
第27図 第8号住居跡	72	第86図 井戸枠実測図(2)	193
第28図 第8号住居跡出土遺物	75	第87図 井戸枠実測図(3)	195
第29図 第9号住居跡	77	第88図 井戸枠実測図(4)	197
第30図 第9号住居跡出土遺物(1)	79	第89図 井戸枠実測図(5)	199
第31図 第9号住居跡出土遺物(2)	82	第90図 井戸枠実測図(6)	201
第32図 第9号住居跡出土遺物(3)	83	第91図 井戸枠実測図(7)	203
第33図 第10号住居跡	84	第92図 井戸枠実測図(8)	205
第34図 第10号住居跡出土遺物(1)	87	第93図 第1号井戸跡出土遺物(1)	207
第35図 第10号住居跡出土遺物(2)	90	第94図 第1号井戸跡出土遺物(2)	208
第36図 第11号住居跡(1)	91	第95図 第1号井戸跡出土遺物(3)	209
第37図 第11号住居跡(2)	94	第96図 第2号井戸跡	213
第38図 第11号住居跡出土遺物(1)	95	第97図 第2号井戸井筒部分側面図	215
第39図 第11号住居跡出土遺物(2)	98	第98図 第2号井戸跡出土遺物(1)	216
第40図 第11号住居跡出土遺物(3)	99	第99図 第2号井戸跡出土遺物(2)	217
第41図 第12号住居跡	101	第100図 第2号井戸跡出土遺物(3)	218
第42図 第12号住居跡出土遺物(1)	103	第101図 第2号井戸跡出土遺物(4)	219
第43図 第12号住居跡出土遺物(2)	107	第102図 第2号井戸跡出土遺物(5)	220
第44図 第12号住居跡出土遺物(3)	108	第103図 第2号井戸跡出土遺物(6)	221
第45図 第12号住居跡出土遺物(4)	109	第104図 溝(1)	231
	110	第105図 溝(2)	233
		第106図 溝(3)	235

第46回	第13号住居跡(1).....	112	第47回	溝出上遺物.....	238
第47回	第13号住居跡(2).....	113	第48回	溝・方形溝状遺構・ピット出土遺物.....	239
第48回	第13号住居跡出土遺物(1).....	116	第49回	方形溝状遺構.....	241
第49回	第13号住居跡出土遺物(2).....	117	第50回	No.1 ピット.....	245
第50回	第13号住居跡出土遺物(3).....	118	第51回	No.2・No.3 ピット・焼土遺構.....	246
第51回	第13号住居跡出土遺物(4).....	119	第52回	No.4・No.5 ピット.....	247
第52回	第13号住居跡出土遺物(5).....	121	第53回	ピット出土遺物.....	250
第53回	第13号住居跡出土遺物(6).....	122	第54回	遺構に伴わない出土遺物(1).....	252
第54回	第14号住居跡.....	125	第55回	遺構に伴わない出土遺物(2).....	253
第55回	第14号住居跡出土遺物.....	127	第56回	住居跡の規模.....	299
第56回	第15号住居跡.....	129	第57回	柱穴類別模式圖.....	301
第57回	第15号住居跡出土遺物(1).....	133	第58回	ママド主軸方向.....	303
第58回	第15号住居跡出土遺物(2).....	134	第59回	分類模式資料.....	323
第59回	第16号住居跡.....	137	第60回	時期別遺跡構成図.....	325

表 目 次

第1表	東北新幹線関係遺跡一覧表.....	7	第4表	鉄製品・土製品・石製品観察表.....	296
第1表	高地道路周辺の遺跡地名表.....	20	第5表	住居跡一覧表.....	305
第2表	遺構名系図表.....	29	第6表	出土物分類表.....	321
第3表	土器観察表.....	255	第7表	図示遺物集計表.....	327

写真図版目次

江刺市愛宕地区空中写真.....	348	国版20	第4号住居跡出土土器・第6号住居跡出土土器・第8号住居跡出土土器.....	368	
国版1	遺跡遺景・遺跡近景・作業風景.....	349	国版21	第7号住居跡出土土器・第10号住居跡出土土器.....	369
国版2	C-D区全景・第1号住居跡.....	350	国版22	第9号住居跡出土土器・第10号住居跡出土土器.....	370
国版3	第2号住居跡・第3号住居跡.....	350	国版23	第11号住居跡出土土器.....	371
国版4	第3号住居跡・第4号住居跡.....	351	国版24	第12号住居跡出土土器.....	372
国版5	第5号住居跡・第6号住居跡.....	351	国版25	第12号住居跡出土土器・第13号住居跡出土土器.....	373
国版6	第7号住居跡・第8号住居跡・第9号住居跡・第10号住居跡・第11号住居跡.....	352	国版26	第13号住居跡出土土器.....	374
国版7	第11号住居跡・第12号住居跡.....	353	国版27	第14号住居跡出土土器・第16号住居跡出土土器・第17号住居跡出土土器.....	375
国版8	第13号住居跡・第14号住居跡・E-F区全景.....	354	国版28	第19号住居跡出土土器・第21号住居跡出土土器.....	375
国版9	第15号住居跡・第16号住居跡.....	355	国版29	第18号住居跡出土土器.....	376
国版10	第17号住居跡・第18号住居跡.....	355	国版30	第22号住居跡出土土器.....	378
国版11	第18号住居跡・第19号住居跡・第20号住居跡・第21号住居跡・E-F区全景.....	356	国版31	第15号住居跡出土土器・第23号住居跡出土土器.....	379
国版12	E-F区全景・第22号住居跡・No.2・No.3ピット・第1号井戸跡.....	357	国版32	第2号井戸跡出土土器.....	380
国版13	G-I区全景・方形溝状遺構・第9号溝跡.....	358	国版33	第2号井戸跡出土土器.....	381
国版14	第10号溝跡.....	358	国版34	第2号井戸跡出土土器・遺構に伴わない出土土器.....	382
国版15	第1号井戸跡.....	359	国版35	刀子・鉄片.....	383
国版16	第1号井戸跡・第2号井戸跡.....	360	国版36	釘・繩・錠・鉄環他.....	384
国版17	第1号井戸跡・第2号井戸跡.....	361	国版37	角・牛骨・馬骨・獸骨・砥石.....	385
国版18	第2号井戸跡.....	362	国版38	洗淨・特殊石製品・土鍤・足方.....	386
国版19	第2号井戸跡・第3号井戸跡.....	363	国版39	第1号井戸横板1.....	387
	出土土器・第2号井戸跡出土土器.....	367	国版40	第1号井戸横板2.....	388
	出土土器・第3号井戸跡出土土器.....	367	国版41	第1号井戸横板3.....	389
	出土土器・第4号井戸跡出土土器.....	367	国版42	第1号井戸横板4.....	390
	出土土器・第5号井戸跡出土土器.....	367	国版43	圓鏡寫真(花粉)・ルツボ.....	391

序 文

1. 調査の経過

昭和46年から実施された岩手県内東北新幹線建設工事に関する埋蔵文化財発掘調査は、一関市より盛岡市に至る約101kmの間がその対象であり、発掘調査実施前の協議・分布調査の段階から発掘調査実施、調査結果の報告書刊行まで約9年の歳月を要した。ここでは、1. 発掘調査実施前の経過、2. 年度別発掘調査の経過、3. 整理報告書作成の経過に大別し、その概要についてまとめてみたい。

(1) 発掘調査実施前の経過

全国新幹線鉄道整備法（昭和45年5月18日法律第71号）に基づく東北新幹線建設予定地における県内埋蔵文化財の取扱いについての最初の協議は昭和46年5月17日に日本国有鉄道盛岡工事局と岩手県教育委員会との間で行なわれ、運輸大臣に提出する申請書に添付する文化財資料は遺跡台帳により作成することとし、今後県教育委員会は分布調査実施のための準備と、建設工事に関連ある範囲内での遺跡についての情報を提出することにした。昭和46年11月2日、新幹線建設予定地内の分布調査実施のための協議をもち調査員は県教育委員会が関係市町村教育委員会の協力のもとに、県文化財専門委員、考古学専攻者、発掘調査経験者の中から委嘱をし市町村単位ごとに班の構成をした。遺跡分布調査は宮城県境より盛岡市に至る約101kmを巾2kmの範囲で実施することとし、11月20日より約2ヶ月の期間で終了した。その結果93遺跡が確認された。

昭和47年4月に主管課である社会教育課に4名の埋蔵文化財担当職員を文化財主査として配置し、さらに4名の嘱託補助員を採用した。東北新幹線担当職員として鳴千秋文化財主査が当り他は東北縦貫自動車道関係の業務を担当しそれぞれの業務の遂行に当った。更に同年6月1日より10日までの間、新幹線ルート用地杭の設置時期に合わせセンター杭を中心に巾20m巾に含む遺跡範囲確認のための現地調査と鳴千秋・菊地郡雄勝文化財主査によって行ない、その結果43遺跡を発掘調査対象遺跡として決定した。その後、新幹線関連事業として東北本線北上貨物操作場の建設予定地と用地問題で現地踏査ができずにいた花巻地区の分布調査の追加により最終的に48遺跡が発掘調査対象の遺跡となった。その結果に基づき調査行程、方法等について協議を進め、全遺跡が記録保存を前提としての発掘調査を実施することにした。

(2) 発掘調査の経過

当初、東北新幹線開業は昭和51年度であり49年度中に発掘調査を終了しなければ支障がある

ということが調査計画立案にあたっての最大の悩みでもあった。そのため野外の発掘調査を優先先行させ、調査結果の整理、報告書の作成、刊行は別途に考えることとした。そのことから冬期間に入ても発掘調査を継続せざるを得ないこともあり、調査の精度や報告書作成の面からも反省すべき点が多々あった。調査開始後の経過の中で国内経済に大きな影響を与えた総需要抑制政策等が原因となって、東北新幹線開業時期が延期となり発掘調査期間は昭和47年10月から52年10月までとなった。調査結果の整理と報告書作成作業は53・54年度の2ヶ年で実施することとした。なお、埋蔵文化財発掘調査委託の契約は年度ごとに日本国有鉄道盛岡工事局長と岩手県知事との間で締結された。調査主体者は岩手県教育委員会教育長、調査主管課は岩手県教育委員会事務局文化課である。

次に年度ごとの主な発掘調査経過について略記する。

昭和47年度 調査員3名、補助員1名、調査期間10月25日～12月18日。3遺跡。

矢巾町所在の下赤林Ⅰ遺跡、下赤林Ⅲ遺跡、高畠遺跡を調査した。この調査は用地本買取時期の調査であり、国鉄が地権者より発掘承諾を得ての調査であった。

昭和48年度 調査員8名、補助員5名、調査期間5月1日～1月29日 8遺跡。

4月、文化課の新設と共に埋蔵文化財調査班が誕生し、本格的な発掘調査が開始された。しかし、用地買取の関係などから年間スケジュールが確定しないまま、まず北上貨物操作場関連遺跡の南館遺跡よりスタートした。ここでは発掘調査方法の統一化を計るために新幹線班全員による合同研修調査を実施した。そして7月より1遺跡2名の調査員と1名の補助員を最低の班構成員とし、遺跡規模によって構成員を調整することとして8遺跡の調査を実施した。夏休み期間には発掘調査の経験のある教員・岩手大学生・京都女子大生の協力参加を得た。12月に入って杉の上Ⅱ遺跡において平安時代の焼失駆穴住居跡から多量の炭化材の発見があり、炭化材の処理上やむを得ずビニールハウスの設置の中で1月下旬まで冬期間の調査となつた。

昭和49年度 調査員8名、補助員5名、調査期間4月8日～12月20日 17遺跡。

江刺市と碑貫郡石鳥谷町所在の遺跡が主な調査地域となった。江刺市落合Ⅱ遺跡は分布調査による遺跡範囲は北上川流域に広がる河岸低地における水田面により約1m高い微高地一帯としていたが、水田面における新幹線高架橋建設工事中に多量の遺物が発見され、地元教育委員会からの連絡があり、そのため遺跡範囲を広げ調査した結果、水田面下旧河道の泥炭層から平安時代の豊富な遺物資料の発見となり貴重な遺跡となつた。江刺地区的調査は地上川東岸一帯であり各遺跡は蛇行しながら南下する北上川とその支流である広瀬川、人首川、伊手川の氾濫により度々冠水をうけていることから遺構の検出、精査の際に土層判別と遺構範囲の確認に手間が多く多くの時間を費やした。

昭和50年度 調査員8名、補助員7名、調査期間4月10日～2月21日 15遺跡

調査地区が、一関市、江刺市、北上市、花巻市、紫波郡紫波町、都南村それに盛岡市と広範囲において調査班相互の連絡・調整が困難な年であった。7月に北上市鬼柳町分の新幹線建設予定地内にあったイチョウの大木の根元から一字一石絆を地元民である佐藤忠二、佐藤升藏氏が発見されたことから鬼柳西裏遺跡としての取り扱いをすることとした。調査の結果、縄文時代・平安時代・近世の各時代にわたる複合遺跡となり2年継続の調査となった。また江刺市宮地遺跡は奈良時代から平安時代にかけての大集落となり調査中に2基の井戸が発見され、そのため乾水期である冬期間の調査となった。嚴寒の中で2月末までの調査となり、遺構実測図の完成と井戸枠のとり上げを行なった。紫波町西田遺跡は北上山地における小丘陵の西端にあり蛇行する北上川によって切離された台地に立地し滝名川と北上川低地に囲まれた残丘上にある。標高100m前後で周辺の水田面との比高は約10mである。この丘陵のほぼ中央を南北に縦断する新幹線予定地を調査対象としたが、ほとんどが山林であり遺跡としての確証はなかなかつかめなかった。立地形に調査根拠をもつたこともあって、まず本年度は遺構検出のための調査を目的としたグリット方式と重機使用（バックホー）による表土はぎを行なった。その結果、縄文時代早期・中期・平安時代にわたる大遺跡であることが確認された。なお年度末人事異動で昭和48年度より調査を担当した峰谷 平氏が陸前高田市立高田小学校へ転勤された。

昭和51年度 調査員7名、補助員8名、調査期間4月9日～12月23日 9遺跡。

昨年度よりの調査継続である江刺市宮地遺跡、北上市鬼柳西裏遺跡、紫波町西田遺跡と盛岡市所在の4遺跡が調査の中心であり本年度で48全遺跡について調査が及んだことになった。西田遺跡は北部地区に縄文時代中期の墓塚群を中心とする集落の全貌が現われ次年度の調査によって結着をつけざるを得ないことになった。48年度から新幹線班で調査担当した宍倉圭介氏が県立遠野農業高校へ、菊池久氏は釜石市立大松小学校へそれぞれ年度末人事異動で転勤された。

昭和52年度 調査員6名、補助員7名、調査期間4月11日～12月15日 1遺跡。

紫波町西田遺跡のみの調査となった。縄文時代中期における墓塚群、円筒形ピット群、貯蔵穴群、住居跡群によって構成された大遺跡の調査をもって新幹線関連48全遺跡の発掘調査を終了した。調査結果の整理はそれぞれの年度における発掘調査終了後、分室において図面、写真、遺物等の整理を一部実施した。

(3) 整理・報告書作成の経過

昭和53年度 調査員6名、期限付臨時職員12名。

53・54年度の2年間にわたる本格的な整理作業に入った。53年度は48遺跡のうち40遺跡の報告書作成のための作業を実施し、3分冊を刊行した。1分冊は一関・江刺地区（10遺跡）、2分冊は北上・花巻・石鳥谷地区（11遺跡）、3分冊には紫波・矢巾・都南・盛岡地区（19遺跡）を収録した。

昭和54年度 調査員6名、期限付臨時職員12名。

本年度は整理作業の最終年度に当たり、新幹線関連遺跡48遺跡の残り8遺跡の報告書作成のための作業を実施した。本年度は報告書4分冊とし、前年度3分冊に続き第4分冊として江刺市の宮地遺跡、5分冊として江刺市の鴻ノ巣館遺跡、石島谷町の高畠遺跡、矢巾町の白沢遺跡、の3遺跡、6分冊には江刺市の落合日遺跡、北上市の南館遺跡と鬼柳西裏遺跡の3遺跡、第7分冊には紫波町の西田遺跡をそれぞれ収録した。

2. 調査の方法

遺跡の調査は原則として以下のような方法を用いた。

(1) 調査対象範囲の送定

新幹線建設地内、及び付帯施設建設地内にかかる遺跡は、全て調査対象とした。

(2) 調査区の設定

調査対象範囲全域にグリッドを設定し、計画的な調査と同時に遺構の平面的位置の把握につとめた。グリッドは調査地の地形を考慮し、東北新幹線の任意の中心杭の2点（東京起点の距離標が明示してあるもの）を原点とし、両者を結ぶ線、およびこれに直交する線を基準線とし3m単位に割付け、30mで1地区とした。グリッド名は東西方向を数字、南北方向をアルファベットで表わし、両者の組合せて呼称した。なお、地区名は調査区の北から順に設定した。

(3) 発掘の方法

① 探索発掘と全面発掘

調査対象範囲内における遺構の分布状況を調べるために、原則として3m×3mのグリッドを市松状に粗掘し、検出作業を進めた。また、基本的な層位の把握のための深掘りを設定した。遺構や遺物を含む層が検出された場合は、その具体的な内容と分布関係などを明確にするため、必要な範囲にわたって全面発掘を行なった。

② 遺構調査の方法

検出された遺構については、該当のグリッド名を付した。その場合、最も北西に位置するグリッドで呼称した。遺構の積立にあたっては、記述項目を統一したカードなどを使用した。

③ 遺物の取り上げ

a. 遺物は原則としてグリッドごとに取り上げ、遺跡記号、出土年月日、出土地点、出土層位を記録の上、取り上げた。

b. 出土遺物のうち、その遺構に直接関係するものや、年代決定資料となり得るものにつ

いては、出土レベルと位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

④ 実測図の作成

断面図・断面図は基本層位、遺構の堆積状態や遺構細部の在り方を示す遺構断面を作成した。原則として、原図の縮尺は1/50であるが、カマド、炉、埋設土器などの細部については、必要に応じて1/50などの縮尺を用いた。各層における上色、土性、混入物、半さ、遺物のあり方などの注記は統一を心がけたが一部統一を欠いたものもある。

平面図 平面図は調査区全域を表現したもの、遺構や遺物包含層での遺物の出土状況を記録するための部分的なものとがある。原図の縮尺は1/50を原則としたが、必要に応じて1/50などの縮尺を用いた。測量方法は、造り方測量により作図した。

⑤ 写真の記録

記録として撮影した写真には、35mm版モノクロ写真、35mm版カラー写真、35mm版エクタクローム写真（スライド用）、6×7cmモノクロ写真、35mm版赤外線写真などがある。

⑥ その他の記録

調査記録として、調査日誌、業務日誌を各遺跡ごとに備え、記録した。また、調査終了後の整理時においても、業務日誌、作業記録、遺構カードを備え、記録した。

3. 整理の方法

発掘調査の期間内で現場作業と併行して行った整理作業は遺物の洗浄だけで、大部分は分室で進められた。整理にあたっては図面、遺物、写真とそれぞれ整理基準を作成して実施した。

(1) 図面整理の方法

発掘調査時に作成した図面は次のような要領で整理した。第一原図は点検、修正の上、登録番号を付し、それをもとに第二原図を作成し、それぞれを図面台帳に記載した。

(2) 遺物整理の方法

遺物は洗浄し、遺跡記号、採取年月日、遺構名、地区名、層位、遺物番号を付し、複合、復元作業を進めた。その後分類作業を進める中で、資料化できる遺物について、実測図、拓本の作成をし、写真撮影をした。

(3) 写真整理の方法

写真是遺跡ごとにそれぞれのネガと密着焼付のものをアルバムに貼付し、遺構名、地区名、遺物番号、関係実測図番号、撮影方向などを記入し、整理した。

(4) 本書に収録した遺構、遺物の実測図は、次の要領に従って整理、作成されている。

① 遺構の図面

遺構配置図は発掘調査時に作成した第一原図を基に $\frac{1}{10}$ の縮尺図を作成し、それを $\frac{1}{10}$ に縮少して載せた。各遺構の図面は第二原図をトレースし、それを以下の最終縮尺に合致するように縮少した。

住跡跡・井戸跡・ピット類： $\frac{1}{10}$ 溝類： $\frac{1}{10}$

なお、遺構の一部を拡大して図示した場合は、その都度縮尺を数字を表示した。

② 遺物

a. 土器：土器は原則として $\frac{1}{10}$ 以上残存するものを図化した。土器の器面調整は中軸線の両側に3cm内外の幅をもたせて表記した。調整技法の表現方法は基本的に宮城県教育委員会の『東北新幹線関係遺跡調査報告書(1)』を参考にした。図式で区別できない技法は「土器の観察表」に記してある。体部下端、および底部にみられる再調整の範囲は実測図の外側に実線で表記し、黒色処理がみられるものは $\blacksquare\blacksquare\blacksquare$ のスクリーン・トーンで表現した。また、過元炎焼成の土器は酸化炎焼成のものと区別するため、断面を黒く塗り潰した。実測図は、縮尺を $\frac{1}{10}$ に統一し、各遺構ごとにまとめて記載した。

b. 鉄製品：鏽の除去には努めたが、かなりの鏽が付着したまま図化されている。実測図には鏽と原体とは区別できるように表現した。破損部には鎖線を付した。実測図の縮尺は $\frac{1}{10}$ に統一して記載した。

c. 土製品・石製品：小形手捏土器、土鍤、土製筋鉢車等の土製品は縮尺を $\frac{1}{10}$ に統一して記載した。調整技法等は土器に準じた。石製品も縮尺は $\frac{1}{10}$ に統一して載せた。砥石の使用面は全面回転して図化した。

d. 木製品：井戸枠として使用された木材については縮尺を $\frac{1}{10}$ に統一して表記した。実測時において、木材が非常に軟弱であったため、加工痕等を完全なかたちでは図化していない。

4. 遺物保存処理の方法

出土遺物のうち、木製品、鉄製品については可能な範囲で保存処理をおこなった。本書収録の遺物のうち、井戸枠は財團法人元興寺文化財研究所に委託し、P.E.G含浸、およびアルコールエーテル法で処理をおこなった。

5. 広報活動の実施

調査内容を広く知らせ、文化財についての関心を深めてもらうことを意図し、次のような活動をした。

- ・現地説明会の開催
- ・現場だよりの発行
- ・関係機関への資料提供

(第1表) 東北新幹線開通運送一覽

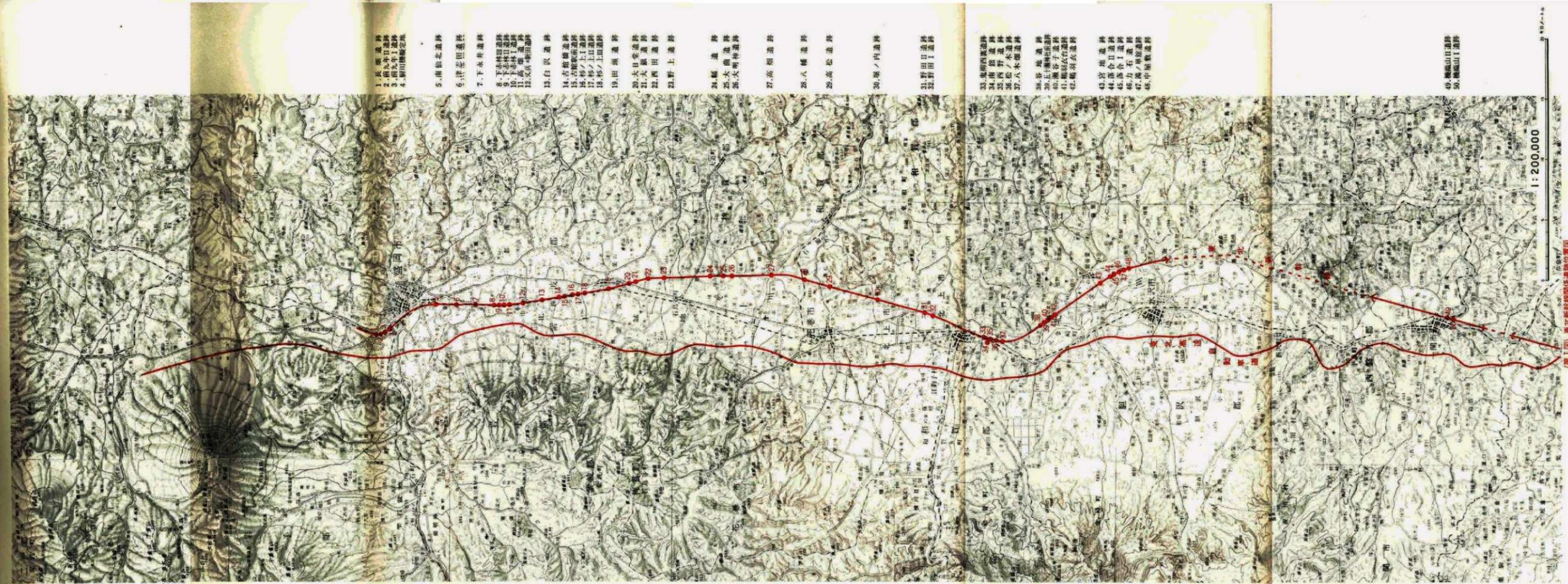
(位置一覧は図1図を参照)

所 在 地	道 路 名	調査面積 ha	測 全 周 間			報告書名
			50. 9. 30~50. 11. 29	50. 9. 22~50. 11. 11	48. 12. 10~48. 12. 22	
一 關 市	機 條 山 I 道 路	3,500m ²	50. 9. 30~50. 11. 29	50. 9. 22~50. 11. 11	n	1
"	機 條 山 II 道 路	1,470	50. 9. 30~50. 11. 29	50. 9. 22~50. 11. 11	n	n
江 利 市	中 屋 敷 道 路	5,000	48. 12. 10~48. 12. 22	—	—	n
"	浦 ノ 集 館 道 路	6,400	49. 6. 24~49. 10. 23	—	—	v
"	力 石 道 路	2,240	49. 4. 8~49. 4. 18	49. 5. 8~49. 6. 19	—	1
"	落 合 I 道 路	2,560	49. 4. 18~49. 8. 6	—	—	n
"	落 合 II 道 路	2,420	49. 4. 8~49. 8. 8	—	—	vI
"	内 地 道 路	3,600	50. 9. 1~51. 7. 26	—	—	w
"	鶴 羽 衣 道 路	1,280	49. 4. 9~49. 5. 14	—	—	1
"	鶴 羽 衣 台 道 路	960	49. 4. 19~49. 5. 10	—	—	n
"	瀬 谷 今 道 路	2,400	49. 5. 8~49. 6. 19	—	—	n
"	五十 湊 社 刷 道 路	1,600	49. 6. 4~49. 7. 30	—	—	n
"	谷 地 道 路	2,720	49. 7. 25~49. 9. 3	—	—	n
北 上 市	八 木 烟 道 路	800	49. 11. 28~49. 12. 9	—	—	II
"	松 ノ 木 道 路	480	50. 12. 16~50. 12. 25	—	—	n
"	西 野 道 路	5,000	50. 9. 1~50. 12. 25	—	—	n
"	南 院 道 路	4,660	48. 5. 1~48. 7. 26	—	—	vI
"	鬼 鳥 西 長 道 路	4,400	50. 9. 3~51. 12. 15	—	—	n
"	野 田 I 道 路	3,000	51. 8. 6~51. 8. 28	—	—	II
"	對 田 II 道 路	1,920	50. 9. 1~50. 9. 19	—	—	n
"	堀 ノ 内 道 路	2,400	50. 7. 7~50. 8. 30	—	—	n
花 梅 木	高 松 道 路	2,000	50. 6. 4~50. 7. 9	—	—	n
"	八 塚 道 路	1,800	51. 10. 7~51. 11. 25	—	—	n
石 烏 谷 町	高 烟 道 路	2,720	49. 10. 25~49. 12. 20	—	—	v
"	大 明 横 道 路	3,680	49. 10. 25~49. 11. 22	—	—	II
"	大 曲 道 路	1,920	49. 10. 25~49. 12. 12	—	—	n
紫 滾 町	野 上 道 路	2,400	49. 11. 18~49. 11. 29	—	—	n
"	西 田 道 路	29,600	49. 10. 17~49. 10. 29	—	—	III
"	大 風 道 路	960	50. 4. 26~52. 12. 15	—	—	w
"	大 日 宮 道 路	2,240	50. 4. 10~50. 4. 26	—	—	III
"	田 炳 道 路	1,760	50. 5. 16~50. 6. 10	—	—	n
"	杉 ノ 上 III 道 路	3,402	49. 9. 5~49. 10. 16	—	—	n
"	杉 ノ 上 II 道 路	4,276	48. 10. 16~48. 12. 28	—	—	n
"	杉 ノ 上 I 道 路	7,200	48. 7. 18~48. 10. 16	—	—	n
"	古 館 道 路	3,360	48. 10. 1~48. 11. 30	—	—	n
矢 巾 刈	白 沢 道 路	4,200	48. 9. 18~48. 12. 8	—	—	n
"	又 兵 衛 新 田 旗 道	3,726	48. 7. 20~48. 9. 29	—	—	v
"	高 烟 道 路	2,080	49. 10. 18	—	—	III
"	下 赤 林 I 道 路	640	47. 11. 24~47. 12. 2	—	—	n
"	下 赤 林 II 道 路	2,720	47. 10. 25~47. 12. 16	—	—	n
"	下 赤 林 III 道 路	3,200	48. 11. 13~48. 12. 19	—	—	n
都 木 村	下 水 井 道 路	2,560	47. 12. 2~47. 12. 18	—	—	n
"	下 志 田 道 路	1,760	50. 4. 10~50. 4. 24	—	—	n
"	南 仙 北 道 路	4,800	50. 4. 23~51. 5. 15	—	—	n
盛 岡 市	野 川 橋 搭 定 地	800	50. 4. 10~50. 4. 25	—	—	n
"	前 九 年 I 道 路	4,600	51. 5. 17~51. 10. 16	—	—	n
"	前 九 年 II 道 路	5,150	51. 4. 23~51. 6. 3	—	—	n
"	長 烟 道 路	3,400	51. 4. 19~51. 6. 2	—	—	n
"	長 烟 道 路	6,370	51. 4. 9~51. 5. 15	—	—	n

※ 並行上 I・II・III 部分は 1 重跡として登録してある。

(第1图) 東江新幹線地圖位置圖

1:200,000



本文

I 遺跡の立地と環境

1 地形と地質

(1) 位置

江刺市は岩手県の県南に位置する小都市で、人口約36,000人を数える。その市域は北上川東岸の平野部とその東側に続く丘陵地および山地一帯に広がっている。市域の範囲は南北約28km、東西約24kmの地域にまたがり、その面積は360.77km²に及ぶ。

市の中心部は市域西寄りの岩谷堂地区にあり、ここから県庁所在地の盛岡市までは北に約57km離れ、北上川を挟んで隣接する水沢市の中心街には西に約7km離れている。

本遺跡は江刺市西部の愛宕地区に位置する。地籍は愛宕字観音堂沖66で表わされ、江刺市役所の西南方向約1kmの地点である。

(2) 地形

岩手県北部に源をもつ北上川は、岩手県を南北に輻射し、宮城県東北部の石巻湾に注いでいる。流路の長さ 243km、流域面積10.720km²に及ぶ東北第1の大河川であり、流路・流域面積ともその半を岩手県が占め、県内の大動脈をなしている。

遺跡の所在する江刺市は、北上川中流域（盛岡一前沢）沿岸地帯に位置する。中流域一般に、東岸では古生層・花崗岩類を主な構成層とする北上山地の西縁丘陵地帯を洗い、西岸では新第三紀層の砂岩・凝灰岩を基盤とする扇状地や扇状地性段丘群の末端に侵食崖をつくっている。中流域においても、東西向側の山地から直角に多くの支流が合流しており、北上山地より西流して合流する河川の勾配は比較的緩く、起伏の大きな奥羽山脈より東流する河川は急勾配で合流する。この結果、奥羽山脈支流から運び込まれた砂礫量は北上山地支流のそれと比べて著しく多く、西岸には大小の扇状地や扇状地性段丘群の発達が顕著になっている。中流域での流路が、河谷内において東に偏するのはこのことに起因する。

胆沢・江刺地方においても以上のこととは同様であり、西岸には六原扇状地・胆沢扇状地などの大規模な扇状地が発達している。胆沢川によって形成された胆沢扇状地は段丘化しており、上位より一前坂段丘（西根段丘相当面）、胆沢段丘（村崎野段丘相当面）、水沢段丘（金ヶ崎段丘相当面）に大別され、胆沢段丘はさらに上野原・横道・堀切・福原の各段丘に細分される。これらの段丘群は胆沢川の流路に沿って南北に規則的に配置されている。

一方、東岸では段丘面の発達は著しく貧弱であり、西岸とは明瞭な河食當力の違いを示している。このなかで、江刺市北部の稻瀬付近には比較的顕著な段丘の発達が認められ、稻瀬より岩谷堂の北端にかけては、中位段丘（村崎野段丘相当面）^(注5)が広く分布し、その前面に低位段丘（金ヶ崎段丘相当面）^(注5)が小規模に発達している。また、丘陵西縁部にはそれに付着するかたちで、低位段丘が小規模ながらも比較的広範囲に分布する。そのほか、北上山地に源をもつ広瀬川・人首川・伊乎川などの支流沿いに小面積の低位段丘が断片的に点在する。江刺市で最も広い面積を占めるのが北上山系の山地・丘陵地帯である。北上山地は隆起半平原化した高原地帯であり、種山高原（物見山：870.6m）・大森山（820.0m）などに代表される緩やかな丸味を帯びた尾根にその特徴がある。山地西側の丘陵は市域の大半を占めており、とくに200m以下で開拓可能な低平な丘陵地が卓越する。

江刺市において、北上川東岸には西岸の胆沢扇状地と面して沖積平野が広く帶状に延びている。通称江刺平野と呼ばれるもので、最大幅東西3.2km、最大長南北10.5kmを計り、中流域最大の規模をもつ。ゆるやかに蛇行して南下する北上川は、北上山地より西流する広瀬川・人首川・伊乎川と合流し、また奥羽山脈より東流する胆沢川とも合流する。江刺平野上にはこれらの河川にかかる旧河道が多数認められ、曲流・蛇行の痕跡を随所にとどめている。同地域は河川との比高も少なくそのほとんどが洪水氾濫の常襲地帯となっており、ここに自然造成された大小の微高地が一面に点在する。

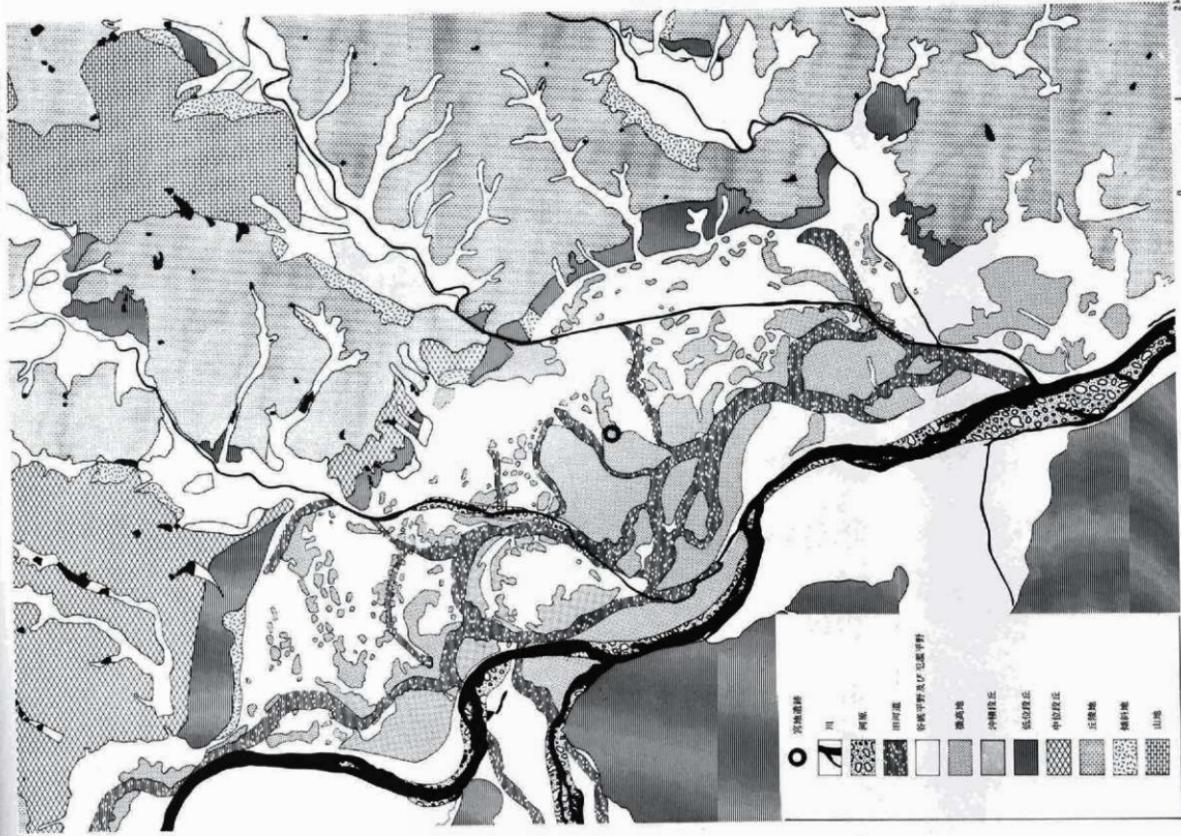
これらの微高地は、その成因の違いによって、①旧河川の洗流に残された沖積台地の微高地面、②旧河川による居揚上の沖積層微高地面、③微高地状自然堤防上の沖積面などに分けられる。^(注6) ①は沼の上、観音堂沖・橋本・三百刈田・荒谷等の小字名に表記される地域が該当し、宮地遺跡の立地面もこの微高地に含まれる。^(注7) ②は江刺平野上の微高地の大半を占めており、東北新幹線関連遺跡のほとんどがこの面に立地する。③は旧河川路に沿って局部的に形成されており、後背地は低地としてそのまま残されている。

江刺平野の海拔高度は35~45mであり、微高地面と周囲の低位面との比高は約1~2mを計る。低位面には水田が開け一大穀倉地帯を形成している。微高地は宅地や果樹・ホップ・野菜等の畑作利用のほか、水田化も進められており。本遺跡の現況（調査時）は宅地・畑地・水田となっている。

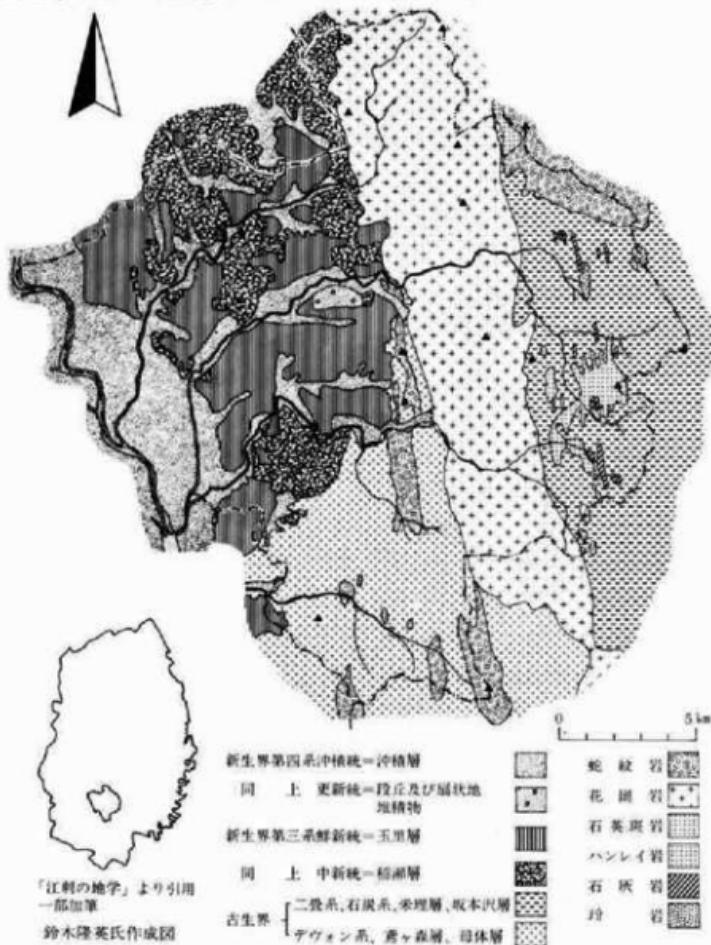
〔3〕 地質

江刺市において、北上山地の主要構成層である古生層は田原地区にみられる鷲ヶ森層と、米里付近にみられる米里層とがある。また中生代白亜紀には花崗岩体の貫入がみられ、柴川から伊手にかけて南北に分布する。これらは標高500~800mの山々として尾根をつらね、隣接町村と

第一圖 地形分類圖



の境界部をなしている。この地域に最も広く現われる地層は新第三系に属するもので、北上山地のなかでは分布範囲の限られた比較的新しい地層からなっている。中新統のものとしては、稲瀬付近に広がる稲瀬層があり、安山岩・凝灰質岩石・礫岩など火山性岩石を主要な構成層とするものである。稲瀬層は丘陵縁辺部各所に露出しており、標高150~300m内外の低い丘陵地を形成している。そのほかの丘陵地は、主として鮮新統の玉黒層の堆積物によって構成される。玉黒層は玉黒挟炭層ともいわれ、稲瀬層の侵食凸凹面を不整合におおっている。上部には亜炭層が挟在し、下部には凝灰質頁岩・砂岩・礫岩が発達する。



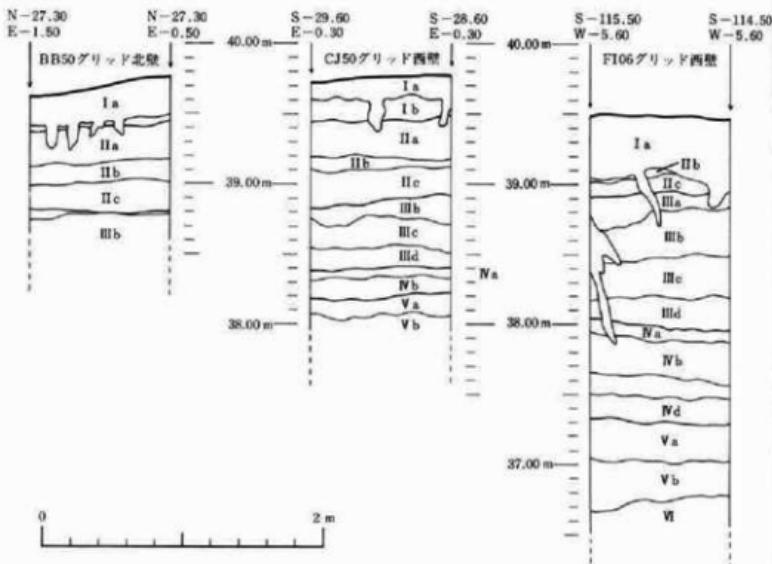
第2図 地質概念図

江刺平野の基盤は玉里層である。北上川及び北上山地の丘陵地に近接する瀬谷子付近の一部では、粘土層が基盤となり、安山岩が露出する。基盤の上部は下位より砂礫層・砂層・シルト層の順に堆積する沖積層で覆われる。江刺平野内では、基盤の絶対高は南より北へと漸次高くなる傾向があり、沖積層の厚さは北に薄く、南に厚くなる。沖積層の地質構成は一部を除いて一様な連続性を示している。表部は完新世のシルト層・砂層より構成され、シルト層が全体として卓越する。2層の層厚は下位の砂礫層に左右される面もあるが、2~4m程度になる。これらの層の下部にはよく統った更新世の砂礫層が一様分布する。礫径は平均30~50cm強で、下部は有効径が大きく透水性はかなり高いものである。層厚は3~5cm程度を計る。地下水位はこの層の上端附近にある。沖積層全体の層厚は約7~8mである。

以上のような沖積層の地質構成は江刺平野全体に一般的にみられるものであるが、一部の地域（たとえば本遺跡の乗る微高地面）では砂層の下部にシルト層の粘性土がみられるようになる。ただしこれはレンズ状に部分的な堆積を示す。

【宮地遺跡の基本層序】

本遺跡では、遺跡の乗る微高地面の基本層序を明らかにするために、調査区内の3地点で深堀りを実施し、断面観察を行なった。その結果は第3図に示すとおりであるが、深堀り不能の



第3図 遺跡の深堀断面図

深層の様相は川崎地質株式会社の試錐結果を参考にした。

Ia層：暗褐色(10YR 4/4)土。シルト。畑地及び水田耕作土。北部で薄く、南部で厚くなる。焼土粒・木炭粒・木器片・小円礫を包含する。層厚13cm土～45cm土。

Ib層：褐色(10YR 4/4)土。シルト。緻密で堅い。畑地の一部（耕作が浅い個所）に薄く確認されるのみである。焼土粒・木炭粒・土器片を含む。層厚0～15cm土。

IIa層：にほい黄褐色(10YR 5/6)土。シルト。色調が褐色(10YR 4/4)を呈する部分もみられる。比較的緻密で圧縮性に欠ける。この層の上面が遺構検出面である。層厚10cm土～30cm土。

IIb層：にほい黄褐色(10YR 5/6)土。シルト。IIa層よりやや粘性が強い。層厚6～15cm土。

IIc層：にほい黄褐色(10YR 5/6)土。シルト。やや砂質である。層厚10cm土～28cm土。

IIIa層：褐色(10YR 4/4)土。シルト質砂。調査区の北端及び南部のE区以南に堆積する。E区以南の遺構の精査、とくに壁の検出・堀り方の有無等はこの層の存在を鍵にして行なっている。層厚0～22cm土。

IIIb層：にほい黄褐色(10YR 5/6)土。砂。ややシルト分を含む。層厚8cm土～34cm土。

IIIc層：にほい黄褐色(10YR 5/6)土。砂。上層に比べてやや粗くなる。層厚16cm土～32cm土。

IIId層：にほい黄褐色(10YR 5/6)土。砂。IV層との漸移層で粘性土を含む。層厚12～22cm土。

IVa層：褐色(10YR 4/4)土。シルト質粘土。有機物を混入する。層厚6cm土～12cm土。

IVb層：にほい黄褐色(10YR 5/6)土。シルト質粘土。層厚20cm土～32cm土。

IVc層：暗褐色(10YR 4/4)土。シルト質粘土。VI層のなかで最も粘性が強く、多量の有機物を含む。色調が黒褐色を呈する個所もみられる。層厚10cm土～17cm土。

IVd層：褐色(10YR 4/4)土。シルト質粘土。細砂を若干含む。層厚15cm土～21cm土。

Va層：にほい黄褐色(10YR 5/6)土。砂。III層に比べて粗くで軟弱である。やや粘性土を含み、含水性が高い。層厚25cm土。

Vb層：にほい黄褐色(10YR 5/6)土。砂。2～3mmの礫を少量含む。層厚30cm土。

VI層：暗灰黄褐色(2.5YR 5/2)土。砂礫。径20～30mmの亜角礫・円礫が主体となる。層厚は試錐結果によれば4m強となる。

なお、粗堀は第1段階としてIIa層の上面まで行ない、第2段階としてIIa層を2～3cmを堀り下げて行なった。遺物の出土層はIa層とIb層に限られる。

2 周辺の遺跡

宮地遺跡は、江刺平野上に点在する数多くの微高地の1つに立地している。これらの微高

地はその成因に若干の違いは認められるものの、いずれも北上川・胆沢川等の大河川の影響のもとに発達したものであることは、概に述べた。こうした微高地面は、古くから人間活動の場として利用されてきており、古くは縄文時代中期末葉の遺跡が知られている。

ここでは、宮地遺跡の歴史的環境を理解する為に、江刺市及びその対岸の水沢市の一部（第4図）を中心に、主に発掘調査された遺跡をとりあげて時代別に概観してみたい。

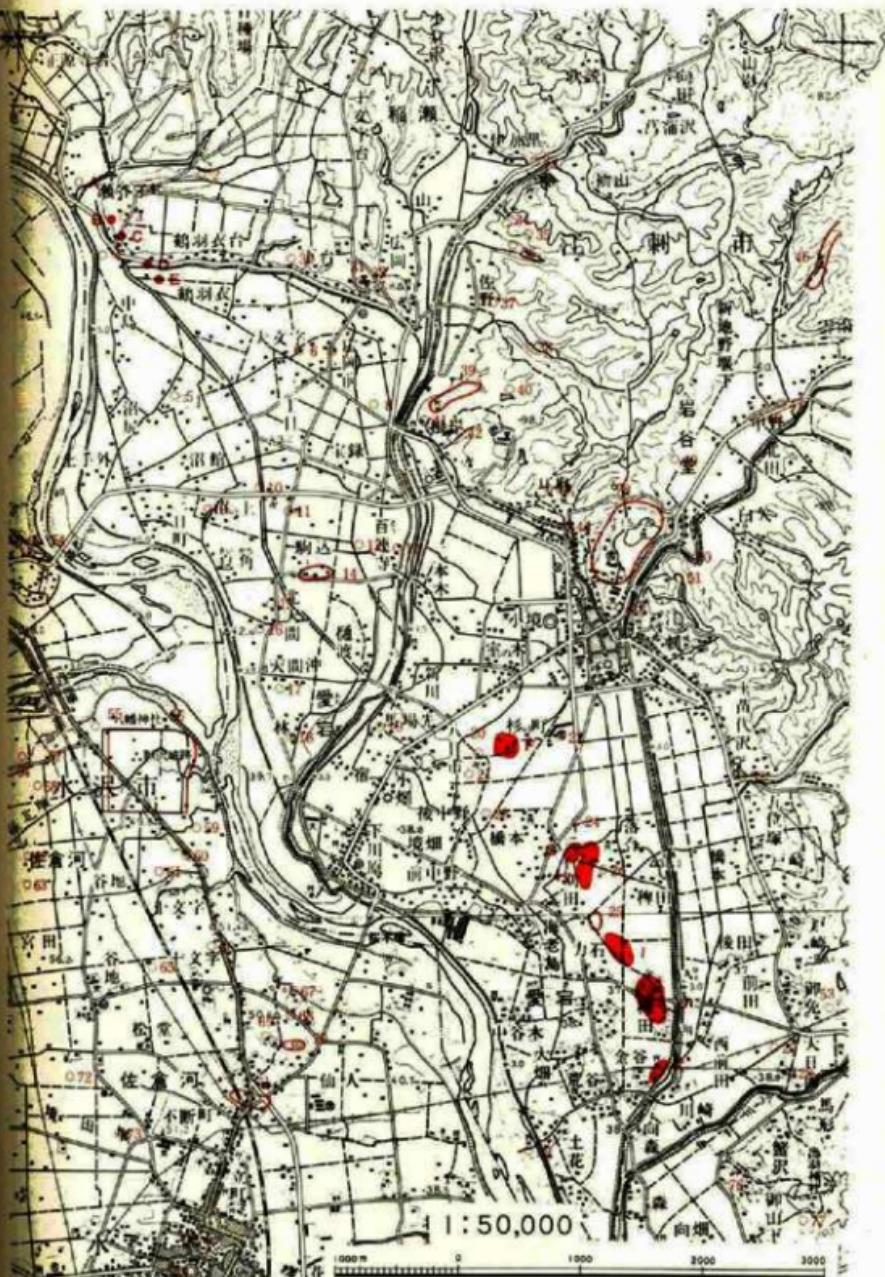
旧石器時代の遺跡は未だ確認されていない。

縄文時代では、江刺地区において五十瀬神社前遺跡・瀬谷子遺跡の2遺跡が調査されている。^(註10) いずれも沖積平野の微高地上に立地する。五十瀬神社前遺跡は中期末葉に属し、微高地上に立地する遺跡では最も古く、住居跡1棟・ガラス3基が検出されている。瀬谷子遺跡からは中期末葉から後期初頭にかけての土器が少量出土している。ほかには立地面をながめて丘陵西縁部や広瀬川・入首川・伊手川の流域に小規模に発達する低位段丘上に中期～晚期の遺跡が分布する。一方水沢地区では、水沢段丘面を中心とした早期～晚期の遺跡が多数知られている。図幅内に限れば、晚期の遺跡が圧倒的に多い。

弥生時代の遺跡では、沖積微高地上に立地する沼の上遺跡・鬼II遺跡などが発掘調査されている。^(註11) 特に沼の上遺跡は著名で、若干の遺構を伴って中期谷起島式併行の土器を主体に出土する。^(註12) 鬼II遺跡では中期谷起島式併行から後期常盤式併行にかけての土器がかなり出土している。ほかに、沖積微高地上には少量ながら該期の土器を出土する遺跡が多い。^(註13) 水沢地区には橋本遺跡^(註14)・常盤遺跡などの著名な標準式遺跡が知られている。

古墳時代の遺跡は、江刺地区では確認されていない。古墳群として登録された遺跡は数個所認められるもののその実体は不明である。水沢地区では、古墳時代の古式土師器を出土する遺跡に、水沢段丘上に立地する高山遺跡・西大畠遺跡がある。^(註15) 高山遺跡ではそれに伴う住居跡も発見されている。また、水沢市の西方には、同じ水沢段丘面に最北の前方後円墳といわれる角塙古墳^(註16)が出現する。

奈良～平安時代に入ると遺跡の数が圧倒的に増加する。江刺平野の微高地上は特に平安時代を中心をおく遺跡が中心となる。新幹線建設に伴って調査された遺跡数11のうち、本道跡を始めとする、鴻ノ巣館・中屋敷・力石I・落合I・落合II・鶴羽衣・鶴谷衣台・谷地の9遺跡が該期のものとしてあげられる。^(註17) また、県道一関・北上線の敷設に伴う調査でも、力石II・鬼II・落合III・朴ノ木の各遺跡が発掘されており、いずれも平安時代にその中心をおくものである。^(註18) 微高地以外に立地する遺跡では、平野の北側稻瀬付近の村崎野段丘相当面上に立地する瀬谷子古窯跡群があげられる。胆沢城及びその近隣集落を主な供給源とするもので、須恵器・瓦などの窯跡が100基以上知られる県内最大の生産遺跡である。^(註19) また、丘陵西縁の段丘上には藤原清衡の居城として伝えられる豊田城凝定地がある。一方、水沢地区では、奈良時代を中心をおく



A 谷地遺跡 B 五十瀬遺跡 C 濱谷子遺跡 D 鶴羽衣台遺跡 E 鶴羽衣遺跡
 F 宮地遺跡 G 落合日遺跡 H 落合 I 遺跡 I 力石遺跡 J 滝之里館遺跡
 K 中星城遺跡

第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 宮地遺跡周辺の遺跡地名表

番号	遺 跡 名	時 期	番号	遺 跡 名	時 期
1	瀬 谷 子 窟 跡	平 安	40	庚 申 沢	不 明
2	稻 澪 古 墳 群	不 明	41	根 岸	繩 文 、 平 安
3	薦 ノ 木	繩 文 、 平 安	42	宝 性 寺 跡	繩 文 中 ~ 晚 期
4	中 島	平 安	43	耳 取	平 安
5	沼 尻	#	44	男 力	"
6	十 三	#	45	館 下	不 明
7	大 文 字	不 明	46	万 松 寺 山	平 安
8	宝 錄	平 安	47	金 打	"
9	沼 の 上	繩 文 晚 、 弥 生	48	中 野	繩 文 晚 期
10	沼 館	中 世	49	四 天 坊 古 墳	不 明
11	別 当	平 安	50	裏 手 丘 上 古 墳	"
12	東 間	#	51	重 染 寺 古 墳	"
13	百 莲 寺	繩 文	52	豊 田 館 撫 定 地	平 安
14	駒 込	平 安 中 世	53	石 山	"
15	北 天 間 (1)	平 安	54	白 糸	不 明
16	" (2)	#	55	八 ツ 口	平 安
17	阿 弥 陀 堂 跡	#	56	胆 沢 城 跡	繩 文 、 奈 良 、 平 安
18	林	#	57	玉 貫 前	"
19	馬 場 先	#	58	膳 性	奈 良 、 平 安
20	觀 音 堂 沖 I	#	59	權 現 堂	"
21	" II	#	60	竈 堂	"
22	杉 の 町	繩 文 後 平 安	61	伯 济 寺 跡	不 明
23	田 谷 城 跡	中 世	62	舞 子 鼻 B	繩 文
24	橋 本	平 安	63	" A	繩 文 、 平 安
25	兎	弥 生 、 平 安	64	玉 貫	平 安 、 中 世
26	見 分	不 明	65	東 大 煙	"
27	御 免	#	66	八 輪 幌	不 明
28	松 川	繩 文	67	下 河 原 館	繩 文 晚 期
29	四 丑	平 安	68	根 岸	"
30	鶴 羽 衣 撫 定 地	#	69	瓦 ケ 田	繩 文 晚 期
31	稻 澪 中 学 校	#	70	桐 山	"
32	稻 澪 小 学 校	不 明	71	下 河 原 鑿 石	不 明
33	大 追 山 居	平 安	72	幅 下	繩 文 中 期
34	佐 野 山 古 墳	不 明	73	里 棺	繩 文 晚 期
35	寺 岡	繩 文 、 平 安	74	水 沢 商 業 跡 地	平 安
36	神 明 館 古 墳	不 明	75	新 小 路	繩 文 晚 期
37	坂 橋	繩 文	76	鹿 野	繩 文 、 平 安
38	古 兵 衛 亂 塔 塚	不 明	77	愛 容 神 社 塚	不 明
39	根 岸 洞 窟	繩 文 中 期	78	岩 谷 堂 城 跡	中 世 ~ 近 世

遺跡、奈良時代から平安時代へと大きな断続をもたず継続する遺跡、及び平安時代を主な活動時期とする遺跡とに3分される。前者には今泉・膳性など水沢段丘縁辺部に立地する大規模な遺跡があり、奈良～平安時代に継続するものには東大畠・石田など水沢段丘上に立地する遺跡が知られている。平安時代を中心をおく遺跡には、802年に創建され、陸奥国支配の中枢的存在となる胆沢城跡があげられる。該期の一般集落は、真城ヶ丘団地遺跡のように新たに胆沢段丘上に出現するものが多くなる。

以上のとく、江刺平野上に立地する遺跡は、平安時代の初期にその中心をおくものが圧倒的多数を占める。これは、胆沢城創建に伴い、その政治的支配による社会的・経済的開発が江刺平野上で強力に推し進められたことを示唆しており、本遺跡もこうした背景のもとに展開していったものと推定される。一方、胆沢扇状地では、前述のごとく、奈良時代に営まれた大規模な集落が既に存在しており、これらの遺跡は平安時代に入ても継続、ないしは再開発というかたちで存続するものが多い。また、立地を異えて新たに出現する遺跡もかなり存在する。こうした事実は、その集落の性格をも加味したなかで、新たな政治支配による政治的・経済的社会の改編の過程として把える内容を含んでいる。

注1 岩手日報社編 1977 「岩手年鑑」

岩手日報社編 1978 「岩手百科事典」

注2 前出注1「岩手百科事典」

注3 中川久夫ほか 1963 「北上川中流沿岸の第四系および地形—北上川流域の第四紀地史(2)『地質学雑誌』第69巻812号

注4 注3と同じ

注5 経済企画庁 1975 「北上山系開発地域土地分類基本調査—北上』 5万分の1

注6 注1と同じ

注7 佐崎与四衛門氏の御教示による。②の居場とは、主として洪水等によって造成された広範囲に及ぶ微高地を言い、土砂を多量に含んだ濁流が流勢を殺され、緩流状態となったときに流送した土砂をその所で沈殿せしめる状態とされている。これは、③にみられる自然堤防が、局部的に形成され背後地まで広々と土砂を積むことのない状態を言うのとは異なり、広範囲にわたる砂丘(泥土)地が居場に該当する。

注8 江刺の地質の記述には、山地・丘陵の部分は江刺市の理科教育担当教諭が合同で研究した資料を用い、江刺平野の様相は新幹線建設に伴う試験結果を多く参考にした。

江刺市理科教育研究会編 1971 「江刺の地学」

川崎地質株式会社 1972 「東北新幹線地質調査報告書—東京起点429～441km—」

注9 遺跡の分布位置・所属時期等は以下の資料を参考にしたが、発掘調査によって確認されているものばかりに、分布調査・資料集収集調査等によって判定したものも含まれている。これは、埋蔵文化財包含地的な確認にとどまるものであり、その実体を正確に把握しているとは言い難い。こうした遺跡は記述に際してできるだけ除外してある。

岩手県教育委員会 1974 「埋蔵文化財分布地図」

- 水沢市 1974 「水沢市史—I—」
- 注10 岩手県教育委員会 1979 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—I—」
- 注11 伊藤鉄男 1973 「沼の上遺跡調査報告書」 江刺市教育委員会
山口了紀ほか 1978 「江刺市沼の上遺跡」 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- 注12 高橋信雄・山口了紀・三浦謙一 1979 「兜II遺跡」主要地方道一覧・北上線関連遺跡発掘調査報告書
(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 注13 水沢市 1974 「水沢市史—I—」
- 注14 注13と同じ
- 注15 前出注9「埋蔵文化財分布地図」
- 注16 高山遺跡調査会 1978 「高山遺跡」 水沢市教育委員会
- 注17 岩手県教育委員会 1975 「西大畠遺跡現地説明会資料」
- 注18 林謙作・伊藤鉄夫・高橋信雄 1976 「角塚古墳」 恒沢町教育委員会
- 注19 落合II遺跡を除き、前出注10「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—I—」
岩手県教育委員会 1976 「落合II遺跡」 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報
- 注20 前出注12「主要地方道一覧・北上線関連遺跡発掘調査報告書」
- 注21 大川清はか 1969 「岩手県江刺市瀬谷子窯跡群緊急調査概報」 窯業史研究所
大川清編 1970 「岩手県江刺市瀬谷子窯跡群第2次緊急調査概報」 窯業史研究所
草間俊一編 1971 「岩手県江刺市瀬谷子窯跡第3次緊急調査報告」 江刺市教育委員会
- 注22 岩手県教育会江刺郡部会編 1925 「江刺郡志」
- 注23 岩手県教育委員会 1975 「今泉遺跡現地説明会資料」
- 注24 岩手県埋蔵文化財センター 1979 「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」
- 注25 岩手県埋蔵文化財センター 1978 「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」
- 注26 岩手県教育委員会 1976 「石田遺跡現地説明会資料」
- 注27 水沢市教育委員会 1972 「上野田地遺跡緊急調査現地説明会資料」

II 調査の概要

宮地遺跡の調査の方法は、文化課で他の遺跡に対して実施してきたものと基本的には同じであり、それは序文の2に詳述してある。しかし、遺跡のもつ特性に応じて細部は異なる点もあるので、簡単にその概要を述べておきたい。

(1) 調査の方法

遺跡の規模：本遺跡の立地する微高地は南北約150m・東西約250mの範囲をもち、約37,000~38,000m²という比較的広い面積を占める。この微高地の規模はそのまま本遺跡の規模・範囲に一致するものと推定される。

調査範囲：新幹線の路線敷は微高地のやや東寄りの部分を北北西—南南東の方位をとって貫通する。微高地における路線敷の範囲は、長さ約180m・幅17.5mを計り、約3,150m²となる。さらに、南方約2kmの地点に位置する落合II遺跡において旧河道の部分より多量の遺物が出土していることから低位の水田面の一部をも調査範囲とし、南北両域で約450m²を加えた。今回の調査は、以上の約3,600m²を対象とした。

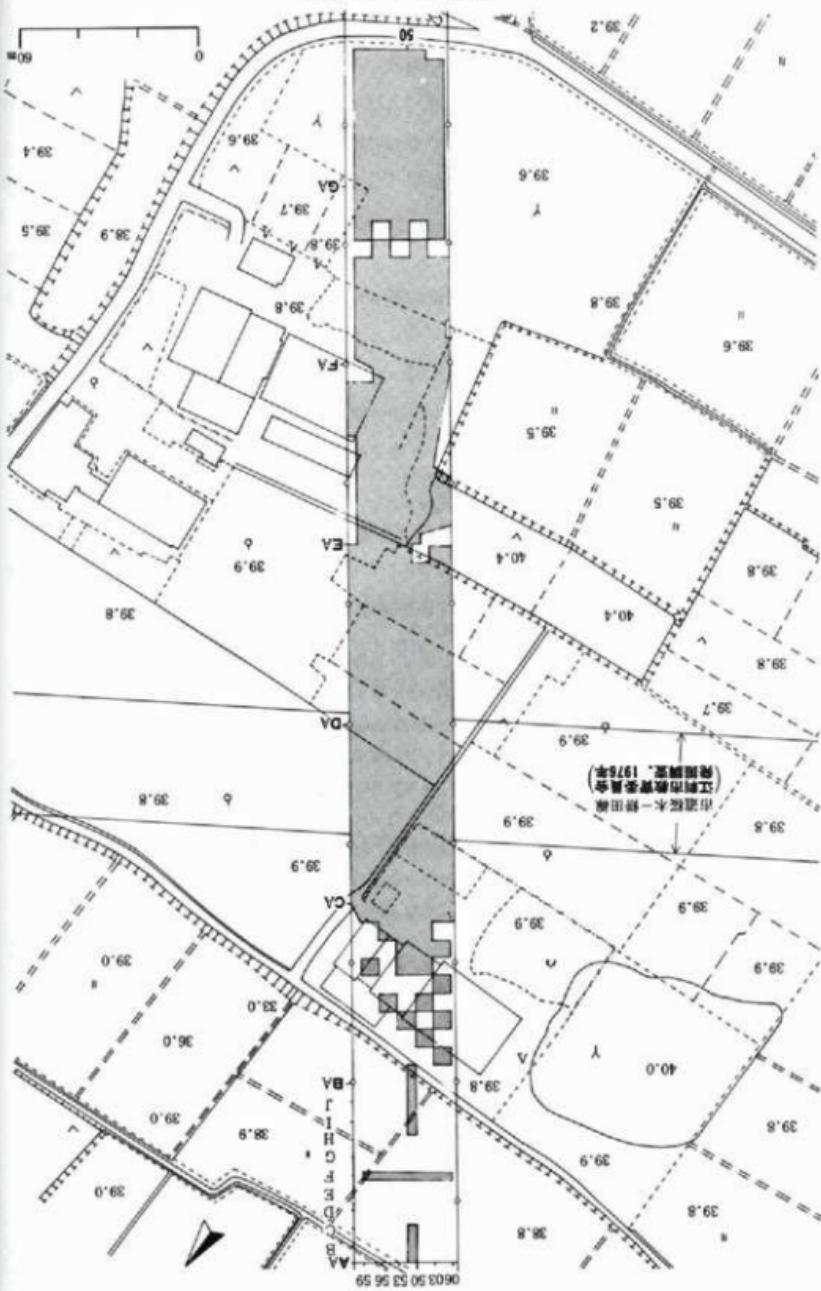
調査区の設定：調査区内の平面測量基準原点は新幹線ルート中軸線上の東京起点432,900kmの地点上に設定し、DA50と名づけた。さらにこの原点と東京起点432,880kmの地点を結ぶ直線を規定し、地割基準線とした。この基準線と直交する線を設け、調査全区域に一辺3mのグリッドを組み1区画30m²とした。調査区北端の低位水田面をA区、南端とそれをG区と呼称し、全域をA~Gの7区に区分した。なお、長軸の地割基準線は座標北より西に37°傾いている。

発掘の方法：発掘の方法としては、まずグリッドを市松状に掘り進み遺跡における遺構の分布状態を検討した。その結果、遺構の存在が確実視されたため微高地の北端部を除いてほぼ全面を発掘することにした。

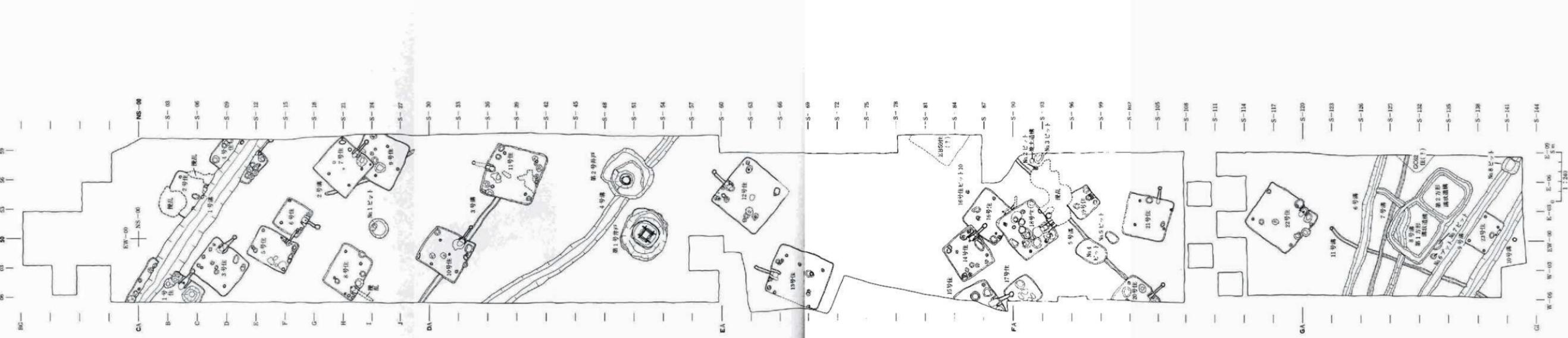
遺構検出のための粗掘はすべて人力で行なった。これは、遺構が検出される層を遺構相互に検討することに留意したためである。しかし、遺跡の基本層がシルトで構成され、遺構の堆積土も同色のシルトであるため、遺構の検出には多くの困難が伴なった。また、当時の地表面が耕作による擾乱や浸食作用によって失なわれていることが多く、遺構の掘り込み面と確認面とが一致したと言えるものは存在しなかった。遺構の検出作業は二度にわたっており、結果的には、検出面である第IIa層を2~3cm掘り下げる段階で遺構の存在を確認したものが多い。

また、地山土と堆積土との区別が困難なため、遺構の精査は難行した。調査期間の長期化は

圖 5 圖 立井剖面圖



第6回 游樂施設図



注：遊樂の新旧関係は
固にしていいない

すべてこのことに起因する。対応策として遺構に近接する地山を深掘りし、それと壁・及び堆積土とを比較するという方法をとった。特に重複する遺構相互の新旧関係の把握には細心の注意を傾けた。

〔2〕調査の経過

前述のごとく、遺構の検出・精査が難行したことと遺跡の規模が予想以上の広がりをみせたことに起因して、単年度で調査を完了させるという当初の予定は実施不可能になり、本遺跡の発掘調査は2年間の継続調査になっている。

初年度は昭和50年9月1日から調査を開始した。粗掘はB区より着手し、A区・C区と進んだ。C区よりは数棟の住居跡が確認されたため、D区以南の粗掘と併行して遺構の精査を実施した。検出作業は2度行なっており、2度目の検出作業でD区以北より住居跡11棟・井戸跡2基などが発見された。当然E区以南にも遺構の存在が予想されたが検出作業は第1段階で保留し、初年度は上記の遺構の精査に主力を注いだ。12月25日には一応初年度の調査を終了したが井戸跡はそのまま放置できないため、乾水期である冬期に調査を続行することとし、51年1月12日から2月21日までの嚴寒中に井筒の取りあげまでを実施した。

次年度は昭和51年4月9日より調査を開始した。ところが、4月中には掘削工事に着手する予定が既に組まれていたため、調査計画の練り直しが急を要する課題となった。そこで、工事の進行計画と合わせて調査日程を配分し、4月末までにG区を6月末までにE区以南をあけたし、7月中旬には全区域の調査を終了させることにした。この計画に従って調査区南端のG区より北に向って再度の検出作業を行い、とりいそぎ全遺構を把握することに努めた。この作業には、前年度に土捨場としていた場所も対象となり、堆土の除去には重機を利用した。その結果、検出された遺構は竪穴住居跡14棟・溝8条などに及んでいる。

また、工事日程に合わせて限定された狭い範囲での調査を繰り返すという発掘方法を余儀なくされたため、削平を免れる遺構（竪穴住居跡か？）についてはシートパイルを打ち込んで保護し、調査対象からはずしている。未調査の竪穴状遺構はG区とE区とに1棟づつ検出されており、GC62住・EG59住と仮称されたものである。いずれも東側の調査区外に延びている。

〔3〕調査の結果

以上の調査は、残務整理をも含め7月26日で終了した。調査期間は2年間で延べ10ヶ月に及び、約2,700m²を発掘した。遺構の内訳は、竪穴住居跡25棟（うち2棟は未調査）・井戸跡2基・溝11条・ピット9個・方形溝状遺構2基などである。それらは調査区の北部と南部において密度が大きく、その数は当初確認した数の約2倍に達している。

III 報告に際して

宮地遺跡での新幹線敷設工事にかかる発掘調査が終了した後、51年の8月より江刺市教育委員会が調査主体となり本遺跡の発掘調査が実施されている。これは、市道の取り付けに伴うもので、県教委の調査が終了する以前にその計画が立案されていた。そこで市道の予定地内に数本の引照杭を設け、基準線を統一できるように配慮した。発掘調査は51年度中に完了しているが、遺構の数量・内訳・配置形態等のいずれもが不明である。したがって本報告書ではその内容に関しては一切ふれていない。ただ本遺跡内における道路の敷設位置とその幅のみを第5図に表示した。

本報告書の整理作業は54年3月より本格的に開始し、9月で終了している。その整理方法は序文の③で記してある方法に準じた。

発掘調査時においては、各種の発見遺構は検出したグリッド名をとって呼称し、原図にもその遺構名で表記した。本報告書では、編集の都合上遺構名を変更し、それぞれ遺構の種類ごとに北より番号をつけ直した。したがって、原図の遺構名と本書の遺構名の関連は第2表に示すとおりである。

なお、本遺跡の内容に関しては、すでに若干の内容が現地説明会資料や各年度の発掘調査略報等で紹介されている。本報告書の記載内容がそれらに優先するものであり、本書以前の遺構名は原図によるものであったことを付記しておく。

第2表 遺構名対照表

住居跡		溝	
原図	報告書	原図	報告書
B J09 住居跡	第1号 住居跡	B J09 溝	第1号溝
C A53 住居跡	第2号 住居跡	C J53 溝	第2号溝
C B06 住居跡	第3号 住居跡	C J06 溝	第3号溝
C C56 住居跡	第4号 住居跡	D B06 溝	第4号溝
C D03 住居跡	第5号 住居跡	F D09 溝	第5号溝
C E50 住居跡	第6号 住居跡	G B06 溝	第6号溝
C F56 住居跡	第7号 住居跡	G C06-1 溝	第7号溝
C G06 住居跡	第8号 住居跡	G C06-2 溝	第8号溝
C H56 住居跡	第9号 住居跡	G E06 溝	第9号溝
C J03 住居跡	第10号 住居跡	G F06 溝	第10号溝
D B53 住居跡	第11号 住居跡	G B50 溝	第11号溝
D J50 住居跡	第12号 住居跡		
E B06 住居跡	第13号 住居跡		
E H03 住居跡	第14号 住居跡		
E H09 住居跡	第15号 住居跡		
E I50 住居跡	第16号 住居跡		
E J09 住居跡	第17号 住居跡		
E J50 住居跡	第18号 住居跡		
F B50 住居跡	第19号 住居跡		
F D09 住居跡	第20号 住居跡		
F D50 住居跡	第21号 住居跡		
F I50 住居跡	第22号 住居跡		
G F50 住居跡	第23号 住居跡		

ビット類	
原図	報告書
C H50 ビット	No.1 ビット
F A50-1 ビット	焼土遺構
F A50-2 ビット	No.2 ビット
F A50-3 ビット	No.3 ビット
F C03 ビット	No.4 ビット
F D03 ビット	No.5 ビット
G E03-1 ビット	No.6 ビット
G E03-2 ビット	No.7 ビット
G G56 ビット	No.8 ビット

井戸跡	
原図	報告書
D G03 井戸跡	第1号 井戸跡
D G53 井戸跡	第2号 井戸跡

方形溝状遺構	
原図	報告書
G D50 方形溝状遺構	第1号方形溝状遺構
G E53 方形溝状遺構	第2号方形溝状遺構

壁带状浅绿色(李)，下部为深绿色，叶缘有锯齿。基部叶脉为掌状脉，叶脉每边5条。

根状茎，表面无毛或有稀疏短毛，表面2cm以外深绿色，叶脉5条，叶脉基部为掌状脉，叶脉每边5条。根状茎上部小块根为掌状脉，叶脉每边5条。根状茎上部大分枝叶11片以上，叶脉5条。

(果) 地面上部分的空心茎叶与花序托同形，果梗长10mm，果皮膜质，果梗30~37cm，直立，果梗基部膨大，果梗37~42cm，果梗31~37cm，果梗基部膨大，果梗30~37cm，直立，果梗基部膨大，果梗37~42cm，果梗31~37cm，果梗基部膨大。

以上，第1号标本与第3号标本在形态上虽然有差异，但两者都是单子叶植物，根状茎上部有小块根，叶脉5条。

第3号：暗褐色的枯叶状，无毛，叶脉5条。叶脉上部完全被叶脉所包，叶脉5条，叶脉上部完全被叶脉所包，叶脉5条。

第2号：暗褐色的枯叶状，无毛，叶脉5条。第1号比第3号厚，分枝与花序完全被叶脉所包，叶脉5条。

1. 粗壮，木質粗老少量發育。

第1号：暗褐色的枯叶状，无毛，叶脉5条。叶脉上部完全被叶脉所包，叶脉5条。

(塊根) 块根(南北)直径6.62cm·6.42cm，根轴(東西)長不取7cm。

(平面形·長輪方向) 未調查區內各處均斷裂為多段，平面形狀與上述之長輪形者完全相同。

第3号(生根跡) 第1号深，第3号生根跡比重根跡深，生根跡3号生根跡比1号深。

(圓錐體狀) 第1号深，第3号生根跡比重根跡深，当生根跡比1号深时第1号深。

(球根狀) 生根跡一部分離根狀外緣較遠，離莖1.16厘米時根狀外緣較近。

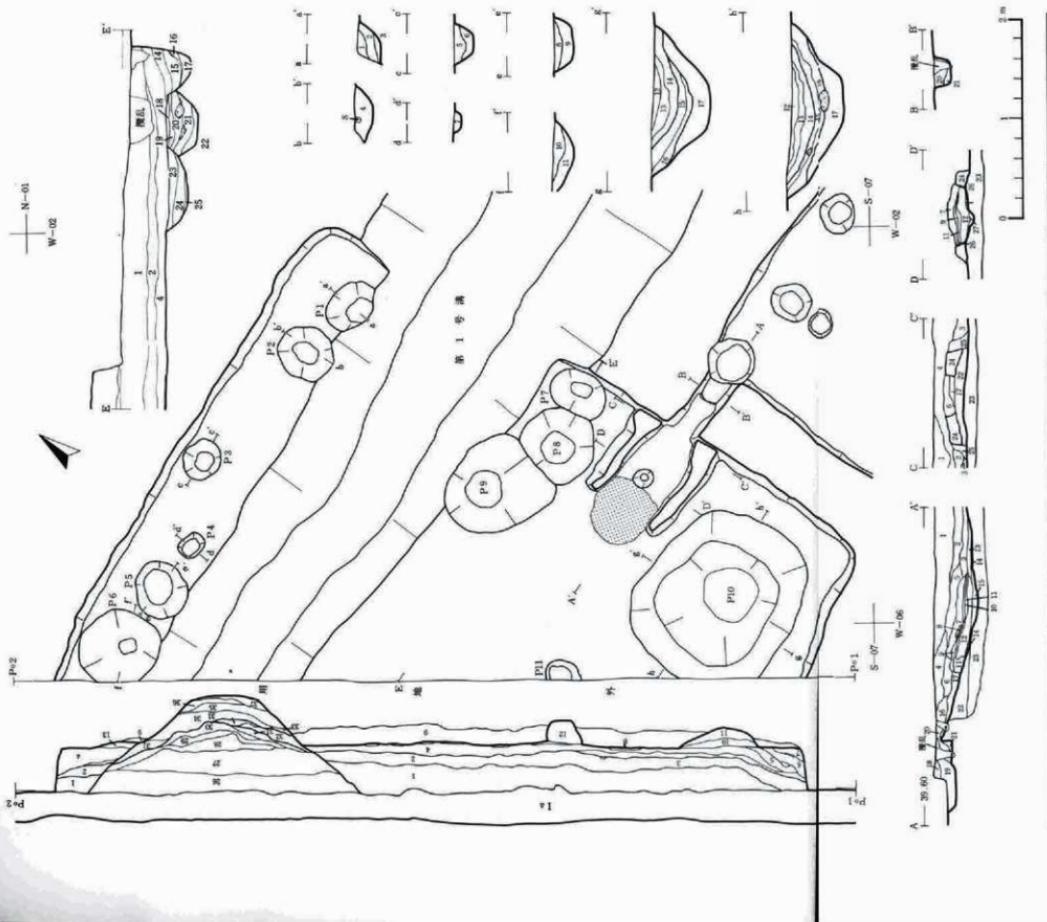
(圓錐體狀) 第1号深，第3号生根跡比重根跡深，當生根跡比1号深時第1号深。

(球根狀) 生根跡一部分離根狀外緣較遠，離莖1.16厘米時根狀外緣較近。

第1号(BJ09) 住居跡

I. 驚火住居跡出土遺物

IV. 蘭見之丸遺跡出土遺物



番号	層号	土色	土性	特徴	地質的意義
第 1 層	1	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
第 2 層	2	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
第 3 層	3	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
第 4 層	4	褐色 (10YR 4/4)	粘土質シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
第 5 層	5	にかべ風化色 (10YR 4/4)	粘土質シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
第 6 層	6	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
第 7 層	7	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
第 8 層	8	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	9	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	10	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	11	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	12	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	13	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	14	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	15	にかべ風化色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	16	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	17	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	18	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	19	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	20	にかべ風化色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	21	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	22	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	23	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	24	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	25	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	26	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	27	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	28	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	29	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	30	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	31	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	32	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	33	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	34	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	35	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	36	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
P	37	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	1	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	2	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	3	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	4	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	5	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	6	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	7	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	8	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	9	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	10	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	11	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	12	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	13	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	14	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	15	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	16	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト
カマ	17	褐色 (10YR 4/4)	シルト	粘土質・水溶液を含む	シルト

図7 図 第1号地盤

土の混合土である。

【柱穴】 床面上より発見された11個のビットのなかで、柱穴とすることのできるものはみあたらない。

【カマド】 東壁やや南寄りの部分に付設されている。第3号住居跡に煙出部の一部を破壊されているほかは遺存状況は良好である。主軸方向はE-2°-Nである。

燃焼部は火床部にあたる部分で床面より若干掘り凹め、そのまま煙道部入口に向って緩やかに立ち上っている。煙道部入口での火床面との比高は24cmになる。火床部には64×59cmの範囲で厚さ2~5cmのかたい焼土面がある。火床部の奥からは直径18cmの小ビットが検出されており、支脚をするためのビットと想定される。

煙道部はやや特異な形態を示す。煙道の中央付近までは燃焼部から連続して緩く立ち上がり、中央付近で一旦急激に下ってそのまま水平に進んで煙出部へと接続している。煙出部には直径約50cmのビットが掘られており、煙道端との比高は4cmとなる。

最後に燃焼部を掘り下げたが、床面下の掘り方埋土と共通する土が検出されており、燃焼部に伴う掘り方は認められなかった。ただ、燃焼部の傾斜する部分にはそれに合わせて土を積みあげている。

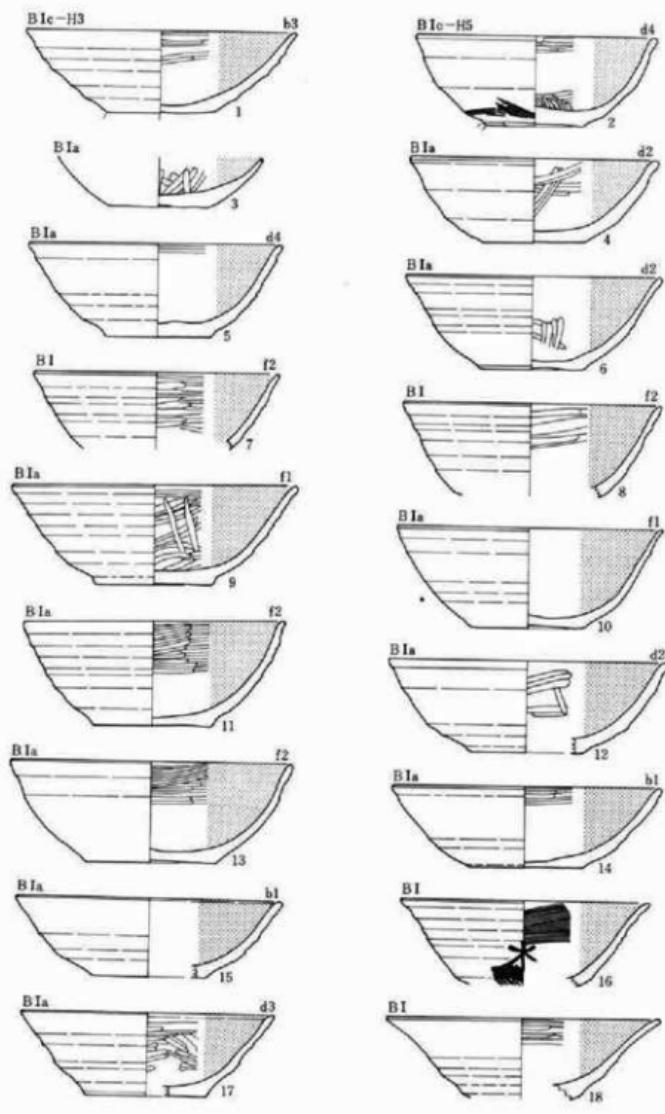
【貯蔵穴状ビット】 貯蔵穴と思われるものにはP₁、P₂、P₃がある。P₁とP₂はカマド左脇に重複して位置している。P₃はP₂よりも新しい。P₃は直径約75cmで深さは32cmとなる。埋土は5層に分けられるが上部の3層は埋め戻した人为的な堆積層である。他の層は自然堆積層で、灰・焼土・木炭を多く混入する。P₃はP₂に後続して使用されたものと思われ、埋土は自然堆積層である。P₃はカマド右脇に位置しており、かなり大形のものである。大きさは178×152cmで深さは58cmとなる。埋土は6層に分けられ、すべて自然的營力による堆積層である。P₃に関していえば、貯蔵穴との想定は一応妥当性をもつてゐるが、当住居と重複するビットとなる可能性も残されている。

【出土遺物】 当住居跡の出土遺物には土器と土錐がある。土器は、环、高台付环、甕、鉢の各器種に分けられる。土器の出土量は比較的多く、なかでもビット10および、カマドの周囲より出土したものが多い。

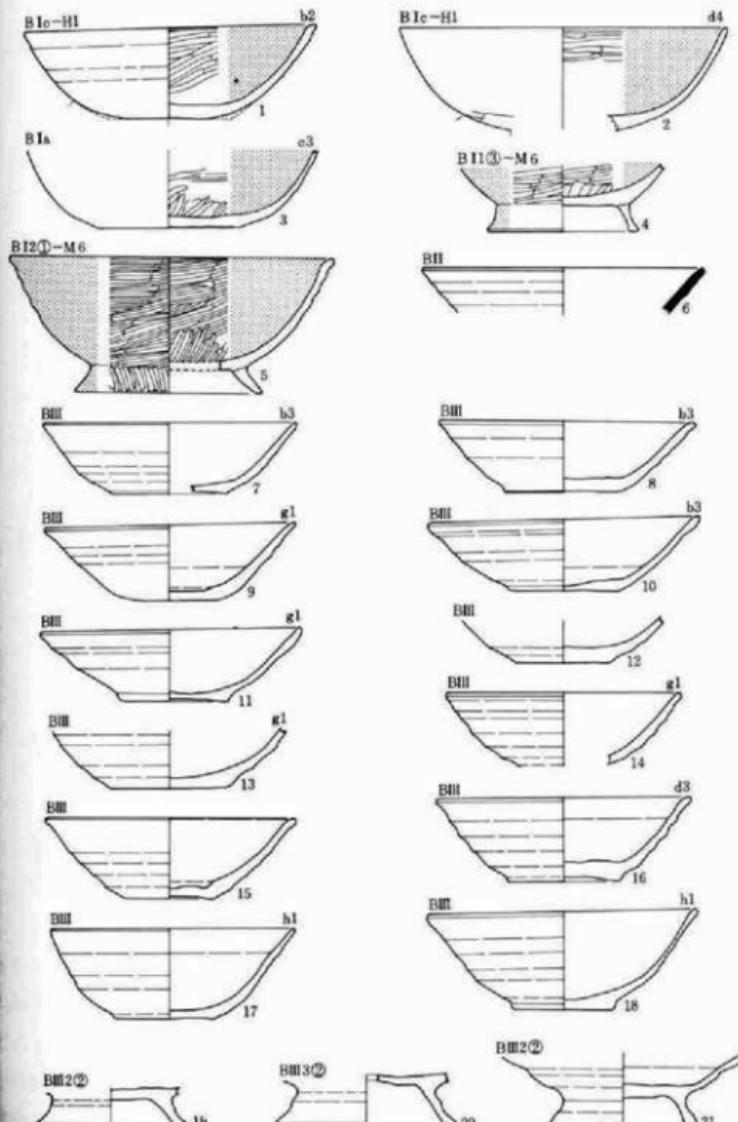
环形土器（第8図、第9図） 环には、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）、B II類（ロクロ使用で還元炎焼成）、およびB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）がある。

〈环B I類〉（第8図1~18、第9図1~3） B I類の环は、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を施すもの（B I c類）と無調整のもの（B I a類）とがある。後者が圧倒的に多い。

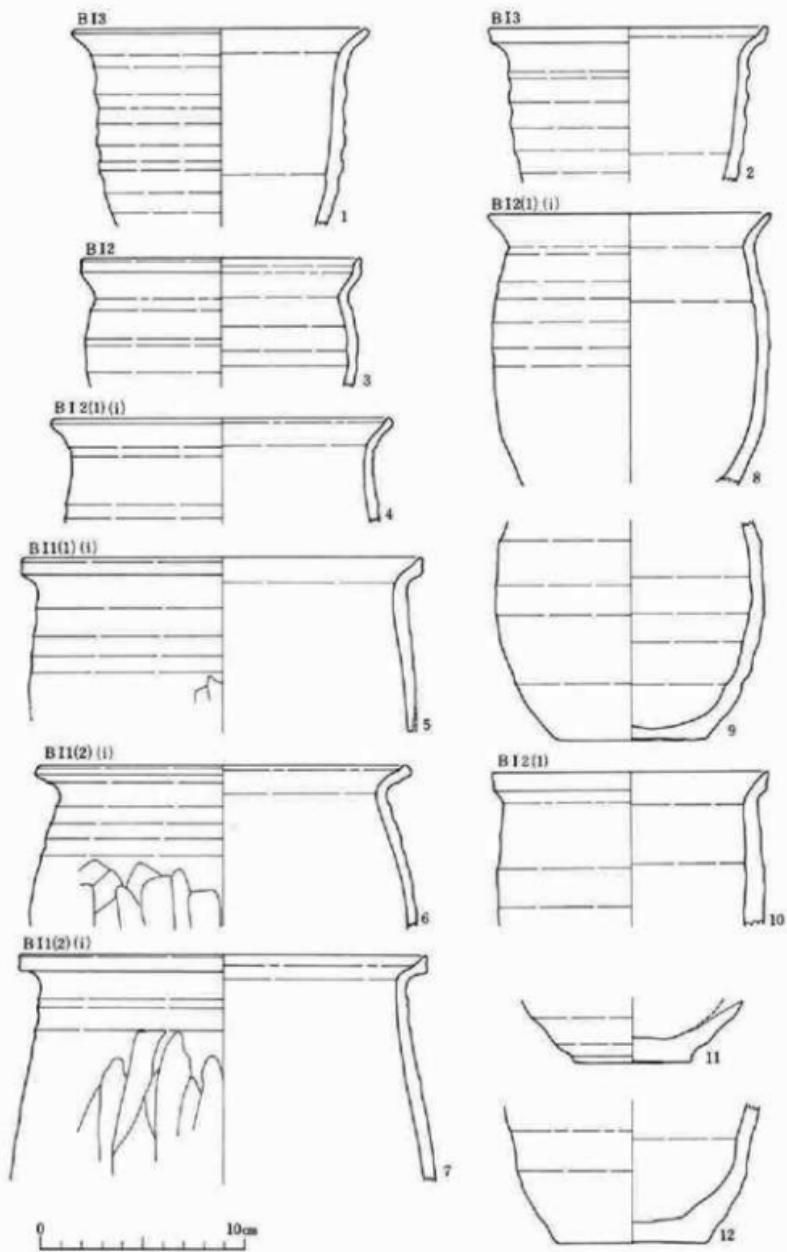
B Ic類の环（第8図1~2、第9図1~2）は、再調整の手法はすべて手持ちヘラケズリによっており、体部下端に施すもの（H₂手法）（第8図2）、底部全面に施すもの（H₃手法）（第8図1）



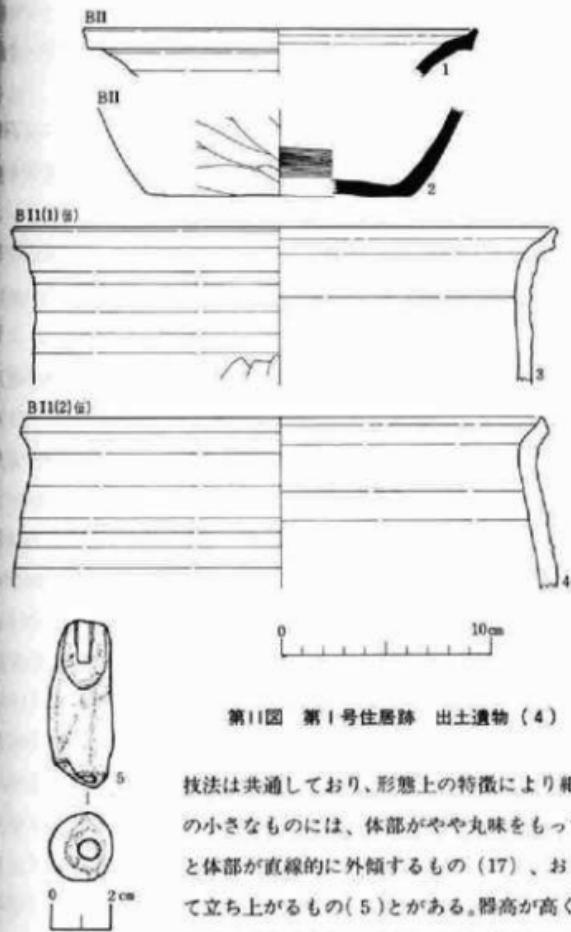
第8図 第1号住居跡 出土遺物(1)



第9図 第1号住居跡 出土遺物（2）



第10図 第I号住居跡 出土遺物 (3)



第11図 第1号住居跡 出土遺物 (4)

体部下端より底部全面に施すもの (H₁手法)(第9図1・2)に3分される。形態上の特徴によっても分けられ、器高が底くて底径の小さなものは、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(第8図1)と体部がやや丸味をもって外傾するもの(第9図1)とがある。また、器高が普通で底径の小さなものは、体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(第8図2、第9図2)である。

B I a 類の环(第8図3～6、9～15、17、第9図3)は、成形・調整

技法は共通しており、形態上の特徴により細分される。器高が普通で底径の小さなものは、体部がやや丸味をもって外傾するもの(4・6・12)と体部が直線的に外傾するもの(17)、および体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(5)とがある。器高が高くて底径の小さなものは、体部がやや丸味をもって立ちあがるもの(11・13)と体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(9・10)とがある。器高が低くて底径の小さなものは体部がかなり丸味をもって外傾する(14・15)。また、器高が普通で底径が大きく、体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(第9図3)もある。9の体部には“水”的墨書きが観察される。

〈环II類〉(第9図6)すべて細片であり、全体の器形を知りえるものは出土していない。

〈环III類〉(第9図7～18)回転糸切り無調整のものである。器高が低くて底径が小さく、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(7・8・10)、器高が低くて底径が極端に小さく、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(9・11・14・15)、器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの(16)、および器高が普通で底径が極端に小さく、体部がやや丸味を

もって立ちあがるもの(17・18)などに細分される。

高台付坏形土器(第9図) 高台付坏はB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)とB III類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とに類別される。

〈高台付坏B I類〉(第9図4・5) 高台部が短く直立ぎみに外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの(B I 1③類)(4)と高台部が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施して周縁をロクロ調整するもの(B I 2①類)(5)に分けられる。いずれも内外両面にヘラケズリを施し、黒色処理を加えるものである。5は高台部もヘラミガキで調整している。4の坏部は器高の高い塊形を呈するものと思われる。なお第8図18は、高台付坏の坏部となる可能性が強い。

〈高台付坏B III類〉(第9図19~21) 高台部が長く外傾するもの(B III 2類)(19・21)と極端に長く外傾するもの(B III 3類)(20)がある。いずれも底部はナデを施し、口縁をロクロ調整するもの(②類)で、坏部の形態は不明である。

壺形土器(第10図・第11図) 壺にはB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)がある。

〈壺B I類〉(第10図4~12、第11図3・4) B I類の壺は器形の大小と最大径をもつ位置によって分けられ、口縁部に最大径をもつ大形のもの(B I 1①類)、体部に最大径をもつ大形のもの(B I 1②類)、および口縁部に最大径をもつ小形のもの(B I 2①類)とに細分される。

B I 1①類の壺(第10図5・第11図3)には、口縁部が短くてゆるやかに外反するもの(第10図5)と極端に短く外反するもの(第11図3)があり、口唇部は上方へ弱く挽き出している。

B I 1②類の壺(第10図6・7、第11図4)は、口縁部の形態に違いがみられ、極端に短くてゆるく外反し、口唇部を上方内側へ挽き出すもの(第11図4)、短く強く外反し、口唇部を上方へ挽き出すもの(第10図7)、短く強く外反し、口唇部は単純に丸めてあるもの(第10図6)などに分けられる。体部はほぼ共通するが、やや丸味が強いもの(第10図6)とゆるやかに張むものとに分かれる。いずれも体部の中央付近に最大径をもつ。器高調整は、体部外面下半にヘラケズリが施されている。

B I 2①類の壺(第10図4、8~12)は、口縁部が比較的長く外反し、体部がゆるやかに張むもの(4・8・9)と口縁部が極端に短く外反し、体部がほぼ直線的に底部へと移行するもの(10)とに分けられる。全面ロクロ調整によっており、底部片には右回転系切痕を残す。

〈壺B II類〉(第11図1・2) B II類の壺はすべて細片であり、図示可能のものは少ない。1は口縁部が大きく開いて外傾する壺の破片である。2は底部片で、外面にはヘラケズリ、内面にはナデが施されている。ともに全体の器形は不明である。

鉢形土器(第10図1~3) 鉢はいずれもB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)に属するものである。1と2は口縁部が短くゆるく外反し、体部がほぼ直線的に底部へと移行するもので、上

端付近に体部最大径をもつ。口唇部に若干の違いがみられ、2は上方へ挽き出している。3は口唇部がゆるく外反し、口唇部を上方へ長く挽き出すもので、体部は肩部付近で丸味をもって張り出し、体部最大径は上半付近にもつ。いずれも全面ロクロナデで調整している。

土鍼 (第11図5) 先端の一部を欠いている。中央でやや脹む管状のものである。長さ5.4cm、最大腹径2.2cmを計り、長軸に沿って径約0.7cmの貫通孔が入る。

第2号 (CA53) 住居跡

〔造構確認面〕 造構の掘込面はIIa層のにぶい黄褐色シルト層上面である。実際にはIIa層を2~4cm掘り下げる造構の存在を確認している。

〔保存状況〕 北西のコーナー部分は溜桶を据えるための大きな円形土壠によって破壊され、東壁の大部分は不定形の溝状の土壤によって攪乱をうけている。保存状況は極めて悪い。

〔遺物関係〕 第1号溝によって南壁全体を切られており、当住居跡は第1号溝より旧い。

〔平面形・長軸方向〕 南壁を欠くため明確にしがたいが、東西に長い長方形を呈するものと思われる。長軸方向は推定でN-84°50'Wとなる。

〔規模〕 長軸(東西)長は4.3m・4.15mとなり、短軸(南北)長は3.7m前後と推定される。床面積はやはり推定値で15.35m²前後になる。

〔堆積土〕 住居内堆積土は基本的には以下の2層に大別される。

第1層：褐色のシルト層で、住居の全域に広く分布する。粒状の焼土・炭化物を少量含む。上部はかなり攪乱をうけている。

第2層：にぶい黄褐色のシルト層で、壁の周囲に厚く堆積する。粒状の焼土・炭化物を多量に含むほか、地山のにぶい黄褐色土をブロック状に混入する。

第1層、第2層とも自然的營力により堆積したものである。

〔壁〕 第1号溝による削除、後世の攪乱等により遺存する壁は西壁の一部と北東コーナー附近に限られる。地山を壁としており、床面より急角度で立ちあがる。残存する壁高は東壁で9~10cm、西壁が5~9cm、北壁9~12cmとなっている。

〔床〕 床面は、北東部に若干低くなる個所もみられるがほぼ平坦になっている。遺存する床面上には4個のビットが掘り込まれている。

地山をそのまま床面としており、掘り方等は検出されていない。

〔柱穴〕 柱穴として断定できるビットは検出できなかった。ただ、配置形からはPが柱穴とも考えられるが、深さが13cmと浅い。

〔カマド〕 南壁の東寄り部分に構築されている。主軸方向は推定でS-12°12'Eとなる。煙道部、煙出部は第1号溝による削除をうけて失なわれており、残存するのは燃焼部の一部の

みである。燃焼部は床面より7cmほど掘り込まれており、下部に2~3cmの固い焼土面を有する。燃焼部側壁は、地山のにぶい黄褐色シルトを素材とし、それを積み上げて構築している。ほとんど遺存しておらず、最大高で10cmにすぎない。

最後に燃焼部床面を掘り下げたが、掘り方等は検出されなかった。

〔貯藏穴状ピット〕 カマド右袖脇に検出されたPが貯藏穴と思われる。第1号溝によって欠損しているが直径約45cmほどの円形を呈するものと思われ、深さは約30cmになっている。埋土は2層に分けられる。上層は粒状の焼土と木炭片を多量に含む褐色土で、はさはさした細粒状堆積を示す。下層は地山のにぶい黄褐色土をブロック状に混入する褐色土で、含有物は認められない。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には、土器と鉄製品がある。土器は壺・甕・高台付盤(?)などの器種がある。カマドの周囲より比較的多く出土している。

壺形土器(第13図) 壺には、B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)、B II類(ロクロ使用で還元炎焼成)およびB III類(ロクロ使用で酸化炎焼成)がある。

〈壺B I類〉(第13図1~5) B I類の壺には、底部を切り離した後、調整を加えないもの(B Ia類)と再調整を施し、底部の切り離し技法が不明のもの(B Ib類)がある。

B Ib類の壺(1)は、体部下端より底部全面に手持ヘラケズリが施されるもの(Hi手法)である。器形の特徴は、器高が低くて底径が小さく、体部がやや丸味をもって外傾する。

B Id類の壺(2~5)は、器高が底くて底径が小さく、体部はやや丸味をもって外傾するもので1と共に通する。

〈壺B II類〉(第13図6) 回転糸切り無調整のもの(B IIa類)である。6は器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するものである。

〈壺B III類〉(第13図7~8) 回転糸切り無調整のものである。器高が低くて底径が小さなものの、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(7)と体部がややふくらみをもって外傾するもの(8)がある。

甕形土器(第13図) 甕にはB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)がある。甕B II類はすべて体部の小片であり、全体の器形等は不明である。

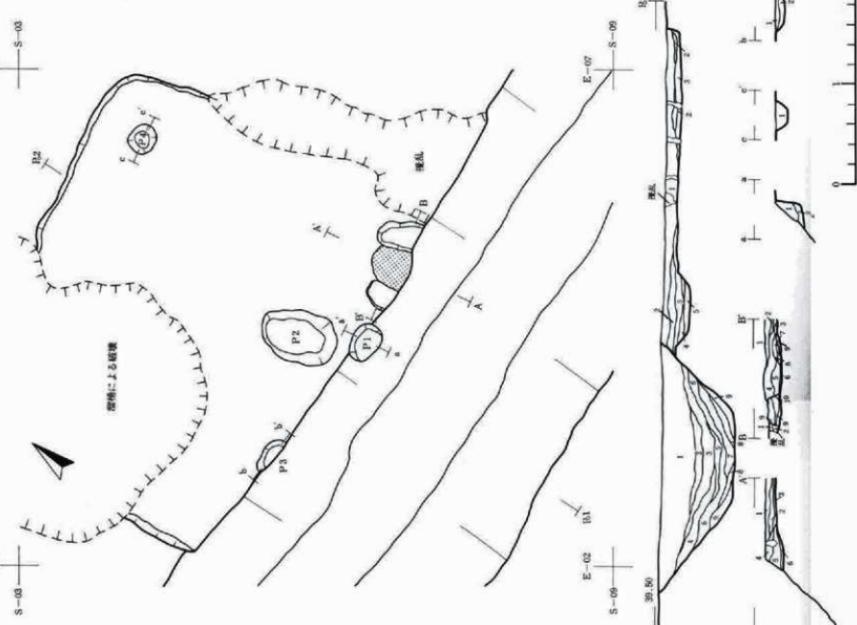
〈甕B I類〉(第13図9~10) B I類の甕には、大形の長胴形を呈し、体部に最大径をもつもの(B I 1(2)類)と小形で口縁部に最大径をもつもの(B I 2(1)類)がある。

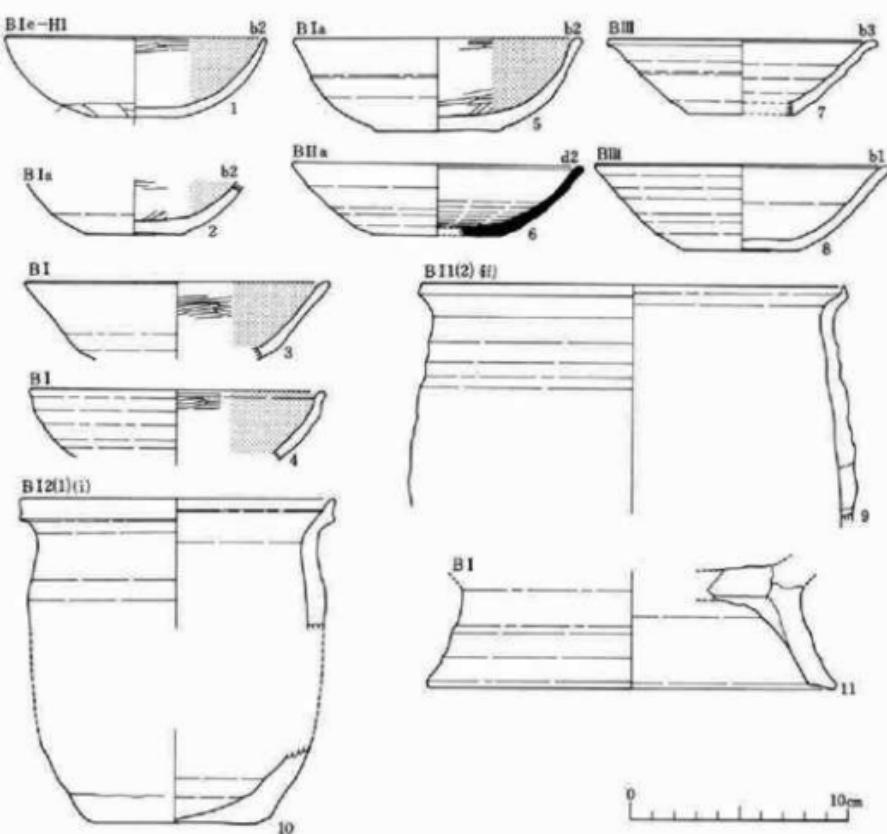
B I 1(2)類の甕(9)は、口縁部が極端に短く外反し、口唇部は上方へ挽き出しており、最大径は体部中央付近にもつ。器面調整は口縁部から体部上半までロクロナデによっている。

B I 2(1)類の甕(10)は、口縁部が短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部最大径を中央付近にもつ。器面は全面ロクロナデで整え、底部外面には右回転糸切り底を残す。

第12図 第2号田園地

番号	形態	土色	土性	セの塊	カマド	1	層	土色	土性	セの塊	
第1号圃											
第 1	1 塵	色(DY R 4)	シ	ルト	泥炭物なし	2				住居跡±0.1	
	2 塵 地	色(DY R 3.4)	シ	ルト	泥炭の底土・木炭を少含む	3	■	色(DY R 4)	シ	ルト	
	3 塵 地	色(DY R 4)	シ	ルト	泥炭の底土・木炭を少含む	4	■	色(DY R 4)	シ	ルト	
	5 塾 地	色(DY R 3.4)	シ	ルト	泥炭の底土・木炭を少含む	5	■	色(DY R 4)	シ	ルト	
	6 塾 地	色(DY R 3.3)	シ	ルト	泥炭よりやや多いシルトで2 層構造の底土・木炭を少含む	6	■	色(S 5 R 0)	シ	ルト	
	7 塾 地	色(DY R 3.4)	シ	ルト	泥炭よりやや多いシルトで2 層構造の底土・木炭を少含む	7	■	色(S 5 R 0)	シ	ルト	
	8 塾 地	色(DY R 3.3)	シ	ルト	泥炭の底土・泥炭物を含むU 字形の底土・泥炭物を含むU 字形の底土・泥炭物を含むU	8	#	色(DY R 4)	シ	ルト	
	9 塾 地	色(DY R 4)	シ	ルト	泥炭の底土・泥炭物を含むU 字形の底土・泥炭物を含むU 字形の底土・泥炭物を含むU	9	#	色(DY R 4)	シ	ルト	
	10 塾 地	色(DY R 4)	シ	ルト	泥炭の底土・泥炭物を含むU 字形の底土・泥炭物を含むU 字形の底土・泥炭物を含むU	10	#	色(DY R 4)	シ	ルト	
第2号圃											
第 1	1 塾	色(DY R 4)	シ	ルト	粘土の底土・泥炭片を少量含む	P 1	1	■	色(DY R 4)	シ	ルト
	2 塾 地	色(DY R 3.3)	シ	ルト	粘土の底土・泥炭物を多く含む	P 2	2	■	色(DY R 4)	シ	ルト
	3 塾 地	色(DY R 3.3)	シ	ルト	粘土の底土・泥炭物を多く含む	P 3	3	■	色(DY R 4)	シ	ルト
	4 塾 地	色(DY R 3.3)	シ	ルト	粘土の底土・泥炭物を多く含む	P 4	4	■	色(DY R 4)	シ	ルト
	5 塾 地	色(DY R 3.3)	シ	ルト	粘土の底土・泥炭物を多く含む	P 5	5	■	色(DY R 4)	シ	ルト

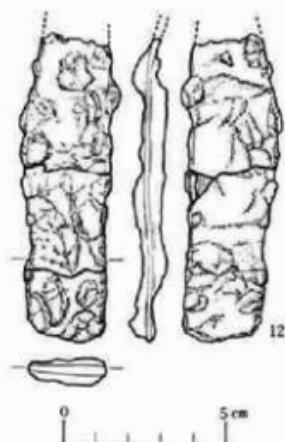




第13図 第2号住居跡出土遺物

高台付盤形土器（第13図II） B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものである。高台部分のみの器片であり、正確には器種は不明である。高台は長く外傾する器内への厚いもので、先端は平坦になっている。底部周縁はロクロナデで調整している。

鉄製品（第13図12） 板状の偏平なもので長方形を呈する。鎌と推定される。一方の先端を欠き、現存長で9.5cm、幅2.5cmを計る。



第3号(CB06)住居跡

【造構確認面】 造構の掘込面はIIa層にぶい黄褐色シルト層上面である。IIa層の上面はところどころに耕作による擾乱を受けており、実際はIIa層を若干掘り下げる全体のプランを確認した。

【保存状況】 ほぼ完全なかたちで遺存している。

【重複関係】 第1号住居跡と重複関係にある。当住居跡の北西隅コーナーの部分が第1号住居跡のカマド煙出部の一部を切っている。第1号住居跡より新しい。

【平面形・長軸方向】 平面形は南北にやや長い長方形で、長軸方向はN-2°15'-Eとなる。

【規模】 短軸(東西)長で4.37m・4.30m、長軸(南北)長で4.63m・4.50mとなり、床面積は約18.79m²である。

【堆積土】 造構内堆積土は基本的には以下の2層に分けられる。

第1層：にぶい黄褐色のシルト層で、住居の上部全域に厚く堆積する。微量の木炭片以外に混入物はみられない。

第2層：褐色のシルト層で、住居の下部全域に分布する。焼土粒・木炭片をかなり混入する。第1層に比べて密度が密になっている。

第1層、第2層とも自然堆積土層として認定できる。

【壁】 地山を壁としている。ほぼ完全なかたちで残存しており、床面よりの角度は比較的きつい。壁高は低く、現存値で東壁5~8cm、西壁11~13cm、南壁11~18cm、北壁6~9cmとなっている。

【床面】 床面はほぼ水平であるが壁付近でやや低く、中央部でやや高くなる傾向がみられる。床面上からは合計12個のピットが検出されている。

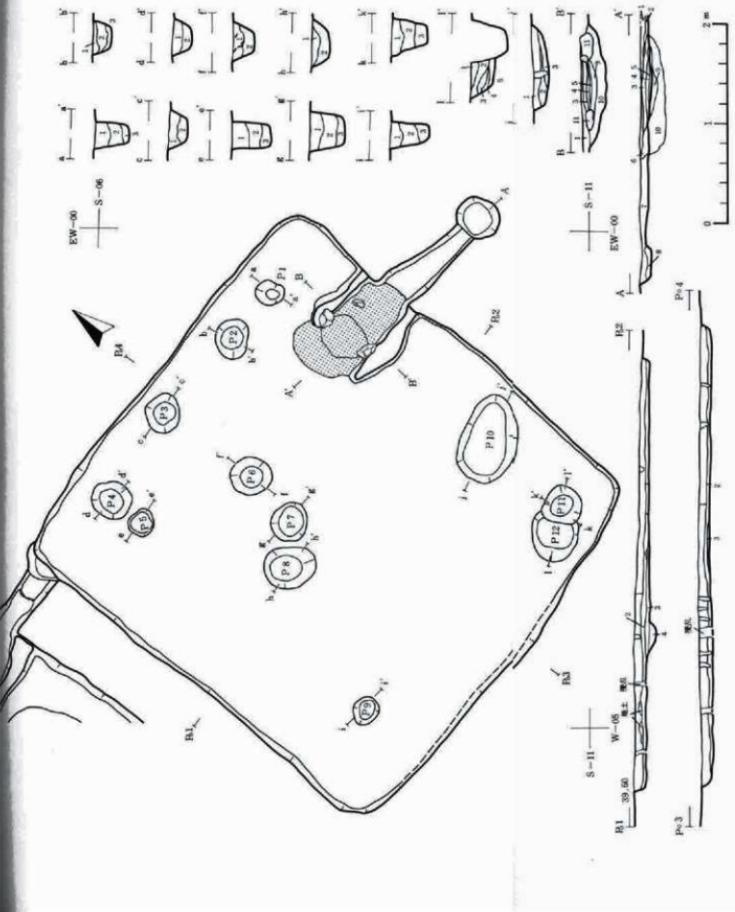
地山をそのまま床面としており、床面下に掘り方等は確認されていない。

【柱穴】 柱穴として認定できるものとしてP₁・P₃・P₅・P₆がある。これらのピットは齊一性が認められ、規模、埋土状況等がほぼ一定している。また、配列にも規則性がみられ、4個のピットを結んだ線は台形に近い四角形となる。

ほかに柱穴の可能性を持つものとしてP₂がある。これは床面のはば中央部に位置しており、上記の4個のピットと同様の内容を示している。P₂が柱穴となれば5本柱となる。

【カマド】 東壁南寄りの箇所に構築されている。燃焼部・煙道部・煙出部とも比較的良好なかたちで残存する。主軸方向は住居の短軸方向からはややすれており、E-9'50'-Sとなる。

燃焼部は床面の高さとほぼ一定している。焚口付近に50×38cmの範囲で厚さ約2cm土の固い焼土面が認められる。燃焼部内には支脚に用いたものと思われる石が残存しているが、動いており確証に欠ける。燃焼部側壁は褐色のシルトをたたきしめて構築されており、焚口付近では内壁



地図							
地層	名	色	土	性	特	そ の 他	
第 1 層	にいわく風化色(10YR 4/3)	シルト	褐色を呈する風化を含む	2	■	色(10Y 4/4) 棕褐色シルト	
第 2 層	■	色(10Y 8/4)	シルト	天井付離隔土	P 5	1	
第 3 層	■	色(10Y 8/4)	シルト	天井付離隔土	P 6	1	
P 4	■	■	粘土の塊状・水溶液を含む風化	2	■	色(10Y 4/4) 同じ	
P 5	■	■	P 8、第6と同じ	3	■	P 1、第6と同じ	
カマヤ 1	柱状岩塊風化層	■	■	2	■	色(10Y 4/4) 同じ	
2	■	■	P 7	2	■	色(10Y 4/4) 同じ	
3	■	■	■	2	■	色(10Y 4/4) 同じ	
4	■	■	■	3	■	色(10Y 4/4) 同じ	
5	■	■	■	3	■	色(10Y 4/4) 同じ	
6	■	■	■	2	■	色(10Y 4/4) 同じ	
7	■	■	■	2	■	色(10Y 4/4) 同じ	
8	■	■	■	2	■	色(10Y 4/4) 同じ	
9	■	■	■	3	■	色(10Y 4/4) 同じ	
10	■	■	■	2	■	色(10Y 4/4) 同じ	
11	■	■	■	3	■	色(10Y 4/4) 同じ	
P 1	1	■	色(10Y R 4/4)	シルト	赤褐色でさざなわして、6	P 11	1
P 2	2	■	色(10Y R 4/3)	シルト質シルト	6	2	■
P 3	3	■	色(10Y R 4/3)	シルト質シルト	3	2	■
P 4	2	■	色(10Y R 4/4)	シルト	赤褐色の離隔土を含む	P 12	1
P 5	3	■	色(10Y R 4/3)	シルト	6	2	■
P 6	2	■	色(10Y R 4/3)	シルト	6	4	■
P 7	2	■	色(10Y R 4/3)	シルト	6	5	■
P 8	1	■	色(10Y R 4/3)	シルト	6	6	■

第14図 第3号生地

に川原石を芯材として使用している。

煙道部は燃焼部底面から高低差をもたずして移行する。長さは約91cmで、底面はほぼ水平になっている。煙出部には直径43cmのピットが掘りこまれており、煙道端との比高は約5cmである。

最後に燃焼部底面を掘り下げたところ、側壁部分をも含めた燃焼部全域に深さ約18cmで皿状の断面形を呈する掘り方が確認された。埋土は地山の褐色土と同質であり、ブロック状の人为的な堆積層である。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴として断定できるピットは検出されていない。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物は土器に限られる。土器には壺・甕・鉢の器種がある。土器の出土量は少く、カマドの周囲より集中して出土している。

环形土器（第15図） 环には、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）、B II類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈环B I類〉（第15図1・2） B I類の环には、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を加えないもの（B Ia類）と再調整を施すもの（B Ic類）とがある。

B Ia類の环は破片のみで固化可能品は出土していない。B I類の环のはほとんどを占める。

B Ic類の环（第15図1）は、体部下端に手持ちヘラケズリを施すもの（H₃手法）である。

器高が普通で底径が小さく、体部は直線的に外傾する。

〈环B II類〉（第15図3） B II類の环には、回転糸切り無調整のもの（B IIa類）と回転ヘラ切り無調整のもの（B IIb類）とがある。

B IIa類の环は細片で2点出土している。いずれも固化不能で全体の器形は不明である。

B IIb類の环（3）は、1点のみで、底径が大きく体部が直線的に外傾するものである。

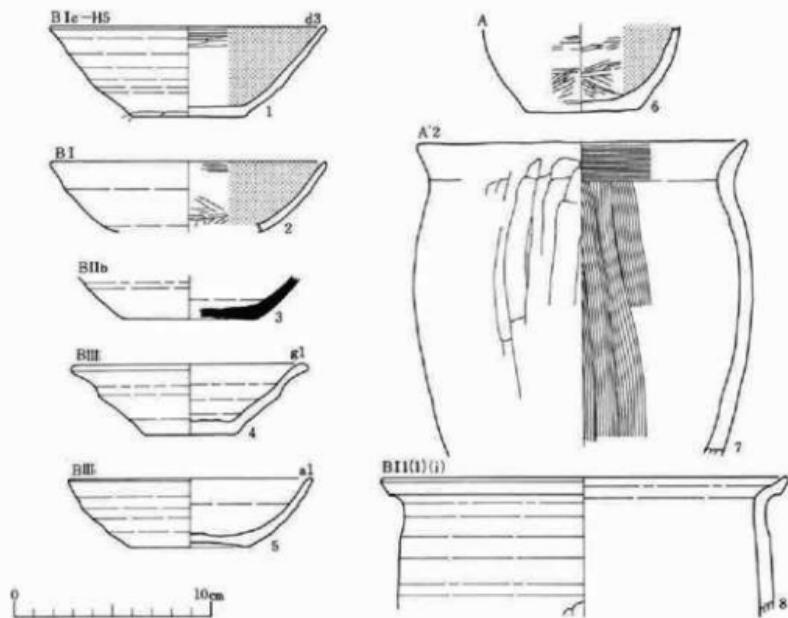
〈环B III類〉（第15図4・5） 破片でかなり出土しているが、全体の器形を知り得るものは少ない。ともに器高が低くて底径の小さなものであり、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの（4）とややふくらみをもって外傾するもの（5）とがある。

甕形土器（第15図） 甕にはA類（ロクロ不使用で酸化炎焼成）とB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）およびB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈甕A類〉（第15図7） 中形のものである。口縁部は短く、直立ぎみに外反し、頸部のくびれは指で折り曲げて造っている。最大径の位置は体部の中央付近にある。器面調整は極めて粗く、外面がヘラケズリ、内面は口縁部が横ナデ、体部がヘラナデで整えている。

〈甕B I類〉（第15図8） 口縁部に最大径をもつ大形のもの（B I 1(1)類）である。口縁部は短く強く外反し、口唇部は上方外側に抜き出している。体部下半外面にヘラケズリが施されているほかはロクロナデで調整している。

〈甕B II類〉 体部の小片が少量出土しているが図示可能のものはない。



第15図 第3号住居跡出土遺物

鉢形土器（第15図6） A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に属するものが1点出土している。口縁部を欠き、全体の器形は不明であるが一応体として分類した。器面調整は体部が内外面ともヘラミガキによっており、底部外面にはヘラケズリが施される。内面は黒色処理されている。

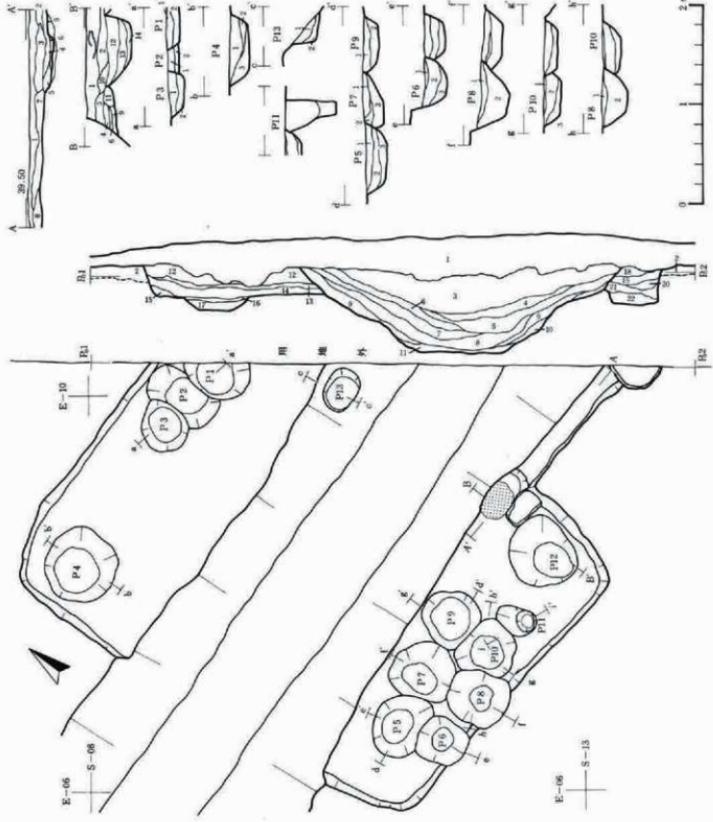
第4号（CC56）住居跡

【遺構確認面】 遺構の掘込面はIIa層の上に黄褐色シルト層上面である。当住居跡付近ではIb層を欠いており、IIa層の上面はすべて耕作土（Ia層）になっている。

【保存状況】 重複による削除をうけている個所を除いて、ほぼ原形をとどめている。なお、住居跡の北東コーナー付近は路線敷外に入る。

【重複関係】 第1号溝と重複関係にある。住居跡のほぼ中央部を巾220~230mにわたって切られており、第1号溝よりも旧い。

【平面形・長軸方向】 基本的には南北に長い長方形を呈するが、北辺よりも南辺が短いため南向きの台形に近い形となる。長軸方向はN-1°00'-Eとなる。



層	名	土	色	土性	特徴	の	地
表	土	2	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	海原地盤
第1分層	3	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	4	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	5	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	6	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	7	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	8	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	9	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	10	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	11	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	12	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	13	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	14	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	15	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	16	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	17	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	18	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	19	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	20	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	21	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第1分層	22	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第2分層	1	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第2分層	2	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第2分層	3	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第2分層	4	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第2分層	5	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第2分層	6	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第2分層	7	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第2分層	8	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第2分層	9	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂
第2分層	10	褐色	褐色	粘土質	1. じぶつ青緑色(10YR 5/6) 2. 黄褐色(10YR 5/3)	砂	砂

図6 四号性地盤

(規模) 長軸(南北)長は4.93m・4.80m、短軸(東西)長は3.65m・3.43mとなる。床面積は約16.46m²である。

(堆積土) 住居内堆積土は以下の3層に分けられる。

第1層：褐色のシルト層である。上部を厚く覆う。緻密な粉状の堆積状況を示す。混入物はみられない。

第2層：褐色の粘土質シルト層である。細粒状の木炭を少量含む。

第3層：褐色のシルト層である。やや砂っぽい。密度は比較的疎密で、地山のにぶい黄褐色土を粒～ブロック状に含む。細粒状の焼土、粒状の木炭をかなり混入する。

以上の堆積層はすべて自然的營力による堆積状況を示している。

(壁) 地山を壁としている。地面より比較的緩やかに立ち上がる。プランの検出に際して造溝掘り込み面より若干掘り下げているが、現存する壁高は東壁で13～22cm、西壁が7～12cm、南壁13～17cm、北壁10～14cmとなっている。

(床) 床面は、やや北側で低く南側で高くなっているが、全体的にはほぼ平坦である。床面上からは合計13個のビットが検出されている。

地山をそのまま床面としており、床面下に掘り方は認められない。

(柱穴) 床面上から発見された13個のビットのうち柱穴として認定できうるものはみられない、規模からみてR_bはその可能性をもつが対となるものが検出されていない。

(カマド) 東壁の南寄りの部分に構築されている。主軸方向はE-2°30'-Sとなる。燃焼部、煙道部の北側は第1号溝によって削除されており、煙出部の一部は路線敷外にかかる。

燃焼部は床面より若干掘り込まれており、38×28cmの範囲で固い焼土面を有する。焼土の厚さは6cmほどで良く焼けている。現存する右側壁は地山のシルトを素材にしている。遺存状況は不良ではほとんど残っていない。

煙道部は燃焼部奥壁から6cmほどの段をもって移行している。長さは約156cmあり、ほぼ水平に煙出部と接続する。煙出部には煙道部底面より約13cm低いビットが掘り込まれており、直径は検出面上で約26cmになっている。

最後に燃焼部底面を掘り下げたところ、側壁部分をも含めた全面に最大深10cmの皿状の掘り方が認められた。

(貯蔵穴状ビット) 床面上から検出された13個のビットのうち貯蔵穴と思われるものには南東コーナー部分より検出されたR_bがある。72×64cmの不整円形で深さは30cmほどになる。堆積土は3層に分けられる。上層はにぶい黄褐色のシルト層で、緻密な粉状堆積を示す。中層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、粒～柱状の木炭や粘状の焼土を多量に含む。下層は褐色のシルト層で地山土をブロック状に含むほか少量の焼土・木炭を混入する。ばさばさした粒状堆積を示す。

ほかに貯蔵穴の可能性をもつものに北西コーナー部分より検出されたB₆がある。B₆とほぼ同様な堆積状況を示しており、灰混りの焼土、木炭を多量に混入している。

【その他のピット】 南壁際に検出されたP₆～P₉のピットは当住居に伴うものであるかは不明である。とくにP₆、P₉は南壁外にわたっており、当住居より新しいものとなる可能性が強い。ただ、6個のピットそれぞれには重複関係が認められ、同時存在したものとはいえない。

【出土遺物】 当住居跡の出土遺物には、土器と砾石がある。土器は、环、甕、壺、鉢の4器種に分けられる。住居のほか全域から出土するが、カマドの周囲よりやや多く出土している。

环形土器（第17図） 环には、A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）、およびB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）がある。

〈环A類〉 固化不能の小片でかなり出土している。すべて平底（A 2類）のものである。

〈环B I類〉（第17図2） B I類の环は、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を施すものと無調整のもの（2）がある。前者は破片でかなり出土しているがすべて固化不能である。

〈环B II類〉（第17図3～9） B II類の环はすべて回転糸切り無調整のものである。形態上の特徴によって細分される。器高が普通で底径が小さなものには、体部が直線的に外傾するもの（3）と大きく開いて直線的に外傾するもの（7）があり、器高が高くて底径の小さなものには体部が直線的に外傾するもの（4～6）と、ややふくらみをもって外傾するもの（8）がある。

甕形土器（第17図） 甕には、A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）およびB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）がある。

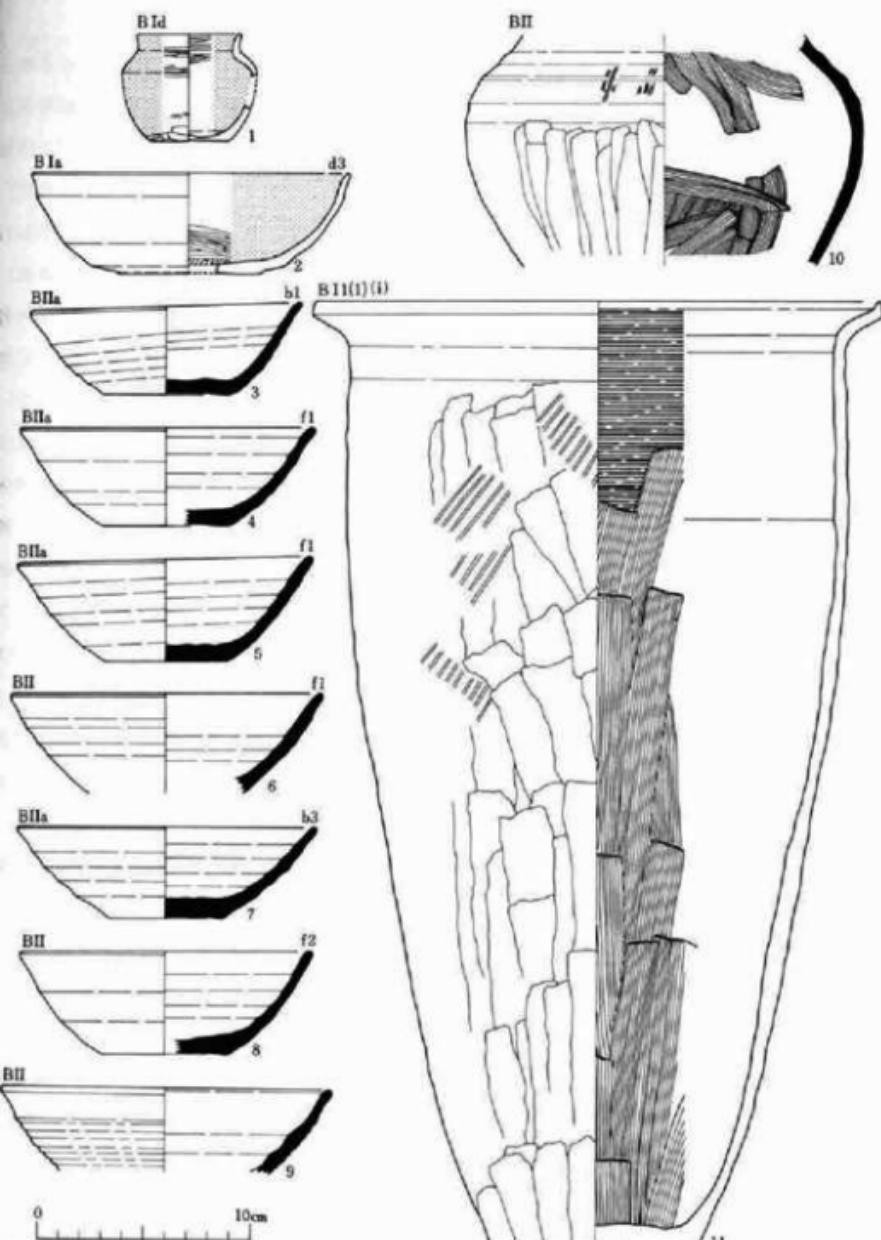
〈甕A類〉 破片でかなり出土しているが図示可能のものはない。大形の長胴形を呈するものがほとんどで、頭部に段を有するものと無いものがある。

〈甕B I類〉（第17図11） B I類の甕は、口縁部に最大径をもつ大形のもの（B I 1(I)類）である。11は器高が極端に高い長胴形を呈する。口縁部は短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部はほぼ直線的に底部へと移行し、体部最大径を上端付近にもつ。外面の調整は口縁部がロクロナデ、体部上半が平行文様工具による叩きしめの後ヘラケズリ、体部下半から底部にかけてはヘラケズリによっており、内面は口縁部から体部上半が刷毛目状ロクロナデ、体部下半がヘラナデで整えている。

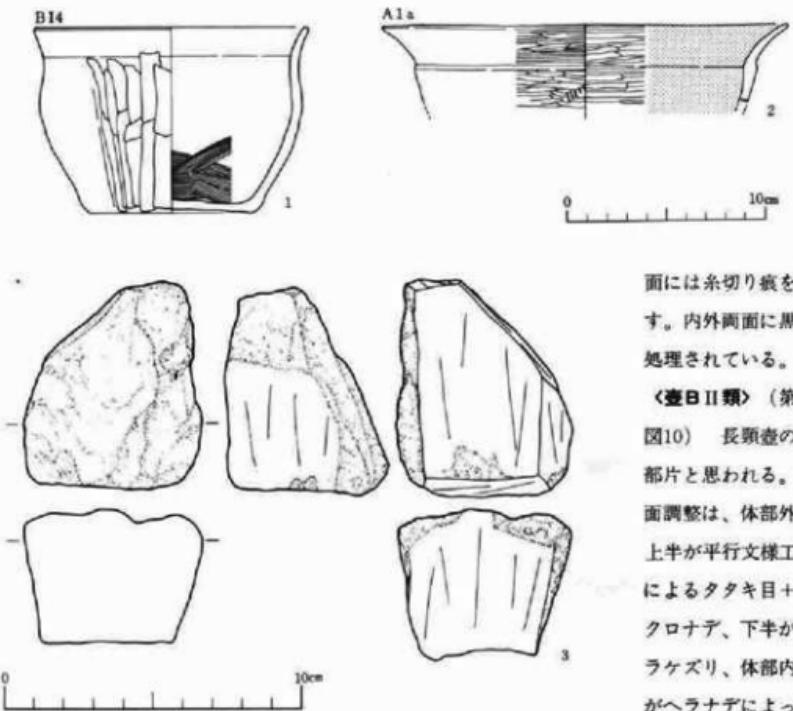
〈甕B II類〉 体部片が少量出土している。全体の器形は不明である。

壺形土器 壺にはB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属すものとB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属すものがある。

〈壺B I類〉（第17図1） 小片を推定復元したものであり、必ずしも正確とは言えないが極端に小形の壺になる。外面の調整は体部下端にヘラケズリが施されるほかはヘラミガキによっており、内面は口縁部から体部上半がヘラミガキ、体部下半がロクロナデで整えている。底部外



第17図 第4号住居跡 出土遺物 (1)



第18図 第4号住居跡 出土遺物（2）

面には糸切り痕を残す。内外両面に黒色処理されている。

〈鉢B II類〉（第17図10）長頭壺の体部片と思われる。器面調整は、体部外面上半が平行文様工具によるタタキ目+ロクロナデ、下半がヘラケズリ、体部内面がヘラナデによっている。

鉢形土器（第18図）鉢には、A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈鉢A類〉（第18図2）口縁部はゆるやかに外反し、頭部にはやや形式化した段を有する。体部はほとんど脛まさに底部へといたるもので、体部最大径を上端付近にもつ。器面は内外面とも丁寧なヘラミガキで調整されている。前段階の調整として、口縁部外面には横ナデ、体部外面には刷毛目が観察される。内面は黒色処理されている。

〈鉢B I類〉（第18図1）口縁部は直立ぎみにゆるく外反し、体部は上半でやや脛むものである。外面の調整は、体部より底部にかけてヘラケズリが整えている。内面は体部下半にヘラナデを施すほかはロクロナデによっている。

砥石（第18図3）不定形の原石を未整形で利用したものである。大小の4面に使用痕が認められる。長軸の横断面形はやや歪んだ四角形を呈する。石質は斜長流紋岩質凝灰岩である。

第5号(CD03)住居跡

【遺構確認面】 IIa層のにぶい黄褐色シルト層を4~5cm掘り下げる遺構の存在を確認した。遺構の掘込面はIIa層の上面である。

【保存状況】 北壁、南壁および西壁の一部が擾乱によって破壊されているが、全体のプランはほぼ完全に確認できた。

【重複関係】 第6号住居跡と重複関係にある。当住居跡の煙道部・煙出部が第6号住居跡の南西部を切っている。第6号住居跡より新しい。

【平面形・長軸規模】 平面形は南北に長い長方形となる。長軸方向はN-9°30'-Wである。

【規模】 長軸(南北)長は4.40m・4.29m、短軸(東西)長は3.46m・3.32mとなり、床面積は約14.24m²である。

【堆積土】 住居内堆積土は以下の2層に大別される。

第1層：にぶい黄褐色のシルト層で、住居の上部全域を厚く覆う。密度はやや疎で、粉~粒状堆積を示す。細粒状の焼土・木炭を少量含む。

第2層：褐色の粘土質シルト層で、床面上に薄く堆積する。粒状の焼土・木炭をかなり含む。壁際には地山土がブロック状に堆積している。

第2層は、床面上にうすく堆積すること、上部に層状の焼土が乗ることなどから生活層とも考えられるが、壁際においては壁の剥落土の上に堆積している。第1層・第2層とも住居廃絶後の自然堆積層として認定した。

【壁】 地山を壁としている。床面より急角度で立ちあがる。現存する壁高は東壁が20~23cm、西壁が14~26cm、南壁13~23cm、北壁20~25cmとなっている。

【床】 床面はほぼ平坦で凸凹はみられないが、北東部より南西部にかけて緩く傾斜している。床面上よりは合計11個のピットが検出されている。

地山をそのまま床面としており、床面下に掘り方は確認されなかった。

【柱穴】 11個のピットのうち柱穴の可能性をもつものとして、P₁、P₄、P₅があげられる。これらのピットは深さがほぼ一定しており約25cmとなっている。ただ、配列の規則性からみれば、これらの3本だけとは考えられず、P₅付近に柱穴が必要となる。しかしP₅は貯蔵穴としての機能をもつものと思われ、柱痕も認められず、柱穴とは考えられない。したがって上記の3個のピットも柱穴としての確証に欠ける。単に可能性をもつにとどめたい。

【カマド】 東壁の南寄りの部分に構築されている。遺存状況は良好である。主軸方向は住居の短軸方向とほぼ一致し、E-7°15'-Nである。

燃焼部は床面と段差をもたずに接続している。焚口付近に24×20cmの固い焼土面があり、そ

の奥に支脚が検出されている。支脚は石と土器とを併用しており、石の上に環を倒位の状態でかぶせている。側壁は地山のにぶい黄褐色シルトを素材としており、遺存状況はあまり良くない。

煙道部は燃焼部底面より16cmの段差をもつ。長さは114cmあり、底面はほぼ水平に移行して煙出部に接続する。煙出部には直径約23cmのピットがあり、煙道端との比高は約10cmになっている。最後に燃焼部を掘り下げたが、掘り方は検出されていない。

【貯蔵穴状ピット】 貯蔵穴と思われるピットにはP₃がある。カマドの右脇、南東コーナーに位置しており、68.5×54.5cmの階円形を呈し、深さは30cmとなる。堆積土は3層に分けられ、上層は褐色のシルト層で、粒状の焼土・木炭を少量含む。中層はにぶい黄褐色のシルトで、地山土をブロック状に含むほか粒状の焼土・木炭を少量混入する。下層は褐色の粘土質シルト層で、多量の焼土・木炭および土器片を含む。

【出土遺物】 当住居の出土遺物は土器に限られる。土器は環・高台付環・甕・鉢の4器種に類別される。住居の北西部より集中して出土したものが多い。

环形土器（第20図、第21図） 环には、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）、B II類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈环B I類〉（第21図1～4） B I類の环には底部を回転糸切りで切り離し、再調整を加えないもの（B Ia類）と再調整を施すもの（B Ic類）とがある。

B Ic類の环（1・2）は、体部下端より底部全面に手持ヘラケズリを施すもの（H₁手法）である。形態上の特徴によって、器高が低くて底径が小さく、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの（1）と器高が普通で底径が小さく、体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの（2）とに分けられる。

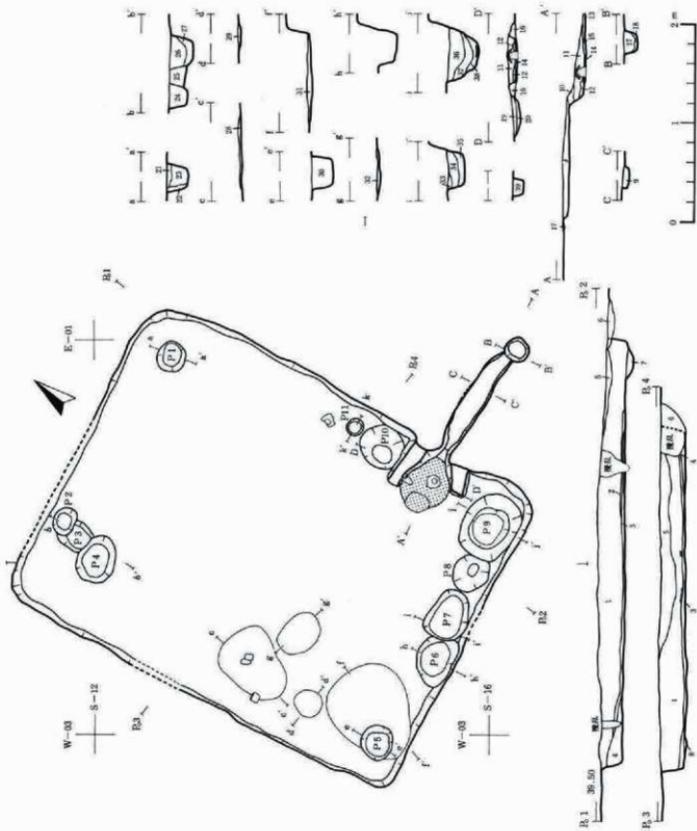
B Ia類の环（3・4）には、器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの（3）と器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの（4）とがある。

〈环B II類〉（第20図10・11） B II類の环はすべて細片であり、全体の器形を知り得るものはない。底部を残すものはすべて回転糸切り無調整のもの（B IIa類）である。

〈环B III類〉（第20図1～7） 回転糸切り無調整のものである。形態上の特徴により、いくつかに細分される。器高が普通で底径の小さなものは、体部が直線的に外傾するもの（1）と体部がややふくらみをもって外傾するもの（7）とがある。また器高が低くて底径の小さなものは、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの（2～4）と体部がややふくらみをもって外傾するもの（5・6）とに分かれる。

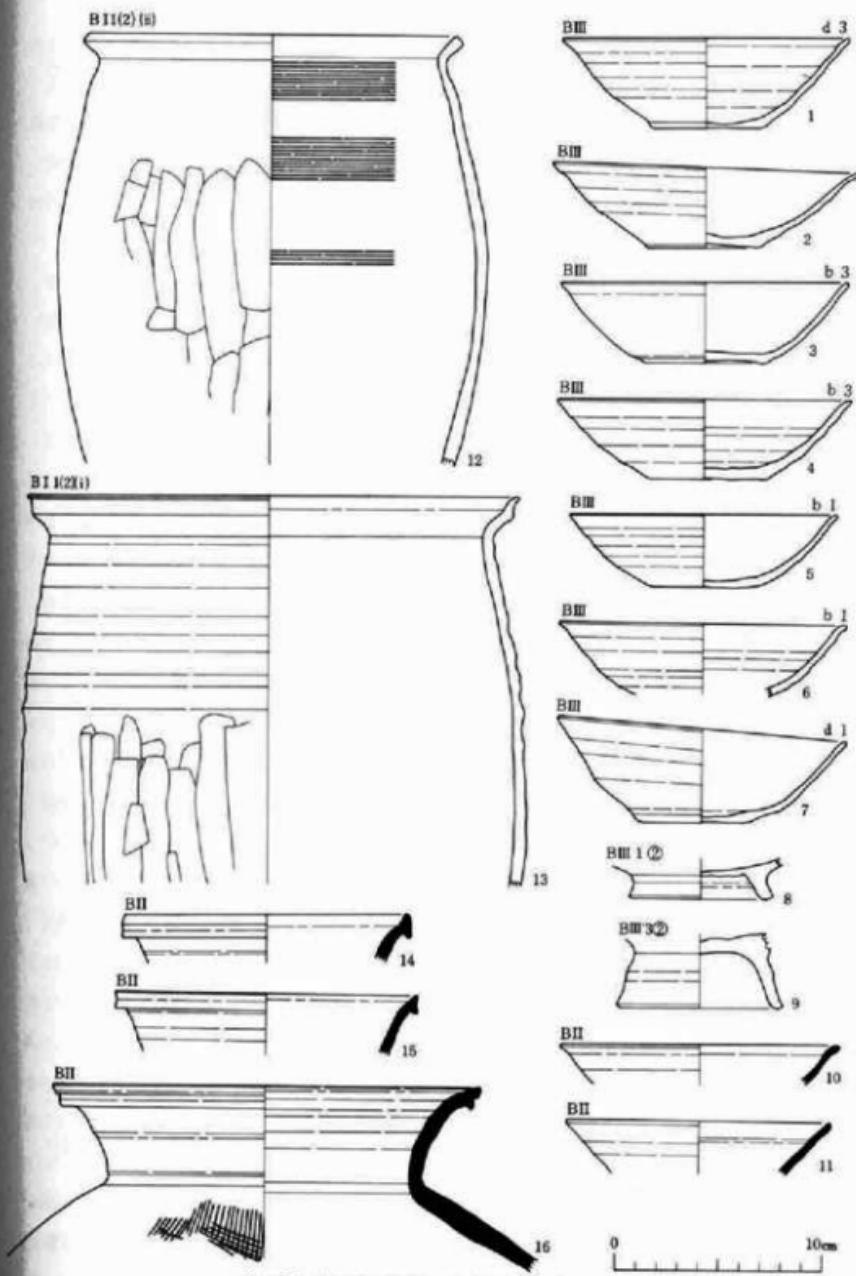
高台付环形土器（第20図・第21図） 高台付环にはB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）とB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈高台付环B I類〉（第21図5～7） 高台部が短く外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの

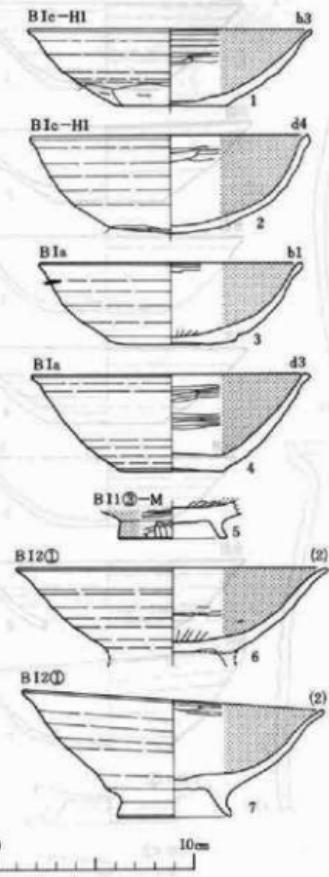


番号	土色	土性	地	地	層	土色	地	地	地	地	
采 1	にじいろの薄紫色(10YR 5/3)	シルト	細粒の土・水を含む	シルト	P 1	にじいろの薄紫色(10YR 5/3)	シルト	粘土	土	地	
采 2	暗 褐	粘 土	褐色の土・水を含む	シルト	#	22	*	(10YR 5/3)	シルト	褐色を帯びた粘土	
采 3	褐色(10YR 4/3)	粘質砂	褐色の土・水を含む	シルト	P 2	にじいろの薄紫色(10YR 5/3)	シルト	シルト	シルト	地	
采 4	にじいろの薄紫色(10YR 5/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	P 3	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	シルト	地	
采 5	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	P 4	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	シルト	地	
采 6	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	#	27	にじいろの薄紫色(10YR 5/3)	シルト	粘土の塊・水を含む	地	
采 7	にじいろの薄紫色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	P 5	褐色(10YR 4/3)	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	地	
采 8	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	#	28	褐色(10YR 4/3)	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	地
采 9	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	P 6	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	シルト	地	
采 10	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	#	29	*	*	*	地	
采 11	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	P 7	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	シルト	地	
采 12	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	#	30	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	
采 13	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	P 8	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	シルト	地	
采 14	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	#	31	褐色(10YR 4/3)	シルト	粘土質シルト	地	
采 15	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	P 9	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	シルト	地	
采 16	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	#	32	*	*	*	地	
采 17	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	P 10	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	シルト	地	
采 18	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	#	33	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	
采 19	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	P 11	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	シルト	地	
采 20	褐色(10YR 4/3)	シルト	褐色の土・水を含む	シルト	#	34	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	
						35	にじいろの薄紫色(10YR 5/3)	シルト	シルト	地	
						P 12	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	
						P 13	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	
						P 14	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	
						P 15	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	
						P 16	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	
						P 17	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	
						P 18	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	
						P 19	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	
						P 20	褐色(10YR 4/3)	シルト	シルト	地	

第15図 第5号柱状図



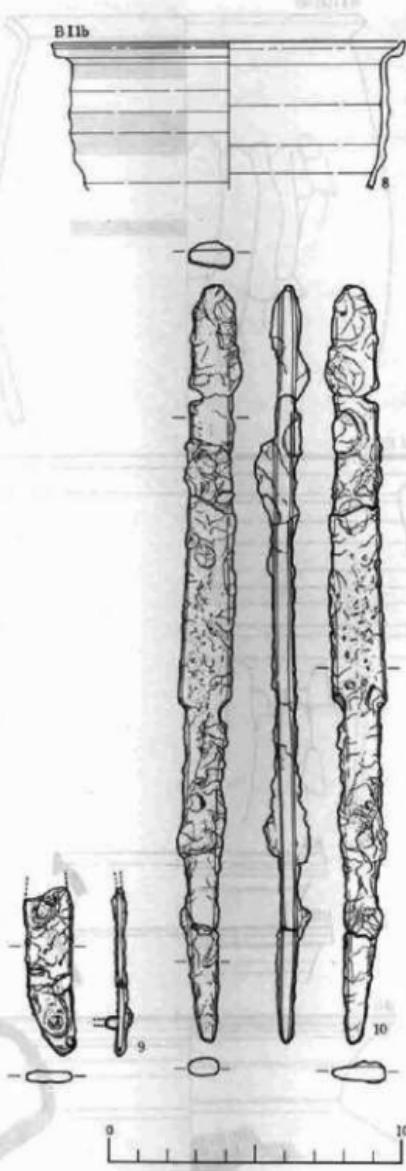
第20図 第5号住居跡 出土遺物 (1)



(B I 1③類)と高台部が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施し周辺をロクロ調整するもの(B I 2①類)とがある。

B I 1類の高台付环(5)は、环部を欠き全体の器形は不明であるが、器高が極端に高い塊形を呈する可能性が強い。

内外両面に丁寧なヘラミガキを施して



第21図 第5号住居跡 出土器物 (2)

黒色処理を加えるものである。

B I 2類の高台付环(6~7)は、环部の形態は共通しており、器高が低くて底径が小さく、体部はややふくらみをもって外傾し、口縁端で外反するものである。

【高台付环III類】(第20図8・9) 高台部が長く外傾するもの(B III 2類)と、極端に長く外傾するもの(B III 3類)とがある。底部は、いずれもナデを施して周縁をロクロ調整するもの(③類)で、环部の形態は不明である。

壺形土器(第20図) 壺はB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)に属すものに限られる。

【壺B I類】(第20図12・13) B I類の壺には、最大径の位置が口縁部にある大形のもの(B I 1(1)類)、体部に最大径をもつ大形のもの(B I 1(2)類)、および小形で口縁部に最大径をもつもの(B I 2(1)類)とがある。B I 1(1)類およびB I 2(1)類の壺は図示不能である。

B I 1(2)類の壺(12・13)には、口縁部が極端に短く外反するもの(12)と、口縁部が短く外反し口唇部を上方外側へ強く挽き出すもの(13)とがある。体部はいずれもゆるく脹り最大径を中央付近にもつ。器面調整は外面が口縁部から体部上半はロクロナデ、体部下半はヘラケズリ、内面が12の体部上半に刷毛目状ロクロナデが施されるほかはロクロナデで整えている。

壺形土器(第20図14~16) 壺はB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)のものに限られる。頸部が直立ぎみに外傾し、口縁部が外反するもので、体部は大きく脹り出す器形を呈する。これは全体の器形が推定できる16は、口唇部を下方へ挽き出しており、中央に太い沈線が回る。体部は平行文様叩き一連ぐう文あて工具で叩きしめている。14・15は口縁部の破片であり、全体の器形は不明である。

鉢形土器(第21図8) B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)に属すものである。口縁部は強く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部最大径は上端付近にある。全面ロクロ調整である。

鉄製品(第21図9・10) 10は刀子で、刃部端をほんの少し欠くかほぼ完形である。現存長で26.2cmもある大形のもので、刃部幅は関近くで1.8cm、中央部で1.5cmを計る。背は幅0.5cmの平造りである。関は背側・刃部側とも段を有し、関幅は1.2cmである。茎は11.5cmの長さをもち、幅は1.3~0.6cmと先端に向って徐々に狭まり、断面形は長方形を呈する。9は最大幅1.7cm、厚さ0.3cmの扁平な鉄製品で、長軸の一端に細長い棒状のものが直角にとりつけられている。現存長で5.7cmを計る。鎌と推定される。

第6号(C E50)住居跡

【造構確認面】 造構の掘込面はIIa層のにぶい黄褐色シルト層上面である。実際にはIIa層を2~4cm掘り下げる造構の存在を確認している。

【保存状況】 所々に長イモによる擾乱をうけているがほぼ原形をとどめている。

【重複関係】 第5号住居跡と重複関係にある。西壁の一部が第5号住居跡の煙道部によって切られている。第5号住居跡より古い。

【平面形・長軸方向】 東西にやや長い長方形を呈する。長軸方向はN-94°50'-Wである。

【規模】 長軸(東西)長が3.35m・3.11mで、短軸(南北)長が3.03m・2.84mとなり、床面積は約8.83m²である。

【堆積土】 住居内堆積土は以下の2層に分けられる。

第1層：にぶい黄褐色のシルト層で、住居の全域を厚く覆う。緻密で比較的固い。少量の木炭粒を含むほか、混入物はみられない。

第2層：にぶい黄褐色のシルト層で、住居の下部全面に堆積する。第1層に比べて密度が疎で、粒-ブロックの堆積を示す。粒状の焼土・木炭をかなり含む。

第1層、第2層とも自然的營力による堆積層として把握することができる。

【壁】 地山をそのまま壁としている。床面よりの立ちあがり角度は比較的緩い。現存する壁高は東壁で20~23cm、西壁が18~21cm、南壁18~22cm、北壁19~24cmとなっている。

【床】 床面は全体的に凸凹がみられず、ほぼ平坦である。たたきしめられたものと思われ、比較的かたい。床面上からは大小5個のビットが検出されている。

床面を立ち割ったところ、にぶい黄褐色のシルト層が5~15cmの厚さで認められた。これは住居掘り方の埋土と考えられ、ブロック状の堆積状況を示している。

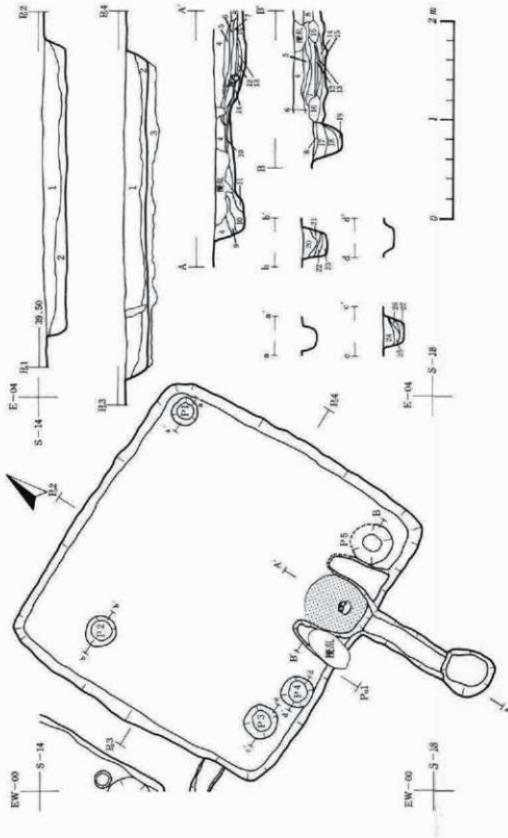
【柱穴】 住居内には柱穴と思われるものは検出できなかった。床面上からは検出されたP₁~P₅のうち、位置からみてその可能性をもつものとしてはP₁とP₂とがあげられる。しかし、埋土状況などからは柱穴としての確証に欠ける。

【カマド】 南壁東寄りの部分に構築されている。燃焼部右側壁の部分が深耕による破壊を受けているほかはほぼ原形をとどめている。主軸方向はS-5°10'-Eである。

燃焼部は床面を若干(2~3cm)掘り下げて作られており、34×52cmの範囲で固い焼土面が検出されている。中央やや壁寄りの部分には支脚が設けられており、石と土器とを併用している。川原石を底面下にうめこんで、その上に土器器皿を倒置の状態でかぶせており、石の露出部の高さは約6cmとなっている。側壁(袖)は地山のにぶい黄褐色シルト質土を素材としている。

煙道部は燃焼部底面より約6cmの比高をもって奥壁とつななっている。長さは約88cmあり、やや下りぎみに移行して煙出部と接続する。煙出部には直径約50cmのビットが掘り込まれており、深さは煙道端より約8cm低くなっている。

最後に燃焼部底面を立ち割ったところ、直下にかたくたたきしめられた層が検出された。掘り方の埋土とは異なることから、カマド燃焼部の固化を意識したものであろう。



地図		層	厚さ	土色	土性	モサの種
図 1	層 1	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	松林の地土・木炭を少額含む		
図 2	層 2	" (10Y R4/3)	シルト	松林の地土・木炭を少額含む		
掘り方盤上	3	" (10Y R5/4)	シルト	ブロックの地盤		
カマヤ	4	にぶい黄褐色(10Y R5/3)	シルト	No. 1 層と同じ		
	5	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト			
	6	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	松林の地土を多額に含む		
	7	" (" "	シルト	No. 2 層と同じ		
	8	褐色(10Y R4/4)	シルト	松林の地土を少額含む		
	9	褐色(10Y R3/4)	シルト	松林の地土の混合層		
	10	" (" "	粘土シルト	松林の地土・腐葉含む		
	11	褐色(10Y R5/8)	シルト	水槽部		
	12	赤褐色(10Y R4/6)	シルト	水槽の地盤		
	13	" (10Y R4/3)	シルト	固結化している		
	14	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	No. 3 層と同じ		
	15	"	シルト	腐解した地盤		
	16	にぶい黄褐色(10Y R5/3)	シルト	松林の地土・木炭を少額含む		
P. 2	17	褐色(10Y R4/4)	シルト	松林の地土・木炭を多額に含む		
	18	" (" "	粘土シルト			
	19	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト			
	20	褐色(10Y R4/4)	シルト			
	21	にぶい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	松林の地土・木炭を少額含む		
	22	" (10Y R5/3)	シルト	樹山土		
P. 3	23	褐色(10Y R4/4)	シルト	No. 20 层と同じ		
	24	"	シルト	松林の地土・木炭を多額に含む		
	25	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	No. 22 层と同じ		
	26	"	シルト	No. 23 层と同じ		
	27	"	シルト			

〔貯藏穴状ピット〕 貯蔵穴と思われるものにPがある。直徑約41cmの円形を呈し深さは約31cmある。埋土は3層に分けられ、上層は褐色のシルト層で粒状の焼土・炭化物を少量含む。中層は褐色の粘土質シルト層で粒～ブロック状の焼土および粒状の炭化物を多量に混入する。土器片もかなり含まれる。下層はにぶい黄褐色のシルト層で地山土をブロック状に含む。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物は土器に限られる。土器には、壺・甕・鉢・堀などの器種がある。住居のほぼ全域から出土している。

环形土器 (第23図) 环には、B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)、B II類(ロクロ使用で還元炎焼成)およびB III類(ロクロ使用で酸化炎焼成)などがある。

〔环B I類〕 (第23図1～4) B I類の环には、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を施さないもの(B Ia類)と再調整を施すもの(B Ic類)がある。前者は破片で少量出土しており、図化不能である。B Ic類の环は再調整を施す部位およびその手法によって細分される。

再調整は回転ヘラケズリによるもの(1)と手持ヘラケズリによるもの(2～4)とがある。前者は体部下端より底部全面に施しており(W手法)、後者は体部下端より底部全面に施すもの(2)(H手法)、と体部下端に施すもの(3～4)(H手法)とがある。さらに、形態上の特徴によっては以下のように分けられる。器高が低くて底径が大きなものは、体部がややふくらみをもって外傾するもの(2)と体部がやや丸味をもって外傾するもの(3)とに分かれる。また、器高が高くて底径の小さなものは、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(1)と体部がやや丸味をもって立ちあがるもの(4)とがある。

〔环B II類〕 すべて回転糸切り無調整のもの(B IIa類)である。細片のため図示できない。

〔环B III類〕 破片で少量出土している。図示可能のものは出土していない。

壺形土器 (第23図) 壺には、A類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)、B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)、およびB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)とがある。

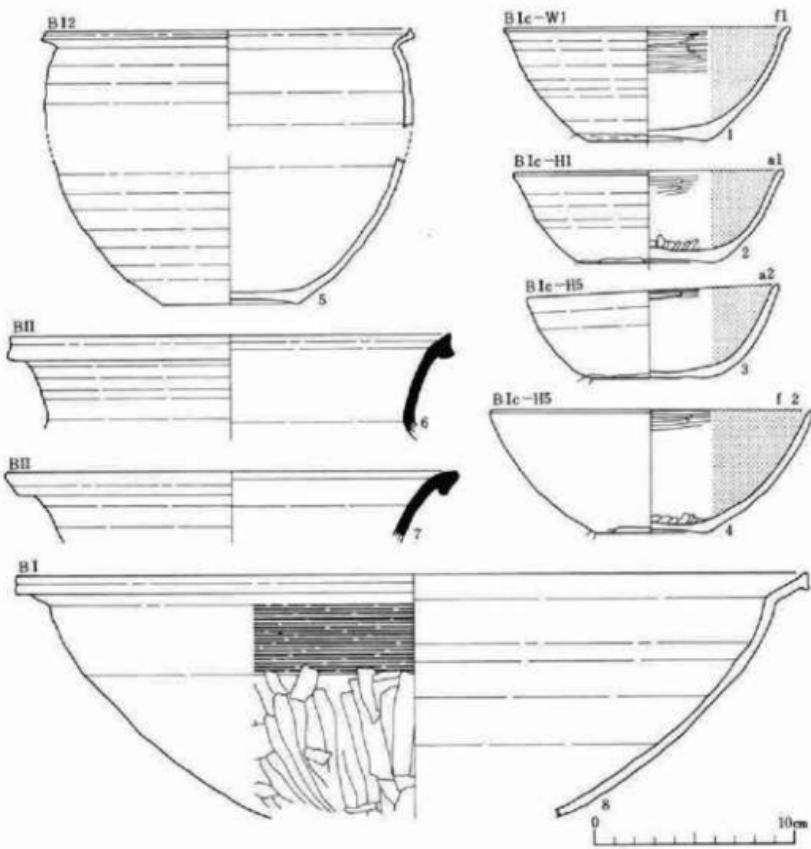
〔壺A類〕 大形のもの(A 1類)が破片で出土している。体部片が多く図示不能である。

〔壺B I類〕 口縁部に最大形をもつ大形のもの(B I 1類)が少量出土している。図示不能。

〔壺B II類〕 (第23図7) B II類の壺は細片でかなり出土している。体部の破片が多く、正確な分類はできない。7は口縁部が外反するもので、口唇部は下方へ強く挽き出している。肩部で大きく張り出す器形を呈するものと思われる。

壺形土器 (第23図6) B II類(ロクロ使用で還元炎焼成)に属するものである。広口壺の口縁部と推定される。口縁部は直立ぎみに外傾して口縁部で外反するもので、口唇部は上下に挽き出している。

鉢形土器 (第23図5) B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)として類別されるものである。口縁部は短く外反し、口唇部は上下に強く挽き出している。体部は上半でやや張り出しており、



第23図 第6号住居跡、出土遺物

上半に体部最大径をもつ。全面ロクロ調整で、底部外面には右回転条切り痕をそのまま残す。
壺形土器（第23図8） B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものである。底部は欠損している。体部はややふくらみをもって外傾し、口縁部はかなり長く外反する。口唇部は下方へ強く挽き出している。外面の調整は口唇部がロクロナデ、口縁部から体部上半が刷毛目状ロクロナデ、体部下半がヘラケズリによっている。内面は全面ロクロナデで整えている。

第7号(CF56)住居跡

【遺構確認面】 IIa層のにぶい黄褐色シルト層を2~3cm掘り下げる遺構の存在を確認した。遺構の掘込面はIIa層の上面である。

【保存状況】 北西コーナー付近と南壁の一部が耕作によって破壊されているほかはほぼ原形をとどめており、保存状況は比較的良好である。

【重複関係】 第9号住居跡および第2号溝と重複関係にある。当住居跡の南東部が第9号住居跡の北西部を切って構築されている。第9号住居跡より新しい。また、第2号溝は当住居の西壁から南壁にかけて検出されており、それらの部分を破壊している。第2号溝より旧い。

【平面形・長軸方向】 東西に若干長いがほぼ正方形を呈する。長軸方向はN-86°30'-Wである。

【規模】 長軸(東西)長で4.66m・4.59m、短軸(南北)長が4.54m・4.46mとなり、床面積は約20.83m²である。

【堆積土】 住居内堆積土は基本的には以下の2層に分けられる。

第1層：褐色のシルト層で、住居のはば全体を覆う。緻密でかなりかたい。粒一柱状の木炭をかなり含む。

第2層：暗褐色のシルト層で、住居の下部に薄く堆積する。粒一ブロック状の堆積状況を示す。粒状の焼土・木炭を多量に含む。壁際には壁剥落に伴うものと思われるにぶい黄褐色土がブロック状に堆積する。

第1層、第2層とも自然堆積層と思われる。とくに第2層は生活層とも考えられたが、壁の剥落土の上に堆積することや緻密さがみられないことなどから自然堆積層として認定した。

【壁】 地山を壁としている。床面よりかなり急角度で立ちあがる。現存する壁高は東壁で23~27cm、西壁が22~26cm、南壁21~28cm、北壁20~24cmとなる。

【床】 床面は全体的に凸凹がみられず、ほぼ平坦である。とくにかたい面はみられない。床面上には貯蔵穴をも含めて合計8個のビットが確認されている。

なお、床面下に掘り方等は検出されなかった。

【柱穴】 床面上に検出された7個の小ビットのなかで、柱穴としての配置の規則性、規模などからみればP₁、P₂、P₃の3つのビットがその可能性をもつ。しかし、対になるべき最低もう1個のビットがみあたらないことからこれらの3ビットも柱穴として断定できない。

【カマド】 東壁のはば中央(やや東寄り)に構築されている。極めて良好なかたちで遺存している。主軸方向はE-3°30'-Sである。

燃焼部は床面を若干掘りくぼめており、焚口付近に63×48cmの範囲で厚さ約5cmのかたい焼土面を有する。粒状の焼土は燃焼部全面に広がる。側壁も良く残存しており、地山のにぶい黄

褐色シルト質土を素材にし、それを積み重ねて作られている。

燃焼部奥壁は約16cmの段差をもって煙道部へと移行しており、煙道部の長さは約102cmになっている。煙道部底面は煙出部に向って緩く立ちあがる。煙出部には直径45cmのピットが掘られており、煙道端との比高はかなり深く29cmになっている。

最後に燃焼部底面を掘り下げたが掘り方等は検出されていない。

【貯蔵穴状ピット】 貯蔵穴と思われるものにはカマド右脇に検出されているP₁がある 114×110cmの不整円形を呈し、深さは55cmになる。埋土は4層に分けられる。No.1層は褐色のシルト層で、粒状の焼土・炭化物を少量含む。No.2層は暗褐色の粘土質シルト層で、木炭片・焼土粒をかなり含む。No.3層は褐色の粘土質シルト層で、土器片・焼土粒・木炭片がかなり含まれる。No.4層は暗褐色の粘土質シルト層で、焼土・木炭・土器が充填する。灰も含まれるものと思われ、土はペトペトしている。

【その他のピット】 カマド左袖脇に検出されたP₂は当住居にかかわるピットとはならず、第9号住居跡の煙出部と思われる。

【出土遺物】 当住居跡の出土遺物には、土器と鉄製品がある。土器の器種は环・高台付环・甕・鉢などに分けられる。床面上のほぼ全域にわたって出土するが、とくにピット8より出土するものが多い。

环形土器 (第25図、第26図) 环には、B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)、B II類(ロクロ使用で還元炎焼成)およびB III類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とがある。

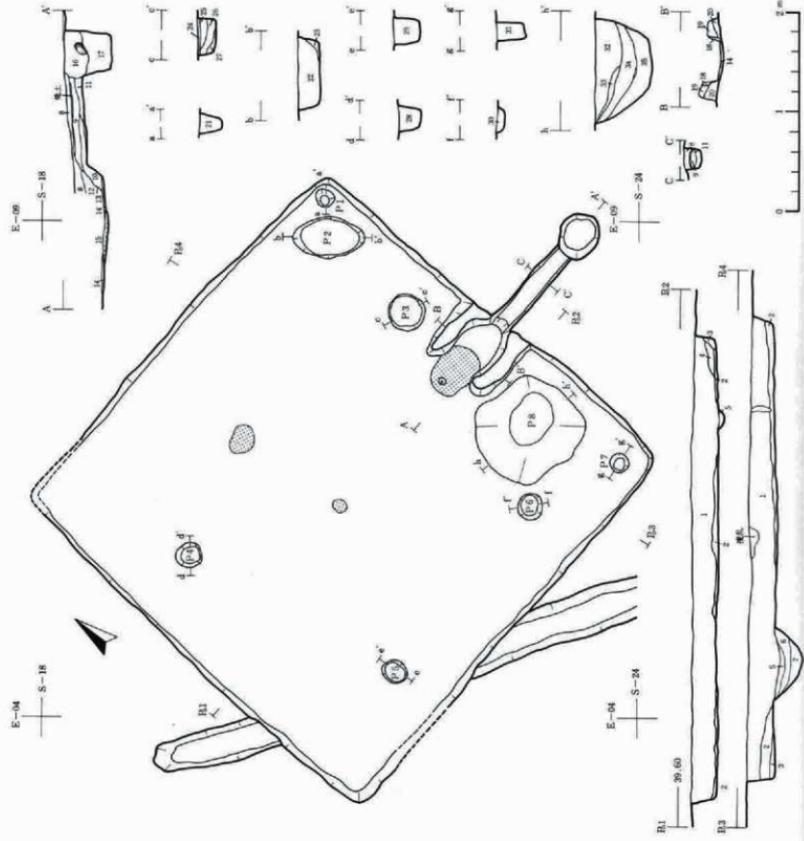
〈环B I類〉 (第25図1～8) B I類の环には、底部を回転糸切りで切り離した後に再調整を施すもの(B Ic類)と調整を加えないもの(B Ia類)とがある。

B Ic類の环(1)は、体部の全面に手持ヘラケズリを施している。底部を欠くため全体の器形は不明であるが、体部はややふくらみをもって外傾する。

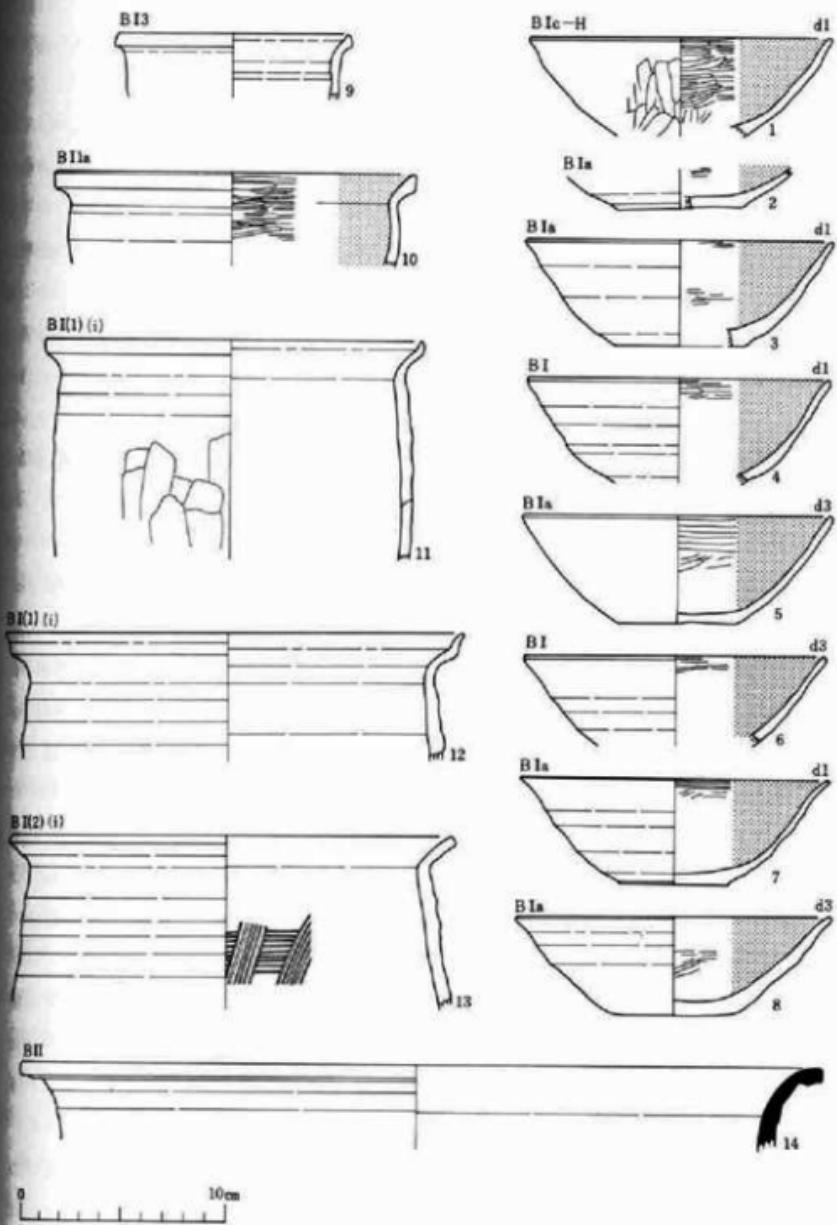
B Ia類の环(2・3・5・7・8)は、形態上の特徴によって分けられ、器高が普通で底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの(3・7)と体部が直線的に外傾するもの(5・8)とがある。

〈环B II類〉 (第26図8～10) 回転糸切り無調整のもの(B IIa類)である。小片で少量出土している。いずれも全体の器形は不明である。

〈环B III類〉 (第26図1～6) 回転糸切り無調整のものである。形態上の特徴によって細分される。すべて器高が普通で底径が小さなもので、体部がややふくらみをもって外傾するもの(1・2)、体部がやや丸味をもって外傾するもの(3)、および体部が直線的に外傾するもの(3・4・6)などがある。



番号	土 色	地 質	土 色	地 質	番号	土 色	地 質	土 色	地 質
第 1 層	1 級 赤褐色	砂 岩	1 級 赤褐色	砂 岩	20	1級 黄褐色	砂 岩	1 級 黄褐色	砂 岩
第 2 層	2 級 褐 緑	砂 岩	2 級 褐 緑	砂 岩	21	2級 黄褐色	砂 岩	2 級 黄褐色	砂 岩
x	3 に い る	3 に い る	3 に い る	3 に い る	22	3級 黄褐色	砂 岩	3 に い る	3 に い る
x	4 x	(3級) 褐 色	(3級) 褐 色	(3級) 褐 色	P 1	4級 黄褐色	砂 岩	4 x	4 x
P 2	5 x	(4級) 褐 色	(4級) 褐 色	(4級) 褐 色	P 2	5級 黄褐色	砂 岩	5 x	5 x
P 3	6 x	6級 褐 色	6級 褐 色	6級 褐 色	P 3	6級 黄褐色	砂 岩	6 x	6 x
P 4	7 x	7級 褐 色	7級 褐 色	7級 褐 色	P 4	7級 黄褐色	砂 岩	7 x	7 x
P 5	8 x	8級 褐 色	8級 褐 色	8級 褐 色	P 5	8級 黄褐色	砂 岩	8 x	8 x
P 6	9 x	9級 褐 色	9級 褐 色	9級 褐 色	P 6	9級 黄褐色	砂 岩	9 x	9 x
P 7	10 x	10級 褐 色	10級 褐 色	10級 褐 色	P 7	10級 黄褐色	砂 岩	10 x	10 x
P 8	11 x	11級 褐 色	11級 褐 色	11級 褐 色	P 8	11級 黄褐色	砂 岩	11 x	11 x
P 9	12 x	12級 褐 色	12級 褐 色	12級 褐 色	P 9	12級 黄褐色	砂 岩	12 x	12 x
P 10	13 x	13級 褐 色	13級 褐 色	13級 褐 色	P 10	13級 黄褐色	砂 岩	13 x	13 x
P 11	14 x	14級 褐 色	14級 褐 色	14級 褐 色	P 11	14級 黄褐色	砂 岩	14 x	14 x
P 12	15 x	15級 褐 色	15級 褐 色	15級 褐 色	P 12	15級 黄褐色	砂 岩	15 x	15 x
P 13	16 x	16級 褐 色	16級 褐 色	16級 褐 色	P 13	16級 黄褐色	砂 岩	16 x	16 x
P 14	17 x	17級 褐 色	17級 褐 色	17級 褐 色	P 14	17級 黄褐色	砂 岩	17 x	17 x
P 15	18 x	18級 褐 色	18級 褐 色	18級 褐 色	P 15	18級 黄褐色	砂 岩	18 x	18 x
P 16	19 x	19級 褐 色	19級 褐 色	19級 褐 色	P 16	19級 黄褐色	砂 岩	19 x	19 x
P 17	20 x	20級 褐 色	20級 褐 色	20級 褐 色	P 17	20級 黄褐色	砂 岩	20 x	20 x
P 18	21 x	21級 褐 色	21級 褐 色	21級 褐 色	P 18	21級 黄褐色	砂 岩	21 x	21 x
P 19	22 x	22級 褐 色	22級 褐 色	22級 褐 色	P 19	22級 黄褐色	砂 岩	22 x	22 x
P 20	23 x	23級 褐 色	23級 褐 色	23級 褐 色	P 20	23級 黄褐色	砂 岩	23 x	23 x
P 21	24 x	24級 褐 色	24級 褐 色	24級 褐 色	P 21	24級 黄褐色	砂 岩	24 x	24 x
P 22	25 x	25級 褐 色	25級 褐 色	25級 褐 色	P 22	25級 黄褐色	砂 岩	25 x	25 x
P 23	26 x	26級 褐 色	26級 褐 色	26級 褐 色	P 23	26級 黄褐色	砂 岩	26 x	26 x
P 24	27 x	27級 褐 色	27級 褐 色	27級 褐 色	P 24	27級 黄褐色	砂 岩	27 x	27 x
P 25	28 x	28級 褐 色	28級 褐 色	28級 褐 色	P 25	28級 黄褐色	砂 岩	28 x	28 x
P 26	29 x	29級 褐 色	29級 褐 色	29級 褐 色	P 26	29級 黄褐色	砂 岩	29 x	29 x
P 27	30 x	30級 褐 色	30級 褐 色	30級 褐 色	P 27	30級 黄褐色	砂 岩	30 x	30 x
P 28	31 x	31級 褐 色	31級 褐 色	31級 褐 色	P 28	31級 黄褐色	砂 岩	31 x	31 x
P 29	32 x	32級 褐 色	32級 褐 色	32級 褐 色	P 29	32級 黄褐色	砂 岩	32 x	32 x
P 30	33 x	33級 褐 色	33級 褐 色	33級 褐 色	P 30	33級 黄褐色	砂 岩	33 x	33 x
P 31	34 x	34級 褐 色	34級 褐 色	34級 褐 色	P 31	34級 黄褐色	砂 岩	34 x	34 x
P 32	35 x	35級 褐 色	35級 褐 色	35級 褐 色	P 32	35級 黄褐色	砂 岩	35 x	35 x



第25図 第7号住居跡 出土遺物 (1)



第26図 第7号住居跡 出土遺物(2)

高台付壺形土器 (第26図7) B III類 (ロクロ使用で酸化炎焼成) に属するものが1点出土している。高台部は長く外傾し、先端に平坦面をもたないものである。底部は全面にロクロ調整されている(④類)。壺部の形態は口縁部を欠くため不明である。

壺形土器 (第25図11~14) 壺には、B I類 (ロクロ使用で酸化炎焼成) と B II類 (ロクロ使用で還元炎焼成) とがある。B II類の出土量はごく少量である。

〈壺B I類〉 (第25図11~13) B I類の壺は、すべて大形のもの (B II類) であり、最大径を口縁部にもつもの (B I 1(1)類) と体部にもつもの (B I 1(2)類) とに分けられる。

B I 1(1)類の壺 (11・12) は、口縁部は短く外反するが口唇部は上方へ挽き出すもの(11)と上方外側へ強く挽き出すもの(12)とに分かれる。体部は、あまり脹まず底部へ移行するも

- (圖) 地山之墻上乙之。東面乙之勿橫斜也。其下無地也。遺存於泥地也。現堆土第1層、第2層乙之自然堆積層乙之泥地也。
- 第2層：紅黃褐色乙之土層乙之、生居床面土層乙之有土。第1層比之堆積層乙之其餘以以下地也。
- 第1層：褐色乙之土層乙之、生居上部全城乙之也。鐵器刃在之也。少量的水井、比較的少也。少量的木頭、鐵頭也。
- (堆積土) 遺構內堆積土樣本的乙之2層乙之大別也。
- 約16.12m-C3.6m。
- (鐵塊) 鐵鏈(東西)長乙之1.71m·4.49m、鐵鏈(南北)長乙之3.76m·3.59m之在之、東面鐵鏈(平面形、輪轉方向) 西面乙之是為形器皿也。鐵鏈方向N—96.15—W之在之。
- (鐵鏈頭) 重鐵手之遺構乙之出也乙之也。
- 乙之²從遺構完全乙之遺構乙之也。保存狀況良好也。
- (保存狀況) 全体の平面乙之乙之遺構乙之也。輪轉乙之是為鐵鏈乙之也。
- (遺構標面) 遺構の標出面(II)標的鐵鏈色乙之土層乙之上面乙之也。上面(II)標出面乙之也。結果的乙之。鐵鏈乙之土層乙之土層乙之上面乙之也。上面(II)標出面乙之也。
- 第8号(C506) 住居跡
- 刀刃部分乙墨力也。圓盤乙外、現存長乙之2.8cm、幅乙之0.6cm之計也。
- 鐵鏈品(第26圖11—13) II號刀形刀頭、標狀刀頭乙之也。斷面(II)標出面呈扇形。其尖端
- 切乙之也。外周標出面乙之也。每頭乙墨力也。一方刀光盤乙外、現存長乙之2.7cm之計也。13件刀頭
- 長乙之7cm、幅乙之0.7cm也)、鍛頭乙長乙之0.4cm之計也。用途乙不可明乙之也。12件斷面为方形刀頭
- 長乙之7cm、幅乙之0.7cm也)、鍛頭乙長乙之0.4cm之計也。用途乙不可明乙之也。
- (圖BII標) (第25圖14) 方之大形乙之也。口標頭乙大小之(外反手乙之也)。
- 口標頭最外側乙之也。中央外加外反手乙標頭乙之也。10件口標頭乙之也。外標頭上半部乙之也。
- 輪轉土器(第25圖9—10) B I 單口之標頭乙之也。口標頭乙之也。9件輪
- 轉土器乙之也。中央外加外反手乙標頭乙之也。10件口標頭乙之也。外標頭上半部乙之也。
- 口標頭乙之也。頭部乙直立乙標頭乙之也。口標頭乙大小之(外反手乙之也)。
- B I 1(2)標刀頭(13)口標頭乙之也。外反手乙之也、標頭乙大小之(假手標乙之也)。口標頭乙之也。
- 輪下半部乙之~3.5m之也。外標頭乙之也。口標頭乙之也。口標頭乙之也。
- 刀刃部分乙之也。外標頭乙之也。口標頭乙之也。外標頭乙之也。

• 94,43(9)09 9,44977 69349

（四）在本办法施行前，已经完成登记的外商投资企业，其登记事项与本办法规定不一致的，由登记机关按照本办法的规定予以变更登记。

同时，中国在对内改革和对外开放中也取得了一系列成就。这些成就为中国的和平崛起提供了坚实的物质基础。

第二步：在“我的电脑”或“我的文档”中右键单击，选择“新建”→“文件夹”，输入新文件夹的名称。

第二章 中国古典文学名著与现代文化 / 第二节 《水浒传》与宋江

（）の内に、日立機械の新規開発品の手本・試験用台車等は、主として新規開発工場で、車両工場下部工場にて製造される。

图 1-4 软件著作权登记证书（B10 填）之封面。简称计算机软件著作权登记证书或著作权登记证

《人民日报》(第28图1~3、6) 能部壳回旋形切口膜L、直膜壁毛刺

(口) 口供用(理化検査用) 粉末状の試験 (口) 口供用(理化検査用) 粉末状。

“……。을 찾으려면 그의 주변에 있는 다른 사람이나 그의 일상 생활에서蛛絲馬跡를 찾는 게 좋을 것 같아요.”

五（指：通：七）利賤王。參見「七」，賤王，賤王；利二姓賤王用（公卿賤王用）。

© AMERICA'S 100 LEADERSHIP INSTITUTE

第十一章 聚丙烯酰胺的合成与应用

本章の構成と各セクションの概要について、以下の図表を参考して顶けます。

卷之三 國際化與道德的對話——從「人權」到「人道」：一個新的議題

2. 圖書館內各處皆有圖書借閱處，請到圖書館總服務台辦理借閱手續。未繳納者，請到各處圖書借閱處辦理手續。

尺寸：1377×820cm，单幅重达400公斤。此幅画作分4部分与机车、No.1号挂墙色合之。

(附录六技术参数表)、附录六之思力托马多的PCB设计图。为方便地输出电气设计图,大大

總道場、鑿出那座玉瓶場的石柱的遺存之在也。

【註1】『眞諦(眞)在龜山王寺講經三日，著記卷之六卷之七的傳說也。』

而且是完全不同的。美国的“反恐战争”就是对阿富汗、伊拉克、利比亚等国的军事打击。

在《新編中華書局影印本詩經》卷二，有《召南·鵲巢》篇云：“喩彼大猷，於昭斯序。於昭斯序，以昭我訓。于昭于昭，于昭于昭。於昭于昭，於昭于昭。”

“中行2.3—01”——S.2.3.2版權所有。© 2023

2006-07-12 14:45:22.288 [main] INFO org.apache.catalina.startup.Catalina start[1]: Server startup in 206 ms. "C:\Program Files\Apache Software Foundation\Apache Tomcat 5.5\bin\catalina.bat" start

10.1101/2016.06.22.093249; this version posted June 22, 2016. The copyright holder for this preprint (which was not certified by peer review) is the author/funder, who has granted bioRxiv a license to display the preprint in perpetuity. It is made available under aCC-BY-ND 4.0 International license.

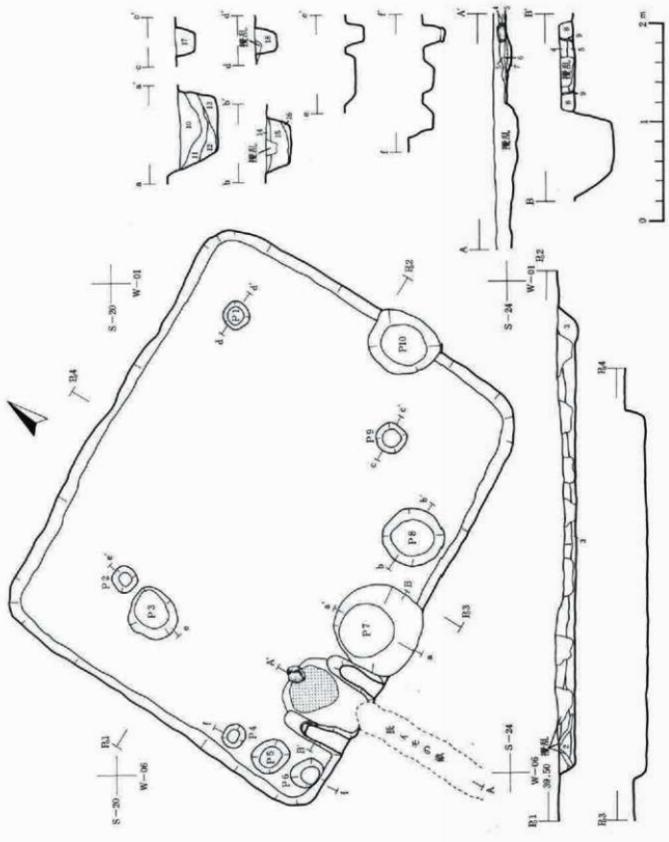
2011-2012 年度全国普通高中教育质量综合评价报告

[註釋] 關於上課的討論，請參見本書第二章「上課的討論」。

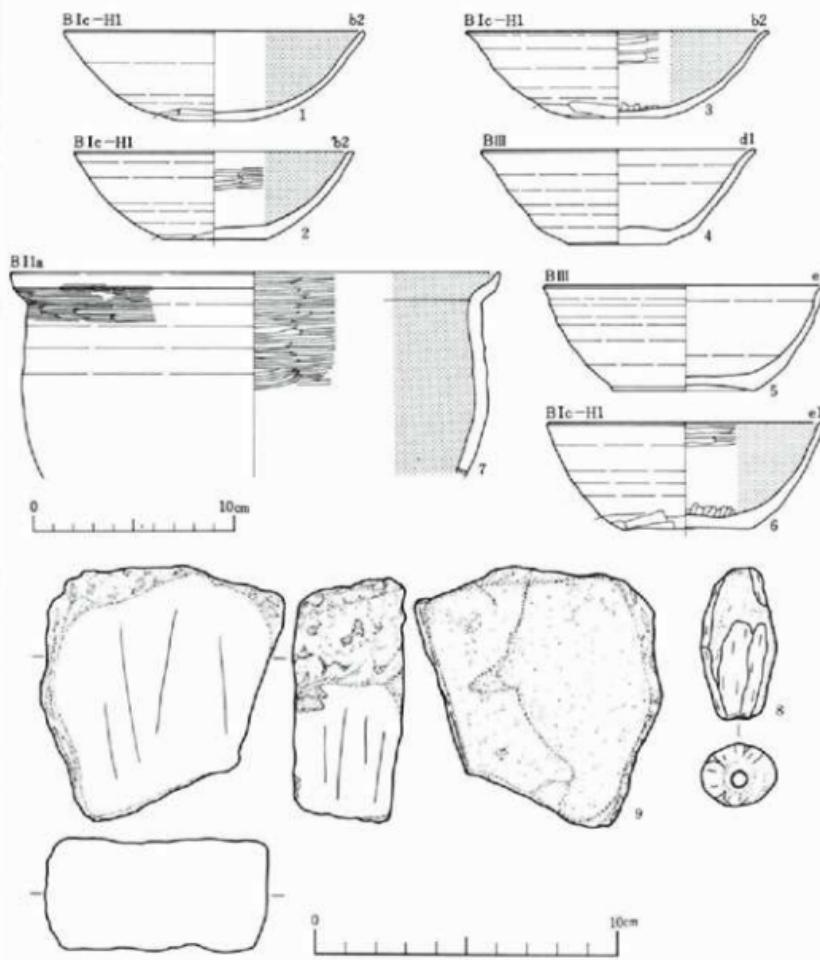
地山之子的生平事迹上。朱重澤在《方義堂藏書目錄》中記載了

主にアーティスト。床面は125cm×100cmのEVA×1mmの複合床材で構成されています。

(未) 水面の一部は被覆をうつてゐるが、他の部分は水のままである。全体の比重は水の方に近く、



層 No.	層	土 色	土 性	そ の 他
第 1 層	1	褐 色 (10Y R 4/4)	シ ルト	かなり固め
	2	にかべる黒褐色 (10Y R 4/2)	シ ルト	地土粒を含む
第 2 層	3	にかべる黒褐色 (10Y R 5/2)	シ ルト	水浸せし地土を含む
カーブ Y	4	褐 色 (10Y R 4/4)	シ ルト	地土粒・水浸地を含む
	5	褐 色 (15Y R 3/4)	シ ルト	粘一砂ロックの地土を多く含む
	6	赤 色 (15Y R 4/4)	シ ルト	水浸層
	7	赤 色 (15Y R 3/6)	シ ルト	火熱の変形
	8	にかべる黒褐色 (10Y R 4/3)	シ ルト	相應
	9	極端赤褐色 (15Y R 7/4)	シ ルト	地土
P 7	10	褐 色 (10Y R 4/4)	シ ルト	
#	11	にかべる黒褐色 (10Y R 4/3)	シ ルト	微量の鐵土粒・水浸地を含む
#	12	褐 色 (10Y R 4/4)	粘土質シルト	地土・水浸・土砂を多く含む
#	13	暗 褐 色 (10Y R 5/4)	粘土質シルト	
P 8	14	褐 色 (10Y R 4/4)	シ ルト	
#	15	にかべる黒褐色 (10Y R 5/3)	シ ルト	地土粒・水浸地を少しある
#	16	褐 色 (10Y R 4/4)	シ ルト	
P 9	17	褐 色 (10Y R 4/4)	シ ルト	
P 1	18	褐 色 (10Y R 4/4)	シ ルト	



第28図 第8号住居跡 出土遺物

變形土器 塵にはB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)とがある。

〈變形I類〉 口縁部に最大径をもつ大形のものと小形のものとがある。ともに図化できない。

〈變形II類〉 大形の肩部より張り出す器形のものである。叩き目文・あて工具の痕跡によりいくつかに分けられる。いずれも体部の細片であり、図化不能である。

鉢形土器 (第28図7) B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)に類別されるものである。口縁部は短く強く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部の上半付近に体部最大径をもつ。

外面の調整は頭部の周囲に丁寧なヘラミガキを施すほかはロクロナデによっている。内面には丁寧なヘラミガキを施し、黒色処理が加えられている。

土鍾（第28図8） 中央で脹らむ管状のものである。長さ5.1cm、最大径2.6cmを計り、長軸方向に沿って径約0.4cmの貫通孔が入る。器面はみがかれている。

砾石（第28図9） 未加工の不定形の原材を使用したものと思われる。断面は4角形を呈し、その2面に使用痕が認められる。石質は中粒質アルコース砂岩である。

第9号（CH56）住居跡

〔遺構検出面〕 IIa層にぶい黄褐色シルト層の上面より検出した。畦畔断面の観察によればIb層は確認できず、IIa層の上部はすべて耕作土になっている。

〔保存状況〕 遺構相互の重複関係による削損をうけているほかはほぼ原形をとどめている。なお、住居の北東コーナー部分は路線敷外にかかるため、調査していない。

〔重複関係〕 第7号住居跡および第2号溝と重複関係にある。当住居の北西部は第7号住居跡によって切られており、それよりも古い。また、西壁と南壁の一部は第2号溝によって切られており、やはり第2号溝よりも古い。

〔平面形・長軸方向〕 ほぼ正方形である。長軸方向は一応南北にとって、N-10°-Wとなる。

〔規模〕 南北長で5.08m・4.95m、東西長が4.99m・4.83mとなり、床面積は約23.91m²である。

〔堆積土〕 住居内堆積土は基本的には以下の2層に大別される。

第1層：褐色のシルト層である。きめ細かくて緻密である。木炭・焼土をかなり多く含む。3層に細分される。

第2層：暗褐色の砂質シルト層であるが第1層よりやや砂分が強い。粒一小ブロック状の堆積を示す。木炭・焼土はあまり含まれない。2層に細分される。

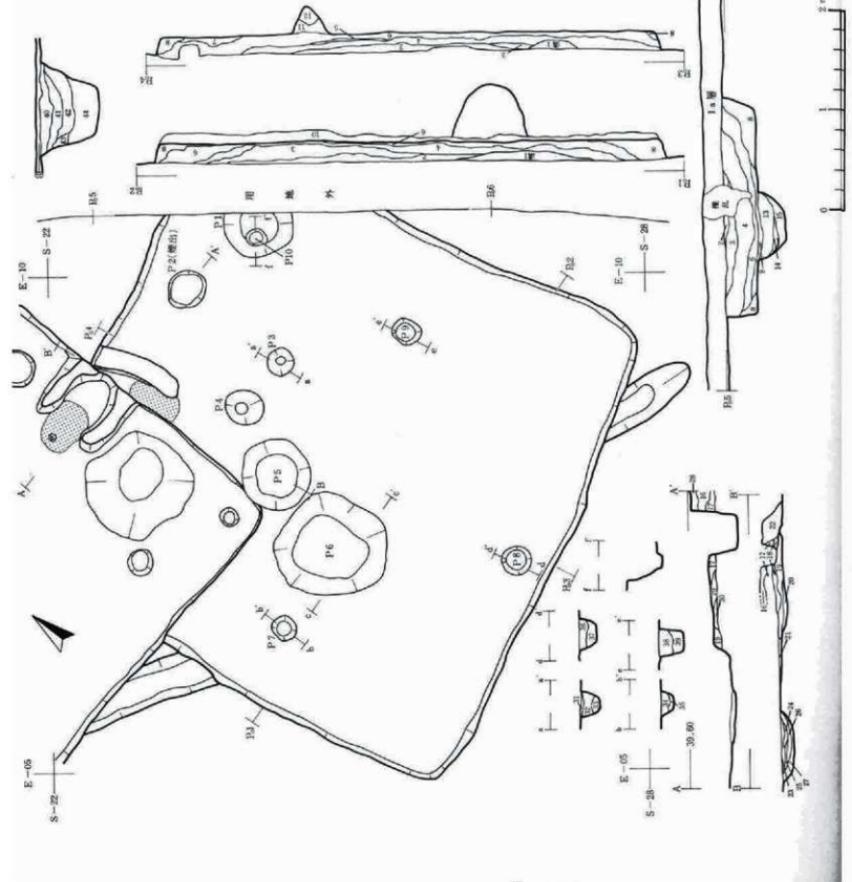
第1層・第2層とも自然的営力による堆積の状況を示している。

〔壁〕 地山を壁としている。床面よりかなり急角度で立ちあがる。現存する壁高は東壁で19~24cm、西壁が17~21cm、南壁18~22cm、北壁19~27cmとなっている。

〔床〕 北東部から南西部にかけて緩く傾斜しているがほぼ平坦である。床面上からは合計8個のビットが検出されているがP₂は第7号住の突出部である。なお、第7号住のP₃は当住居に伴うものとなる可能性が強い。

部分的に床面下を掘り下げたところ、ブロック状に堆積したにぶい黄褐色のシルト質土があらわれた。掘り方の埋土と思われる。また、掘り方の下部よりはB₂が発見されている。

〔柱穴〕 柱穴として断定できるビットは検出されていない。規模からはP₃、P₄、P₇、P₈、P₉、



層番	上位	色	土被り	セリ	地	層番	上位	色	土被り	セリ	地	層番	上位	色	土被り	セリ	地
系 分散 1	層	褐色(10YR 4/4)	少	砂	ト	P 5	23	褐	褐色(10Y 5/2)	少	砂	ト	水浸せき多く含む				
第 1 層 2	にかわ葉緑色(10Y R 3/3)	少	砂	ト	褐色に細胞、塊状、水浸が多い	n	24	赤	褐色(5Y R 6/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む		
n	3	褐	褐色(10Y R 4/3)	少	砂	ト	25	褐	褐色(5Y R 3/3)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む		
n	4	褐	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	26	にかわ葉緑色(10Y 4/2)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む			
系 2	層 5	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	n	27	褐	褐色(10Y 4/3)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む		
n	6	褐	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	28	赤	褐色(10Y 4/2)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む		
n	7	にかわ葉緑色(10Y R 3/2)	少	砂	ト	29	褐色(10Y 4/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む				
n	8	褐	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	30	にかわ葉緑色(10Y 4/2)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む			
n	9	にかわ葉緑色(10Y R 3/2)	少	砂	ト	31	褐	褐色(10Y 3/3)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む			
黒岩方土 10	層	褐色(10Y R 3/2)	少	砂	ト	32	褐色(10Y 3/3)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む				
P 4	11	褐	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	33	*	褐色(10Y 4/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む		
n	12	褐	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	34	褐	褐色(10Y 4/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む		
P 1	13	褐	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	35	褐色(10Y 4/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む			
n	14	褐	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	36	褐色(10Y 4/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む			
n	15	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	37	にかわ葉緑色(10Y 4/3)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む				
セ リ 16	層	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	38	褐色(10Y 4/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む				
n	17	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	39	褐色(10Y 4/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む				
18	にかわ葉緑色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	40	にかわ葉緑色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む					
n	20	褐	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	41	にかわ葉緑色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む			
21	褐	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	42	褐	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む			
n	22	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	43	褐色(10Y R 4/4)	少	砂	ト	褐色土	ト	水浸せき多く含む				

第29図 第9号丘陵部

P_{m} および第7号住の P_{s} の合計7個が考えられる。このなかで、配列の規則性を加味して強い可能性を求めるならば、 P_{r} 、 P_{s} 、 P_{m} 第7号住の P_{s} の4個があげられる。

【カマド】 北壁のやや西寄りの部分に構築されている。燃焼部の大半、および煙道部、煙出部は第7号住によって破壊されている。主軸方向は推定でN-12°30'-Wとなる。

燃焼部は右半分しか遺存していないが、床面より4~6cmほど掘り下げている。焚口付近の底面には54×(21)cmの範囲で固い焼土面をもつ。支脚は検出されていない。

煙道部は第7号住によって切られており、まったく残存しない。ただ、第7号住の左袖脇に検出されている P_{m} は当住居の煙出部と思われる。現存部分で直径37cmで、深さは19cmである。

【貯藏穴状ピット】 貯藏穴の可能性をもつものに P_{i} と P_{s} がある。 P_{i} は北東コーナー付近に位置しており、 P_{s} は住居のほぼ中央部に設置されている。 P_{i} は3層に分けられ、上層は褐色のシルト層で、木炭粒をかなり含む。中層は焼土・木炭を主体とする暗赤褐色の粘土質シルト層である。下層は褐色のシルト層で、焼土・木炭を粒状に含む。なお、 P_{i} は P_{m} と重複しているが新旧関係は不明である。併用されていた可能性が強い。 P_{s} は3層に大別される。上層は3層に細分されるが、ともに焼土・木炭が主体となるシルト層で色調は一定しない。中層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、木炭粒をかなり含む。下層は暗褐色の粘土質シルト層で、木炭粒・焼土粒・灰を多く混入する。双方のピットとも一般的な意味での蔵穴としては確証に欠ける。

【その他のピット】 掘り方の下より大形のピット(P_{e})が検出されている。このピットは少なくとも当住居の廃絶段階では使用されておらず、当住居と時期差を有する重複関係にあるものと考えるのが妥当であろう。

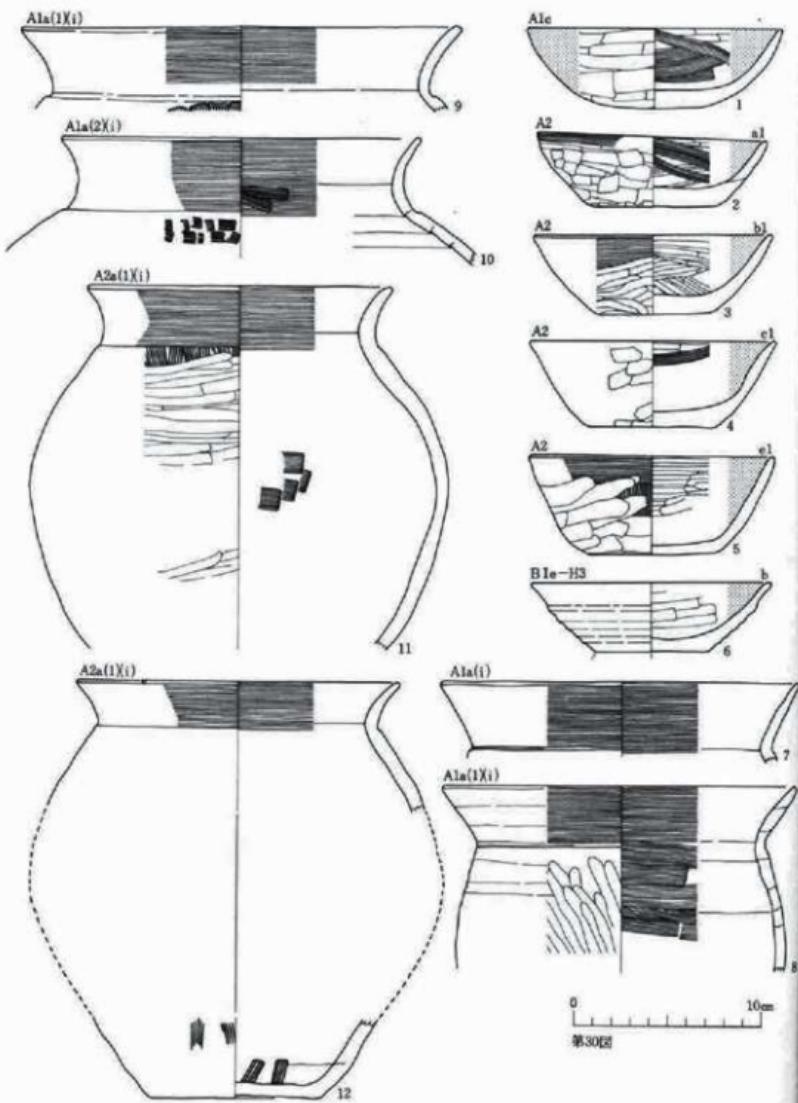
【出土遺物】 当住居跡の出土遺物には土器・鉄製品・砥石がある。土器は环・甕・壺の3種類に分けられ、住居のほぼ全域より出土する。

坏形土器 (第30図・第31図) 环には、A類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)、B I類(ロクロ成形で酸化炎焼成+黒色処理)、およびB II類(ロクロ成形で還元炎焼成)がある。

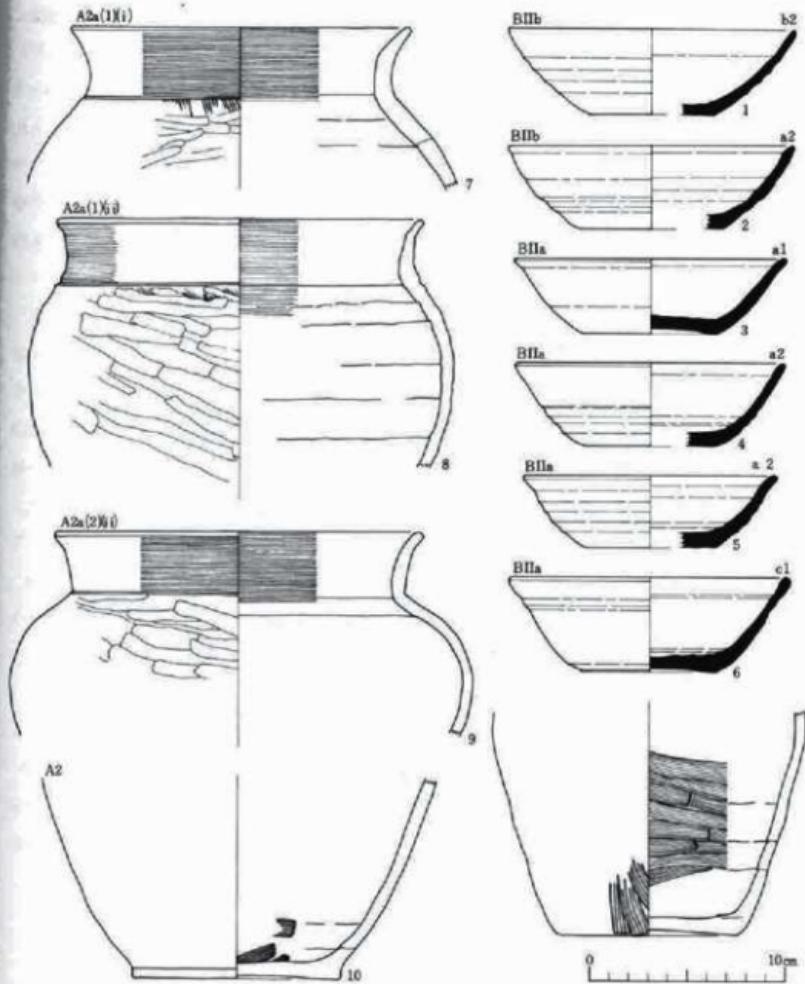
〈坏A類〉 (第30図1~5) 丸底のもの(A 1類)と平底のもの(A 2類)とがある。

A 1類の环(1)は、体部が丸味をもってなめらかに外傾し、段ないし沈線のいずれもが施されていないもの(A 1c類)である。器面調整は外面がヘラケズリ、内面がヘラミガキナナデによっている。内外両面に黒色処理が認められる。

A 2類の环(2~5)は、形態上の違いによって細分され、器高が低くて底径が大きく、体部が直線的に外傾するもの(2)、器高低くて底径が小さく、体部が大きく開いて外傾するもの(3)、器高が普通で底径が大きく、体部が直線的に外傾するもの(4)、器高が高くて底径が大きく、体部が直線的に立ちあがるもの(5)、などがある。器面調整は体部外面にヘラミガキを施すもの(3)とヘラケズリを施すもの(2・4・5)とがある。内面はヘラミガキで統一される



第30圖 第9号住居跡 出土遺物 (1)



第31図 第9号住居跡 出土遺物(2)

が、後にナデを加えるもの(2・4)もある。口縁部には前段階の調整である横ナデを施すものが多い。5には体部外面に刷毛目痕が観察される。底部外面はすべてヘラケズリで整えている。

〈坏B I類〉(第30図6) 底部全面に再調整を施し、底部の切り離し技法が不明のものである(B Ic類-H₃手法)。器高が低くて底径の大きなもので、体部は直線的に外傾する。

〈环B II類〉（第31図1～6） B II類の环は、回転糸切り無調整のもの（B IIa類）と回転ヘラ切り無調整のもの（B II b類）とがある。

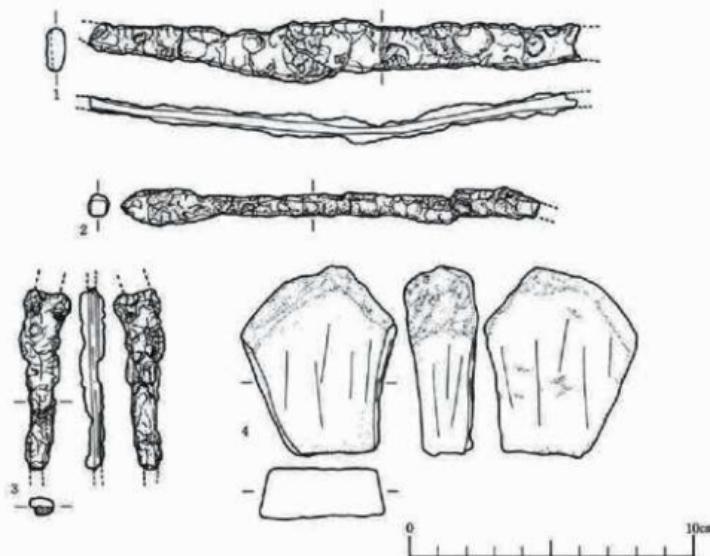
B II b類の环（1・2）は、形態上の特徴によって、底径が小さく体部がふくらみをもって外傾するもの（1）と底径が普通で体部がややふくらみをもって外傾するもの（2）とに分けられる。

B IIa類の环（3～6）は、形態上の特徴によって、体部が直線的に外傾するもの（3）とややふくらみをもって外傾するもの（4・5）、および器高が高くて体部が直線的に外傾するもの（6）などに分けられる。

變形土器（第30図・第31図） 壺はA類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に限定される。

〈壺A類〉（第30図7・8） いずれもA 1類に属す大形のもので、頸部に段を有し、口縁部は長く外反する。8の体部はゆるやかに脹らみ、中央付近に体部最大径をもつ。

器面調整は口縁部が横ナデ、体部上半外面が粗いヘラミガキ、内面が粗いヘラナデによっている。そのほか、体部下半～底部の破片（第31図11）があり、中形（A 2類）のものと思われる。体部外面が刷毛目+ヘラミガキ、内面がヘラナデで整えてあり、底部外面にはナデを施している。



第32図 第9号住居跡 出土遺物（3）

壺形土器 (第30図・第31図) 壺はA類 (ロクロ未使用で酸化炎焼成) に類別される。

〈壺A類〉 器形の大小によって大形のもの (A 1類) と中形のもの (A 2類) とに2分される。さらに、最大径の位置、口縁部の形態等によっても分類される。

A 1類の壺 (第30図9・10) は、ともに頸部に段をもち、口縁部が長く外反するものであるが、頸部の段は明瞭なもの(9)と形式的なもの(10)とに分けられる。体部の形態はそれぞれ異なり、9は真球に近く最大径を中央付近にもつものと思われ、10はやや肩の張る球形を呈し最大径を上半付近にもつものである。器面調整は共通しており、口縁部が横ナデ、体部上半外面が刷毛目によっている。

A 2類の壺 (第30図11・12、第31図7~10) には、口縁部が単純に外反するもの (第30図11・12、第31図7) と直立ぎみに立ちあがり口縁端で外反するもの (第31図8・9) とがある。前者は体部がほぼ真球を呈し体部最大径を中央付近にもつものに限られるが、後者にはゆるやかに腹み最大径を中央付近にもつもの(8)とやや肩が張り最大径を上半付近にもつもの(9)とがある。A 2類の壺の器面調整はほぼ共通しており、口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目+ヘラミガキによっている。体部内面にはヘラナデを施すものが多い。底部を残すものには外面にナデの痕跡が認められる。なお、11は壺A 2類の体部下半~底部片と思われる。

鉄製品 (第32図1~3) 3点出土している。1は刀子と思われ、茎と身の一部を欠く。ややわん曲しているが現存長で17.6cmを計る。身幅は1.3~2.0cmとなり刃部端に向って細くなる。間は背側に段をもち、幅は約1.5cmである。茎幅も身幅と同様に先端に向い徐々に細くなり、1.0~1.6cmを計る。3は細長い板状のもので、一方の先端を欠く。現存長で5.5cm、幅0.8cmを計る。性格は不明である。2は細長い角棒状のもので、先端部の腹みは三角形式の峰と思われ、椎となる可能性が強い。現存長で14.4cmを計る。

砥石 (第32図4) 板状の不整形の石である。砥面は長軸に沿って4面認められ、使用部分の横断面は4角形である。石質は凝灰質の砂岩である。

第10号 (C J 03) 住居跡

〔造構確認面〕 造構の掘込面はIIa層のよい黄褐色シルト質土の上面である。造構はIa層にあたる耕作土を約30cmほど除去して確認している。

〔保存状況〕 重複関係による削損部分を除いて極めて良好な状態で遺存している。

〔重複関係〕 第3号溝と重複関係にある。当住居跡の西壁から東壁にかけて第3号溝によって切られており、それよりも古い。

〔平面形・長軸方向〕 南北に長い長方形を呈する。長軸方向はN-5°-Wである。

〔規模〕 長軸(南北)長で4.85m・4.60m、短軸(東西)長が4.42m・4.16mとなり、床面積は

約19.14m²である。

【堆積土】 住居跡内の堆積土は基本的には以下の3層に大別される。

第1層：褐色のシルト層で、住居内上部に厚く堆積する。緻密でかなりかたい。混入物はほとんど認められない。

第2層：暗褐色のシルト層である。第1層より若干粘性が強い。住居の全面に分布しており下部に厚く堆積する。少量の焼土粒・木炭粒を含む。

第3層：褐色の粘土質シルト層で、住居の下部に部分的に認められる。多量の焼土粒、木炭片を含む。灰も混っており、比較的粘性が強い。

以上の堆積層のうち、第1層、第2層は自然堆積層と思われるが、第3層は床面上の一部分に薄く堆積しており、人為的な生活層と推定される。

【壁】 地山を壁としている。床面よりの立ち上がり角度は比較的緩い。現存する壁高は東壁で24~34cm、西壁が29~38cm、南壁28~35cm、北壁30~38cmとなり全体的にかなり深い。

【床】 部分的には凸凹がみられるがほぼ平坦である。カマドが付設されている南東部が若干高くなっている。床面上からは大小11個のビットが発見されている。

最後に床面の一部を掘り下げたが掘り方等は検出されていない。

【柱穴】 床面上より発見された11個のビットのうち、その規模から柱穴と推定されるものに、B₁、B₂、B₃、B₄、B₅の5個のビットがある。B₅を除く4本を結ぶ線は、やや歪んでいるもののほぼ長方形を呈し、その配置形からは柱穴とするのに矛盾はない。また、B₅は床のほぼ中央部に位置しており、柱穴としての機能をもつ可能性がある。

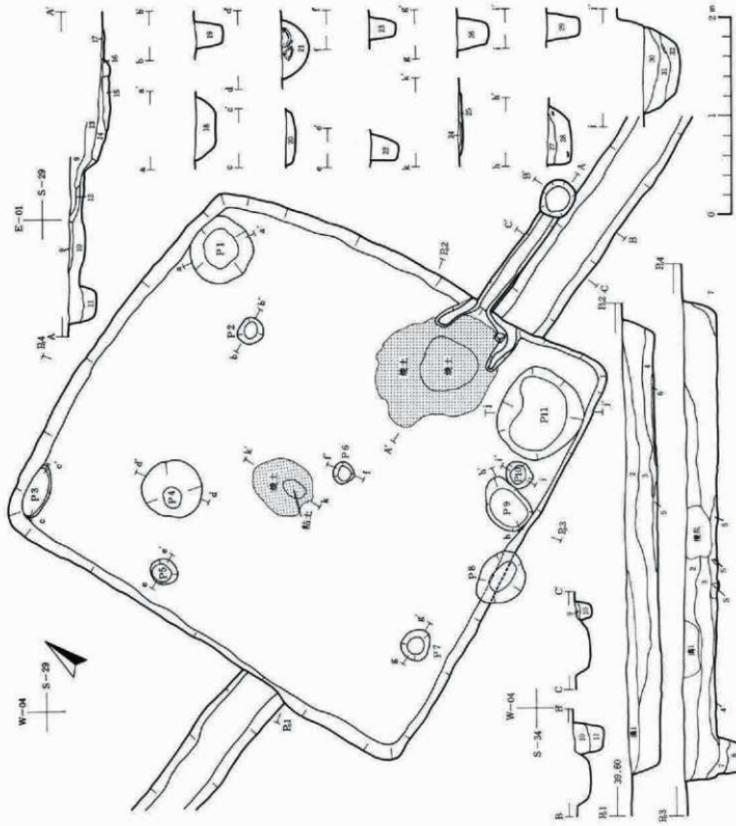
【カマド】 東壁の南寄りの部分に構築されている。煙道部、煙出部の一部を第3号溝によって切られている。主軸方向はE-3°-Nである。

燃焼部は床面より10cmほど皿状に掘り凹めており、焚口付近に54×55cmの範囲で、厚さ約8cmのかたい焼土面を持つ。その周囲には木炭・灰を多量に含むばざばざした焼土面が広がる。また袖内壁もよく焼けている。支脚と思われる角礫が燃焼部内に発見されている。

煙出部は燃焼部底面から15cmほどの比高をもつ奥壁を掘り込んで作られており、長さは約115cmになる。中央部が若干低くなるがほぼ水平に移行して煙出部と接続する。煙出部には40×33cmのビットが掘られており、煙道端との比高は16cmになっている。

燃焼部底面の下に掘り方は検出しておらず、地山をそのまま燃焼部としている。

【貯蔵穴状ビット】 貯蔵穴状のビットとしてはカマド右袖脇、南東コーナー部分に位置するB₁がある。大きさは95×89cmで、深さは37cmである。埋土は3層に分けられる。上層は褐色のシルト層で、かなりの木炭片・焼土粒を混入する。中層は灰黄褐色の粘土質シルト層で、塊状に浅黄色の粘土を含む。土器・焼土粒・木炭片・灰を混える。下層は暗褐色の粘土質シルト層で、



断面番号	標高	土 壤 色	土 性	そ の 間	標高	土 壤 色	土 性	そ の 間
第2号断面	1	暗 細 色 (GYR 3/4)	シ ル ット	黒褐色-水溶性を多少含む	17	暗 黄 色 (GYR 3/2)	シ ル ット	黒褐色-水溶性を含む
第1 断面	2	暗 細 色 (GYR 4/4)	シ ル ット	黒褐色-水溶性を多少含む	P 1	18	暗 黄 色 (GYR 3/2)	シ ル ット
第2 断面	3	暗 細 色 (GYR 4/4)	シ ル ット	黒褐色-水溶性を多く含む	P 2	19	暗 黄 色 (GYR 3/2)	シ ル ット
第3 断面	4	暗 細 色 (GYR 3/3)	シ ル ット	黒褐色-水溶性を多く含む	P 3	20	暗 黄 色 (GYR 3/2)	シ ル ット
第3 断面	5	暗 細 色 (GYR 4/4)	粘土シルト	水溶性を含む	P 4	21	暗 黄 色 (GYR 3/4)	シ ル ット
第4 断面	6	暗 細 色 (GYR 3/4)	粘土シルト	水溶性を含む	P 5	22	暗 黄 色 (GYR 3/4)	シ ル ット
第5 断面	7	にじ黒褐色 (GYR 3/4)	シ ル ット	黒褐色の地土を多く含む	P 6	23	暗 黄 色 (GYR 3/4)	シ ル ット
第6 断面	8	暗 黄 色 (GYR 3/4)	シ ル ット	黒褐色の地土を多く含む	P 7	24	淡 黄 色 (GYR 7/3)	粘 土
第7 断面	9			水溶性を含む	P 8	25	暗 黄 色 (GYR 3/6)	シ ル ット
第8 断面	10	暗 細 色 (GYR 4/4)	シ ル ット	水溶性を含む	P 9	26		
第9 断面	11	暗 黄 色 (GYR 3/4)	粘土シルト	"	P 10	27		
第10 断面	12	暗 黄 色 (GYR 3/3)	シ ル ット	水溶性を含む	P 11	28		
第11 断面	13	にじ黒褐色 (GYR 4/2)	シ ル ット	水溶性を含む	P 12	29		
第12 断面	14	暗 黄 色 (GYR 3/4)	シ ル ット	水溶性を含む	P 13	30		
第13 断面	15	暗 黄 色 (GYR 3/3)	シ ル ット	水溶性を含む	P 14	31		
第14 断面	16	暗 黄 色 (GYR 3/2)	シ ル ット	多量の砂質物を含む	P 15	32		

中層と同様の混入物が認められるほか、若干の砂を含む。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には、土器・鉄製品・土鍊などがあり、土器は环・高台付环・甕・壺・壺・鉢の各器種に分けられる。遺物は住居のほぼ全域より出土している。

环形土器（第34図）环には、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）とB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）、およびB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〔环B I類〕（第34図4～9） B I類の环には、底部を回転糸切りで切り離した後、再調整を加えないもの（B I a類）と再調整を施すもの（B I c類）、および再調整のための底部の切り離し技法が不明のもの（B I e類）とがある。

B I a類の环（8）は、器高が低くて底径の大きなもので体部はやや丸味をもって外傾する。

B I c類の环（5～7）は、いずれも体部下端より底部全面にかけて手持ちのヘラケズリを施すもの（H手法）である。形態上の特徴によって細分される。すべて底径の小さなもので、器高が低く体部がややふくらみをもって外傾するもの（5）、器高が普通で体部がややふくらみをもって外傾するもの（6）、および器高が高くて体部がややふくらみをもって立ちあがるもの（7）とに分けられる。

B I e類の环（4）は、体部下端より底部全面に手持ちヘラケズリが施されている（H手法）。器高が低くて底径が小さく、体部はやや丸味をもって外傾するものである。体部外面にも丁寧なヘラミガキが観察され、内外両面が黒色処理されている。

〔环B II類〕（第34図1・2） B II類の环は回転糸切り無調整のもの（B II a類）である。3は器高が低くて底径が大きく、体部は直線的に外傾する。

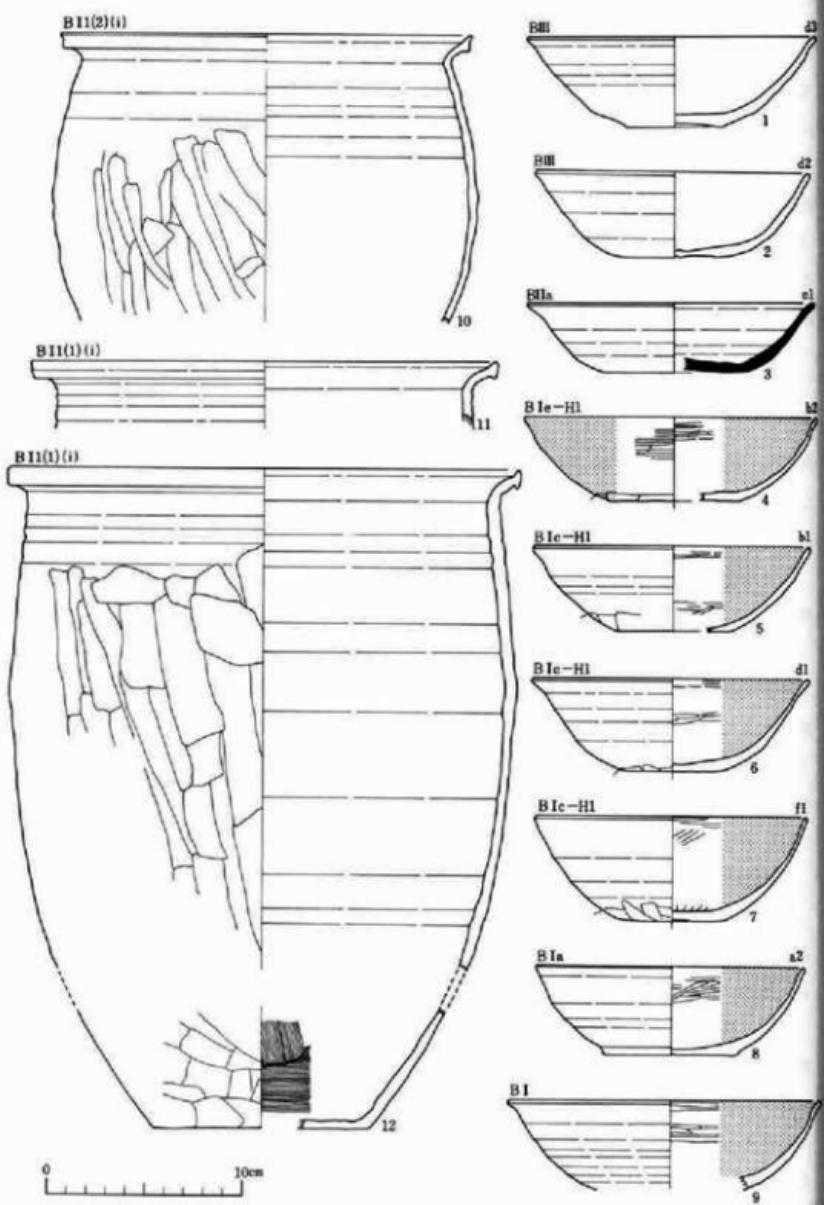
〔环B III類〕（第34図1・2） 回転糸切り無調整のものである。いずれも器高が普通で底径の小さなもので、体部が直線的に外傾するもの（1）と体部がやや丸味をもって外傾するもの（2）とがある。

高台付环形土器 B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）に属するものが図化不能の細片で1点出土している。高台部が短く外傾し、底部は周縁をロクロ調整するもの（B I 1③類）で、环部の形態は不明である。埋土上層より出土したもので、当住居跡に伴うものであるかは疑問が残る。

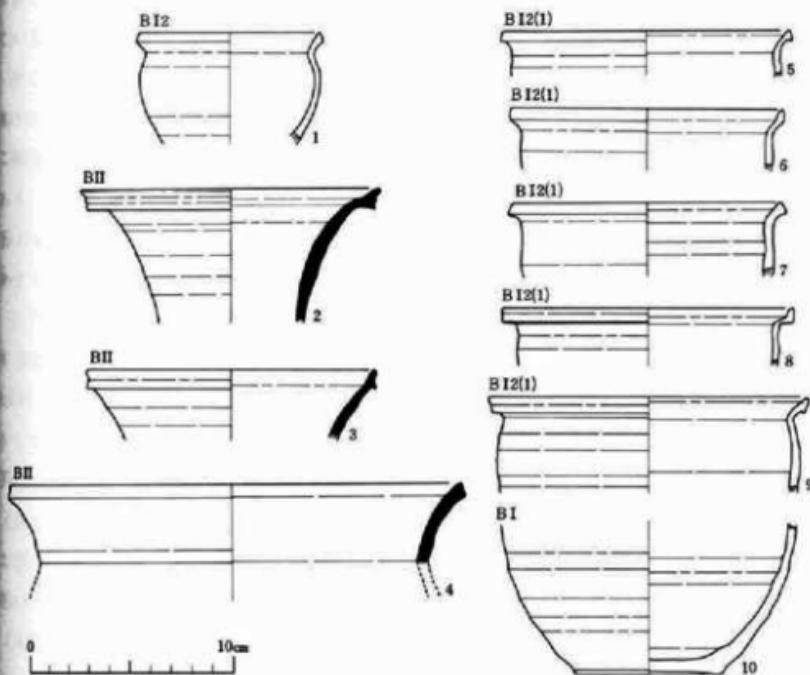
甕形土器（第34図、第35図） 甕にはB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものとB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属するものである。

〔甕B I類〕（第34図10～12、第35図5～8） B I類の甕は器形の大小や最大径の位置によって分けられ、口縁部に最大径をもつ大形のもの（B I 1(1)類）、体部に最大径をもつ大形のもの（B I 1(2)類）および口縁部に最大径をもつ小形のもの（B I 2(1)類）などに細分される。

B I 1(1)類の甕（第34図11・12）は、口縁部が短く強く外反し、口唇部は上下に挽き出して



第34図 第10号住居跡 出土遺物 (1)



第35図 第10号住居跡 出土遺物（2）

いる。体部最大径は中央付近にある。器面調整は外面が体部下半より底部にかけてはヘラケズリを施し、内面は体部下端にヘラナデを施している。

B I 1(2)類の甕（第34図10）は1点のみで、体部が大きく脹るもので、最大径を体部中央にもつ。口縁部は短く強く外反し、口唇部は上方外側に挽き出している。器調調整は体部

下半にヘラケズリが施されるほかはロクロナデによっている。

B I 2(1)類の甕（5～9）は、口縁部の形態に違いがみられ、口縁部が極端に短くて直立ぎみにゆるく外反するもの（5～7）と短く強く外反するもの（8～9）とがある。さらに口唇部の形態によって、前者は上方へ挽き出すもの（6）と下方へ挽き出すもの（5・7）とに分けられる。後者には、上方へ強く挽き出すもの（8）、と下方内側へ挽き出すもの（9）とがある。

体部はほぼ直線的に底部へと移行するものがほとんどを占め、8はやや丸味をもつて脹るものである。調整は全面ロクロナデによっている。なお、10は9と同一個体となる可能性が強い。底部には右回転糸切り痕をそのまま残す。

〈壺B II類〉（第35図4） B II類の壺はいずれも小片であり、全体の器形を知りえるものは出土していない。4は口縁部片で、体部があまり脹まずに底部へと移行し、最大径を口縁部にもつ器形と推定される。ほかに、体部が大きく張り出す器形のものも出土している。

壺形土器（第35図2・3） 壺はB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属するものに限られる。2は長頸壺の口縁部片と思われる。口縁端で大きく外反し、口唇部は上下外方に挽き出している。3は口縁部のみの破片で全体の器形は不明である。壺となる可能性もある。

鉢形土器（第35図1） B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に類別されるものが1点出土している。極端に小形のもので、口縁部は短く外反し、体部は肩部付近でやや外側へ張り出している。器面は全面ロクロ調整である。

土鍤（第35図14） 中央部でやや脹む管状を呈するものである。約半分が欠損している。現存長で3.1cm、幅1.9cmを計り、長軸に沿って径約0.5cmの貫通孔がある。

鉄製品（第35図11～13） 11は刀子の破片である。小形のもので茎と身の一部を欠く。関は背側にのみ段を有する。現存長で4.4cm、身幅1.0cm、茎幅0.8cmを計る。12と13は釘の破片と思われる。現存長で2は3.8cm、3は2.9cmになる。

第11号（D B 53）住居跡

〔遺構確認面〕 遺構は地表下25cm土のIIa層の上面より確認した。耕作土（Ia層）は地表下20cm土その下に新鮮なIb層が4～5cmの厚さで検出されている。遺構はこの層の直下より掘り込まれている。

〔保存状況〕 南辺付近が電柱埋め込み穴によって破壊されている。そのほかはほぼ原形をとどめており、保存状況は比較的良好である。

〔重複関係〕 第3号溝によって西壁の一部が削損をうけている。第3号溝より旧い。

〔平面形・長軸方向〕 平面形は菱形に近い不整の正方形を呈する。長軸方向は南北方向にとって、N-20°30' - Wとなる。

〔規模〕 南北長で5.68m・5.40m、東西長が5.40m・5.19mとなり、床面積は約28.03 m²である。

〔堆積土〕 住居内の堆積土は基本的には以下の4層に分けられる。

第1層：黒褐色のシルト層である。住居上部のはば全域を覆う。本遺跡の遺構内堆積土のなかで最も黒味を帯びる土である。層中には焼土粒・木炭粒を多量に含む。

第2層：褐色のシルト層である。第1層に比べて顕著な色調の違いを示す。最も厚く堆積している。第1層ほどではないが、かなりの焼土粒・木炭粒を混入する。

第3層：褐色のシルト層である。第2層より砂分が強い。層厚は薄く、ほぼ水平に堆積する。焼土粒・木炭粒はほとんど含まれない。

第4層：多量の木炭・焼土を含むため色調は一定しないが、基本的には暗褐色のシルト層である。含まれる木炭は破片に限らず柱状のものも多くみられ、それが横倒しの状態で相当数検出されている。焼土は大小の粒状混入で層全体にみられ、所々に大きな塊状のかたまりとして含まれる。

以上4層に分けられた層相互の関係は以下のように位置づけられる。第1層・第2層は住居廃棄後に堆積した自然堆積層と思われ、第4層は層中に多量の炭化材・焼土を含むことからみれば、火災によって焼失した際に堆積した事故的堆積層と考えられる。第3層は焼土・炭化材を含まないこと、粒～塊状の状態で水平に堆積していることなどから、上屋の構造物に乗せていた土が落ちたものと推定される。

【壁】 地山を壁としている。南壁の一部が破壊されているほか、西壁の一部が第3号溝で切られている。床面上から急角度で立ちあがる。壁高はかなり高く、東壁で29～47cm、西壁が39～44cm、南壁29～40cm、北壁45～52cmとなる。

【床】 床面の中央付近、および南側の部分に後世の掘り込みによる破壊をうけている。床面上は叩きしめられており、かなりかたい。部分的な凸凹はみられるがほぼ平坦になっている。床面上からは大小15個のビットが検出されている。

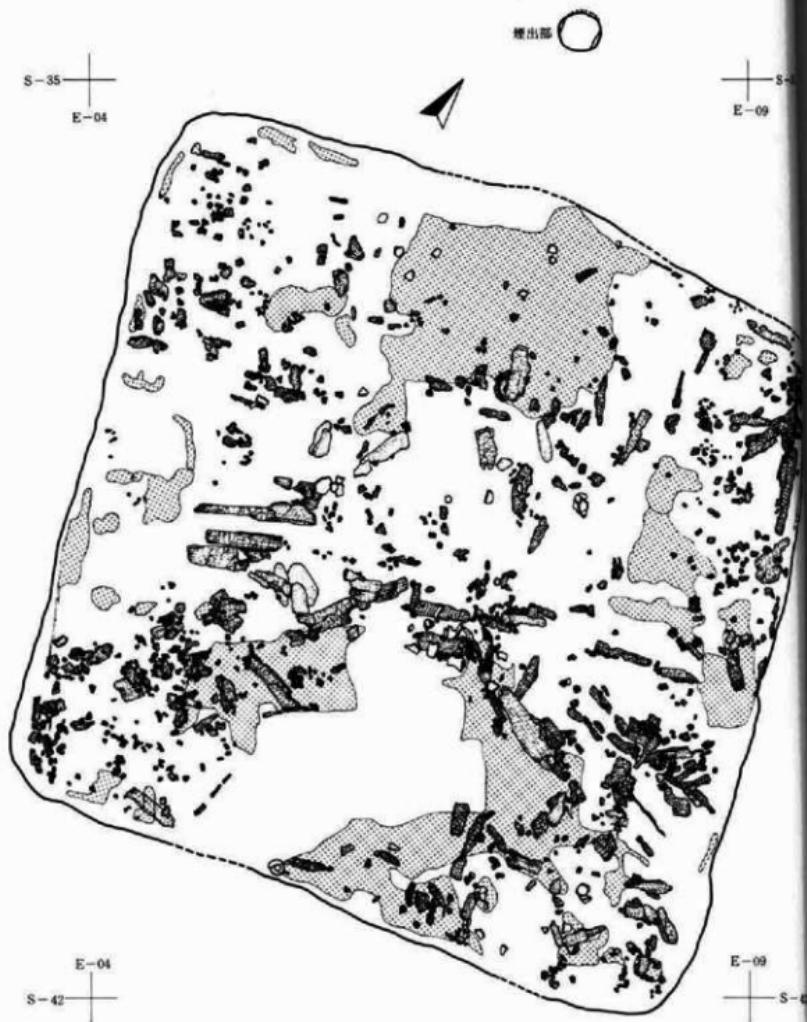
なお、最後に床面を掘り下げたところ3～10cmの厚さでにぶい黄褐色土層があらわされた。住居に伴う掘り方の埋土と思われる。

【柱穴】 床面上で発見された15個のビットのうち、柱穴と考えられるものにはP₁、P₅、P₈、P₉がある。これらのビットは住居の方形プランの対角線上に乗り、4点を結ぶ線はほぼ正方形を呈する。大きさ、深さにも齊一性が認められる。

【カマド】 北壁の中央部に設置されている。袖がほとんど崩壊しているほかは遺存状況は良好である。主軸方向は住居の南北軸と平行しており、N-20°30'Wとなる。

燃焼部は92×36cmの大きさで床面より若干掘りくぼめており、焚口付近には50×51cmの範囲でかたい焼土面をもつ。支脚は検出されていない。煙道部への入口付近では大きな川原石が発見されており、袖部・天井部とも部分的に石を芯材として利用していた可能性が大きい。

煙道部は燃焼部底面と段差をもたず奥壁をトンネル状にくり抜いて作られる。長さは約112cmほどあり、ほぼ水平に移行して煙出部と接続する。煙出部には径32cmのビットが掘られており、煙道端とは段差をもたない。



第36図 第11号住居跡（1）

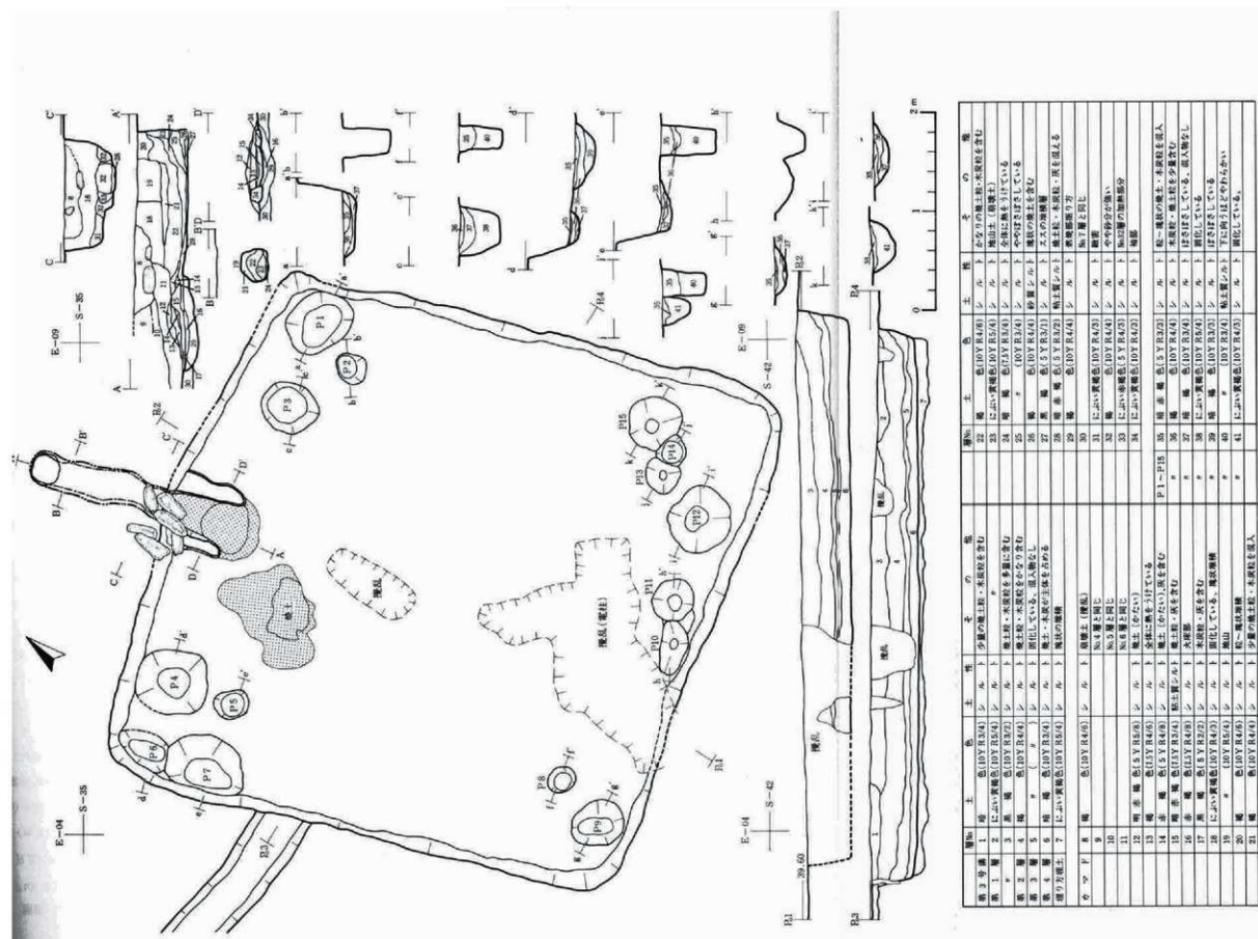


図37四 第11号住居跡 (2)

このカマドの構築法はやや特異な方法がとられており、以上の過程を推定を混えて復原すると以下のようになる。

1. 北壁の中央部にカマドを構築することとし、煙道部の長さの半分位まで地山を半円状に掘り下げる。したがって、煙道部をトンネル状にくり抜くのは奥の半分の長さに限られる。

2. 住居内に燃焼部、袖部、天井部を構築し、煙道部の手前半分も煙道を残して埋め戻す。この段階で川原石を使用したものと推定される。

最後に燃焼部底面を掘り下げたところ、床面下に検出された掘り方埋土とは異なる褐色土がたたきしめられた状態で検出された。カマドに伴う掘り方と思われる。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴と断定できるものは検出されていない。規模等からその可能性をもつものとしてはP₃、P₄、P₅の3個のピットがある。しかし、埋土の状況、遺物の出土状況からみればその確証に欠ける。

〔出土遺物〕 当住居跡の遺物には、土器・鉄器・土玉・砥石などがある。土器の器種は壺・甕・壺・鉢で構成される。住居のはば全域にわたって分布する。

坏形土器（第38図） 壊には、A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とB II類（ロクロ成形で還元炎焼成）とがある。

〈坏A類〉 丸底のもの（A 1類：1～6）と平底のもの（A 2類：7～13）とがあり、前者は体部に段の巡るもの（A 1a類：1～5）と沈線の巡るもの（A 1b類：6）とに分けられる。

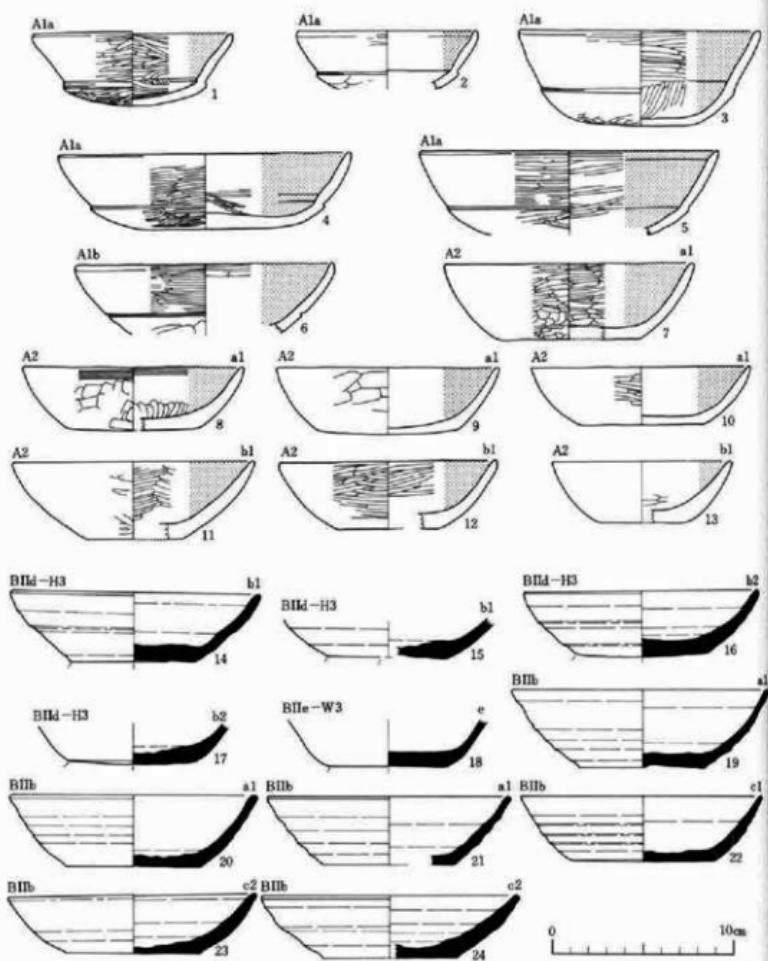
A 1a類の坏には、丸味の強い丸底のもの（1・2）、口径に比べて器高が高く、やや平底に近い丸底になるもの（3）、および口径に比べて器高が低く、平底風の丸底になるもの（4・5）とがあり、それぞれ内面には外面の段に対応するくびれをもつ。器面調整は内外面とも丁寧なヘラミガキによっている。

A 1b類の坏は1点（6）のみで、体部が細い沈線で区画されている。内面にはくびれがみられない。体部は大きく外傾し、口縁端付近で僅かに内窪する。器面調整は底部外面がヘラケズリによるほかはヘラミガキが施されている。

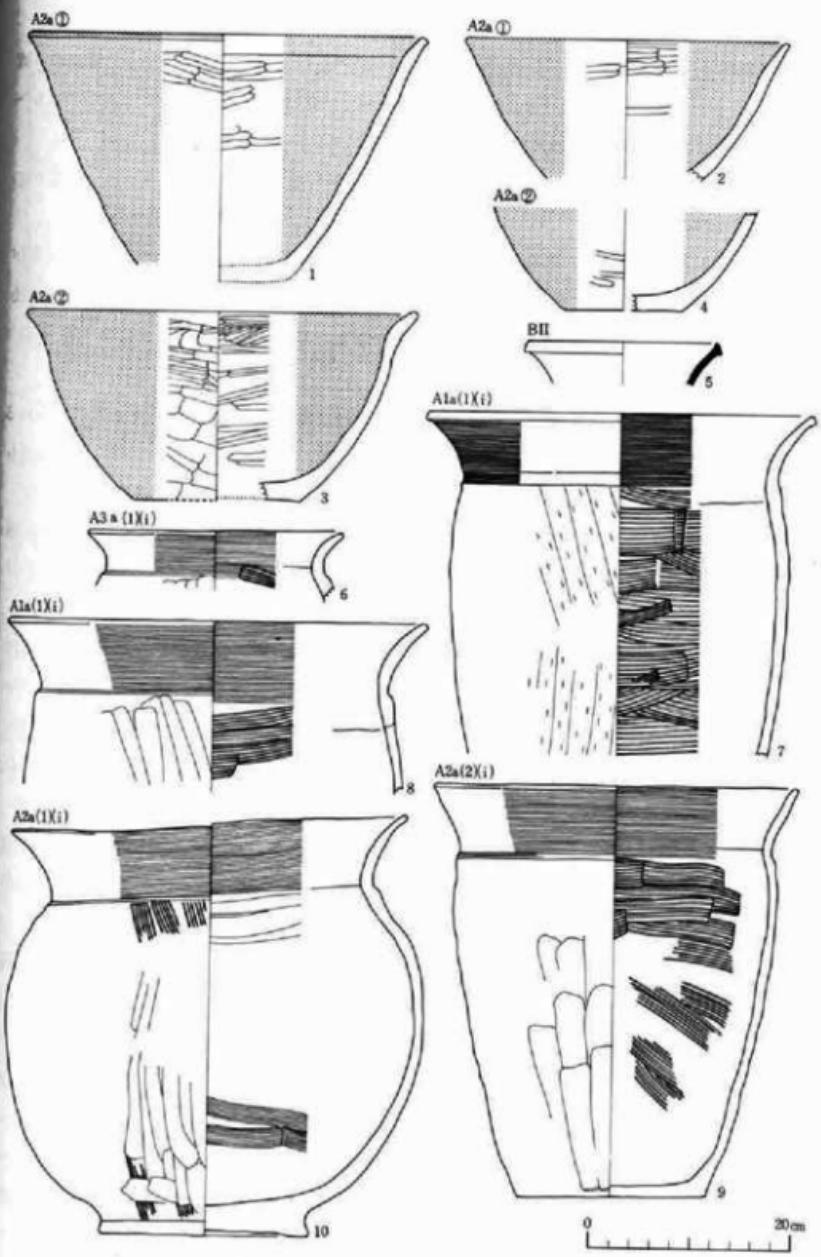
A 2類の坏（7～13）は口径に比べて器高の低いものである。体部から口縁部までは直線的に外傾するもの（7～10）と底径が小さく大きく開いて外傾するもの（11～13）とがある。

器面調整は内外面ともヘラミガキによっており、一部のものには前段階の調整であるヘラケズリや横ナデの痕跡を残すものもみられる。

〈坏B II類〉 （第38図14～24） 底部を回転ヘラ切りで切り離した後、再調整を施さないもの（B IIb類）と再調整を施すもの（B IIc類）、および再調整のため底部の切り離し技法が不明のもの（B IIe類）とに分けられる。再調整の手法には手持ちヘラケズリによるもの（H手法）と回転ヘラケズリによるもの（W手法）とがある。



第38図 第11号住居跡 出土遺物(1)



第39図 第111号住居跡 出土遺物 (2)

B II d類の壺(14~17)には、平底で体部が直線的に外傾するもの(14・15)と丸底風の平底で体部がややふくらみをもって外傾するもの(16・17)とがあり、ともに底部全面に手持ちヘラケズリが施されている(H手法)。

B II e類の壺(18)は、底部全面に回転ヘラケズリが施されるもの(W手法)で、器高が高くて体部は直線的に立ちあがる。

B II b類の壺(19~24)は、形態上の特徴によって、器高が普通で底径が大きなものと器高が低くて底径の大きなものとに分けられる。前者は体部が直線的に外傾するもの(19~21)で、後者は体部が直線的に外傾するもの(22)と体部がややふくらみをもって外傾するもの(23・24)とに細分される。

變形土器(第39図) 壺はすべてA類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)に属するものに限られる。

〈壺A類〉(第39図7~9) 器形の大小によって2分され、大形のもの(A 1類)と中形のもの(A 2類)がある。そのいずれも口徑より器高が大きく、頭部に段を有するものである。

A 1類の壺(7・8)は、頭部に明瞭な段をもつもので、口縁部は単純に長く外反し、体部最大径を中央付近にもつ。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面がヘラケズリ、内面が刷毛目となっている。

A 2類の壺(9)は、頭部の段がやや形式的なものになる。口縁部は直立ぎみに外反し、体部最大径を上端付近にもつものである。器面調整はA 1類の壺と共通する。底部外面にはヘラケズリの痕跡が認められる。

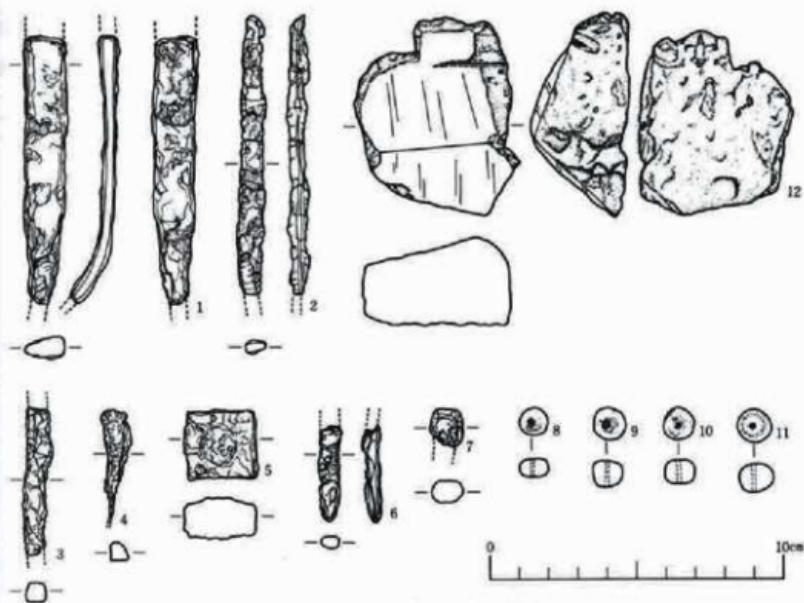
鉢形土器(第39図1~4) 鉢はすべてA類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)に属するものである。体部の形態上の特徴によって2分され、器高が高く、体部が直線的に外傾するもの(1・2)と、体部がややふくらみをもって外傾するもの(3・4)とがある。器面調整はいずれもが共通しており、体部より口縁部まで内外面とも丁寧なヘラミガキで整えている。底部を残すものには外面にヘラケズリの痕跡をとどめている。内外面に黒色処理が加えられている。

壺形土器(第39図) 壺にはA類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)とB II類(ロクロ成形で選元炎焼成)とがある。

〈壺A類〉(第39図6・10) 中形のもの(A 2類)と小形のもの(A 3類)とがある。

A 2類の壺(10)は、頭部に明瞭な段をもつもので、口縁部は単純に長く外反する。体部はほぼ真球を呈し、最大径を中央付近にもつ。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目+ヘラミガキ、内面が刷毛目+ナデによっている。底部外面にはヘラケズリが施されている。

A 3類の壺(6)は、頭部に明瞭な段をもち、口縁部が長く外反するものである。体部最大径は中央付近にもつものと思われる。器面調整は口縁部が横ナデ、体部上半外面がヘラミガキ、内面が刷毛目によっている。



第40図 第11号住跡 出土遺物 (3)

〈壺B II類〉(第39図5) 口縁部の細片である。小形のもので、器面にはロクロナデの痕跡のみをとどめている。

鉄製品(第40図1~7) 7点出土している。1は刀子の破片で、刃部端および茎の一部を欠く。茎は変形してかなり弯曲している。長さ9.2cm、身の最大幅1.5cm、背幅0.4cmを計る。2は細身の刀子で、茎と身の一部を欠く。刃部端は背に向かって丸くなっている。現存長は9.6cmで、身幅は中央付近で0.8cmを計る。3・4は細長い棒状のもので、断面形は四角形を呈する。角釘と思われる。3は両端を欠き、4は一方の先端を欠く。それぞれ現存長で5.1cm・3.6cmを計る。5は2.5×2.4cmの方形で、厚さ13mmを計る立方体である。鎧帶、馬具等の飾金具と推定される。6・7は細長い棒状のもので、ともに一端を欠く破片である。現存長でそれぞれ3.3cm・1.3cmを計る。性格は不明であるが、6は釘となる可能性が強い。

土玉(等40図8~11) 4点出土している。いずれも上下にやや平坦な面をもつがほぼ球形を呈するものである。8は最大復径1.0cm、厚さ0.6cmで中央部に0.1cmの貫通孔をもつ。以下同様に9は1.1cm、0.9cm、0.1cm、10は1.1cm、0.8cm、0.1cm、11は1.2cm、1.0cm、0.1cmを計る。

礫石(第40図12) 不整形の石で、2面に使用痕が認められる。最大長6.7cm、最大幅5.4cmを計る。石質は淡緑色石質凝灰岩である。

第12号 (D・J・50) 住居跡

【遺構確認面】 当住居跡は粗振の段階でIIa層を若干掘り下げたときには確認されていない。G区からE区にかけて遺構の検出が希薄であったため、再度、重機を使用して遺構の有無を調査しており、当住居はこの段階で確認された。したがって、IIa層はほとんど削平しており、地点によってはIIb層をも露出している。

【保存状況】 遺構の検出作業の段階で削平した部分を除いてほぼ原形をとどめている。

【重複関係】 当住居との重複遺構はみられない。

【平面形・長軸方向】 ほぼ正方形を呈する。長軸方向は東西にとって、N-87°-Wである。

【規模】 南北長で5.88m・5.79m、東西長が5.76m・5.71mとなり、床面積は約33.06m²である。

【堆積土】 遺構検出の段階で壁はほとんど削平されており、住居内堆積土は単一の層にまとめることができる。住居上部の堆積土の状況は不明である。

第1層：褐色の粘土質シルト層で、床面上の全域を覆う。緻密でかなりしまっている。木炭粒を少量混える。なお、壁沿いには壁の剥落土と思われるにぶい黄褐色土が分布する。

住居内の堆積土は粉状の緻密な堆積状況を示しており、自然的營力による堆積層と思われる。

【壁】 地山を壁としている。床面よりの立ち上がり角度はきつい。前記のように壁は遺構検出の段階でかなりの部分が削平されており、構築時の壁高は不明である。現存部分で東壁が6～28cm、西壁11～25cm、南壁4～14cm、北壁12～26cmとなっている。

【床】 床は全体的に平坦な面をなしており、比較的かたい。床面上には大小13個のピットが掘られているほか、中央部には固い焼土遺構をもち、南北コーナー付近には埋甕がみられる。

なお、床面下を掘り下げたところ、9～19cmの厚さをもつにぶい黄褐色の砂質シルトが検出された。掘り方の埋土と思われる。

【柱穴】 柱穴にはP₂、P₇、P₁₁、R₂の4個のピットがあてられる。R₂を除く3つのピットには掘り方を有し、いずれも明確な柱痕が確認されている。これら4個のピットを結ぶ線は南側にやや短い不整正方形(台形)を呈する。

【カマド】 北壁のやや西寄りに構築されている。袖の遺存状況は不良であるが、ほかの部位はほぼ原形をとどめている。主軸方向はN-7°-Eである。

燃焼部は119×56cmの範囲で床面より6cmほど皿状に掘り下げてある。焚口の手前には大きさが65×46cmで深さが8cmのピットを持つ。灰等をかき出すためのものであろう。ほぼ中央には支脚として使用したと思われる石があり、その間が良く焼けている。袖部はにぶい黄褐色のシルト質土を素材として構築し、土器と川原石を芯材として併用している。土器(甕)は正位の状態に立てており、右袖内からは3個体分検出されている。左袖は遺存状況が不良で、まとま

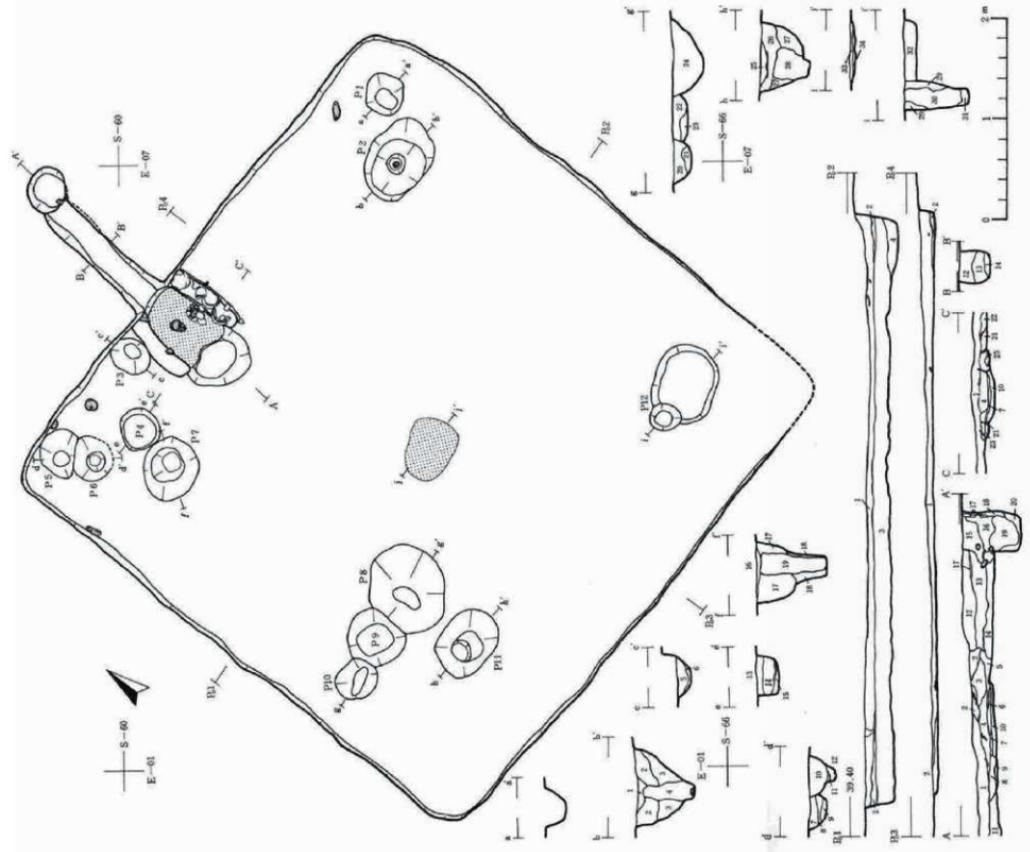


図	種名	性別	標本	地	場所	標本	地	場所	標本	地	場所
1	1. 雌	雄	色10YR4/1	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ
	2.	♂	色10YR4/1	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ
	3.	♀	色10YR4/1	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ
	4.	♀	色10YR4/5	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ
ガラフ	1.	雄	色15YR3/3	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	2.	雄	色15YR3/3	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	3.	雄	色15YR4/3	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	4.	♂	*	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ
	5.	♂	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
ガラフ	6.	雌	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	7.	♀	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	8.	♀	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	9.	♀	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	10.	♀	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	11.	♀	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	12.	♀	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	13.	♂	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	14.	♀	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	15.	♂	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	16.	♂	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	17.	♀	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	18.	♀	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	19.	♀	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	20.	♀	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	21.	♂	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	22.	♂	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	23.	♂	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
P 2	1.	♂	色15YR4/5	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	2.	♂	*	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ
	3.	♂	*	()	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
P 3	4.	♂	*	()	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形
	5.	♂	*	()	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形	シルバ	少頭形

第1回 図 第12号生仔附記

った土器は発見されていない。

煙道部は燃焼部底面と際立った段差をもたず接続する。煙道部底面はほぼ水平に煙出部へ移行しており、その長さは約130cmである。煙出部には大きさが45×40cm、深さ60cmのピットが掘り込まれており、煙道端との比高は約27cmになる。ピット内には小さな砾が入っている。

最後に、燃焼部底面を掘り下げたところ、厚さ約6cmの褐色土が認められた。これは、床面下の掘り方埋土とは異なっており、カマドを意識した掘り方の埋土と思われる。

〔貯蔵穴ピット〕 貯蔵穴と推定できるピットは検出されていない。

〔その他の施設〕 中央部床面上に大きさが62×45cm、厚さ6cmの固い焼土面がある。おそらく炉(地床炉)として使われたものであろう。

また、南西コーナー付近には埋甕がある。土器の底部は床面下8cmのところにあるが、埋甕のための掘り方は検出されていない。若干掘り凹めて土器を据えたものと思われる。用途は不明である。

〔出土遺物〕 当住居跡の出土遺物には土器・鉄製品・砥石がある。土器は环・高台付环・甕壺の各器種がある。住居の北壁付近、カマドの周囲より出土したものが多い。

环形土器(第42図) 环にはA類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)、B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)およびB-II類(ロクロ使用で還元炎焼成)とがある。

〈环A類〉(第42図7~21) A類の环はすべて平底(A2類)のものである。底部より口縁部に至る形態上の特徴によりいくつかに細分される。器高が低くて底径の小さなものには、体部がややふくらみをもって外傾するもの(14)、体部がややふくらみをもって外傾し、口縁端で立ちあがるもの(1)、体部がややふくらみをもって外傾し、口縁端で外反するもの(16~21)、および底部との境にくびれをもち、ややふくらみをもって外傾するもの(10)などがある。器高が低くて底径の大きなものには、体部が直線的に外傾するもの(15)と体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(12)とがある。器高が普通で底径が大きなものには、体部が直線的に外傾するもの(8)と体部がやや丸味をもって立ちあがるもの(9)とがある。器高が普通で底径の小さなものは、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(11)である。また、器高が高くて底径が小さなものには、体部が直線的に立ちあがるもの(13)がある。外面の器面調整は口縁部が横ナデで共通する。体部はヘラケズリによるもの(8~10・12~15・17・19・20)とヘラミガキによるもの(7・11・16・18・21)に分けられ、17には前段階の調整である刷毛目痕が観察される。底部はヘラミガキされるもの(21)もあるが、他はヘラケズリによっている。内面調整は、全面に丁寧なヘラミガキが施される。前段階の調整である横ナデの痕跡をとどめるもの(10)もある。

〈环B I類〉(第42図3・4) B I類の环は、底部を回転糸切りで切り離した後に再調整を

施すもの（B Ic類）である。再調整の手法は手持ちヘラケズリによっており、それを体部下端より底部全面に施すもの（3）と底部全面に施すもの（4）とに分けられる。いずれも、器高が低くて底径の大きなもので、体部はややふくらみをもって外傾する。

〈环B II類〉（第42図1・2） B II類の环は底部を残す破片をも含め系切り無調整のもの（B IIa類）に限られる。器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの（1）と器高が高くて底径が大きく、体部が直線的に立ちあがるもの（2）がある。

高台付环形土器（第42図6） 高台付环はB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理に属するものである。高台部分は長く外傾し、先端に平坦部分をもたないものである。底部に菊花状のヘラ刻みを施し周縁をロクロ調整している。环部は、器高が高くて口縁部までやや丸味をもって立ちあがるものである。

なお、第42図5は底部を欠損しているが、高台付环の破片と思われる。

變形土器（第43図、第44図） 裂はA類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に属するものである。

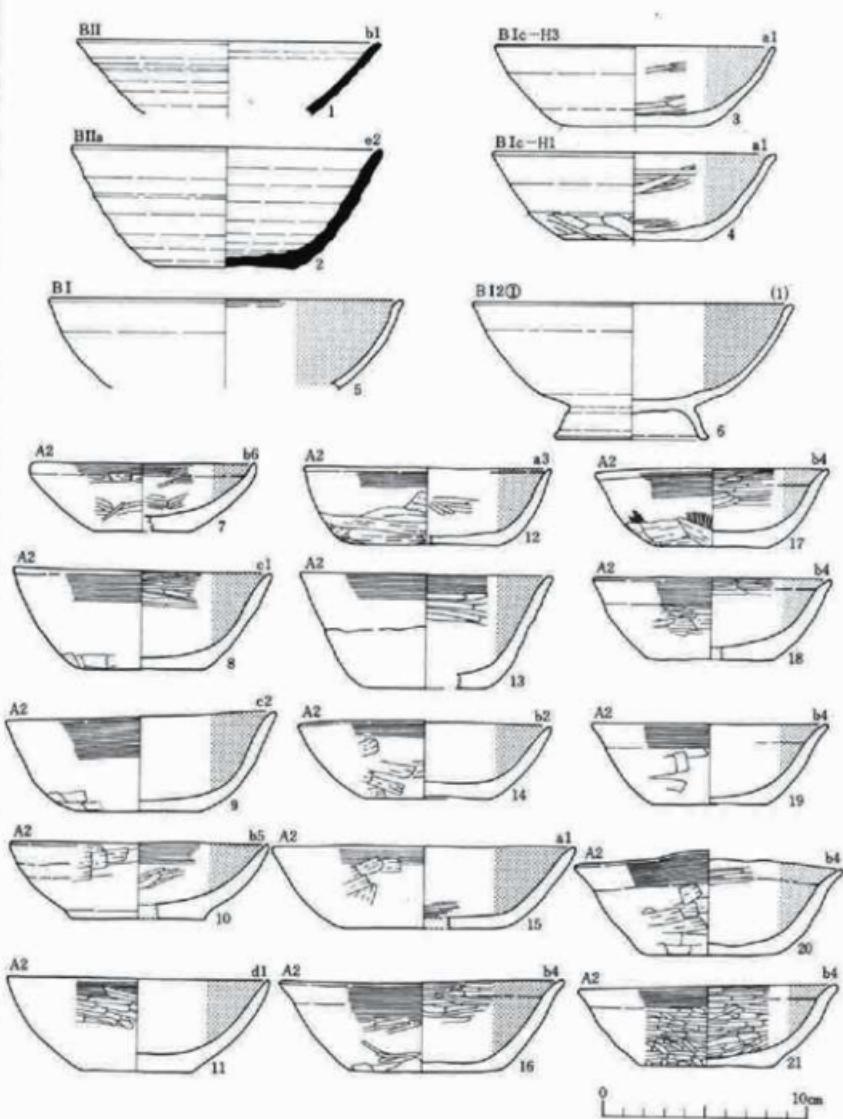
〈變A類〉 A類の裂は器形の大小により3分（A 1類・A 2類・A 3類）される。

A 1類の變（第43図1～3、第44図1）は、単純に長く外反する口縁部をもつ長頸形のものである。頸部に明瞭な段を有するもの（第43図1、第44図1）と頸部に段をもたないもの（第43図2・3）とに分けられる。体部最大径の位置にも違いがみられ、中央付近にもつもの（第43図1・3）と体部の上端付近にもつもの（第43図2、第44図1）がある。器面調整は第43図2を除き口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目+ヘラケズリ、体部内面が刷毛目によっている。底部を残すものには外面にヘラケズリを施している。第43図2は体部外面がヘラミガキに近い軽いヘラケズリ、内面がヘラナデで調整している。

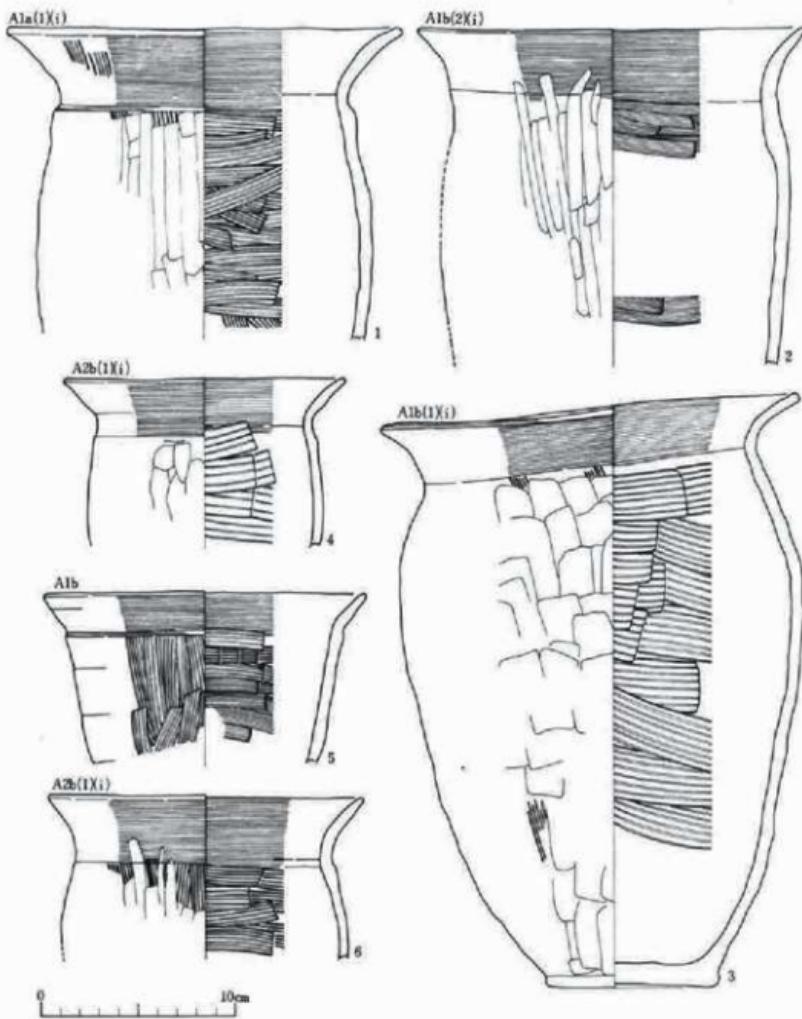
A 2類の變（第43図4・6、第44図3）は口縁部の形態、体部最大径の位置等によって細分され、口縁部が長く外反し、体部最大径を中央付近にもつもの（第43図4・6）と直立ぎみに外反し、体部最大径を上端付近にもつもの（第44図3）とに分けられる。いずれも頸部には段をもたない。器面調整は口縁部は横ナデで共通するが、体部外面はヘラケズリによるもの（第43図4、第44図3）と刷毛目+ヘラケズリによるもの（第43図6）とに分けられ、体部内面は刷毛目によるもの（第43図4・6）、ヘラナデによるもの（第44図3）とに分けられる。

A 3類の變（第44図6・7）は、口縁部が直立ぎみに外反し、体部最大径を上端付近にもつもの（6）と口縁部が長く外反し体部最大径を中央付近にもつもの（7）とに分けられる。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面がヘラケズリ（6）、ないしは刷毛目（7）、体部内面がヘラナデによっている。

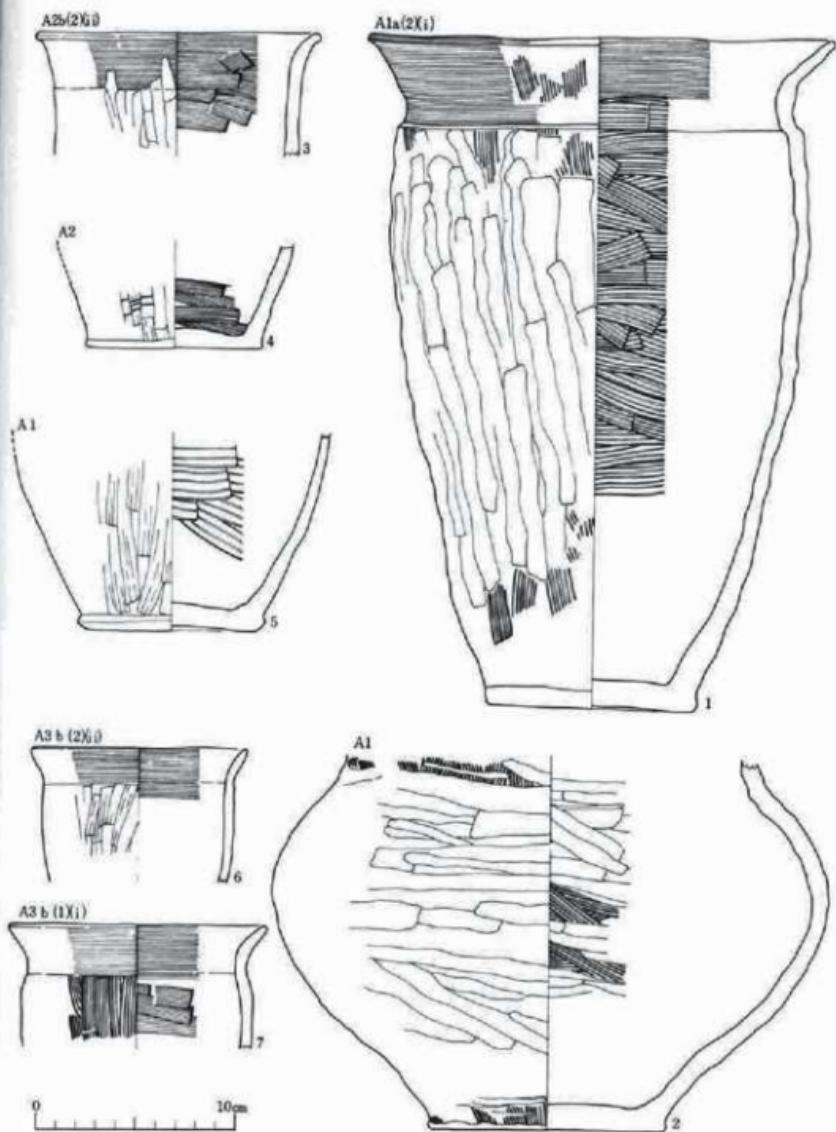
なお、体部下半より底部にかけての破片（第44図4・5）がある。4はA 2類、5はA 1類に属するものと思われる。ともに体部最大径を中央付近にもつものである。底部外面は4には



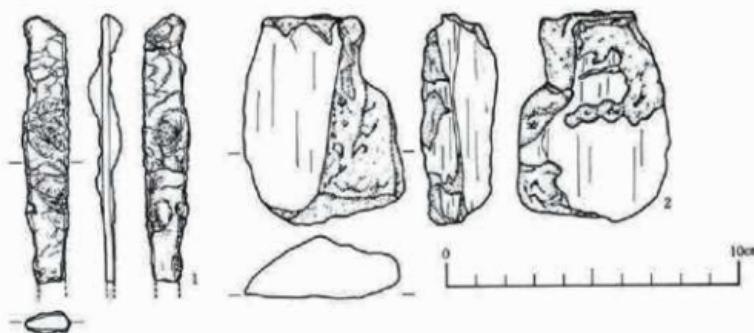
第42図 第12号住居跡 出土遺物 (1)



第43図 第12号住居跡 出土遺物（2）



第44図 第12号住居跡 出土遺物 (3)



第45図 第12号住居跡 出土遺物（4）

ラケズリ、5には木葉痕が観察される。

壺形土器（第44図2） 壺はA類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に類別されるものが1点出土している。体部の形状が横長の球形を呈する大形のもので、体部最大径は中央付近にある。器面調整は内外両面とも体部が刷毛目+粗いヘラミカキによっている。底部外面にはヘラケズリを施している。

鉢形土器（第43図5） A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に属するものが1点出土している。口縁部がゆるく外反し、体部はほとんど脹まずに底部へと移行し、体部最大径を上端付近にもつ。頸部にはやや形式的な段を有する。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目、体部内面がヘラナデ+刷毛目によっている。

鉄製品（第45図1） 刀子の破片である。茎部および刃一部の部を欠く。現存長で9.2cm、幅1.5cm±、背幅0.6cmを計る。

砾石（第45図2） 不整形の自然石を砾石としている。横断面形は5角形を呈し、2面に砥面がみられる。石質は淡緑色石質凝灰岩である。

第13号（E B06）住居跡

〔遺構確認面〕 当住居跡も第12号住居跡と同様に、粗掘の段階ではその存在を確認できなかった。重機による再調査の段階でIIa層をかなり掘り下げて遺構を確認している。遺構の掘込面は不明である。

〔保存状況〕 検出作業において上部はかなり削平をうけている。また、住居の西側は水田となっており、床面ぎりぎりまで破壊されている。西壁のほとんどが遺存していない。

〔平面形・長軸方向〕 平面形は南北に長い長方形を呈する。長軸方向はN-17°30'-Wである。

〔規模〕 長軸(南北)長で6.07m・5.95m、短軸(東西)長が5.25m・5.22mとなり、床面積は31.06m²である。

〔堆積土〕 遺存する遺構内堆積土は基本的には以下の3層に大別される。

第1層：ふい黄褐色のシルト層である。部分的に上部を薄く覆う。焼土粒・木炭粒を少量含む。

第2層：褐色のシルト層である。2層に細分され、住居の全域に広く分布する。木炭粒・焼土粒を多量に含み、遺物をかなり包含する。

第3層：褐色の粘土質シルト層である。床面の上部全域を厚く覆う。粉状の緻密な堆積状況を示す。木炭粒・焼土粒のほか遺物を多量に含む。

以上の3層に大別された堆積土は、すべて自然堆積層として認定される。

〔壁〕 検出作業によりかなり削損をうけている。地山を壁としており、床面より急角度で立ちあがる。

現存する壁高は東壁で4~14cm、西壁0~5cm、南壁10~17cm、北壁8~24cmとなり、場所によってかなりのばらつきがみられる。

〔床〕 床はほぼ平坦な面をなしている。壁沿いが若干低くなるが、周溝等の施設は検出されていない。床面上からは大小15個のピットが発見されている。

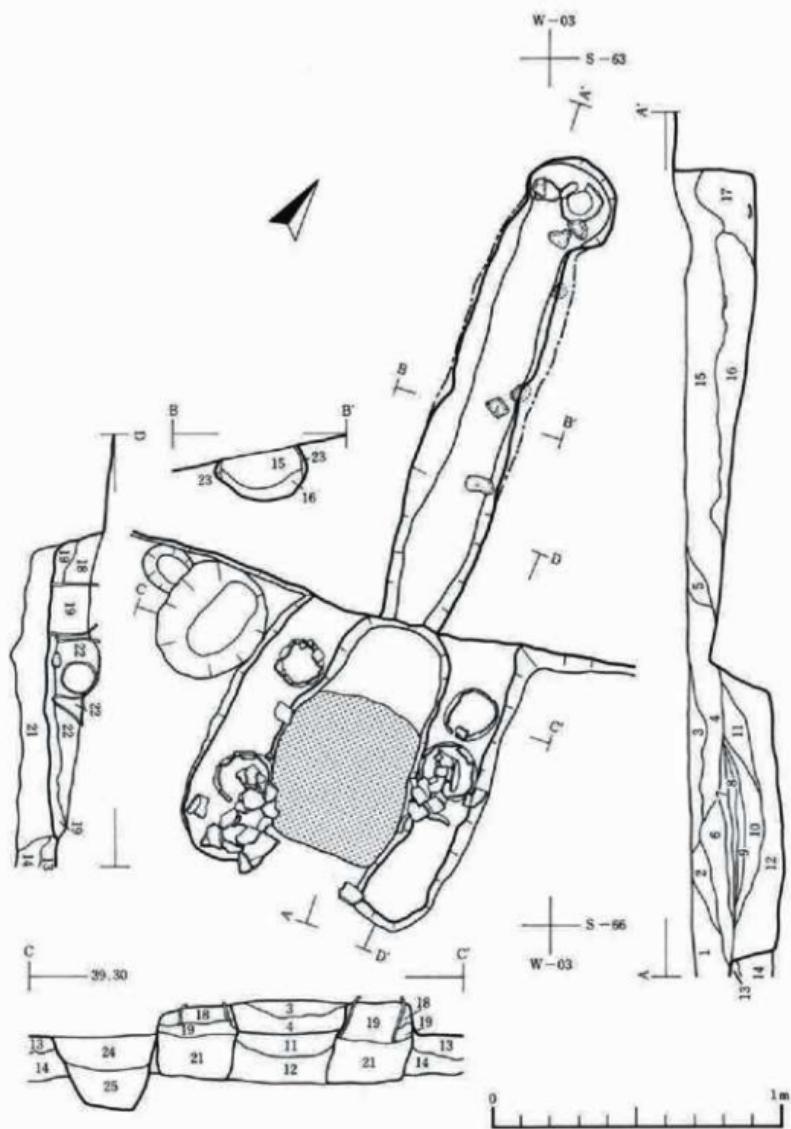
最後に床面を掘り下げたところ、3層に分けられる人為的な堆積層があらわされた。掘り方の埋土と思われる。掘り方は床面下約15cmの深さまで掘られている。破壊されている西側の範囲は掘り方のラインに沿わせて推定した。

〔柱穴〕 柱穴は4個確認されている。P₁、P₂、P₃、P₄の4個であり、それぞれ規模に齊一性が認められ、それらを結んだ線は1辺約4mの整った正方形を呈する。柱穴の位置は西に偏しており、4本のうち2本は西壁に近接している。

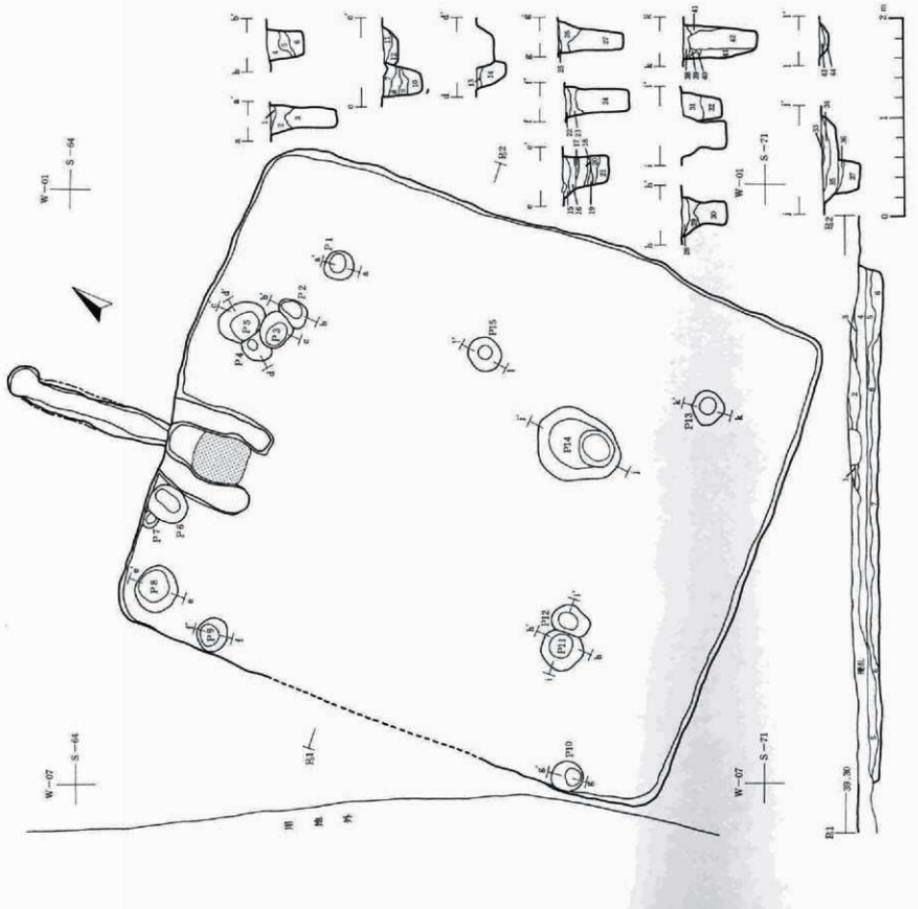
〔カマド〕 北壁のやや西寄りに構築されている。西側の半分が水田耕作により若干削平されているがほぼ原形をとどめている。主軸方向は住居の長軸方向と一致し、N-17°30'-Wである。

燃焼部は床面を若干掘り凹めており、97×48cmの規模をもつ。燃焼部内には54×48cmの範囲で厚さ4~6cmの固い焼土面が認められる。支脚は発見されていない。袖は地山のふい黄褐色土を基本とするシルト質土を積みあげて構築しており、土器(甕)が芯材として使用されている。土器は甕を倒位の状態に据えられており、左右の袖とも3個体分づつ検出されている。また、袖の内からは小さな川原石も発見されているが芯材として意識したものであるかは不明である。

煙道部は燃焼部底面より4cmほどの段差をもつ奥壁に作られている。煙道部の長さは約143cm



第46図 第13号住居跡（1）



番号	色	土の性	土の性	土の性	土の性	土の性	土の性
番 1 ■	にぶい黒褐色 10YR 4/4	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 3	少	黒褐色 10YR 4/4	少
番 2 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作土 - 耕作地多量施肥	P 4	少	褐色 10YR 4/4	少
番 3 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 5	少	褐色 10YR 4/4	少
番 4 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 6	少	褐色 10YR 4/4	少
番 5 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 7	少	褐色 10YR 4/4	少
番 6 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 8	少	褐色 10YR 4/4	少
番 7 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 9	少	褐色 10YR 4/4	少
番 8 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 10	少	褐色 10YR 4/4	少
番 9 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 11	少	褐色 10YR 4/4	少
番 10 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 12	少	褐色 10YR 4/4	少
番 11 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 13	少	褐色 10YR 4/4	少
番 12 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 14	少	褐色 10YR 4/4	少
番 13 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 15	少	褐色 10YR 4/4	少
番 14 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 16	少	褐色 10YR 4/4	少
番 15 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 17	少	褐色 10YR 4/4	少
番 16 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 18	少	褐色 10YR 4/4	少
番 17 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 19	少	褐色 10YR 4/4	少
番 18 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 20	少	褐色 10YR 4/4	少
番 19 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 21	少	褐色 10YR 4/4	少
番 20 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 22	少	褐色 10YR 4/4	少
番 21 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 23	少	褐色 10YR 4/4	少
番 22 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 24	少	褐色 10YR 4/4	少
番 23 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 25	少	褐色 10YR 4/4	少
番 24 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 26	少	褐色 10YR 4/4	少
番 25 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 27	少	褐色 10YR 4/4	少
P 1 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 28	少	褐色 10YR 4/4	少
P 2 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 29	少	褐色 10YR 4/4	少
P 3 ■	褐色 10YR 4/2	少	耕作地 - 反復に多量施肥	P 30	少	褐色 10YR 4/4	少

になり、底面は突出部に向かって下方へ緩く傾斜している。突出部には大きさが34×29cmで、深さ29cmのビットが掘られており、煙道端とは比高をもたずになめらかに接続する。ビット内からは小さな川原石、土器(甕の底部)が発見されている。

最後に燃焼部を掘り下げたところ、床面下の掘り方埋土とは異なるに付い黄褐色土が検出された。燃焼部を意識した掘り方の埋土と思われる。

〔貯蔵穴状ビット〕 貯蔵穴と推定されるようなビットは発見されていない。

〔出土遺跡〕 出土遺物は多種におよび、土器・鉄製品・小形手捏土器・紡錘車・土玉・砾石などがある。土器には壺・甕・壺・鉢・蓋などの器種がある。カマド周辺および北壁際よりまとまって出土している。

环形土器(第48図) 环にはA類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)に属するものとB II類(ロクロ成形で還元炎焼成)に属するものがある。

〈环A類〉(第48図1~18) A類の环は底部が平底のもの(A 2類)に限られる。底部から口縁部に至る形態上の特徴によりいくつかに細分される。器高が低くて底径の小さなものには、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(3~4)、体部がややふくらみをもって外傾するもの(5~8)、体部がやや丸味をもって外傾するもの(9~11)、ややふくらみをもって外傾し、口縁端で立ちあがるもの(14)などがある。器高が低くて底径の大きなものには、ややふくらみをもって外傾するもの(12)とややふくらみをもって立ちあがるもの(13)がある。器高が普通で底径の小さなものには、体部が底部との境にくびれをもち大きく開いて直線的に外傾するもの(1~2)と体部がやや丸味をもって立ちあがるもの(15~17)がある。そのほか、器高が普通で底径が大きく、体部がやや丸味をもって立ちあがるもの(18)もある。器面調整は外面は口縁部が横ナデ、体部が刷毛目+ヘラミガキによるもの(1~4・9)、体部より口縁部までヘラミガキによるもの(7~11・13)、口縁部が横ナデ、体部がヘラミガキによるもの(5~10・12~14)、口縁部が横ナデ、体部がヘラケズリによるもの(6)、口縁部が横ナデ、体部が刷毛目+ヘラケズリによるもの(8)などに分けられる。底部にはヘラケズリが施されている。内面調整は口縁部に横ナデを施し、体部にヘラミガキを加えるもの(1~5・9~10・12~16)と全面にヘラミガキを施すものとに分けられる。

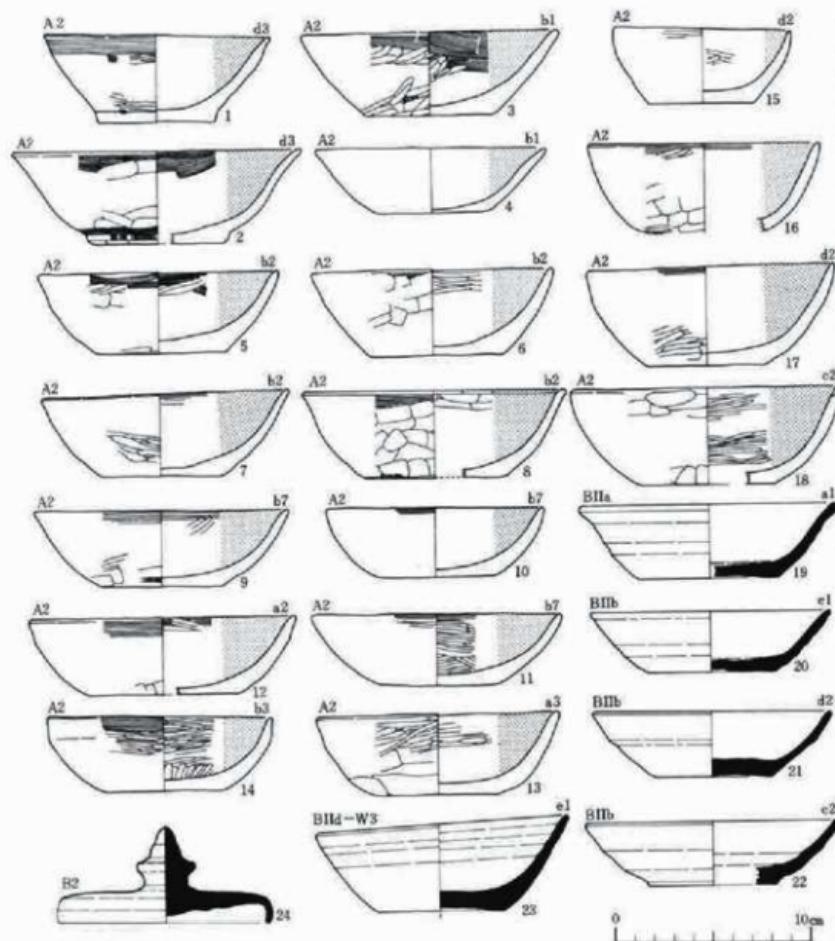
〈环B II類〉(第48図19~23) B II類の环は、底部の切り離し技法、および再調整の有無によって細分され、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を施さないもの(B IIa類)、底部を回転ヘラ切りで切り離し、再調整を施さないもの(B IIb類)、底部を回転ヘラ切りで切り離し、再調整を施すもの(B IIc類)などがある。

B IIa類の环(14)は、器高、底径とも普通で、体部が直線的に外傾するものである。

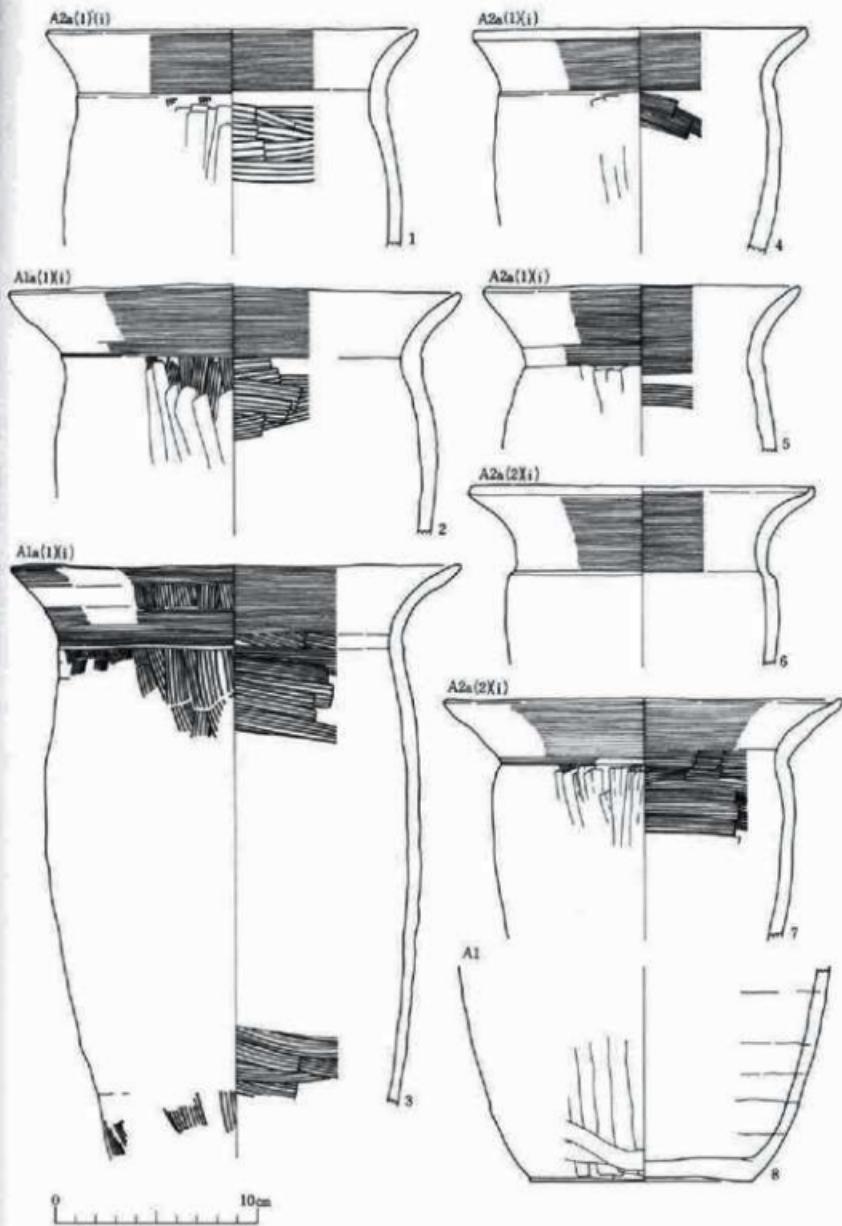
B IIb類の环(20~22)はすべて器高の低いものである。底径が大きく体部が直線的に外傾

するもの(20)と底径が大きく体部がややふくらみをもって外傾するもの(22)、および底径が小さく体部がややふくらみをもって外傾するもの(21)などに分けられる。

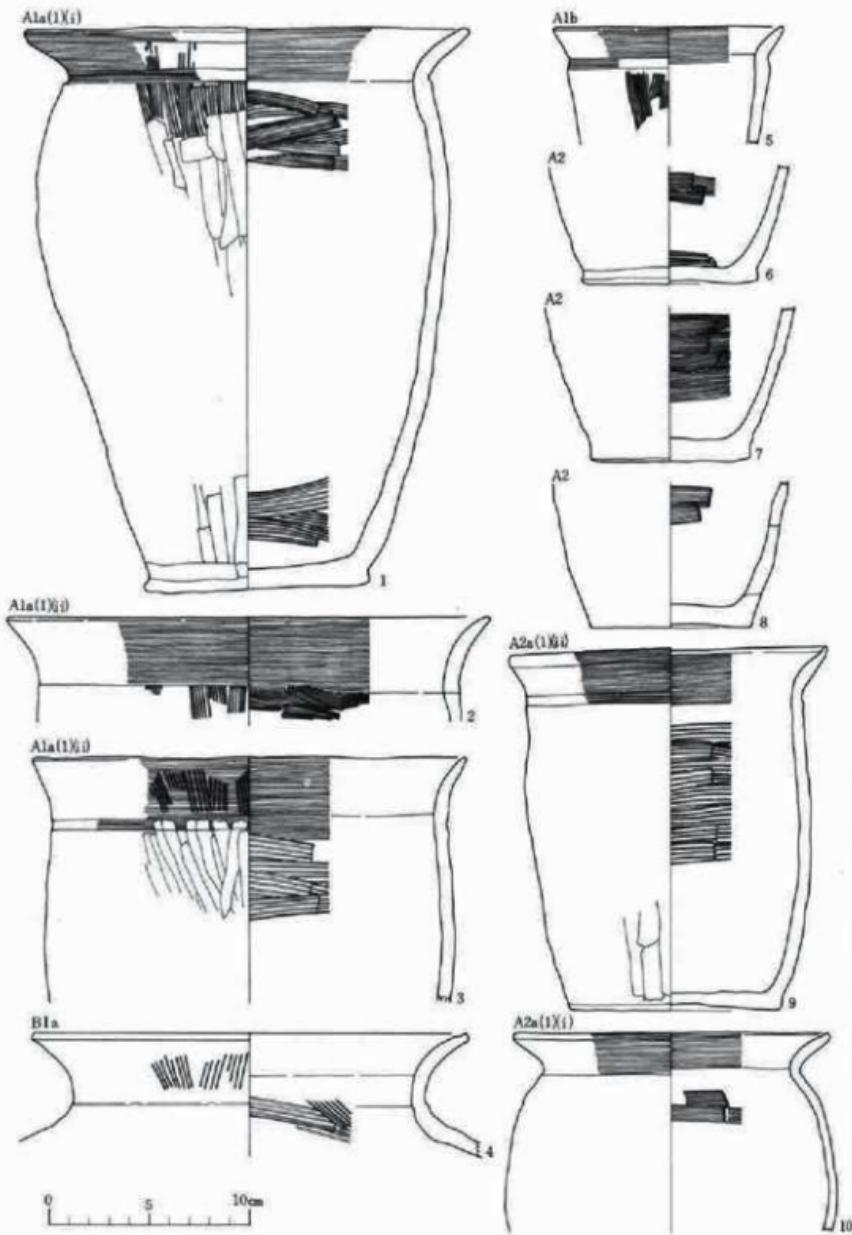
B II d類の环(23)は、器高が高くて底径の大きなもので、体部は直線的に立ちあがる。底部全面に回転ヘラケズリを施している(B II d類-W₃手法)。



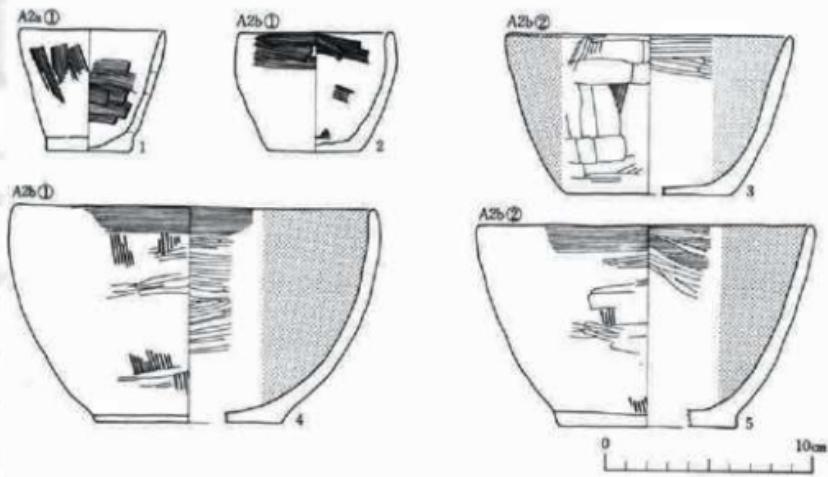
第48図 第13号住居跡 出土遺物(1)



第49図 第13号住居跡 出土遺物 (2)



第50図 第13号住居跡 出土遺物 (3)



第51図 第13号住居跡 出土遺物(4)

變形土器 (第49図、第50図) 壺には、A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とBII類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈壺A類〉 器形の大小によって3分（A1類・A2類・A3類）され、さらに体部最大径の位置、口縁部の形態等によって細分される。

A1類の壺（第49図2・3、第50図1～3）は、口縁部が長く外反し、体がゆるやかに脹らみ最大径を中央付近にもつもの（第49図2・3、第50図1）と、口縁部が直立ぎみに外反し、体部が直線的で最大径を中央付近にもつもの（第50図2・3）とに分けられる。いずれも頭部にはやや形式化した段を有する。器面調整は共通しており、口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目+ヘラケズリ、内面が刷毛目によっている。底部を残すものは外面にヘラケズリを施している。口縁部外面には前段階の調整である刷毛目痕が観察される。

A2類の壺（第49図4～7、第50図9）は、口縁部が長く外反し、体部最大径を中央付近にもつもの（第49図1・4・5）、口縁部が極端に長く外反し、体部最大径を上端付近にもつもの（第49図6・7）、口縁部が直立ぎみに外反し、体部が直線的で最大径を中央付近にもつもの（第50図9）とに分けられる。頭部の段には明瞭なもの（第49図6・7）とやや形式的なものとがある。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面がヘラケズリになっている。体部内面は刷毛目によるもの（第49図1・6・7、第50図9）とヘラナデによるもの（第49図4）とがある。なお、体部外面には、ヘラケズリの前に刷毛目を施しているもの（第49図1・7）もある。

そのほか、体部下半より底部にかけての破片（第49図8、第50図6～8）がある。すべてA類の甕であり、A 1類のもの（第49図8）とA 2類のもの（第50図6～8）とに分かれる。

〈甕B II類〉（第52図1～3）すべて口縁部～体部上端の細片である。大きさはそれぞれ異なるが、口径30cmを越える大甕である。

口縁部はいずれも長く外反するが、口唇部を上下に挽き出すもの（1）と下方へ挽き出すもの（3）がある。1は口縁外面に彫描文がみられ、2には体部外面を平行文様工具で叩きしめている。1の内面にはオリーブ褐色の自然釉がかかり、3は内外面に灰色の自然釉がかかっている。

壺形土器（第50図）壺にはA類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）とB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）がある。

〈壺A類〉（第50図10）中形のA 2類に属するものである。口縁部は長く外反し、体部は真球に近い形を呈し、最大径を中央付近にもつ。頸部の段は形式的なものである。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面がヘラミガキ（？）、内面がヘラナデによっている。

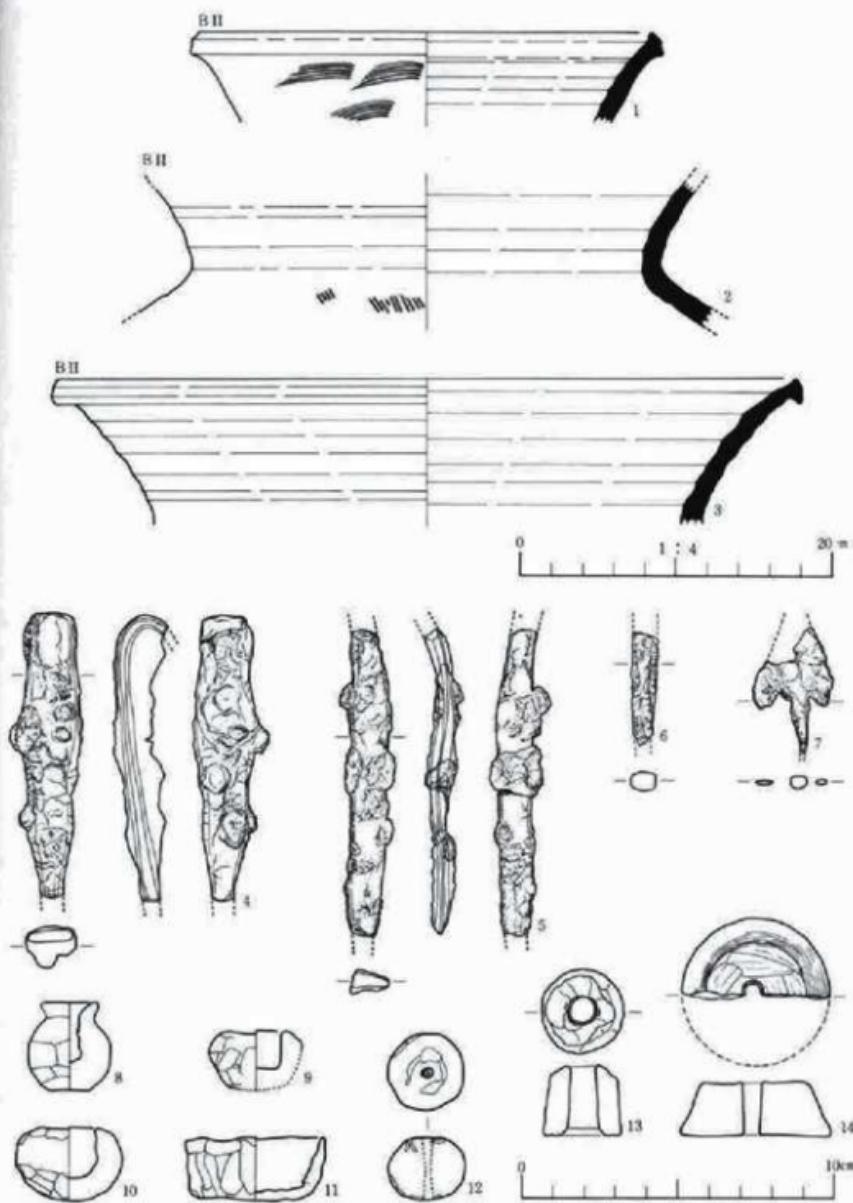
〈壺B I類〉（第50図4）大形のものである。口縁部は長く外反し、口唇部は弱く上方へ挽き出している。体部はや肩の張る球形を呈するものと思われる。器面はロクロナデによる調整であるが、口縁部および体部上半の外面に平行文様工具による叩きしめの痕跡が認められる。体部上半内面には刷毛目が施されている。

鉢形土器（第48図、第50図5）すべてA類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）に属するものである。頸部にくびれをもち、体部と口縁部とが区画されているもの（A 1類）と体部より口縁部までなめらかに移行するもの（A 2類）がある。

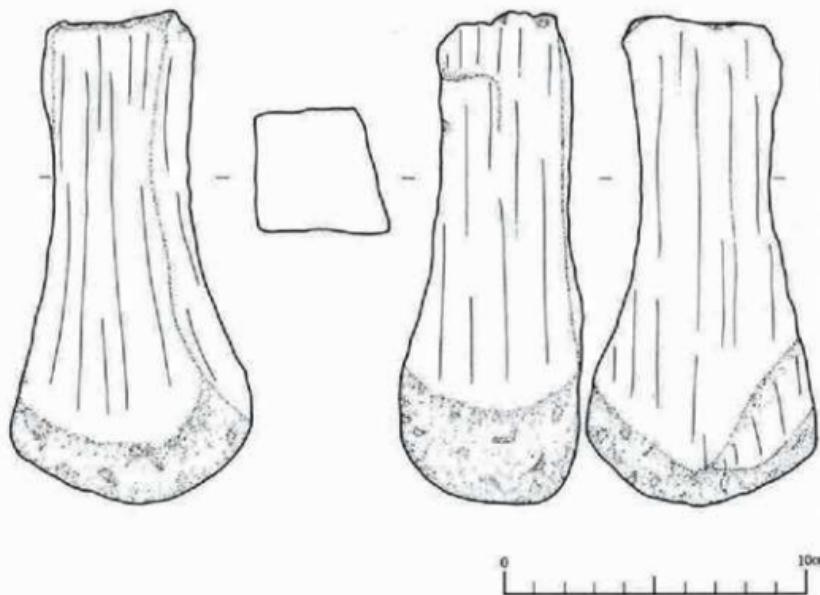
A 1類の鉢（第50図5）は、頸部に形式化した段をもち、口縁部は短くゆるく外反するものである。体部はほとんど脛ますそのまま底部へと移行し、体部最大径を上端付近にもつ。器面調整は口縁部が横ナデ、体部外面が刷毛目、内面がヘラナデによっている。

A 2類の鉢（第48図1～5）は、相対的に底径が小さく、体部より口縁部まで直線的に外傾するもの（A 2a類）と、相対的に底径が大きく、体部より口縁部まで脹みをもって立ちあがり、塊形に近い形を呈するもの（A 2b類）がある。

A 2a類の鉢（1）は小形のもので、器面調整は外面が刷毛目、内面がヘラナデによっている。底部外面にはナデが施されている。A 2b類の鉢（2～5）は、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの（3・5）と、体部がかなり丸味をもって内窩ぎみに立ちあがるもの（2・4）とがあり、後者は器形の大小によって2分される。器面調整は、小形のものを除いて内外面ともヘラミガキを基本としているが、外面には前段階の調整である刷毛目・ヘラケズリが観察され、4・5には口縁部に横ナデが施されている。なお内面は黒色処理されており、3は外面にも黒色処理が施されている。小形のものは内外ともヘラナデで整え、底部外面にはナデが施さ



第52図 第13号住居跡 出土遺物（5）



第53図 第13号住居跡 出土遺物（6）

れている。

壺形土器（第48図24） B II類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属するものが1点出土している。宝珠形の極端に高いつまみをもつものである。天井部はほぼ水平になっており、口縁部はするどく屈曲しほば直立する。全面ロクロ調整である。

小形手捏土器（第51図） 4点出土している。器形には各種みられ、壺形を呈する平底のものの（8）と塊形を呈する丸底のもの（9・10）、および鉢形を呈する平底のもの（11）とがある。器内は厚いもの（8～10）と薄いもの（11）とがある。器面はオサエで整えているが、軽いヘラケズリを加えるもの（8～10）もある。法量測定値は8が口径1.8cm、胴径2.7cm、底径1.3cm、器高2.8cmを計る。9は口径約1.9cm、体部径約2.9cm、器高1.9cmとなり、10は口径1.8cm、体部径3.5cm、器高2.3cmとなる。11は口径4.9cm、底径3.2cm、器高2.0cmを計る。

土玉（第52図12） 上下にやや平坦な面をもつがほば球形を呈する。最大腹径2.5cm、高さ2.0cmを計り、中央には径約0.3cmの貫通孔がある。器面には軽いミガキの痕跡が観察される。

紡錘車（第52図13・14） 石製のもの（13）と土製のもの（14）とがある。13は輝石安山岩の多

孔質熔岩を加工したもので、上部のやや丸まった截頭円錐形を呈する。上面径2.1cm、底径2.5cm、高さ2.3cmを計る。孔径は上部で0.8cm、下部で1.0cmになる。14は截頭円錐形を呈する土製のもので、約半残存する。大きさは復元推定値で上面径約3.3cm、底径約4.9cmを計り、高さは1.8cmになる。孔径は上部で0.6cm、下部で0.5cmである。

鉄製品（第52図） 4点出土している。4は刀子と推定されるもので、両端を欠いている。銷による変形が著しく、一端は大きく屈曲している。現存長で約9.3cm、幅約1.7cmを計る。5は刀子の破片と思われる。茎・刃部端の両端を欠き、やや弯曲している。現存長で9.9cm、幅1.2cmを計る。6は両端を欠く細長い棒状のものである。角針と思われる。現存長で3.6cmとなる。7は平根有茎陽扶三角形式の鉄簇である。峰の先端、両陽扶部の先端、および茎の大半を欠く。峰は推定で長さが約3.2cm、幅2.7cmを計る。莖被は長さ1.6cmで、断面は約0.4cmの方形を呈する。陽扶部・茎部の長さは不明である。

砥石（第53図） 外形が分銅形を呈するものである。周縁には整形痕が認められず、不定形の原材料を利用したものと思われる。砥面は長軸に沿って4面認められ、使用部分の横断形は四角形である。石質は輝石安山岩の多孔質溶岩であり、紡錘車(13)と同質である。

第14号（E H03）住居跡

(造構確認面) 地山のよい黄褐色土層(IIa層)を若干掘り下げて造構の存在を確認した。柱畔断面の観察によれば、造構はIIa層の上面より掘り込まれている。

(保存状況) ほぼ原形をとどめており、保存状況は良好である。

(重複関係) 第16号住居跡と重複関係にある。当住居跡の北東コーナー部、および煙道部が第16号住居跡の西壁を切っている。第16号住居跡より新しい。

(平面形・長軸方向) 平面形は南北にやや長い不整の長方形を呈する。長軸方向はN'-17°30' -Eである。

(規模) 長軸(南北)長で4.30m・4.17m。短軸(東西)長が4.08m・3.87mとなり、床面積は約16.14m²である。

(堆積土) 住居内堆積土は基本的には以下の3層に分けられる。

第1層：褐色のシルト層である。住居の上部全域に厚く堆積する。やや砂分が強くしまりがない。焼土粒・木炭片を少量含む。

第2層：褐色のシルト層である。住居の全域に分布する。第1層に比べて緻密でややかたい。焼土粒・木炭片をかなり含む。細砂土が部分的に混入する。

第3層：褐色のシルト層である。床面上の全域に分布する。他の層に比べてやや粘性が強い。やわらかく、ほさほさしている。焼土粒・木炭片をかなり含む。

以上の堆積土はすべて自然的營力による堆積であり、人為的な要素は認められない。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は床面より比較的緩く立ちあがる。遺存状態は非常に良好でかなり深くなっている。現存する壁高は東壁で27~29cm、西壁が24~30cm、南壁28~33cm、北壁21~28cmとなる。

〔床〕 床面はたたきしめられた痕跡もなく比較的やわらかい。凸凹はみられず、ほぼ平坦になっている。床面上からは大小14個のビットが検出されている。

最後に床面を掘り下げたところ、8~12cmの厚さをもつ黄褐色のシルト質土が検出された。掘り方の埋土と思われる。

〔柱穴〕 床面上から検出された14個のビットのうち、大きさ、深さからみて柱穴としての可能性をもつものはP₄、P₇、P₁₀、P₁₂の4個のビットに限られる。ただ、これらのビットの配置形態はかなり不整形になっており、やや重んだ台形状を呈する。また位置も床面上の南北方向に偏している。

〔カマド〕 東壁の北寄りに付設されている。袖部が崩壊していることを除けばほぼ完全な形で遺存している。主軸方向はE-11°30'~Sである。

燃焼部は床面より若干の段差をもって掘り凹められており、91×35cmの規模をもっている。焚口付近には大きさ59×41cm、厚さ3cmの固い焼土面がある。支脚は検出されていない。袖部は褐色のシルト質土を素材にしてそれを積み上げて構築している。また、間口にあたる部分には川原石が発見されている。芯材として利用していたものであろう。

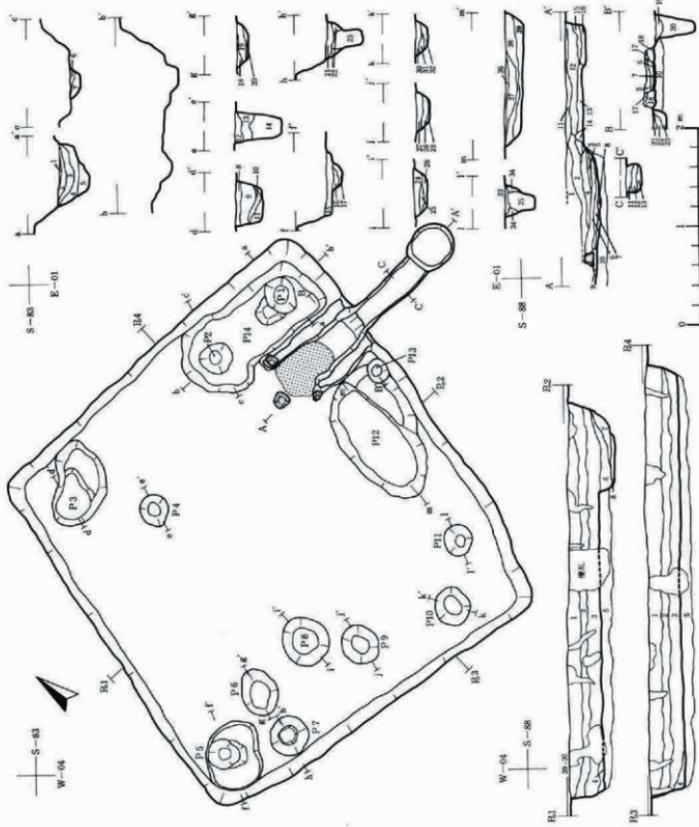
煙道部は燃焼部底面より約12cmの段差をもつ奥壁につくられる。長さは約79cmあり、ほぼ水平に移行して煙出部と接続する。煙出部には大きさが49×43cm、深さ21cmのビットが掘り込まれており、煙道端との比高は約4cmになっている。

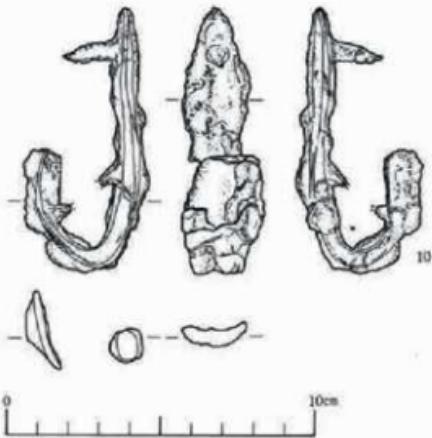
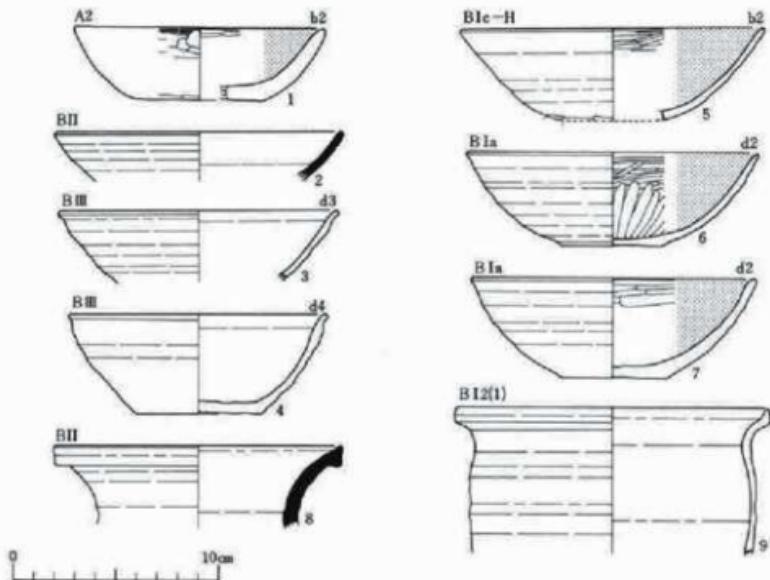
なお、燃焼部の下からにぶい黄褐色のシルト質土が認められた。これは床面下の掘り方埋土と同質であり、燃焼部そのものを意識した掘り方は検出されなかった。

〔貯蔵穴状ビット〕 貯蔵穴と断定できるものではないが、それに類したものとして、P₂とP₄がある。P₂は140×83cmの階円形を呈し、深さは19cmとなる。カマドの右脇に位置している。P₄はカマドの左脇に位置しており、157×67cmの隅丸長方形を呈する。深さは20cmとなる。P₂、P₄とも一般的な貯蔵穴とは形態が異なること、深さが浅いことに問題が残り、確証に欠ける。

〔出土遺物〕 出土遺物には土器と鉄製品があり、土器は环・甕・壺の3器種に類別される。遺物は、カマドの周囲より集中して出土しているが絶対量は少ない。

环形土器（第55図） 环には、A類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）、B II類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。





第55図 第14号住居跡 出土遺物

〈環A類〉（第55図1） 平底のもの（A 2類）が破片でかなり出土している。1は器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するものである。外面の調整は口縁部が横ナデ、体部より底部がヘラケズリによっており、内面は全面にヘラミガキが施されている。

〈環B I類〉（第55図5～7） B I類の環には、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を加えないもの（B I a類）と再調整を施すもの（B I c類）

とがある。

B I a類の環（6・7）は、器形が共通しており、器高が普通で底径が小さく、体部がやや丸

味をもって外傾するものである。

B Ic類の环(5)には、体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。底部を欠くため再調整の部位は不明である。器高が低くて底径が小さく、体部はやや丸味をもって外傾する。

〈环B II類〉(第55図2) B II類の环は回転糸切り無調整のものである。すべて細片であり全体の器形を知りえるものは出土していない。

〈环B III類〉(第55図3・4) 回転糸切り無調整のものである。器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの(3)と体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(4)とに分けられる。

壺形土器(第55図) 壺にはA類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)とB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とがある。

〈壺A類〉すべて圓化不能の細片である。大形の壺の体部片がほとんどを占める。

〈壺B I類〉(第55図9) B I類の壺には大形のものと小形のものとがある。いずれも口縁部に最大径をもつものである。9は口縁部に最大径をもつ小形の壺(B I 2(1)類)で、口縁部は短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。全面ロクロ調整である。

壺形土器(第55図8) B II類(ロクロ使用で還元炎焼成)に属す口縁部のみの破片である。全体の器形は不明である。

鉄製品(第55図10) U字形にまげられたもので、3箇所に釘状の突起がついている。中央の一部では棒状を呈し、両端はやや内側に弯曲する坂状のものになっている。性格は不明である。長さは8.6cmを計る。なお、同様の製品が江刺市鴻之巣館遺跡より出土している。

第15号(EH09)住居跡

〔造構確認面〕 IIa層のにぶい黄褐色土層を3~4cm掘り下げて造構の存在を確認している。なお、造構の掘込面はIIa層の上面である。

〔保存状況〕 西側の約半分は路線敷外にわたるために調査していない。調査区に限れば、桑の木による攪乱部分が隨所にみられるもののほか原形をとどめている。

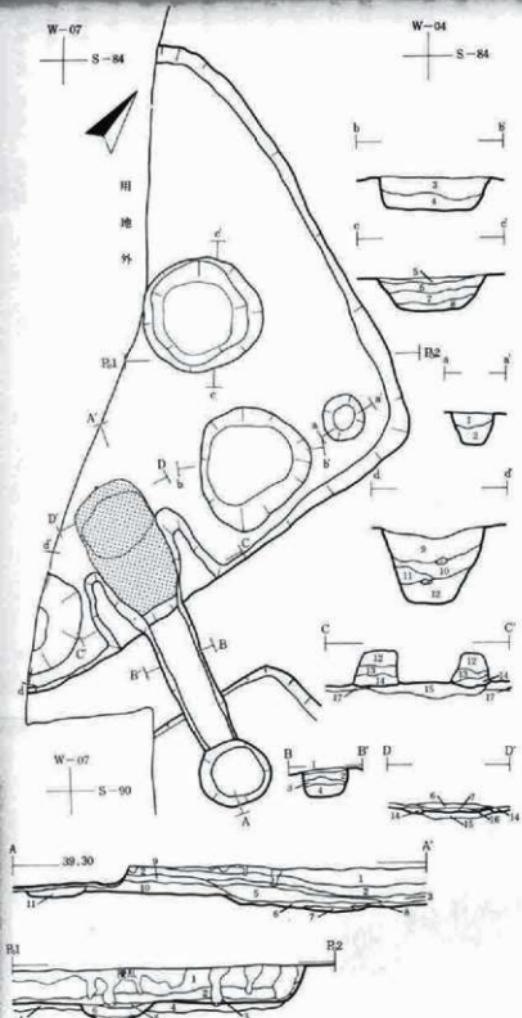
〔重複関係〕 第17号住居跡と重複関係にあり、それよりも旧い。

〔平面形・長軸方向〕 平面形は部分発掘のため不明である。推定では正方形を呈するものと思われるが確証に欠ける。長軸方向も不明である。

〔規模〕 規模も同様に不明である。北西のコーナーの一部が検出されていることから推定すれば一辺4m前後となる。

〔堆積土〕 造構内堆積土は以下の2層に大別される。

第1層：褐色のシルト層である。上部は桑木根によりかなり攪乱をうけている。住居の全域



層No	土 色	土 性	その他の
第 1 層	褐色(10Y R4/4)	シルト	
第 2 層	にふい・黄褐色(10Y R4/3)	#	塊土粒・木炭粒を少量含む
# 3	# (#)	#	粘一塊状の塊土をかなり含む
盛り方理土	(10Y R5/4)	#	塊状構
P 3	5		ピットNo.5層と同じ
# 6			No.6層 =
# 7			No.7層 =
カ マ フ			
1			住居用堆積土No.1層と同じ
2			# No.2 層 =
3			# No.3 層 =
4	暗赤褐色(L5Y R3/3)	シルト	はさばさした塊土
5	# (5Y R3/3)	#	やや粘性がある
6	# (15Y R3/4)	#	ややしまりのある塊土
7	赤褐色(L5Y R4/6)	#	水床部
8	黒褐色(5Y R2/2)	粘土質シルト	木炭粒・灰を多量に含む
9	暗赤褐色(L5Y R3/4)	シルト	はさばさしている
10	# (5Y R3/4)	#	木炭粒・灰を含む
11	黒褐色(15Y R2/2)	粘土質シルト	塊状の塊土を含み、ねばりがある
12	にふい・黄褐色(10Y R4/3)	シルト	塊土粒を少量含む
13	褐 色(10Y R4/4)	#	ややぼかはさしている
14	にふい・黄褐色(10Y R4/3)	#	混入物なし
15	# (#)	#	細砂を混入する
16	暗赤褐色(5Y R3/4)	#	塊土粒・木炭粒を多量に含む
P 1			
1	褐 色(10Y R4/4)	シルト	微量の木炭粒を含む
# 2	にふい・黄褐色(10Y R4/3)	#	
P 2	3	褐 色(10Y R4/4)	#
# 4	# (#)	#	はさばさしている
P 3	5	褐 色(10Y R3/4)	#
# 6	褐 色(10Y R4/4)	#	塊土粒を少量含む
# 7	# (15Y R4/4)	粘土質シルト	塊土粒・木炭粒を少量含む
# 8	# (15Y R4/3)	#	はさばさしている
P 4	9	暗赤褐色(5Y R3/4)	#
# 10	暗褐色(15Y R3/3)	シルト	塊土粒・木炭粒を少量含む
# 11	# (15Y R3/4)	#	混入物なし
# 12	灰 黒 褐 色(10Y R4/2)	#	塊状構



第56図 第15号住居跡

を厚く覆う。混入物はほとんど認められない。

第2層：にぶい黄褐色のシルト層である。床面上の全域に分布する。第1層に比べてやや粘性がある。焼土粒・木炭粒をかなり含んでいる。

第1層、第2層とも住居廃絶後の自然的營力による堆積層と考えられる。

〔壁〕 地山を壁としている。床面よりの立ち上がり角度は比較的緩い。調査区域内での現存する壁高は東壁で17~29cm、北壁が29~39cmとなりかなり深い。

〔床〕 床面は部分的に凸凹がみられるものの、たたきしめられてかなり固い面をなしている。床面上からは大小4個のピットが検出されている。

最後に床面を掘り下げたところ5~10cmの厚さをもつにぶい黄褐色土層があらわれた。住居掘り方の埋土と思われる。

〔柱穴〕 部分的な調査に限られるため、実体はまったく不明である。床面上に検出された4個のピットのうち、柱穴の可能性をもつものはその規模からP₁に限られ、住居全域での配置形は推定不能である。

〔カマド〕 東壁に付設されている。P₁は南東のコーナー部分に位置するものと予想されることから、東壁での偏位はやや南に寄るものと推定される。一部路線敷外にわたったが、ほぼ完掘しており、全体的に保存状況は良好である。主軸方向はE-28°-Sである。

燃焼部は107×61cmの範囲で、床面より若干掘り凹めてある。焚口付近には58×45cmの範囲で厚さ2~4cmの固い焼土面をもつ。支脚は発見されていない。袖部は地山のシルト質土を素材にしており、それを水平に横みあげて構築している。

煙道部は燃焼部底面より7cmほどの段差をもつ奥壁に作られている。長さは約113cmあり、底面はほぼ水平に移行して煙出部と接続する。煙出部には59×55cmで深さ約23cmのピットが掘られている。煙道端との比高は4cmと少ない。

なお、燃焼部底面の下から褐色のシルト層が検出されている。これは、床面下の掘り方埋土とは異なっており、燃焼部そのものを意識した掘り方の埋土と思われる。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴にはP₁がある。これはカマド右脇に位置しており、推定で直径約85cmの円形を呈し、深さは63cmである。堆積土は3層に分けられる。上層は暗赤褐色の粘土質シルト層で、粒~塊状の焼土・木炭片・灰を多量に含む。中層は暗褐色のシルト層で、焼土粒・木炭粒を少量含む。下層は灰黄褐色のシルト層で、塊状の堆積状況を示す。P₁のほかにP₂、P₃があり、規模・形状が類しているものの、とともに貯蔵穴としての確証に欠ける。

〔出土遺物〕 当住居の出土遺物には土器と鉄製品がある。土器には、环・高台付环・甕・壺の各器種があり、カマドの周囲を中心に出土している。

环形土器（第57図、第58図） 环には、B-I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）とB

II類（ロクロ使用で還元炎焼成）、およびB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈坏B I類〉（第57図4～7）B I類の坏は回転糸切り無調整のもの（B I a類）に限られる。形態上の特徴によって、器高が高くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの（4～6）と、器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの（7）とに分けられる。

〈坏B II類〉細片で2片出土するのみで図示不能である。

〈坏B III類〉回転糸切り無調整のものである。B I類の坏と器形が共通しており、器高が高くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの（4）と器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの（5）とに分けられる。

高台付坏形土器（第57図、第58図）高台付坏には、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）とB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

〈高台付坏B I類〉（第57図3・8・9）高台部が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施して周縁をロクロ調整するもの（B I 2①類）と、高台部が直立ぎみに短く外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの（B I 1③類）とに分かれる。

B I 1③類の高台付坏（8）は、体部より口縁部までやや丸味をもって立ちあがるもので、極端に器高の高い塊形を呈する。器面調整は内外両面にヘラミガキを施し、黒色処理を加えていく。なお、3はB I 1③類の高台付坏の坏部片と思われる。

B I 2①類の高台付坏（9）は、坏部を欠き、全体の器形は不明である。

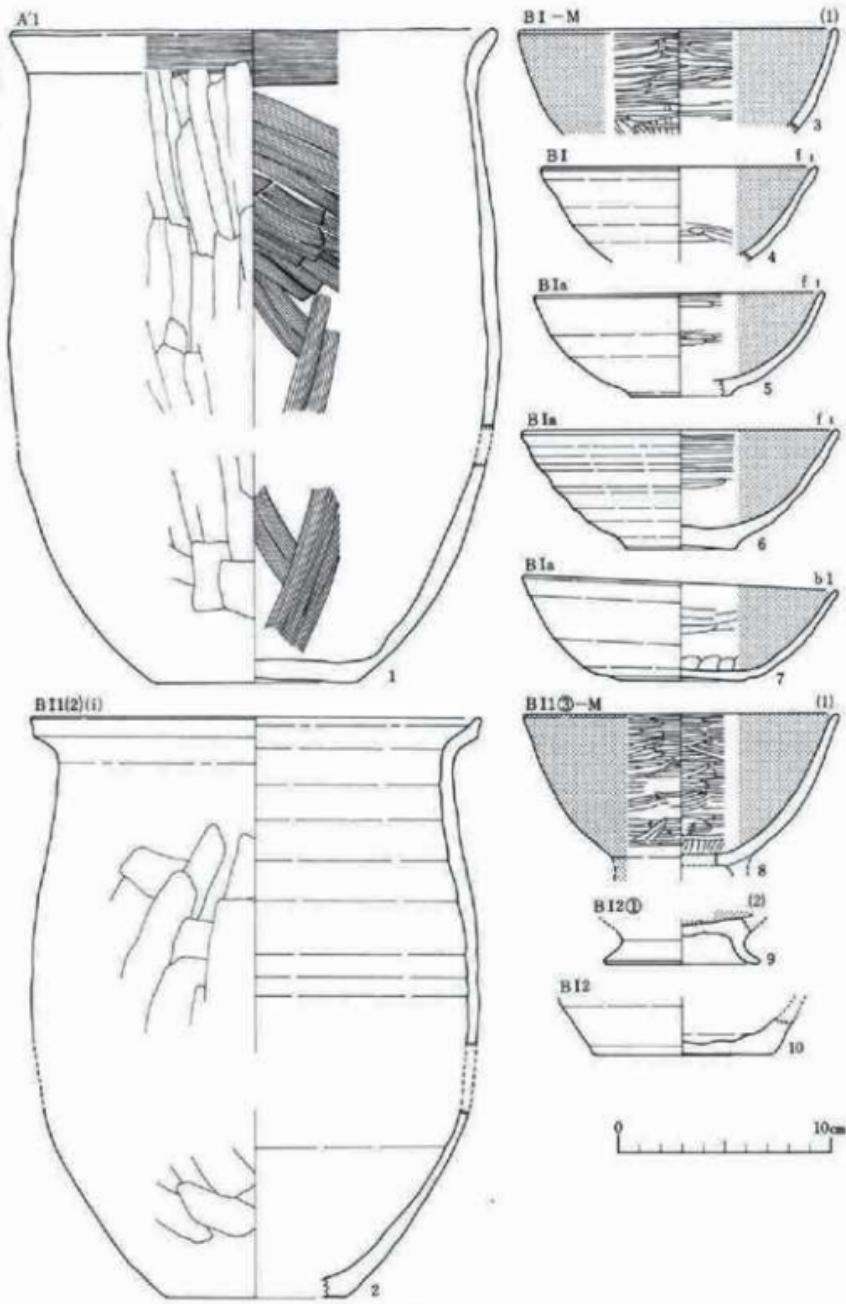
〈高台付坏B III類〉（第58図6・7）高台部が極端に外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施し、周縁をロクロ調整するもの（B III 2①類）と、高台部が短く外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの（B III 1③類）とがある。

B III 2①類の高台付坏（7）は、器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾する坏部をもつ。B III 1③類の高台付坏（6）は坏部を欠くため全体の器形は不明である。

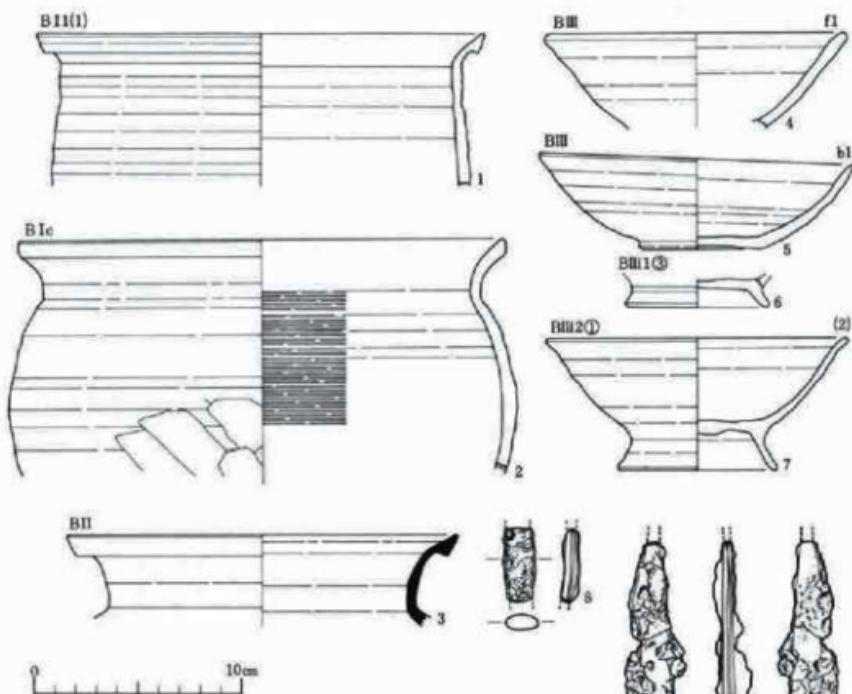
變形土器（第57図、第58図）變には、A類（ロクロ不使用で酸化炎焼成）、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）およびB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈變A類〉（第57図1）A類の變は1点のみで、体部に最大径をもつ大形のものである。口縁部は短く直立ぎみに外反し、体部はゆるやかに脹んで底部へと至る。器面調整は口縁部が横ナデ、体部から底部に至るまで外面はヘラケズリ、内面はヘラナデによっている。調整は粗い。

〈變B I類〉（第57図2、第58図1）B I類の變は大形のもので、最大径を口縁部にもつもの（B I 1(1)類）と体部にもつもの（B I 1(2)類）とがある。B I 1(2)類の變（第57図2）は1と器面が近似しており、1のロクロ版である。口縁部は短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。器面調整は体部と底部の外面にヘラケズリが施される。



第57図 第15号住居跡 出土遺物 (1)



第58図 第15号住居跡 出土遺物（2）

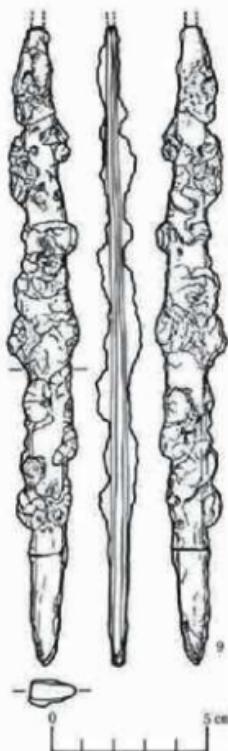
B I 1(1)類の甕（第58図1）は口縁部が短く外反し、口唇部は下方へ挽き出すものである。体部の最大径は中央付近にもつもとの思われる。

なお、第57図10は小形の甕の底部片と思われる。全面ロクロ調整で底部には糸切痕を残す。

〈甕B II類〉 体部の細片が少量出土している。図示可能のものはなく、全体の器形は不明。

壺形土器（第58図） 壺にはB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものとB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属するものがある。

〈壺B I類〉（第58図2） 口径より器高が低く、体部に最



大径をもつものである。口縁部は長く外反し、体部は大きく脹み中央付近に最大径をもつ。外面の調整は口縁部から体部上半が印クロナデ、体部下半がヘラケズリによっており、内面は体部上半に刷毛目状ロクロナデが施されるほかはロクロナデで整えている。

〈壺口II類〉（第58図3） 広口壺の口縁部と推定される。肩部で立ち上がり、口縁端で大きく外反する口縁部をもつ。全面ロクロ調整である。

鉄製品（第58図8・9） 9は刀子である。刃部端を欠くが現存長で20.9cmを計る大形のものである。関は背側にのみ段をもつものと思われ、約1.3cmの関幅をもつ。刃部は幅0.6~1.4cmを計り先端に向って細くなっている。茎も同様に先端に向って茎幅が狭くなっている。背幅は約0.4cmの平造りでかなり薄くなっている。8は両端を欠く細長い坂状のものである。刀子の身の一部とも思われるがはっきりしない。現存長で2.4cm、幅1.0cmを計る。

第16号（E 150）住居跡

〔遺構確認面〕 遺構の掘込面はIIa層の上面である。実際にはIIa層を若干掘り下げて遺構の存在を確認している。

〔保存状況〕 当住居は2棟の住居跡によって切られており、かなりの部分が削損をうけている。しかし、後世の擾乱等はみられず、全体のプランはほぼ正確に把握できた。

〔重複関係〕 第14号住居跡および第18号住居跡と重複関係にある。当住居の西壁の一部が第14号住居跡の東壁や通道・突出部によって切られており、南東コーナー部が第18号住居跡の北西コーナー部によって切られている。第14号住居跡および18号住居跡より旧い。

〔平面形・長軸方向〕 平面形はほぼ正方形を呈する。長軸方向は南北方向にとって、N-3°-Eとなる。

〔規模〕 南北長で4.38m・4.15m、東西長が4.32m・4.10mとなり、床面積は推定で約17.02m²である。

〔堆積土〕 遺構内堆積土は基本的には次下の2層に分けられる。

第1層：にぶい黄褐色のシルト層である。住居の上部をほぼ水平に覆う。粗い粒塊状の堆積状況を示す。微量の木炭粒・焼土粒を含む。

第2層：にぶい黄褐色のシルト層である。床面上の全域に厚く堆積する。第1層に比べて緻密でかなり固い。焼土粒・木炭粒はかなり含まれる。

なお、上記の第2層は住居廃絶後に自然的な當力で堆積したものと思われる。しかし、第1層は粒～塊状の堆積状況を示しており、人為的な堆積層と推定される。

〔壁〕 地山を壁としている。床面よりの立ち上がり角度は比較的緩い。現存する壁高は東壁で24~32cm、西壁が20~23cm、南壁26~30cm、北壁20~28cmとなっている。

【床】 全体の約3分の1にあたる部分が第18号住居跡によって削損を受けている。残存部分はほぼ平坦になっており、比較的やわらかい。床面上からは大小合わせて9個のビットが検出されている。なお、第18号住居跡の床面上から、当住居にかかるビットは発見されていない。

最後に床面下を掘り下げたところ6~14cmの厚さをもつにぶい黄褐色土が検出された。掘り方の埋土と思われる。貼り床とすることのできる層は認められない。

【柱穴】 ほば柱穴とすることのできるものにはP₃とP₅があり、P₁も柱穴の可能性をもつ。これらと対になるビットは、配置の規則性からみれば第18号住居跡の床面上に求められるが検出されていない。第18号住居の掘り方によって破壊された可能性が強い。

なお、P₃とP₅の埋土断面の観察によれば、柱を抜きとった痕跡を残している。

【カマド】 東壁の南寄りの部分に構築されている。煙道部・煙出部の部分は検出時の削平および搅乱によって破壊されている。また、燃焼部の右側は第18号住居によって切りとられている。遺存状況はきわめて不良である。主軸方向はE-12°-Sである。

燃焼部は72×(38)cmの規模をもち、床面との段差は認められない。焚口付近には39×(38)cmの範囲で厚さ2~3cmのかたい焼土面を有する。袖は地山のシルト質土を素材にして構築されている。右袖は遺存しない。

煙道部は燃焼部底面と約9cmの段差をもつ奥壁に作られ、煙道部底面は上方に向かって傾斜している。煙道部・煙出部は検出作業時に削平されており、規模等は不明である。

なお、燃焼部底面の下には床面下の掘り方とは異なる掘り方が検出されている。

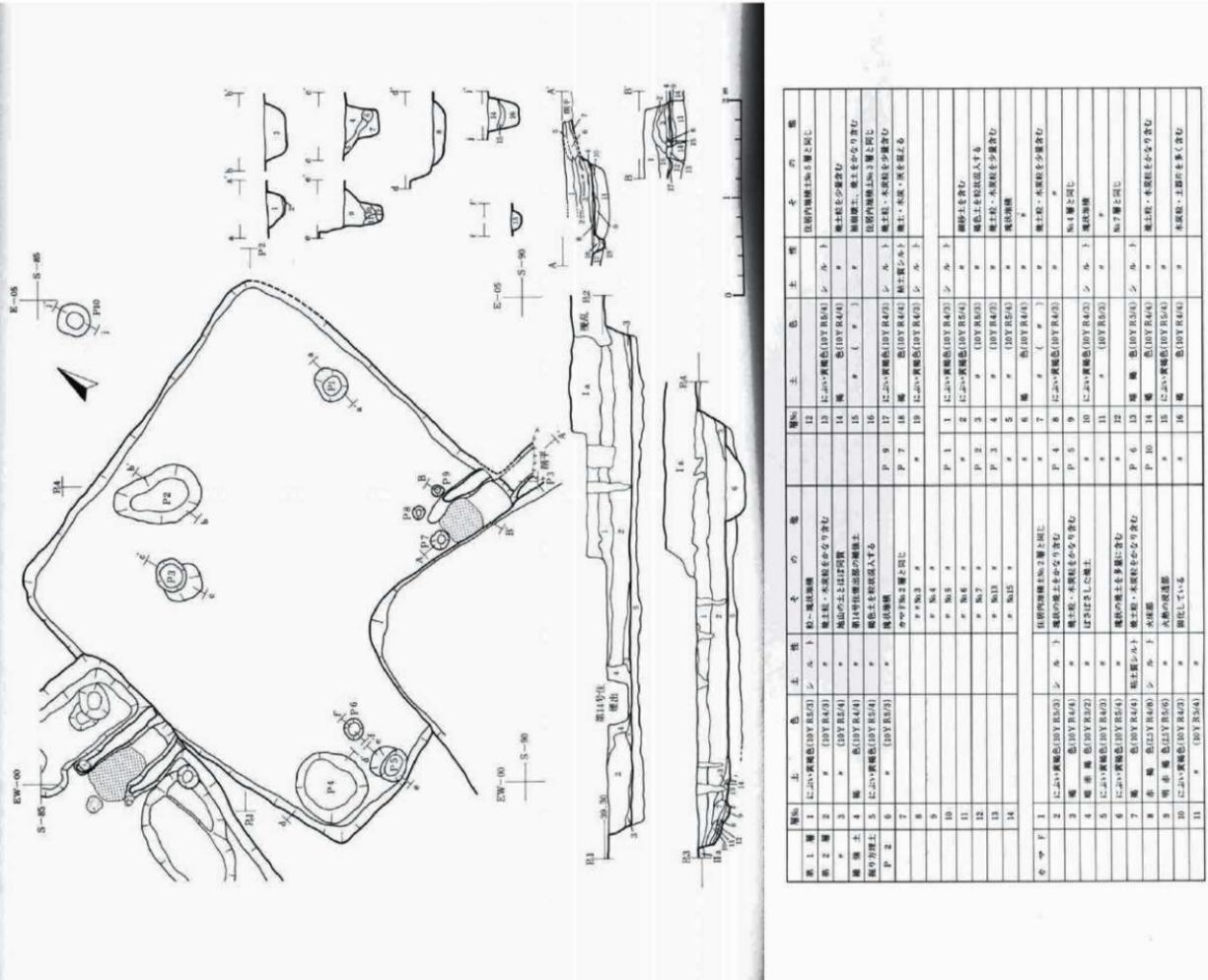
【貯蔵穴状ビット】 貯蔵穴として認定できるビットは検出されていない。P₂とP₃がその可能性をもつが、P₂は住居の廃絶以前に埋め戻されており、P₃は深さが足りない。

【その他のビット】 竪穴外の北壁外側にP₁が検出されている。当住居に伴うものであるかは不明である。

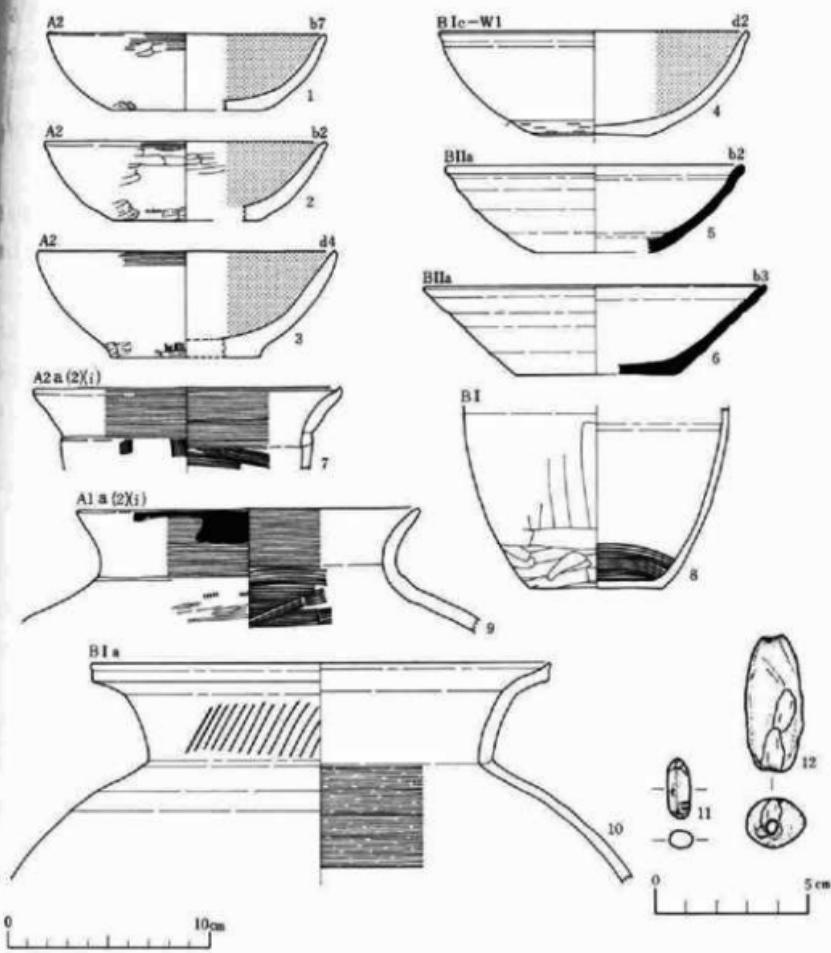
【出土遺物】 当住居跡の出土遺物には、土器・土錐・石製品がある。土器は壺・甕・壺の3器種に分けられる。カマドの周囲から比較的多く出土している。

坏形土器（第60図1~6） 壺にはA類（ロクロ未使用で酸化炎焼成）、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）、およびB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）とがある。

〈壺A類〉（第60図1~3） A類の壺はすべて平底のもの（A 2類）である。体部の形態上の特徴によって、それぞれが類別される。器高が低くて底径の小さなものは、体部がやや丸味をもつて外傾するもの（1）と体部がややふくらみをもつて外傾するもの（2）とがある。また、器高が普通で底径の小さなものは、底部との境にくびれをもちややふくらみをもつて立ちあがるもの（3）がある。外面の調整は、口縁部が横ナデ、体部はヘラミガキによっているが、体部下端より底部にかけてはヘラケズリのままでとどめている。前段階の調整である刷毛目が観



第16号地質図



第60図 第16号住居跡 出土遺物

察されるもの（2・3）もある。内面は全面ヘラミガキで整えている。

〈环B I類〉（第60図4）底部を回転糸切りで切り離した後に再調整を施すもの（B I c類）である。再調整は体部下端より底部全面にかけて回転ヘラケズリを施している（W手法）。形態上の特徴は、器高が普通で底径が小さく、体部がやや丸味をもって外傾するものである。

〈环B II類〉（第60図5・6）B II類の环は回転糸切り無調整のもの（B IIa類）に限られる。

形態上の特徴によって、器高が普通で底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの(5)と、器高が普通で底径が大きく、体部が大きく開いて直線的に外傾するの(6)とに分けられる。

壺形土器 (第60図7・8) 壺にはA類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)とBⅠ類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とがある。

〈壺A類〉 (第60図7) A類の壺は中形のもの(A2類)が1点出土している。口縁部は長く外反し、頸部にはやや形式的な段を有する。体部最大径を上端付近にもつ。器面調整は口縁部が横ナデ、体部上半外面がナデ、内面がヘラナデによっている。

〈壺BⅡ類〉 (第60図8) BⅡ類の壺は小形のもの(BⅡ2類)に限られる。口縁部から体部上半を欠くが口縁部に最大径をもつものと思われる。体部の最大径は中央付近にある。器面調整は体部上半がロクロナデ、体部下半が外面にヘラケズリ、内面に刷毛目を施している。底部外面はヘラケズリによっている。

壺形土器 (第60図9・10) 壺には、A類(ロクロ未使用で酸化炎焼成)とBⅠ類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とがある。

〈壺A類〉 (第60図9) A類の壺は大形のもの(A1類)が1点出土している。口縁部は単純に外反し、頸部にはやや形式的な段を有する。体部はやや肩の張る球形を呈するものと思われる。口縁部には丹が塗布された痕跡が認められる。器面調整は口縁部が横ナデ、体部上半外面が刷毛目+ヘラミガキ、内面が刷毛目によっている。

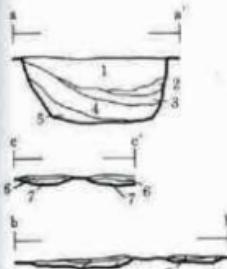
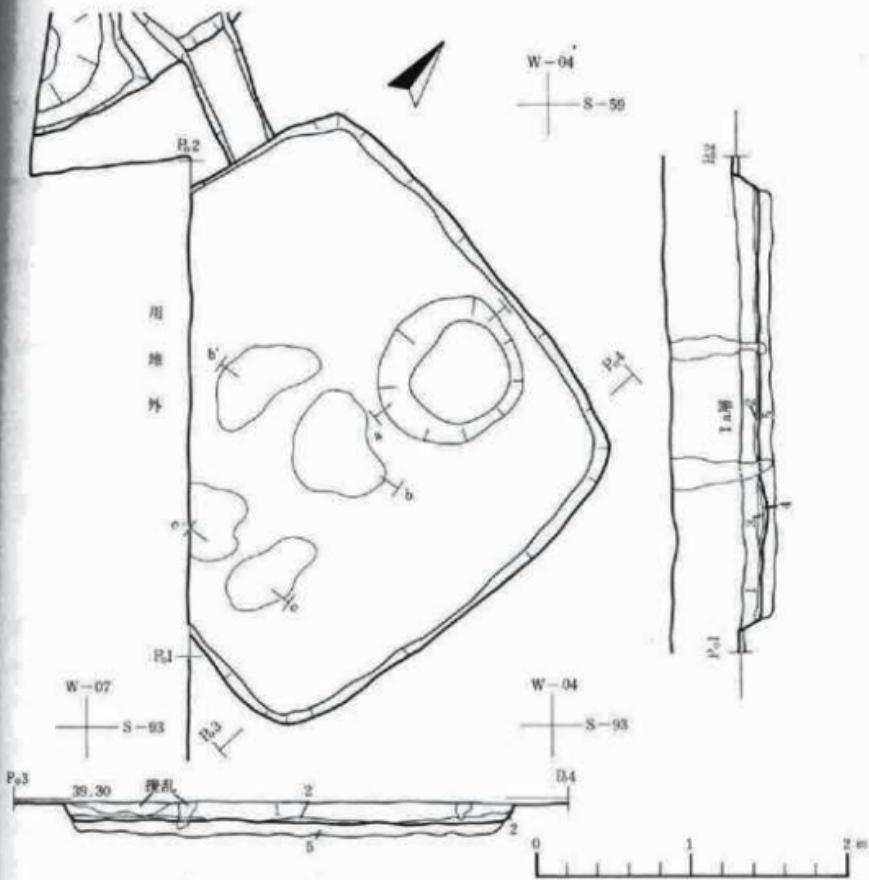
〈壺BⅠ類〉 (第60図10) 口頭部が、肩部より直立ぎみに外傾し口縁端で強く外反する大形のもので、口唇部は上方に挽き出している。体部はほぼ真珠を呈し、最大径を中央付近にもつものと思われる。外面の調整は、口縁部が平行文様工具による叩きしめ+ロクロナデ、体部上半がロクロナデ、体部下半がヘラケズリによっている。内面は体部上半に刷毛目状のロクロナデが施されるほかロクロナデで調整している。

土鍤 (第60図12) 中央部でやや膨む管状のものである。長さ5.4cm、最大径1.9cmを計り、中央に約0.4cmの貫通孔がある。器面はオサエで整えられているが部分的にヘラミガキが施されている。

石製品 (第60図11) 細長い棒状のもので、断面は円形を呈する。石質は長石であり、石や木片に文字を書くことができる。筆記用具として使われた可能性をもつ。長さは2.1cmで、直径は約0.7cmを計る。

第17号(EJ09)住居跡

〔遺構確認面〕 耕作土(Ia層)を除去して遺構を確認している。耕作土下にIb層は検出され



	層 No.	土 色	土 性	そ の 他
第 1 層	1	にごい黄褐色(10Y R4/3)	シルト	緻密でかなりかたい
第 2 層	2	褐 色(10Y R4/4)	粘土質シルト	他土粒・木炭粒をかなり含む
地 土	3			No. 6 層と同じ
"	4			No. 7 "
掘り方理土	5	にごい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	塊状堆積
<hr/>				
P1. 第1層	1	褐 色(10Y R4/4)	シルト	緻密でかたい
"	2	にごい黄褐色(10Y R4/3)	"	はさはさしている
P1. 第2層	3	褐 色(7.5Y R4/4)	"	
"	4	" (")	"	粘-塊状の乾土を多量に含む
P1. 第3層	5	" (7.5Y R4/6)	粘土質シルト	灰・細砂を含む
地 土	6	明赤褐色(5Y R5/8)	シルト	
"	7	赤 色(2.5Y R4/6)	"	

第61図 第17号住居跡

す直接IIa層になっている。遺構はこの層の上面より検出された。

【保存状況】 桑の木による擾乱以外には破壊をうけておらず、ほぼ原形をとどめている。なお、北西のコーナー部分は路線敷外にわたるため、調査していない。

【重複関係】 第15号住居跡と重複関係にある。第15号住居跡の煙道・煙出部が当住居の西壁および床面の一部に切られている。第15号住居跡よりも新しい。

【平面形・長軸方向】 平面形は正方形を呈する。長軸方向は東西方向にとってN—76°30'—Wとなる。

【規模】 東西長で3.24m・3.13m、南北長が3.01m・2.89mとなり、床面積は約9.05m²である。

【堆積土】 遺構内堆積土は2層に分けられる。

第1層：にふい黄褐色のシルト層である。住居の全域に厚く堆積し、非常に緻密でかたくしまっている。焼土粒・木炭粒を少量含むほか、細砂土を混入する。

第2層：褐色の粘土質シルト層である。床面上の一定部分に薄く堆積する。ほさほさしており粘性がある。焼土粒・木炭粒をかなり含む。

第1層、第2層とも自然的な営力によって堆積した層と思われる。

【壁】 地山を壁としている。床面よりの立ちあがり角度は比較的緩い。壁の高さは低く、他の遺構と明確に区別される。現存する壁高は東壁で11~17cm、西壁が12~14cm、南壁8~11cm、北壁17~20cmとなっている。

【床】 床面は部分的な凸凹はみられるが全体的にはほぼ平坦である。とくにたたきしめられた痕跡もなく比較的やわらかい。床面上からは大形のビットが1個のみ検出されている。ほかに、かたい焼土面が4ヶ所ほどみられる。

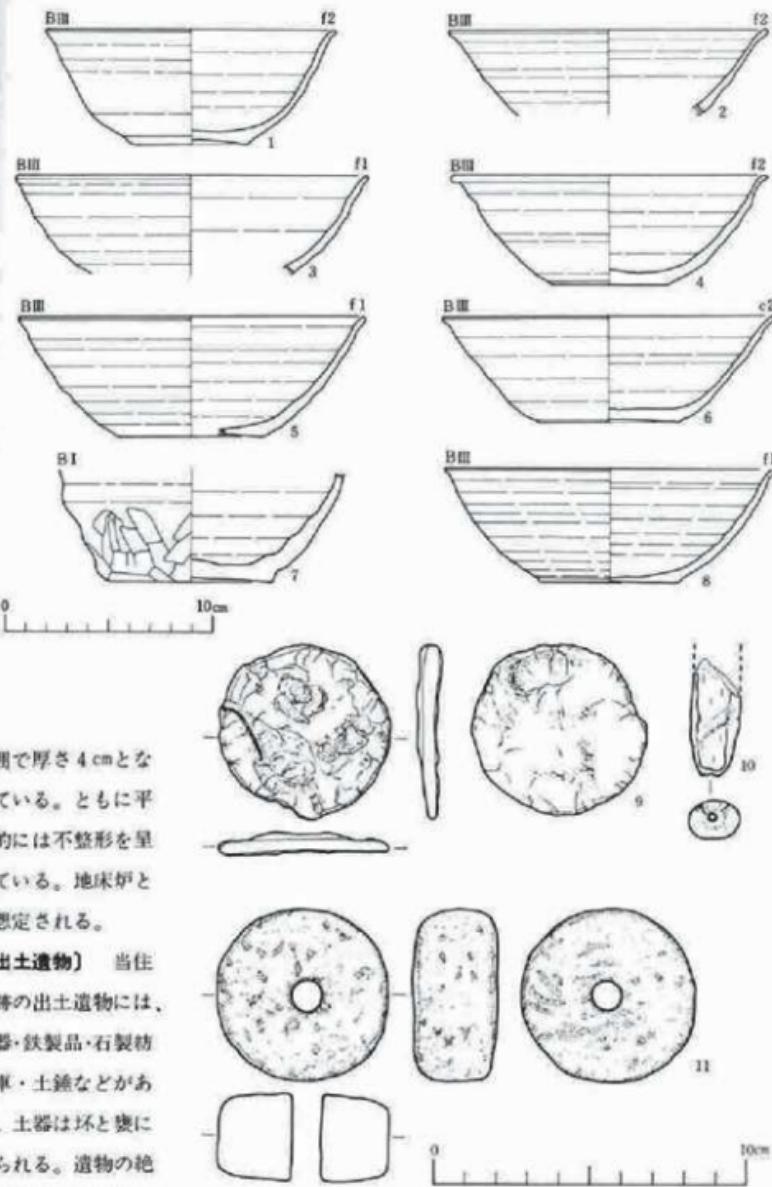
なお、床面の下から6~10cmの厚さをもつにふい黄褐色シルト層が検出されている。掘り方の埋土と思われる。

【柱穴】 柱穴とすることのできるビットはまったく発見されていない。

【カマド】 カマドは検出されなかった。これは、そもそも付設されていないものなのか、それとも用地外に構築されているものなののかは不明である。用地外に認められるとすれば南壁が有力である。

【貯蔵穴状ビット】 貯蔵穴として断定はできないが、その可能性をもつものとしてP₁がある。埋土は3層に分けられる。上層は褐色のシルト層で焼土粒・木炭粒を少量含む。粉状の緻密な堆積状況を示す。中層は褐色のシルト層で、多量の焼土塊・木炭片を多量に含む。下層は褐色の粘土質シルト層で、灰・細砂を混入する。

【その他の施設】 床面上に焼土遺構が4個所検出されている。F₁は66×65cmの範囲で厚さ6cm、F₂が35×76cmの範囲で厚さ4cm、F₃が32×64cmの範囲で厚さ6cm、F₄が45(+2)×47cmの



範囲で厚さ4cmとな
っている。ともに平
面的には不整形を呈
している。地床炉と
も想定される。

〔出土遺物〕 当住
居跡の出土遺物には、
土器・鉄製品・石製纺
錐車・土鍤などがある。
土器は壺と甕に
限られる。遺物の絶
対量は極端に少ない。

第62図 第17号住居跡 出土遺物

坏形土器 (第62図) 坏にはB I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理)とB III類(ロクロ使用で酸化炎焼成)がある。

〔坏B I類〕 図示不能の細片で少量出土している。すべて回転糸切り無調整のものである。

〔坏B III類〕 (第62図1~6、8) 回転糸切り無調整のものである。形態上の特徴によって3分される。器高が高くて底径の小さなものは、体部がやや丸味をもって立ちあがるもの(1・2・4)と体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(3・5・8)とがあり、器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの(6)もある。

壺形土器 (第62図7) 壺は、B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)に属するものに限られる。大形のものと小形のものがある。ほとんどが体部片のため作図不能である。7は小形の壺の底部片である。底部外面には糸切り痕を残し、体部下半外面には、ナデに近い鞋いヘラケズリが施されている。口縁部に最大径をもつものと思われる。

鉄製品 (第62図9) 中央にあると思われる芯棒の痕跡を確認できないが、紡錘車の円盤部分と思われる。径約5.6cmの円形を呈し、厚さ0.4cmを計る。

土鍾 (第62図10) 中央でやや脹む管状のもので、一方の先端を欠く。現存長で3.8cm、最大腹径1.6cmを計り、中央に径約0.3cmの貫通孔が入る。

石製紡錘車 (第62図11) 低い円柱形を呈するもので、上径と底径がほぼ共通する。径11cm、厚さ5.5cmを計る。複輝質安山岩の多孔質溶岩塊を加工したものである。

第18号(E-J50)住居跡

〔遺構確認面〕 耕作土(I a層)下に古い黄褐色土(IIa層)を若干掘り下げて遺構を確認している。なお、I b層は検出されず、IIa層の上面まで耕作土になっている。

〔保存状況〕 東壁付近が庭木の抜根のためかなりの搅乱をうけており、煙道部・煙出部が欠損している。ほかに搅乱はみられず、遺存状態は比較的良好である。

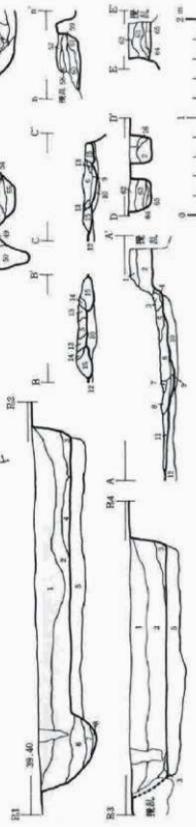
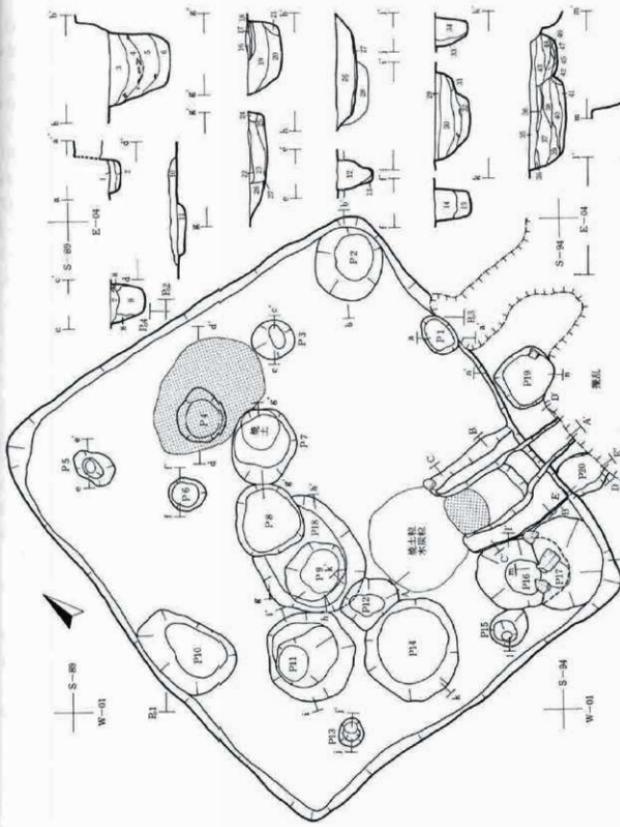
〔重複関係〕 第16号住居跡と重複関係にある。当住居の北西コーナーの部分が第16号住居跡の南東部を切っている。第16号住居跡より新しい。

また、東壁沿いに位置するE_mの一部を切っている。しかしE_mは当住居に伴うものである可能性も残されており、遺構相互の重複関係を示すものであるかは不明である。

〔平面形・長軸方向〕 平面形は南北に若干長い長方形を呈する。正方形に近い。長軸方向はN-16°50'-Eである。

〔規模〕 長軸(南北)長で4.92m・4.80m、短軸(東西)長が4.53m・4.42mとなり、床面積は約22.12m²である。

〔堆積土〕 住居内の堆積土は基本的には以下の2層に分けられる。



番号	地名	土 帯	性 質	厚	測 定
P 1	1. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	0.7	21. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 2	2. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	0.8	22. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 3	3. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	0.8	23. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 4	4. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	0.8	24. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 5	5. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	0.8	25. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 6	6. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	0.8	26. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 7	7. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	0.8	27. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 8	8. 沿 海	色 (10Y 6/4)	砂質 カル	0.9	28. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 9	9. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	29. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 10	10. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	30. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 11	11. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	31. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 12	12. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	32. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 13	13. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	33. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 14	14. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	34. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 15	15. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	35. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 16	16. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	36. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 17	17. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	37. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 18	18. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	38. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 19	19. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	39. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト
P 20	20. 沿 海	色 (10Y 6/4)	シルト	1.0	40. 12. 黄褐色 (10Y 6/4) シルト

第1層：暗褐色のシルト層である。住居の上部には全域に分布する。緻密でかなりかたく、少量の木炭粒を含む。

第2層：褐色のシルト層である。床面上に厚く堆積する。粉状の緻密な堆積状況を示し、焼土粒・木炭粒をかなり含む。部分的に焼土・木炭の集中する個所がみられる。

なお、第1層、第2層とも住居廃絶後に自然堆積したものと思われる。

〔壁〕 地山を壁としている。床面より急角度で立ちあがる。壁はかなり深く、現存する壁高は東壁で34~42cm、西壁が36~40cm、南壁30~35cm、北壁27~40cmとなる。

〔床〕 北西部の一部分は精査の段階で4~6cmほど掘り過ぎている。基本的にはほぼ平坦になっており、とくにたたきしめられた痕跡もなく、比較的やわらかい。床面上からは大小18個のピットが検出されているが、同時に使用されたものではなく、相互にかなりの重複関係がみられる。

最後に、床面を掘り下げてにぶい黄褐色のシルト質土を検出した。掘り方の埋土と思われる。

〔柱穴〕 明確な柱痕をもつ柱穴が4個検出されている。 P_1 、 P_2 、 R_1 、 R_2 の4個は配列にも規則性がみられ、平面的には長方形を呈する。住居のプランからはやや西側にずらして配置されている。

〔カマド〕 東壁の南寄りの部分に付設されている。煙道部の一部、煙出部は庭木の抜痕によって破壊されている。主軸方向はE-16°50'-Sである。

燃焼部は床面より若干掘り下げており、103×45cmの縦にかなり長い規模をもつ。焚口付近には39×44cmで厚さ5cmの固い焼土面があり、中央やや煙道寄りの部分は4cmほどの低い段差になっている。支脚は発見されていない。袖は地山のシルト質土を素材にして構築している。最大高で11cmしかなくほとんど崩壊しているが、長さは110cmもありかなり長い。

煙道部は燃焼部底面端より10cm高い奥壁につくられており、現存する範囲では底面は水平になっている。煙出部は破壊されている。

なお、燃焼部底面の下にはにぶい黄褐色土が充填する掘り方を有する。これは床面下の掘り方の埋土と識別できることから燃焼部そのものを意識した掘り方と思われる。

〔貯蔵穴状ピット〕 貯蔵穴には P_1 、 R_1 、 R_2 がある。 P_1 は北東隅に位置しており、大きさは76×74cmで深さは60cmある。埋土は4層に分けられる。No.1層は褐色のシルト層で粉状の緻密な堆積を示している。No.2層は褐色のシルト層で、多量の土器片を含む。No.3層は褐色の粘土質シルト層で、灰・焼土粒・木炭片・土器片を多量に含む。No.4層は褐色のシルト質粘土層で、灰・焼土塊・木炭片を混入する。 R_1 と R_2 は南東隅に位置し、 R_1 が R_2 を切っている。 R_1 は塊状の堆積状況を示し、埋め戻されたものである可能性が強い。 R_2 は P_1 より新しく、埋土は4層に分けられる。No.1層は暗褐色のシルト層で、緻密でかなりかたい。少量の焼土粒木炭片を含む。

No 2層は暗褐色のシルト層で焼土粒・木炭粒をかなり含む。No 3層は褐色の粘土質シルト層で多量の焼土塊・木炭片・土器片を含む。No 4層は灰黄色色のシルト質粘土層で、かなりのねばりがある。灰・細砂土を混入する。

【その他のピット】貯蔵穴と思われるピットと柱穴を除き、床面上に合計11個のピットが残る。これらのピットを重複関係、埋土状況などから整理すると以下のようになる。

- ①P₁—上部は焼土・木炭の混合土に覆われるが、ピットの埋土にこれらの土は含まれない。
- ②P₄—床面直上より掘り込まれており、埋土上層は人為的に埋め戻した堆積層と思われる。
- ③P₇—埋土最上部の床面とほぼ水平になる面に焼土造構が認められる。
- ④P₈—P₁₈と重複関係にあり、P₁₈を切っている。埋土は自然的當力による堆積状況を示している。
- ⑤P₉—P₁₈と重複関係にあり、P₁₈に上部を切られている。
- ⑥P₁₀—西壁際にあり、埋土に壁の剥落土を混入する。
- ⑦P₁₁—埋土最上層は人為的堆積層と認定され、埋め戻した痕跡をとどめている。
- ⑧P₁₂—P₁₃およびP₁₄と重複関係にある。P₁₂の一部を切っているが、P₁₃には壁の一部を切られている。最上層は埋め戻されている。
- ⑨P₁₄—P₁₂に切られており、P₁₂と同様に最上層は人為的堆積層である。
- ⑩P₁₅—北壁の一部を削っている。掘り方によって破壊されていないことから、当住居に伴うものである可能性が強い。
- ⑪P₁₆—P₈、P₉、P₁₂と重複関係にあり、P₉、P₁₈より新しく、P₈よりは古い。堆土は自然的當力による堆積状況を示す。

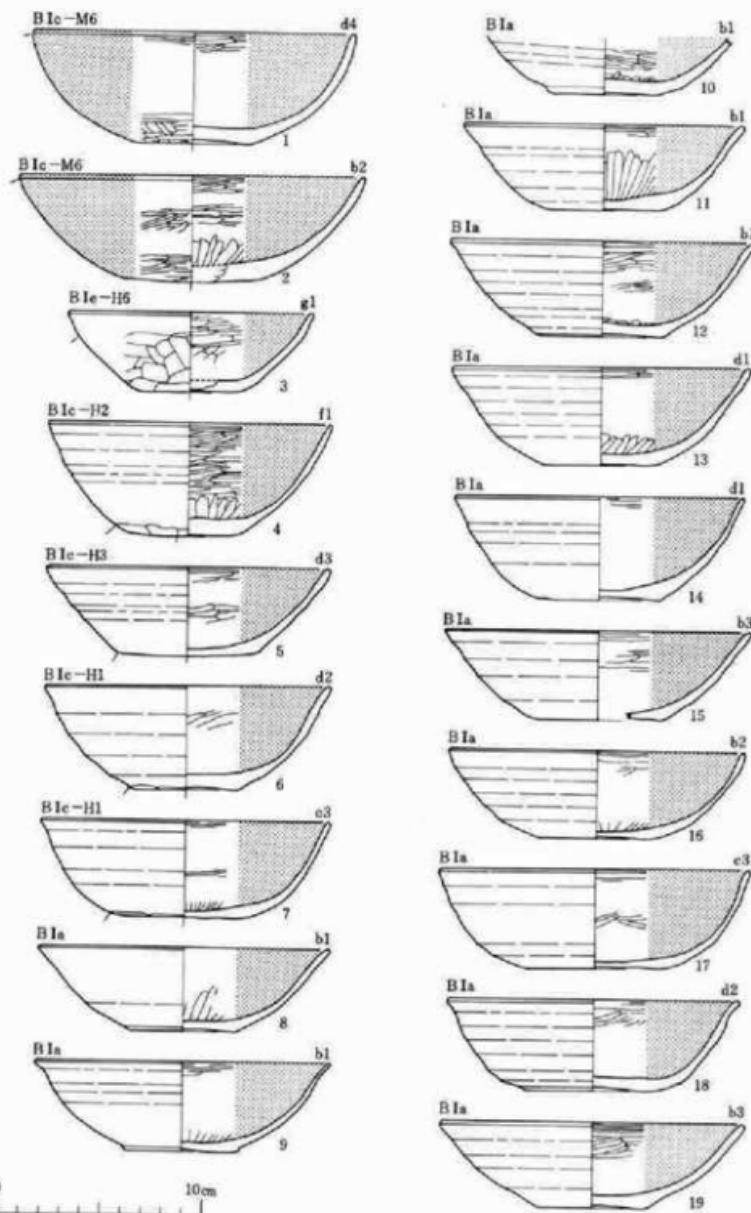
以上の事実から、当住居が廃絶される直前の段階で使用されていたものと予想されるピットにはP₈、P₉の2個のピットがあげられる。

なお、住居北西部からは第16号住居跡に伴うピットが検出される可能性をもっていたが、明確にそれと認めることのできるピットは発見されていない。

豊穴外からP₁₅、P₁₆の2個のピットが検出されている。これらは当住居に伴う可能性も残されているが、庭木の抜根によって擾乱をうけた部分に何らかの遺構が存在したこととも考えられる。P₁₆としたものは当住居の旧煙道部となることも予想されたため、それを意識した精査を行なっている。

【出土遺物】当住居跡の遺物には、土器・鉄製品・金銅製品・切子玉などがある。土器は、环・高台付环・甕・鉢の器種に分けられる。遺物の出土量は非常に多く、住居のほぼ全域より出土している。

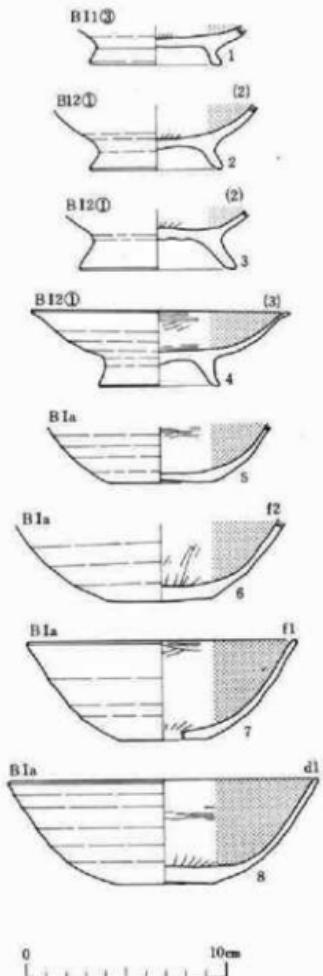
环形土器（第64図～第66図）环には、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）、B II



第64図 第18号住居跡 出土遺物(1)

類(ロクロ使用で還元炎焼成)およびBⅢ類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とがある。

〈环BⅠ類〉(第64図1~19、第65図5~8) BⅠ類の环には、底部を回転糸切りで切り離し、再調整を加えないもの(BⅠa類)、再調整を施すもの(BⅠc類)および再調整のため底部の切り離し技法が不明のもの(BⅠe類)とがある。

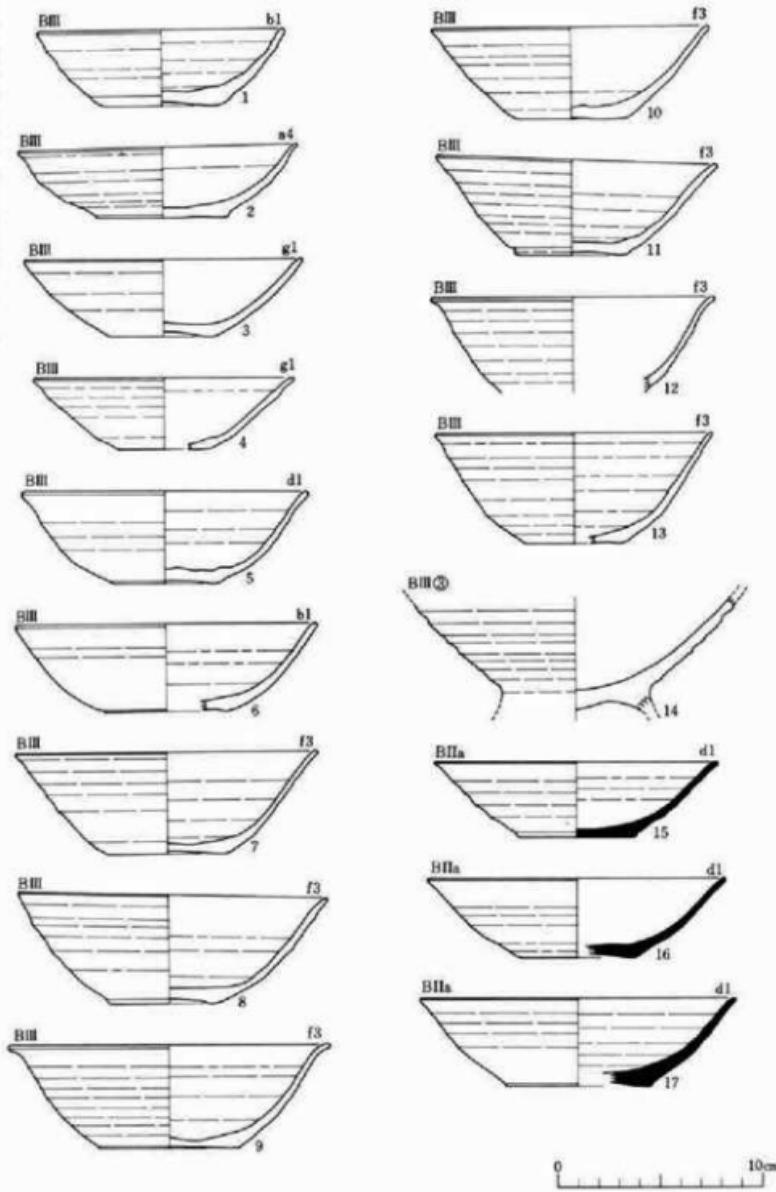


第65図 第18号住居跡 出土遺物(2)

BⅠe類の杯(3)は1点のみで、体部より底部にかけて全面に手持ちヘラケズリを施している(H₆手法)。器高が低くて底径が極端に小さく、体部は大きく開いて直線的に外傾する。

BⅠc類の环(1・2、4~7)は、再調整の手法の違いによっていくつかに細分される。外面全体に丁寧なヘラミガキを施すもの(M₄手法)(1・2)、体部下端より底部周縁に手持ちヘラケズリを施すもの(H₂手法)(4)、底部全面に手持ちヘラケズリを施すもの(5)、および体部下端より底部全面に手持ちヘラケズリを施すもの(6・7)などがある。器形はそれぞれ異なり、器高が普通で底径の小さなものは、体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(1)と体部がやや丸味をもって外傾するもの(6)とがある。器高が低くて底径の小さなものは、体部がやや丸味をもって外傾するもの(2)と体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(5)とがある。器高が普通で底径の大きなものは、体部がかなり丸味をもって立ちあがる(7)。また、器高が高くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(4)もある。

BⅠa類の杯(第64図8~19、第65図5~8)は、形態上の特徴によっていくつかに分けられる。器高が低くて底径の大きなもの



第66図 第18号住居跡 出土遺物（3）

のは、体部がやや丸味をもって外傾するもの(18)で、器高が低くて底径の小さなものは、体部がややふくらみをもって外傾するもの(8~12)、体部がやや丸味をもって外傾するもの(16)、および体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(15・19)とがある。器高が普通で底径の大きなものは、体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの(17)で、器高が普通で底径の小さなものは、体部がややふくらみをもって外傾するもの(13・14、第65図8)となる。また、器高が大きくて底径が小さく、体部がややふくらみをもって立ちあがるもの(第65図6・7)もある。

〈坏B II類〉(第66図15~17) 回転糸切り無調整のもの(B IIa類)に限られる。すべて器高が低くて底径が小さく、体部は直線的に外傾するものである。

〈坏B III類〉(第66図1~13) 回転糸切り無調整のものである。形態上の特徴によって細分される。器高が低くて底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの(1~6)、器高が低くて底径が大きく、体部がやや丸味をもって外傾するもの(2)、器高が低くて底径が極端に小さく、体部が大きく開いて直線的に外傾するもの(3~4)、器高が普通で底径が小さく、体部がややふくらみをもって外傾するもの(5)などがある。また、器高が高くて底径が小さく体部が直線的に外傾するもの(8~13)がかなり出土している。

高台付坏形土器(第65図、第66図) 高台付坏には、B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成+黑色処理)とB III類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とがある。

〈高台付坏B I類〉(第65図1~4) 高台部が短く外傾し、底部周縁をロクロ調整するもの(B I 1③類)と高台部が長く外傾し、底部に菊花状のヘラ刻みを施して周縁をロクロ調整するもの(B I 2①類)とに分けられる。

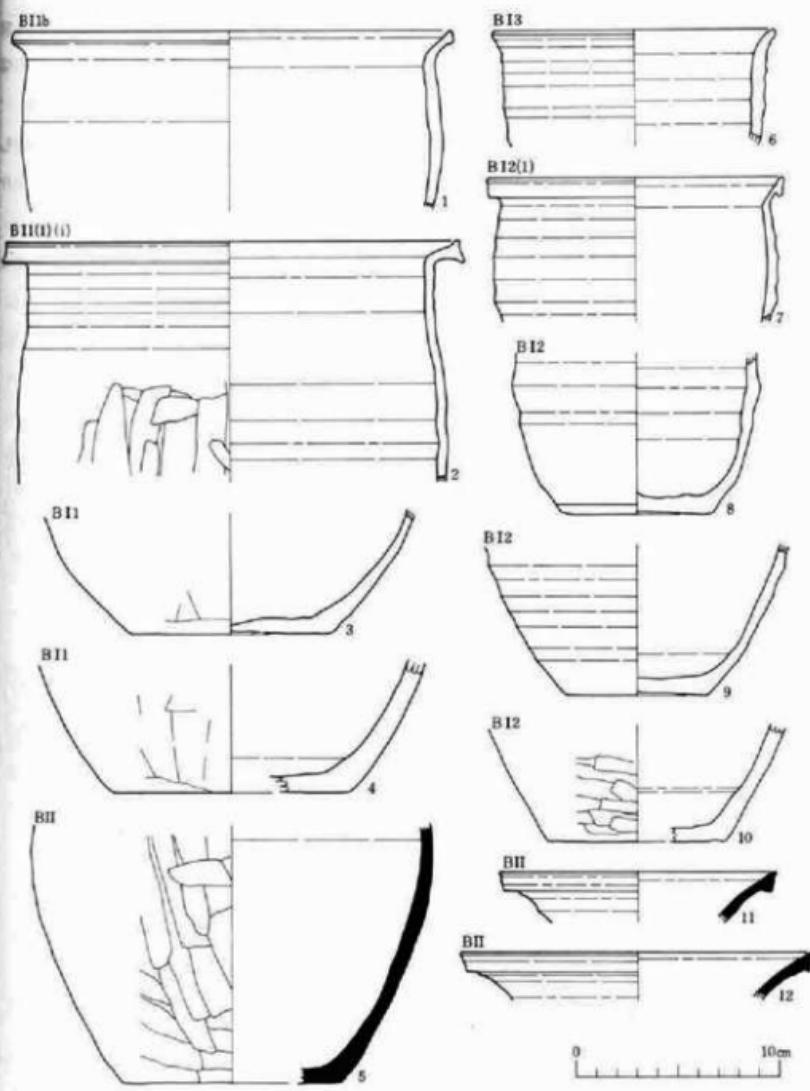
B I 1③類の高台付坏(1)は、坏部が欠損しており全体の器形は不明であるが、器高の高い壇形(11類)を呈するものと思われる。B I 2①類の高台付坏(2~4)も、4を除き坏部を欠いている。2・3は壇形の坏部(2類)と思われる。4は体部が大きく開くもので器高が極端に低い皿形の坏部(3類)をもつ。

〈高台付坏B III類〉(第66図14) かなり大形のもので、高台付盤に近い形を呈する。底部は菊花状のヘラ刻みを施し周縁をロクロ調整している。高台部・坏部の形状は不明である。

壇形土器(第67図) 壇には、B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)とがある。

〈壇B I類〉(第67図2~4、7~10) B I類の壇は器形の大小によって2分される(B I 1・B I 2類)が、すべて最大径の位置は口縁部にもつもの(11類)である。

B I 1(1類)の壇(2)は、口縁部が短く強く外反するもので口唇部は上下に挽き出している。体部はゆるやかに脹み、中央付近に体部最大径をもつ。体部下半外面にヘラケズリが施される。B I 2(1類)の壇(7)は、口縁部が短く外反し、口唇部を下方へ強く挽き出すものである。体



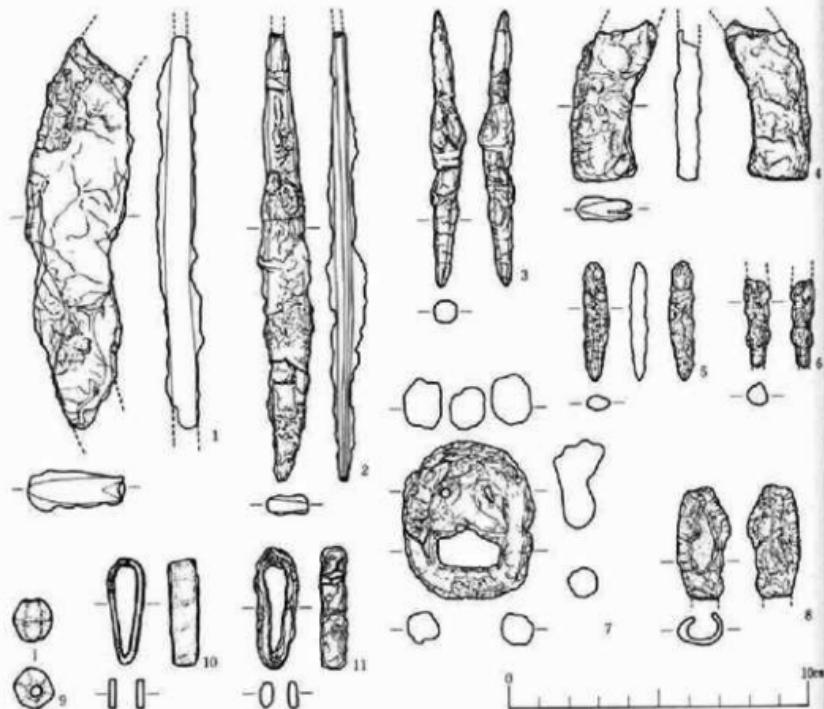
第67図 第18号住居跡 出土遺物 (4)

部は比較的円やかに脹らみ、中央付近に体部最大径をもつ。全面ロクロ調整である。

なお、体部下半より底部にかけての破片（3・4、8～10）が出土している。3・4は大形のもの（B I 1類）で、8～10は小形のもの（B I 2類）と思われる。8・9の底部には糸切痕をそのまま残すが、ほかはヘラケズリが施されている。

《甌B II類》（第67図5、11・12）すべて細片であり、全体の器形を知りえるものは出土していない。11・12は体部が大きく脹む甌の口縁部片で、5は体部下半より底部にかけての少片である。

鉢形土器（第67図1・6）鉢はいずれもB I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に類別される。



第68図 第18号住居跡 出土遺物（5）

1は口縁部が短く外反し、口唇部は上方へ弱く挽き出すもので、体部は上半付近でゆるく張り出している。6は口縁部が極端に短く直立ぎみに外反し、体部はほとんど脹まずそのまま底部へと移行する。いずれも全面ロクロ調整である。

鉄製品（第68図1～8、11） 1と4は鎌の刃先の一部である。平面形がU字形をなし、内縁に沿って溝をつくり、木身をはめるようにしたものである。1は大形のもので現存長で約13.1cm、最大幅3.1cmを計る。4は比較的小形のもので、基部の一部のみを残す。現存長で約5.4cm、最大幅1.9cmとなる。2は刀子で、刃部端の一部を欠く。15.0cmの大形のもので、刃部長約10cm、刃部の最大幅2.9cmを計る。関は背側にのみ段を有し、幅2.2cmとなる。茎は先端に向って細くなり、1.0～2.2cmの幅をもつ。3は両端がとがった角棒である。鍔と思われる。上部端はするどくとがらせており身の先端と思われるが逆刺はつかない。茎は身と同様に細くなっている。柄に挿入するようにつくられている。現存長で9.2cmを計る。5は先端をするどくとがらせた細い棒状のものである。錐と推定される。現存長で4.0cm、最大幅1.5cmとなる。6は細長い角棒であり、釘と思われる。両端を欠き、現存長で3.9cmを測る。7は絞具である。剣鉄の部分は付着したまま鋸化している。大きさは長さ5.3cm、幅4.3cmを計る。8は上半部に木身を挿入するための袋部をもつ円棒である。性格は不明であるが、のみの一部とも推定される。現存長で3.7cm、幅1.6cmを計る。11は刀子の刃部の元にはめこむはばき金具と思われる。長さが3.9cm、厚さ0.4cmのものである。

金銅製品（第68図10） 11と同じであり、はばき金具と思われる。鉄地金銅ぱりで、鉄製品に鍍金の青銅をはったものである。長さ3.6cm、厚さ0.2cmを計る。

切子玉（第68図9） 上下で12面をもつ算盤玉状を呈する。水晶製品である。長さが1.4cmで最大幅は1.3cmになる。

第19号（FB50）住居跡

〔遺構確認面〕 遺構はIIa層を4～5cm掘り下げた段階で確認されている。当地区ではIb層は検出されず、遺構確認面の上部は耕作土（Ia層）になっている。

〔保存状況〕 住居の北西部は庭木の抜根によって破壊されている。また、木根による擾乱が随所に認められ、保存状況はあまり良くない。

〔重複関係〕 当住居と重複する遺構は発見されていない。

〔平面形・長軸方向〕 東辺長が他より若干短いため台形に近い形状になるが、ほぼ正方形を呈する。長軸方向はN-78°30'-Wである。

〔規模〕 東西長で2.82m・2.77m、南北長が2.73m・2.58mとなり、底面積は約7.12m²である。

【堆積土】 住居内堆積土は2層に分けられる。

第1層：よい黄褐色のシルト層である。緻密でかなりかたい。上部の全面を覆っている。焼土粒・木炭粒を少量含む。

第2層：褐色のシルト層である。第1層に比べてやや砂分が強くて密度があらくなる。床面上の全域に厚く堆積する。焼土粒・木炭粒をかなり含む。

第1層、第2層とも自然的な營力による堆積層と思われる。

【壁】 地山を壁としている。壁は床面より比較的急角度で立ちあがる。大小の擾乱をうけており、遺存状況は良くない。現存する壁高は東壁で16~22cm、西壁が20~38cm、南壁18~23cm、北壁13~20cmとなっている。

【床】 壁際が若干低くなっているがほぼ平坦な面をなしている。とくにたたきしめてはおらず、比較的やわらかい。床面上からは3個のやや大形のピットが検出されている。

なお、床面の下からは8~9cmの厚さをもつよい黄褐色土層が検出されている。掘り方の埋土と思われる。

【柱穴】 柱穴はまったく検出されていない。

【カマド】 東壁のほぼ中央に付設されている。とくに破壊はうけておらず、遺存状況はかなり良好である。カマドの構築法は他の住居とは異なっており、やや特異な構造をもっている。主軸方向はE-16°-Sである。

燃焼部・袖部は床面上から6~8cmの段差をもつ“壇”の上に構築されている。この壇は燃焼部と袖部の規模に合わせて作られているが、燃焼部は火床面にあたる部分に限定されている。したがって平面的には東壁際に出口をもつ“U”字形になっている。

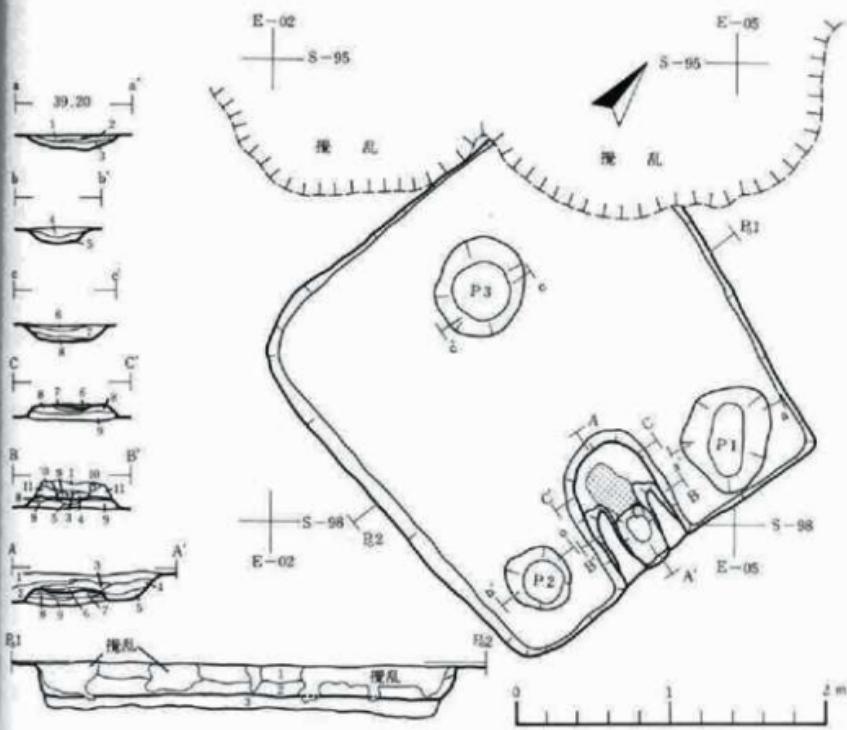
燃焼部は焚口付近に36×24cmの範囲で厚さ2~3cmのかたい焼土面をもっている。火床部の奥は一段低くなり、両袖にはさまれてピット状になっている。これは前記の壇を作る際にして土を重ねなかった部分にあたり、床面とほぼ同一レベルにある。支脚とは断定できないが熱をうけた石が燃焼部内に1個発見されている。袖は壇の上に地山のシルト質土をさらに積みあげて構築されており、袖幅は壇による規制をうけたものと思われ、最大幅で16cmと狭い。

煙道部・煙出部は竪穴外の地山上からは検出されていない。おそらく、竪穴の外に出て上方へ立ちあがるものであろう。

【貯蔵穴状ピット】 床面上から発見された3個のピットはいずれも貯蔵穴とするには確証に欠ける。平面的には比較的大形であるがどれもが深さは10cm±となっており、かなり浅い。

【出土遺物】 当住居の出土遺物は土器に限られ、土器には、环・甕・鉢・壺の器種がある。カマドの周囲に集中して出土するが、その量は少い。

环形土器（第70図） 环には、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）、B II類（ロク



層号	土色	土性	その他の	層号	土色	土性	その他の
Ⅲ-1層	赤-25・黄褐色(30YR 5/4)	シルト	軟化でかい	9	にじや黄褐色(10YR 4/3)	シルト	軟化している。地床地盤
Ⅲ-2層	赤-24	シルト	地土粒・水質粒をかなり含む	10	× (30YR 5/3)	×	地土粒を少量化。やわらかい
軟土質地	赤-24・黄褐色(30YR 4/3)	×	地床地盤	11	× (30YR 5/4)	×	
Ⅳ-1層	1 赤	粘土	第1層と同上	P-1	1 黒	色(30YR 4/4)	シルト
	2	シルト	× 第1層と同じ	2 黒	色(30YR 4/4)	×	やわらかである
3 黒	色(30YR 4/5)	シルト	地土粒を多量に含む	3 黒	色(30YR 4/4)	×	あらうでやわらかい
4 × (×)	×	地土粒・水質粒をかなり含む	P-2	4 黒	色(30YR 4/4)	×	地土粒を多量に含む
5 × (30YR 4/4)	×	やわらかく、半固状を少量含む	5 黒	色(30YR 3/4)	×	地土粒・水質粒を少量化	
6 黒	赤(30YR 5/5)	×	地床地盤	P-3	6 黒	色(30YR 4/4)	×
7 黒	赤(30YR 4/4)	×	地の堆積物	7 黒	色(30YR 4/4)	×	地土粒・水質粒をかなり含む
8 黒	赤(30YR 4/4)	×	軟化している。地床地盤	8	× (×)	粘土質シルト	ねりきりがある

第69図 第19号住居跡

ロ使用で還元炎焼成)、およびB III類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とがある。

〈环B I類〉(第70図1~4) B I類の环には、底部を回転糸切りで切り離した後、再調整を加えないもの(B Ia類)と再調整を施すもの(B Ic類)とがある。

B Ic類の环(1~3)は、すべて手持ちヘラケズリによる再調整で、体部下端に施すもの(Hs手法)(1)と底部全面に施すもの(Hs手法)(2~3)とがある。いずれも、器高の低いもので、底径が小さく体部がやや丸味をもって外傾するもの(1・3)と、底径が大きく体部がやや丸味をもって外傾するもの(2)とに分けられる。

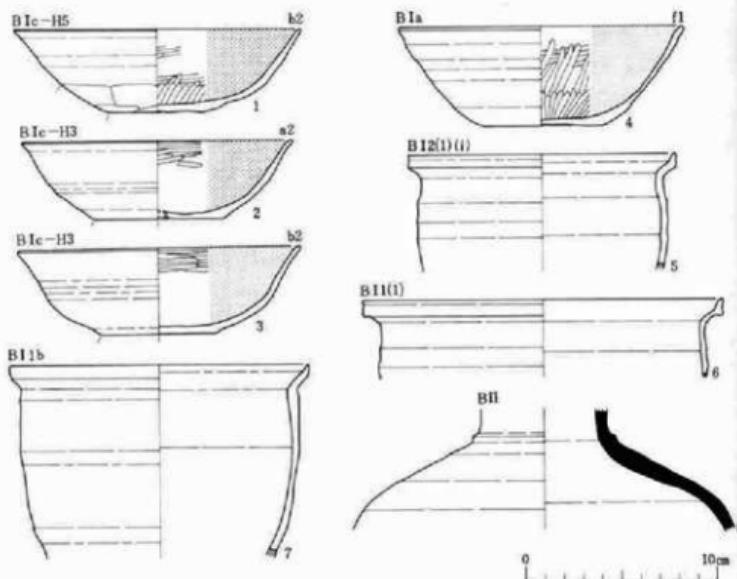
B Ia類の环(4)は、器高が高くて底径が大きく、体部はややふくらみをもって立ちあがる。

〈环B II類〉〈环B III類〉回転糸切り無調整のものが、細片で少量出土している。

變形土器(第70図)變は、B I類(ロクロ使用で酸化炎焼成)とB II類(ロクロ使用で還元炎焼成)とに類別される。

〈變B I類〉(第70図5~6) B I類の變は、口縁部に最大径をもつ大形のもの(B I 1(i)類)と口縁部に最大径をもつ小形のもの(B I 2(1)類)とがある。

B I 1(1)類の變(6)は、口縁部が短く強く外反し、口唇部は上方へ強く挽き出すものである。



第70図 第19号住居跡 出土遺物

体部はゆるく脹み、中央付近に体部最大径をもつものと思われる。

B I 2(1)類の壺(5)は、口縁部が短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。

〈壺B II類〉 破片のため図示不能である。大形のもので、長い口縁部をもち、体部は肩部より大きく張り出す器形を呈するものと思われる。

鉢形土器（第70図7） B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成）に属するものである。口縁部は短くゆるく外反し、口唇部は弱く上方へ挽き出している。体部はあまり脹まず、上端付近に体部最大径をもつ。全面ロクロナデで整えている。

壺形土器（第70図8） B II類（ロクロ使用で還元炎焼成）に属するものである。口縁部、体部下半を欠き、全体の器形は明らかでないが長頭壺として分類した。

第20号（F D 09）住居跡

〔遺構確認面〕 遺構確認面はIIa層のほぼ上面である。断面観察によれば遺構はIIa層の直上より掘り込まれている。なお、当地区にはIb層は存在しない。

〔保存状況〕 当住居の北西隅から南東隅にかけての左半分が路線敷外に入るため調査していない。調査範囲内に限定すればほぼ原形をとどめており保存状況はかなり良好である。

〔重複関係〕 第5号溝と重複関係にある。当住居の北壁の一部が第5号溝によって切られたり、第5号溝より旧い。

〔平面形・長軸方向〕 北辺長より東辺の現存長が長く、南北に長い長方形を呈するものと思われる。長軸方向は推定でN-7°30'-Eである。

〔規模〕 未調査部分を含むため規模は不明である。ただ、北西コーナーと北東コーナーは検出されており、東西長は推定で3.65m強、南北長は40.5m±となる。

〔堆積土〕 住居内堆積土は基本的には以下の2層に大別される。

第1層：褐色シルト層である。上部全面に厚く堆積する。緻密でかたくしまっている。焼土粒・木炭粒を少量含む。

第2層：暗褐色のシルト層である。第1層に比べてややねばりがある。床面上の全域に分布し、焼土粒・木炭粒をかなり含む。

第1層、第2層とも住居の廃絶後自然的營力によって堆積した層と思われる。

〔壁〕 地山を壁としている。床面よりの立ちあがり角度は比較的緩い。現存する壁高は東壁で10-17cm、北壁が23-32cmとなっている。

〔床〕 床面上はほぼ平坦になっている。かたくたきしめられており、埋土とは肌分れ現象がみられる。床面上からは大小5個のピットが発見されている。

最後に床面を掘り下げたところ、床面全域に15-25cmの深さをもつ掘り方が検出されている。

埋土は2層に分けられ、いずれもが埋め戻した人為的な堆積層である。

【柱穴】 床面上より発見された5個のピットのうち、平面的な大きさから柱穴と考えられるものにはP₁とP₂がある。このうちP₁は深さが約51cmもありかなり深くなるが、P₂は24cmと浅い。いずれのピットも対となるのが検出されておらず確証に欠ける。

【カマド】 東壁の南寄りに付設されている。煙道部・煙出部が検出時に若干削平されているほかは良好なかたちで遺存している。主軸方向はE-2°30'-Sである。

燃焼部の大きさは92×24cmとなり、長さに比べて幅がとくに狭くなっている。燃焼部底面は火床部分が床面よりやや凹んでいるものの奥に向かって緩く立ち上がっている。支脚は発見されていない。煙道部は、火床部とは16cmの比高をもつが、緩く傾斜して立ちあがる燃焼部底面とは際立った段差をもたず接続する。袖部は地山のシルト質土を素材とし、それを積み上げて構築している。煙道部底面は入口付近でやや高くなるものはほぼ水平に煙出部へと移行する。煙出部には直径約41cmのピットが掘り込まれており、煙道端との比高は4cmと少ない。

なお、燃焼部を掘り下げて検出されたにふい黄褐色土は床面下の掘り方埋土とは異なっており、カマドの付設場所に限定された掘り方と思われる。

【貯蔵穴状ピット】 貯蔵穴には南東隅に発見されたP₃がある。約半分が路線敷外に入る。直径約103cmの不整円形を呈するものと思われ、深さは約26cmになる。埋土は3層に分けられる。上層は暗褐色のシルト層で、緻密な堆積状況を示し、混入物はほとんどみられない。中層は灰黄褐色の粘土質シルト層で、木炭粒を少量混入する。下層は暗褐色の粘土質シルト層で、粒~塊状のあらい堆積状況を示し、少量の焼土粒を含む。

【出土遺物】 当住居跡の出土遺物には土器と鉄製品があり、土器は环・高台付环・甕・壺・鉢の器種に分類される。カマドおよび焼土面の周囲より集中して出土する。

环形土器（第72図） 环には、B I類（ロクロ使用で酸化炎焼成+黒色処理）とB II類（ロクロ使用で還元炎焼成）およびB III類（ロクロ使用で酸化炎焼成）とがある。

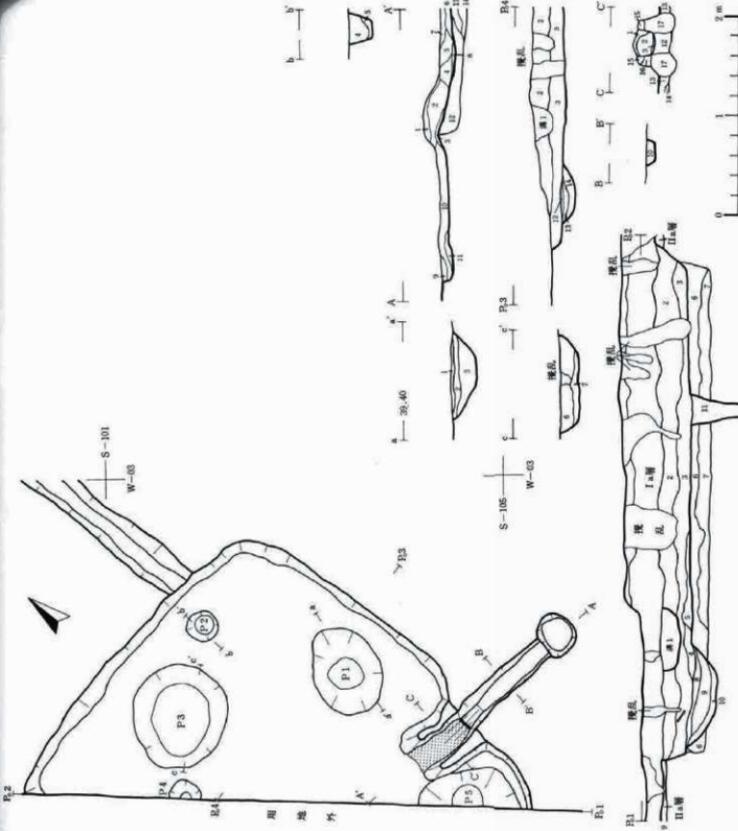
〈环B I類〉（第72図1、6～9） B I類の环は、底部を回転糸切りで切り離した後、再調整を加えないもの（B Ia類）と再調整を施すもの（B Ic類）とがある。

B Ic類の环（1）は、器高が高くて底径の小さなもので、体部はかなり丸味をもって立ちあがる。底部を欠損するが、体部下端に手持ちヘラケズリを施している。

B Ia類の环（6～9）は、形態上の特徴によって3分され、器高が普通で底径が小さく、体部が直線的に外傾するもの（6・7）、底径が大きく体部が直線的に外傾するもの（8）および底径が大きく体部がかなり丸味をもって立ちあがるもの（9）などに細分される。

〈环B II類〉 図示不能の細片が4片出土している。

〈环B III類〉（第72図11～14） 回転糸切り無調整のものである。器高が低くて底径が小さく



番号	土色	土種	その他の特徴	層厚	土種	土性	その他の特徴
第5号層 1	褐 色 色10YR 8/3(2)	シルト	木炭を含む	5	水 土 色10Y 14/6(5)	シルト	泥炭の塊状土を含む
第1層 2	褐 色 色10D 8/4(4)	シルト	褐色を含むかない	8	水 土 色10Y 14/6(5)	シルト	泥炭の塊状土を含む
第3層 3	褐 色 色10Y 8/3(4)	シルト	褐色を含む	9	褐 土 色10Y 14/3(3)	シルト	泥炭を含む
" 4	にかい黒褐色 色10Y 5/2(2)	粘土質シルト	粘土を含む	9	褐 土 色10Y 14/3(3)	シルト	泥炭を含む
" 5	黒褐色 色5 1/2(2)	シルト	褐色土を含む	10	泥炭地 色10Y 4/4(4)	シルト	泥炭を含む
腐泥層 6	にかい黒褐色 色10Y 5/4(4)	シルト	褐色土を含む	11	褐 土 色10Y 4/4(4)	シルト	泥炭を含む
" 7	" 色10Y 4/2(2)	"	褐色土を含む	12	泥炭地 色10Y 5/3(3)	シルト	泥炭を含む
P 5	褐 色 色10Y 8/3(4)	シルト	木炭を含む	13	泥炭地 色10Y 5/3(3)	シルト	泥炭を含む
" 8	褐 色 色10Y 8/3(4)	シルト	木炭を含む	14	" 色10Y 5/3(3)	シルト	泥炭を含む
P 4	10 壁 色 色10Y 8/4(4)	シルト	やわらかさ	15	褐 土 色10Y 4/4(4)	シルト	泥炭の塊状土を含む
P 1	11 壁 色 色10Y 8/4(4)	シルト	やわらかさ	16	泥炭地 色10Y 4/4(4)	シルト	泥炭を含む
" 12	"	"	"	17	" 色10Y 5/4(4)	シルト	"
" 13	"	"	"	"	"	"	"
" 14	"	"	"	"	"	"	"
カーマフ 1	褐 色 色10Y 8/4(2)	シルト	粘土の塊状土を含む	"	褐 土 色10Y 3/4(4)	シルト	泥炭でない
2	褐 土 色10Y 8/4(4)	"	多量の塊状土を含む	"	3 壁 色10Y 3/4(4)	シルト	泥炭・泥炭・泥炭土を含む
3	褐 色 色10Y 8/4(4)	"	塊状土を含む	"	4 壁 色10Y 3/4(4)	シルト	泥炭を含む
4	褐 土 色10Y 8/4(2)	"	塊状土を含む	P 3	5 壁 色10Y 3/4(4)	シルト	泥炭を含む
5	" ()	"	ほろほろしている	"	" ()	"	泥炭を含みやらない